
異聞 真田信繁伝

どたぬき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異聞 真田信繁伝

【Nコード】

N6031T

【作者名】

どたぬき

【あらすじ】

某所で書いていた小説の移転品です。とりあえず、指摘された内容は書き直したので、まあ、だらだら書いていくので、長く、生暖かく見ていってください。後、一応はフィクションのつもりなので改めて作品を見るのにある程度の差は多めに見てください。

真田信繁・・・通称真田幸村の数奇な人生についてかかれた小説です。奇想天外なその人生の始まりは、日本最後の戦国の戦い（大阪夏の陣）から始まっていた。その前後において何が行われ、そして

どつなつて言つたのか書かれた小説です。

序節（前書き）

某所で書いていた小説の移転品です。とりあえず、指摘された内容は書き直したので、まあ、だから書いていくので、長く、生暖かく見ていってください。後、一応はフィクションのつもりなので改めて作品を見ル野にある程度の差は多めに見てください。

序節

異聞 真田信繁伝

序節 真田信繁と言う男

真田信繁、通称真田幸村は信濃の国の当時領地を任されていた真田昌幸の息子として信濃の地で生まれた。それからしばらくして祖父が無くなった為、父真田昌幸の相続により上田城城主となった。上田城は小さく、こじんまりとした城ながら、領地は平和で民は穏やかだった。だが時は戦乱の戦国時代。武田軍を破った織田に昌幸は服従する事で、その地を守っていった。その間真田信繁と兄信之は父の元、武田家の秘伝の軍略書や様々な戦略所を読み漁り、数多くの学問や武道にいそんでいた。当時の軍略書の多くは軍の動かし方や、虚の突き方。兵士達の混乱時の心理などに及び、その中には孫子の兵法書などに更に日本独特の注釈が加えられたものを用いられていた。その書物は当時、武田家から落ち延びた物達が保管していたものの殆どに及び、そんな腕を磨きながらの平和な日々は長く続かず、信繁は援軍の代償として上杉軍に人質として向かった。そこで、上杉景勝と会い、その容姿と才覚を気に入られ仮初ながら領地を与えられていた。当時豊臣五大老の一人であり、その最中その有能さは、豊臣家臣一堂に知られる事となった。そこで、そして時代が過ぎるうちに織田信長は明智光秀に打たれ、豊臣の世になった時、豊臣秀吉から真田の性と上田の地を保障された真田家は、豊臣方に恭順する際、無理やり真田信繁は人質にされ、豊臣家内に入質として捕らわれてしまう。その頃に結婚させられており、無理やり豊臣方に付くようにさせられてしまう。だがその中で真田家は晴れて一大名としての地位を手に入れ、その地を守り続けるはずだった。豊臣秀吉が死んでしばらくすると気に入られていた秀吉がいな

くなり、また養子騒ぎも一服した為、真田家の元に返される事となった。それからしばらくし、豊臣方筆頭の石田光成と、徳川家康との間で関が原の合戦が行われる事となった。その時、昌幸は数少ない兵士達を見ながら考えていた。信義どおりなら確かに石田につくべきだが、彼は今までかき集めた情報で戦況を考えていた。．．．大方東がもしかしたら勝つかもしれない。西は統制が取れなければあるいは．．．。それに、従順を決め込んで東に付けば今までの恩義に報いる事はできない。それを考え、当時徳川に嫁をもらっていた兄信之を徳川方に帰らせた。父の手元には下らなければ国を滅ぼすという手紙が何通も徳川方から来ていた昌幸はある妙案を思いつく。それがこの地を無視するなら通し、それ以外なら抵抗するとうものだった。だがこの地に徳川秀忠は軍を引き連れ上田城に向かつていった。それを見た真田昌幸は籠城を決め、蹂躪されるかもしれない住民を城に集め、近くの森に退避するように指示を出したが、誰一人として森に逃げるものはいなかった。それを見た昌幸は民兵達を加え、それでも10倍近くある兵力差のまま、第二次上田の戦いは始まった。それは信繁の初陣でもあった。この戦いは兵法を尽くして戦った真田方の大勝利で終わった。それはある意味小さな勝利でもあり、誰も、何も報酬は無いかもしれないが、それは大きな勝利であった。それは関が原の戦いの直前で行われた為、徳川秀忠は関が原に参戦する事はなかったが、石田光成に後方を突いてほしいと頼まれていた真田昌幸は、この戦闘で兵を動かす事ができなかった為、結局関が原に参加できなかった。その為、関が原の戦いは結局東方が勝つのであった。その後、もう一度大軍を率いてやってくる徳川軍に、民を巻き込む事を恐れた真田昌幸は、涙を飲みつつ無条件で降伏するのであった。そこで、数多くの徳川方の武将に切腹をさせられそうになるが、徳川に行つた兄に一命を救われる事となり、九度山の山奥に幽閉される事になる。そこで父真田昌幸は、一生上田の民を案じその生を終えていった。その息子真田信繁はその無念さに山奥で僧侶達と暮らしていたが、ある日、豊臣方が人を

集め、徳川と戦うと使者に聞いた真田信繁はいても立つてもいられず、急いで山を下りていった。そこで旧武田軍の人々などに誘われ、大阪冬の陣を向かえる。そこで最初真田信繁が勢いで押し切る合戦を提案したが、淀君が反対した為、籠城をすることとなった。そこで父譲りの戦略で、大阪城の布陣の欠陥を見抜いた信繁は真田丸での戦いで、徳川軍を打ち破るも、戦い自身は大きな堀があり攻めあぐねた大軍の徳川軍と互角であった。だが、本丸周辺への砲撃が始まると、豊臣側から講和を受けるとの報を徳川に出し、堀を埋める事を約束させ、戦争は終わった。それから行くところがない真田は武功もあつて、大阪城郊外に小さな武家屋敷を構え、一時的な平和を味わっていた。

第一節 1614年二月（前書き）

1614年二月のある日、真田信繁ていにある男が尋ねて来る。その男は見知った男でもあった。

第一節 1614年二月

第一節 1614年二月

「叔父御。今日はどうした。」

目の前の若い侍はじつと厳しい顔で、目の前のヒゲモジヤの男を見つめていた。ヒゲモジヤの男はその形相に脂汗を垂らしながら、若い侍を見つめていた。お互い胡坐をかいて座ってはいるが、剣呑さはすさまじいものがあつた。

「今日は・・・お前のためにいい話を持ってきたんだ。」

「なんですか？叔父御！」

口を開くと、その怒号はこの建物いっぱい響き渡つた。

「先日は確か、80万石で徳川に寝返れでしたっけ？」

「いやあな。」

「あの話はお断りしたはずですよ。」

「いやあ・・・お前もあの上田の地は懐かしかるう。帰りたと思わんか？」

ヒゲモジヤの男は懐から手ぬぐいを取り出すと、汗でびっしょりとなつた額をぬぐつた。

その間も若い侍は、そのヒゲモジヤの男を睨みつけていた。

「それだけじゃない、武田のあの地をほしいと思わないか。」

「・・・それで！」

「徳川殿は信濃一國を約束してくださつた。一緒におぬしの兄のところに行かないか？」

その瞬間、侍は立ち上がり、怒りの形相でヒゲモジヤの男は座りながらも部屋の隅までずり下がつた。

「叔父御！ふざけるのもたいがいにせい！」

「だから！だから話を聞け！」

その怒号は声は小さい屋敷すべてに響き渡つたのだ。声の持ち主

である若い侍の男は目の前にいる髭モジヤの男を蹴りだしていた。

「信繁！聞け、あの上田の地に、いや、お館様の意思・・・いや、親父の無念を晴らすいい機会だぞ！」

「叔父御殿がそんなに不忠者だと思わなんだぞ！二君に仕えろとか言う、馬鹿者だと俺は思わなかつたぞ！」

信繁と呼ばれた若い男は刀を手につけて、怒りで顔を赤くしていた。「わ、分かつたから刀を納めろ！」

「真田様！刀をお納めください。いくら徳川側として来た叔父殿とはいえ切つてしまえば、主君に泥を塗りますぞ！」

坊主頭の男が老化から走つて部屋に飛び込むなり、信繁と呼んだ男に覆いかぶさり、押さえ込む。

「算！離せ！！この不忠の輩は・・・いや！この真田の名を汚したこの叔父御はこの真田信繁が成敗してくれる！」

信繁は怒り心頭の顔でじつとそのヒゲモジヤの叔父を睨みつけた。「この信繁！八十万石で裏切らず！信濃一國で寝返れば不忠者にならないと思つたか！何たる！・・・いや、ここで成敗してくれる！」

「わ、分かつた。もう言わん。だから・・・わしは、わしは帰るぞ！せつかくの提案蹴つた事を後悔するぞ！」

庭に蹴りだされた叔父はそのまま、玄關に走つていった。その様子を見ていた信繁はその焦つて逃げ出す姿をじつと見つめた。

「はあ・・・はあ・・・せい・・・すまない。」

そう言つて信繁は刀にかけた手を収め、じつと部下を見つめた。

「この算、出すぎた真似をしてすいませんでした。」

「いや、いいんだ。だがすまない。」

そう言つと信繁はどかつとその場に座り、縁台から外を見つめた。「お前たちのことを考えたら、本当なら、上田のあの地に帰るのがいいんだろつが・・・すまない。」

そう言つて信繁は外を見つめた。外の天気ははれていて掃いたが、まだ少し肌寒い天気であった。ふとその寒さに父と共にいた上田の地を思い出していた。この頃の信繁は若いながらも実践などを多く

積み、顔は丹精ながらも凜々しくその風貌はもはや熟練の域に至っていた。身体は中背ながらすつと細く、だからといって必要なところには筋肉が付いていた。

ただ、その瞳の中に眠る信念は、今でも揺るぎなく、爛々と燃えさかっていた。

「おれは、ただ、そういうことが許せなかったんだ。」

「いや、そのような事は。」

「そんな事をするとか何か色々なものを失いかねない気がしてな。寂しそうな声がこの小さな庭いっぱいに響き渡る。」

「いいんです。我々は、そういうあなたについてきたんですから。」「そんな事を言うのなら、この話受ければよかったのに。」

その声に声のほうを振り返ると、庭にあのヒゲモジャの男が立っていた。その瞬間、今まで押さえてきたことが押さえきれなくなっ

た。

「叔、父、御！切られに来たか！そこに居直れ！」

そう言うのと、信繁は裸足で庭に飛び出すとその勢いで刀を抜き、切りかかった。それを叔父は脇差を抜くとその刀を打ち払った。

「！」

息を呑みじつと叔父を見つめた。確かに切るつもりはなく、寸止めめ予定だが、それでも打ち払われるだけの打ち込みをした覚えはなかった。叔父も戦場には出るが、それほど強い人ではない。それがこの打ち込みを抜刀して直後に打ち払えるとは思えなかった。

「時として名を捨て、実を取る事も必要ですぞ。」

「……おぬし……。」

算が立ち上がり、じつと叔父御殿をみつめた。信繁は、今までの少し寂しげな瞳から一転、洗淨にいるときと一緒の、とぎすまされた瞳になった。

「おぬし、叔父御殿ではないな。」

打ち払われた刀を構えなおし、それまでの激情から一点じつと冷静に叔父を見つめる。

「……ほう……」

その叔父のような格好をした男は、すり足でじりじりと間合いを詰めていく。

「何でそう思ったかな。」

「その物腰、そして、その構え。普通の侍ではやらん。」

確かに武士にしては、その構えが独特であった。ふつうの武士では、脇差しは根本を握り、打ち込みを強くする傾向があるが、この男は柄の中程を握り、少しばかり、間合いをのばしている。そして何より、脇差しを前に構えず、だらりと下げていた。信繁は相手に合わせるように構えを解かず、少しずつ間合いを詰める。

「何者……」

身構えた信繁はじつとその様子を見つめている。

「そこまで警戒されるなら、こんな無粋な真似、しないほうが良かったな。」

そう言うつと、脇差しを納めて叔父らしい男は廊下に腰をかける。

「そういう貴様は何者だ！」

「敵意はない。客のつもりだが？むしろ、茶の一杯でも出して欲しいところだ。」

そう言うつと廊下に座った叔父の格好をした男は髭を引き剥がすとぼろっと取れた。

「もしや……いや……もしや、半蔵殿か？」

「半蔵？」

青海入道はいぶかしがるとその顔を見つめる。その間に叔父御に見えた男は、口から綿を取り出している。その顔はもはや、叔父とは似ても似つかない感じに変わった。顔は細く、中背中肉、外見に特徴らしい特徴がないところが特徴みたいな風貌の男がそこにいた。

「有名な人だよ。せい、奥の台所にいる連中から、水を持ってくるように行ってくれ。家に確かお茶はないし、それぐらいしか出せないから……ただ器だけは来客のを頼む。」

「わかった。いいんだな。」

「ああ。」

そういうと算は奥に引き下がっていった。

「お茶を出すまでも無いか。」

「茶を立てたくとも、茶ツ葉と、茶具は性に合わぬゆえ、持つてはおらぬ。それに水で茶菓子を出しても、味気なかるう。」

「確かに……。それは失礼した。」

「何の用かな。伊賀の忍者が。」

落ち着いた声で信繁は目の前の男を見つめていた。昔、上田の城にいた頃に幾度か戦ったことがあるが、その中でも目の前にいる男は、格が違うようにも感じられた。伊賀の忍者はこの当時、暗殺から何から何まで請け負う暗殺集団としても知名度がある忍びの者達だった。数多くの異名があるため、いい話は出た事がない。

「ん？そこまでとは見識あふれるお方だ。私に敵意はない。あなたは敵意のない人間に刃を向けるのかな？」

真田より落ち着き払う半蔵に気圧された様に、信繁はしばらく睨みつけた後に刀を納め廊下に座った。

「それで、何の用かな？」

「何の用かと言われて、察しは着くであろう。」

「徳川につけと。」

「まあそういうわけではないが、おぬしがどうして戦っているのかお館様が知りたいとおっしゃっていてなあ。」

「それで……。」

「先ほどの話を聞かせてもらった。」

「人が悪い。」

「やはりお館様が思った通りのお人だ。それでこそ、真田という男よ。」

「だから！なんだといのだ。」

そう言っつて信繁はじつと相手の様子を見つめる。さっきの叔父御見たいな濁った瞳ではなく、その瞳はまっすぐこちらを見つめてい

た。

「私はお前のようなヤツにこそ我らの下に来て、真にこの日の本の国を平和にして欲しいと思っっている。」

「それはどういう意味だ。」

「我らの中にも、さっきの男みたいな情けない自分の保身しか考えない人間は多い。」

男は大きくため息をつく

「私は、あんな物で釣られる男ではない。」

「だからこそ聞きたい。お主は何の為に戦っておるのだ？」

「それは……。」

「それは？」

「仕えたる君主の為だ。」

「それが……あの淀殿か？」

ふと、信繁は怒りで顔がゆがんでいる淀殿の顔を思い浮かべる。

昔は聡明な美人とも思ったが、今ではその面影さえもない。

「まあそういわれても仕方が無いが、それでも君主の為だ。」

そう言っつて信繁は外を見つめる。その見た先には外堀を埋めている最中の大阪城を見つめていた。淀君には先の大坂の戦いで、いろいろ無茶を言っつてきて、勝てる戦を逃した経験がある。

「おぬしの父上もそうだったか？」

「父上は分からないが俺はこの道を貫きたい。」

「そうか……。今日はおぬしに見て欲しいものがある。その為に……。」

「なんだ？」

「江戸まで来て欲しい。」

「は？」

当時は徒歩や船が殆どの為、大坂から江戸まで向かうと一ヶ月以上はかかる。この当時遠距離旅行は無茶な行為の代名詞ともいわれている。

「まさか、この私に江戸にこいと。」

そう言うと、信繁は刀に手をかけた。

「ああ。この話が来た時に、信繁殿がこのような答えをするのは分かっていた。だからもう一つ考えがあった。」

「ほう？」

「おぬしに、江戸に来て見て欲しいものがある。その為に私はここに来たのだ。」

そういいながら微笑む彼の表情には一点の曇りも無かった。

「もし来ないといったら。」

「絶対に来てもらおう。」

「それはどういう意味だ。」

そう言うと自分の脇差を取り出し、鞘ごと信繁の前に置いた。

「この事に自分の命を賭そう！」

「それほどまでに見て欲しいものは何だ！」

「それは……ここでは言えん。だが来てくれている間は命はこちらが保障する。」

微笑みながら出した声に、一瞬信繁はたじろいだ。この刀を目の前に鞘ごと置くのは、この当時ある種の覚悟を示すものだった。そしてあの微笑み、死を覚悟しているとさえ思われた。

「そこまでしてどうして俺を江戸に？」

信繁は不思議そうにその表情を見つめるが。

「お前が豊臣に忠誠を誓うように、私はお館様の夢の為に一命を賭しておる。そのお館様の命令だ。来ればわかる。」

そう言って男はじつと信繁を見つめた。そのまま、じつとお互いを黙ったまま見つめていた。その静寂は長く、空気がピンと張りつめた、そんな緊張感だった。その時、向こう側からどすとどすと歩いて来る音が聞こえる。

「本当にこれだろうな！」

「ああそうだ。拙者が持ち出した最高の器だ。これでいい！」

「でも何で俺がやらなきゃいけないんだよ！」

「家でただ酒飲んでるんだ！そのぐらい行ってこい！」

向こうから、大声での会話が聞こえてくる。その声に触発されお互いは庭に顔を向けた。このまま、正面を向いていれば何かの拍子に斬り合いかねないほどの緊張感がそこにあった。

「ここに帰ってくる事は出来るか？」

「ああ。それは約束しよう。」

「その間にここを攻めるつもりか？」

「その間お館様が豊臣を攻めない事も約束しよう。」

「本当だろうか。」

「ああ……。万が一でもあれば、私が、豊臣方に立ってお館様を説得もしよう。」

緊迫した空気が二人の間に流れる。もし本当ならそこまで高く見られているということだが……。

「……。むげにおぬしの命を散らす事はない。」

そう言うと刀にかけた手を収めると、音のしたほうを見る。そこにはお盆に器をのせた

男がやってくる。

「そう言ってくれてよかった。」

「ただし、幾つか条件がある。」

「ほう？」

「まずは旅費はお主持ちと言う事。そしてもう一つは、部下を連れて行っていいか？」

当時旅行にかかる金はかなりの高額で、特に侍ともなれば、ぼったくられたりして、食費一つでもかなりの金額になることも多い。

「慎重なおぬしの事だ。それぐらいは覚悟していた。只、少数にしてくれ、へんに目立てば、どちらも危ういからな。」

「わかった。」

筧がその場に来た頃にはお互いの緊張した空気は和らいでいた。

「真田様、一応持ってきましたぞ。器はどれがいいか分からなかったから適当なのを持ってきました。」

そういうと二人の間に湯飲みの小さな器が二つおかれた。その中

には水が入っている。器が目の前に持つてくるまでには先ほどの剣香さが微塵も感じられないほどの落ち着いた空気であった。

「真田殿、おぬしのところに家人はおらぬのか？」

「いやあな。ここは仮住まいと思っておる。だから部下と呼べるのは6人ぐらいしか、この家にはおらん。」

そう言つと、算は、軽くお辞儀をする。当時の武家屋敷は戦闘をいつ行つてもよいように部下を数名ほど、家に住まわせていた。特にその部下に家人（妻や子供）がいれば、食事などの世話を武家屋敷を持つ人の家族を中心に行い、それを中心とした世帯が完成するのが普通であり、当時において小姓などを持つ大きな家以外では女性が器を持つてくるのがふつとされた。

「今は、この真田家の部下である算と申す。先ほどは失礼した。」

「いやいや。あの振る舞い、さすがです。」

「算、今から出立するぞ。」

信繁は器に注がれた水を一気に飲み干すとその場に置いた。

「ハイ？何処へ？」

「江戸だ。」

「へ？」

「江戸だ。」

「江戸つて・・・確か、徳川の居城ですよね。」

「ああ。」

「お待ちください。いきなり徳川の居城に行つて何になります？」

「あの男がこいと。」

その瞬間、算の動きが止まった。

「いやあ、待つてくださいよ。それだけで急に言われて行けるわけ無いですよ。」

「だそつだ。」

そう言つと、信繁が振り返ると男の顔は何も変わつてはいない。

「いや、お忍びの旅だ。船に乗つてゆったりと駿河について、そこから観光がてらに江戸まで行くのはどうだ。せっかくお主も外に闘

歩しておるのだ。私もおぬしもいつ死ぬか分からぬ身だ。旅を楽しむのも悪くは無かるう。」

「そういうものか？」

「真田様。そんな甘言に引っかかってどうするんです。」

「おぬしも行くんだぞ？」

「はい？」

「そうだ、寛、青海を探してきてくれ。一緒に行こうぜ。江戸へ。どうせこの館でうじうじするより、出来れば兄貴の顔がみたい。」

「え、いやまあ、そういうのは嫌いじゃないですけど・・・わざわざ、いつ戦があるか分からないこの時に行く事ないでしょ。」

寛は焦って引きとめようとしていた。確かに今までいくらでも無茶な事は言ってきたが、ここまで無茶な事は初めてだった。その様子をじつと二人は見つめていた。主のその目は江戸に行く事でいっぱい・・・と寛には見えた。

「分かりましたよ。只、出立には幾つか準備があるので、明日まで待つていただきたい。青海にもそう伝えておきますし、後のものは留守を頼んでおきます。」

「分かり申した。」

そう言つと男は深々と寛にお辞儀をした

「でだ。」

「はい？」

「改めて聞こう。お主、名はなんと言つ？」

そう言つて、真田信繁は手を差し出した。

「・・・拙者、半蔵と申す。今後ともお見知りおきを。」

次の日の朝早く、朝もやに包まれ、ちょうど周辺は霧で見通しが悪い中、まだ朝日も昇らぬうちに真田家の仮住まいの屋敷の門の前には数人の男がいた。その中心に真田信繁と二人の男、そして複数の家人がいた。

「大助。しばらく出掛けるから、お母さんを頼んだぞ。」

「うん。」

そう言つと小さな、その子は母親のすそを握りながらも激しく頷いた。このころの真田信繁には妻がいて、子供がいた。だがほかの男達には妻とかはいない独り身の者ばかりだった。

「あなた。」

「すぐ帰つて来る。それまでは頼んだ。」

「はい。」

そう言つとで見送りに来たただ一人の女性はしつかりと頷いた。

「後の者も、よろしく頼んだ。」

「根津、留守を頼む。」

「分かり申した。」

そう言つと家人の一人が深々と頭を下げる、顔立ちは真田信繁に似ていた。

「いいんでしょうか。江戸なんて。」

「いいんだよ。只、何かあつたら根津、お前が俺の代わりとして、秀頼様にお仕えしてくれ。」

そう柔らかく微笑むと、根津甚八の手を柔らかく握つた。根津甚八は信繁と同じような体型をしており、よく間違われるので、彼自身いろいろと重宝していた。

「・・・分かりました。だがここで死ぬような真田様はとも思えない。ただ道中は最近いろいろあるといます。用心なされよ。」

「それは、わしらが付いておるわい。大丈夫じゃ。」

旅用の装束に身を包んだ坊主頭の大男が鷹揚に頷く。

「青海は酒とかで、真田様を困らせるなよ。」

坊主頭の青海は胸をドンと叩いて見せた。

「大丈夫じゃ、酒は飲んでも飲まれぬのが酒の極意じゃ。その程度ではどうともない。」

「酒代とかで旅賃をスるなという事だ。」

「ふ、あはははははははははは。大丈夫だ。」

「青海。大声を出すな。今回は隠密ぞ。目立つなよ。」

「わかった。」

そう言つと周囲を見渡した。

「あれ、あの男とやらはどこ行つた?とか言つたやつ。」

「ずっとここにおつたわ。」

声のするほうを全員が振り返ると、半蔵は家の門の内側から門に寄りかかっていた。

「旅費はこつち持ちといった以上気にする必要はない。だが、その調子だと酒だけは省いたほうがよさそうだな。」

半蔵は柔らかく微笑みながら言った。その言葉に全員が弾ける様に笑つた。

「ではいごうか。」

「はっ。」

そういうと、信繁と筧、青海は根津たちに一礼すると大通りに向かつて4人は歩いていった。

「どうやっていくのだ?忍び旅とはいえ、どの道行こうがきついでるうが。」

現在、豊臣方と徳川方の間が険悪である為、各要所には関所が築かれ、移動は大幅に制限されていた。徳川方の兵士には顔が覚えられている事があり、見つかれればただではおかれぬ。

「それは手配してる。海路だ。」

そう言つと、半蔵は前を歩き、港に向かつて歩いていった。

「船に乗るのは、初めてだな。」

「でも、確か、徳川の船はここに入つては来れまい。」

そういぶかしがって筧は聞いて来る。

「それは大丈夫だ。外堀普請の際の材料の一部を商人に頼んであるが。」

「それで?」

「その商人に帰る時期を少し遅らせてもらっている。だから我々はその船に用心棒として乗り、駿河まで行く。そこから歩きた。」

「江戸まで直行じゃあ良くないか?」

信繁は腕を組みながら考えていた。それを少し足を速めながら、半蔵は答える。

「それだとさすがに、関所におぬし達の姿を見ると、変に勘ぐる者が多い。だから、あえて途中で降りて、せつかくだから美味しい物を食べながら旅をしようというのだ。」

「お主のような者からそんな言葉が聞けようとは思わなかった。」

青海が意外そうな顔をして前を歩く半蔵に並ぶように早足で歩く。「お主に何らかの生きる楽しみや酒の美味さがあるように、拙者も生きる楽しみはある。酒も好き、風景も茶も子供も好きだ。まあ、博打はあんまり好きじゃないがな。」

「そういう会話をしながら、」

「そろそろか？」

「そういう筈の鼻に潮の香りが匂ってきた。堺は港町としても有名で、大阪城周辺と隣接していた。」

「俺は海は始めてでな。」

「そうか。山の生まれだからな。」

青海は納得したように頷くと周囲を見渡す。近くで帆を張った船は一艘しかなかった。大型の船だ。もう荷入れは終わっているらしく、人足達の姿はなかった。

「半蔵様。」

商人らしい男が駆け寄って来る。

「この方達が。」

「ああ、そうだ。」

「よろしく頼む。」

信繁は軽くお辞儀をする。

「でも、こいつら大丈夫なのか？」

青海は不振そうにひ弱そうに見える商人のほうを見る。

「並の水軍よりも海にいるこいつらは、よっぽどの事がない限りこの船は沈みもしないよ。」

「そう半蔵は言つと手に持った荷物を甲板に向かって投げつける。」

「それは失礼した。すまない。青海、誤れ」

「・・・すまん。」

「いえ、いいですよ。ほかの武士の方々に、こういつてくれるのは半蔵様だけですから。」

「そうですか。」

そう信繁は軽く頷いた。

「だが拙者船旅ははじめてですよ。」

「早くお乗り込みください。もう少して、霧は晴れ、下手すればどなたかに見咎められますぞ。」

商人は周囲を見渡し焦り始めた。空が白んできたからだ。

「分かり申した。」

そう言うと全員は駆け足で船に乗り込むと、そのまま出航をはじめた。そうこれが、これから起こる真田信繁の波乱万丈の人生の始まりとも言える運命の船出だったのだ。

第二節 東海不思議旅（前書き）

ついに駿河に着いた真田一行は徒歩で江戸を目指すべく東を目指す。
そこで出会ったのは・・・。

第二節 東海不思議旅

第二節 東海不思議旅

「これが、駿府・・・富士山はこっちから見たことはないが、きれいなものだ。」

真田信繁は港に着いて背筋を伸ばしていた。

「ですな。船から見る富士山よりも、やっぱり陸から見る富士山のほうが、きれいですな。」

「そうだな。船は狭い。」

青海はそう言うと、身体を乗り出す。

「・・・そういいながらも、お前達は毎日酒を飲んでたじゃないか。」

半蔵は呆れながら、船から下り、船長でもある商人に金を渡していた。

「仕方ないだろ。二週間やることが無いんだから。」

青海はあきれたように周囲を見渡す。

「甲板掃除も暇つぶしみたいなものだ、せつかくだから磨いていけばよかったのに。」

信繁は呆れたように船を見つめる。

「そういうあんたはずっと、本を読んでたくせに。」

青海は呆れたようにいった。

「ま、私の暇つぶしにはなりましたがね。甲板磨きは。算はそう言つて腕をまくつた。」

「・・・その代わりにあなたは飲みながら甲板を磨いてるから、こぼれた酒拭いてるだけに見えたけどな。」

半蔵は、悪態をつくとそのまま街中に歩いていく。

「で、こっからどうやって行く？」

信繁は周囲を見渡すが、港町であり家康のお膝元である駿府は、

江戸や京都と同じぐらい活気に満ち溢れていた。

「そうだな。三島から箱根山中を抜け、そのまま相模沿いから街道がある。そこを通ってから、江戸まではほぼ平地だ。」

「・・・おう、何か神社めぐりもいいなあ。あっはっはっはっは。」
青海は豪快に笑った。

「坊主が神社周りとは。あっはっはっは。」

算もにやけたように歩いている。大通りも人通りも多く、町も活気に満ち溢れている。

「・・・本当に大丈夫か？」

信繁は半蔵の横を歩くように歩くと、箱根のほうを見た。

「とういとう。」

「あの辺は確か風魔の根城じゃないか？」

「それは・・・まあ・・・崩れさえいなければ大丈夫だろう。」

「そうか。」

風魔とは旧北条家に使えた忍軍で忍術などの陰陽術で有名な忍者たちで構成された忍軍である。これに対し半蔵などの伊賀忍軍、その近くにある甲賀忍軍は一応陰陽術は学ぶが道具による潜入などに重きを置いている。北条家の滅亡に伴い風魔忍軍も滅亡したと言われている。

「そ、その、風魔の崩れって何なんでしょうか？」

算は不安になったように周囲を見渡した。

「崩れ。まあ、相場に予想がつく。忍軍が無くなって、生きるに生きていけなくなって山賊になる。定番だ。」

「そんな。山賊ですか？」

「それからこのお方を守るために俺達がいるんじゃないか。」

青海は意気揚々と信繁の後ろを付いて行った。

「ですよね。」

「まあ、私もいる。気にするな。」

そう言つと、前を歩く半蔵は吸い込まれるように一つの酒屋に入っていく。それに付き添うように三人は酒場の中に入った。

「よう、おやじ。」

「いらつしゃいませ、半蔵様。」

「こいつらも含め、一杯頼んだ。」

「は、はい。」

そう言うつと店主は店の奥に小走りで向かった。

「ここは？」

「ああ。なじみの店だ。」

「そうか。親父！酒頼んだ！あと、つまみも。」

「は、はい！」

奥の親父さんは店の奥から大声をかけた。

「また飲むのか？青海。」

「まあな。こういうところの酒は飲む為にあるんだよ。」

「お主の事だ。これだけが目的じゃあ、あるまい？」

「簡単なものだ。」

そう言うつと半蔵は周囲を見渡す。そこには忍足立ちが酒盛りをしていたりして、店自身はかなりにぎわっていた。

「おい、南側どうよ」

「いやあな、近く通るとき。村の連中とかが、最近山賊見たとか言つてたんだ。それで一応近くの侍とかには言っておいたけど、しばらくはな……。」

“そうか、でも北は険しすぎて上れないからさ。俺、南行くよ。”

「……ふ。」

信繁は口の端を緩ませた。半蔵は軽く頷くと、店主のいる店の奥を見つめた。

「お待たせしました。」

奥から店主がやってくるとお盆に徳利と空の杯を持ってきていた。

「どうぞ。調子は。」

半蔵は徳利を机に置くと、杯に酒を取り分けている。

「いやあ、最近は繁盛してますよ。どうもね。南回りに山賊が出たらしく、ここから、甲州回る人が多くて、この辺、結構人通りが多

いんですよ。」

「そうか。」

「でも、山賊ってどんなやつなんだ？」

信繁は興味深そうに聞いて来る。

「いやあね。それがどうにもその話だけが無いんですよ。」

「は？」

算は間の抜けた声を上げながら、二人に酒を配っている。

「どうも、山賊に襲われたって奴がいるんですけどね。お待さんもいたんですけど、どうもその話だけが出てこない。この宿場で今、その話で持ちきりなんですよ。」

「そうか。」

半蔵は頷くと、店主が持ってきた小魚を棒に刺した物を手に取る
と、口に一気に啜えた。

「ならどうする？」

「ん？」

信繁は頷くと、腰に下げた竹の水筒から水をぐつと煽った。

「北は二週間ぐらい余分にかかるが、甲州から抜ける道もある。だが、甲州にはもしかしたら、武田崩れの山賊がいる場合もある。まあ、今回は南にも山賊がいる事もあるから、どっちも変わらん。」

半蔵は酒を煽り、一堂も見る。

「武田崩れの山賊なら俺らでも顔が利くんじゃないのか？」

算が軽い調子で周りを見ながら答えた。

「いや、顔を知っていればいいが、大抵こういう崩れは武将とかではなく、戦場で逃げ出した兵士とかが多い。だから顔を知っていればかもとして襲われるだけだ。」

「そうだな。確かに甲州は行って見たいが、山賊はいやだな。」

「だな。」

青海は酒を一気に煽り、魚を握り締めるとぐいつと飲み込んだ。

「でも、お館様がいた頃はそんな事はなかったのにな。」

「そうは言っても、もう今じゃあ、昔の物語だ。悔しいけどな。」

青海はそう言つと徳利を握り、残つた酒を一気に飲み干した。

「もう、さすがに慣れたよ。」

諦めたような声で、手に持った杯を筧はぐいっと煽った。

「そうだな。」

信繁は寂しそうな顔で周囲を見渡す。

「どうする？」

「……。俺は南に行つて見たい。鎌倉とか見てみたいしな。」

半蔵の問いに信繁は大きく頷いた。

「そうですね。」

筧は頷くと立ち上がる。

「じゃあ行くか、せめてもう少し進んだ宿場までは行きたいからな。」

「わかった。」

そう言つと半蔵は立ち上がると店主にお金を渡した。そしてそのまま店を出た。

そういつ、青海はと歩くペースを上げた。

「それは真田様が決めることだ。」

「それはそうだが、やっぱり酒とかだと山より海のほうが……つまみが旨い。」

「だな。」

その言葉に全員が頷くと、四人はそういつつ歩くペースを上げた。

「で、この辺に集落とかはあるのか？」

信繁は山を見渡す。

「結構道沿いに多くあるぞ。まあこの辺はともかく中腹から先は誰もいなくなるからな。」

半蔵はまっすぐ前を見て、山を登っていた。

「そうか。やっぱり。」

「どうしてだ。」

「いや、どうも人の気配を感じる。」

その言葉に後ろの二人に緊張が走る。さすがに戦に慣れた二人のため、いきなり周囲を見渡すことは無かった。半蔵もその表情は変えることは無かった。

「もしかしたら狩人かなんかじゃないのか？」

半蔵は少しだけ声を下げて信繁に声をかけてみる。

「いや、だとしたら不自然な所が多い。こっちに動きを合わせて動く必要は無い。」

「……そうなんですか？」

筧も、二人の緊張に合わせて、じっと足元に視線に合わせて、相手に視線を合わせないようにしている。風がないのに周囲の草が揺れ始める。

「くる！」

信繁が、押し殺した声で叫んだ瞬間、坂の上の草から何か黒い何かが飛び出す瞬間、信繁は一步踏み込み、脇差を抜く。

「はあおおお！」

その黒い何か・・・いや、黒い何者かは手に持った手斧を振り下ろす。信繁はその中腹を狙い、脇差で打ち払った。その瞬間、黒い何者かは後ろに飛びのき、手斧を構えた。

「何奴！」

そういい全員が武器を構える。相手はどうも一人らしくその黒い衣装もあつて昼間の今では路上では目立っていた。体の線が細くしなやかに見えた。

「誰かはしらねえが、俺達を襲うたあ、いい度胸だ。」

そういい、青海は得物である棒を構えようと思うが、周囲を見渡してやめて、骨法の構えを取った。

「お前達！出てけ！」

そう聞こえた声は女性とも男生徒も使いない中性的な・・・子供のようがあるが、その殺気はすさまじいものだった。

「は！？ふざけるな。俺達は旅のものだ！敵意はない！」

「その成りで何を言う！」

そう言うとその黒い衣を纏った人間は声を荒げながらも冷静にこちらとの距離を取っていた。

「俺達は只、江戸に向かうだけだ。」

「知るか！」

信繁は脇差を構えると、少しずつ距離を詰めている。

「お前ら侍は！山賊とか何とか言つてまた村を襲う気だろ！」

・・・その言葉に全員が息を呑んだ。

「俺らは村を襲う気はない。解るか？」

信繁は説得しようとしていた。だがその表情はこわばっていた。

「そんなの信用できるか？」

黒装束は叫ぶ。

「どうします？真田様。」

算は信繁の脇を固めるようにじりじりとにじり寄り。しばらく考えたそぶりを、信繁がすると、何かを思いついたように目の前の人間を見つめた。

「そうだな。お前、名前をなんと云う？」

「お前なんかに教えるか！」

「じゃあ、お前。お前の集落に俺達を連れて行け！」

「そう云うと信繁は脇差を鞘に納めた。」

「・・・どうするつもりだ！」

「決まってる。そんな馬鹿侍なんて俺達が倒してやる！」

「そう云うと、信繁は、皆の一步前に出た。」

「信用できるか！」

「・・・信用してもらおうしかないな。」

その黒装束と信繁はじつと見つめていた。

「なんでだ。」

「何が？」

「なんで、」

「なんで・・・そんなに、いきなり要求を！」

「おまえらは、山賊に困ってる。俺たちは、まあ、仕事に困ってる。」

いい飯の種じゃないか。」

「真田殿！」

半蔵が叱責するように声を上げる。

「侍とかはそうだ。いつも弱いやつにつけ込む。」

「・・・そう思うのは自由だが、山賊とかにやられているのはそっ

ちじゃないのか？味方が欲しいはずだろ。」

そしてまた、しばらくの静寂が周囲を包む。

「あんたはどつちの味方だ。」

「だれとだれだ。」

「侍と、こつちのだ。」

「さあな、どつち側につくかは、村に行ってからにしよう。」

この言葉の後にもまた、息をのむ静寂が訪れる。

「・・・わかった。お前みたいな強情な奴・・・初めてだ。」

「そう云うと、目の前の黒装束は覆面をとった。そこには流れるような黒髪、ほっそりとしたその顔は、誰がみてもはっとする美しさ

だ。その顔の所々は泥や汚れがあり、その無骨さは、周囲に伝わってきた。周囲も同じ意見らしく、全員がその顔を前にして唾を飲んだ。その姿は声と同じく男性とも女性ともとれない何か蠱惑的なところがあつた。

「俺はまだが、名乗ってなかつたな。俺は、しま。」

「真田だ。よろしくな。」

そういうと、しまは後ろを向けると、そくささと歩いていった。まいった。

「いいんですか？ついて行って。」

寛は、信繁に顔を寄せ、小声で話す。

「いいんじゃないか？あれが噂に聞く風魔かもしれん。ならば、それを見に行くのも悪くなくろう。」

「・・・江戸に着くのは遅れますぞ。」

半蔵は信繁を半眼でにらみつける。

「だとしても向こうもある程度の遅れは計算の内であるう？」

「ん・・・んう。仕方ない。まあ、村に行つて事をかたづけたら、江戸に行つてもらいますぞ。」

そういうと、半蔵は懐から干し芋を取り出すと、口でかみちぎる。

「わかりましたよ。」

そういう信繁の顔は少しにやけていた。

「ここが俺たちの村だ。」

「はあ、はあ、ちよつと待ってくれや、俺はさすがに疲れたぞ。」

「青海、情けないぞ。」

肩で息をする青海を笑顔で見つめる信繁はここまできても涼やかだつた。

「さすがに今回はかりは、はあ・・・はあ、青海に味方しますぞ。」

真田様。三刻ばかりほぼ全速力で駆けさせられて、息が切れない御仁がいましようか？」

「そう言う事言うなよ。せい。このぐらい出来ないと山暮らしはできんぞ。」

「で、村の名は？」

その流れをたたききるように涼やかな顔のしまと、半蔵は下を見下ろした。峠を二つ越え、見下ろした峡谷の谷底近くに、川に張り付くように一つの村・・・というか集落がそこにあった。

「さあ、俺は村長じゃないから、わかんね。」

「そうか。」

「というか、小さな村ですな。俺の田舎の村よりもちっさいところ、はじめてだ。」

寛は、驚いたように下を見つめた。

「馬鹿にするな。これでもみんないいやつだ。」

「というよりは・・・本当に何回か襲撃されているようだな。」

「そうだな。」

半蔵の目線の先に目を向けた信繁はそううなずいた。そこには焼け落ちたまま放置された家が数軒あった。その近くの畑も荒らされた形跡もある。

「あれがそうだ。俺たちが山賊とか言っつて、急におそつてきて、それで、村荒らしていった奴らの跡だ。」

その言葉に全員が押し黙ってしまった。それほどまでに、焼け落ちた家の跡はむごたらしいものだった。

「これは・・・な・・・。」

半蔵は、言葉を飲んで、その焼け跡から目を背けた。

「あんな事した侍どもは信用ならねえ。ま、お前らがそうかどうかはついてからだ。この斜面降りたら・・・ま、半刻ほどかかるからその辺でキノコでも探しながら降りてきてくれ。」

そう言う、しまの下げている風呂敷には、あふれんばかりの山菜が入っていた。

「拙者はこういう事には不慣れだから、真田殿もがんばって、食べれるものを頼みますぞ。」

そう言う半蔵の着物の懐は少しふくらんでいた。

「ん？お前？集めてくれたのか？」

「ああ。これ。確かこれは食べられましたよな。」

そう言うて懐から、松茸を二つほど取り出した。

「ああ！それは！よくあつたな。それ、滅多にとれないから・・・
焼くと言いんだぞ。」

しまが目を輝かせ、松茸を見つめていた。

「まだ修行が足りませんぞ。しま殿。結構ちらほら生えてましたからね。これがまた・・・炙り、茎の吸い物あたりは絶品でしたね。結構いい酒のつまみです。」

「俺は、こういうのには慣れていないから、もう休みたいぞ。」

そう言うて青海は近くの木にもたれ掛かった。

「はっはっは、青海。おぬしが酒よりも休憩が欲しいとはな。」

「確かにそうだが、さすがにもう足腰立ちませんよ。」

青海の言葉に全員が始めるように笑った。

「麓まで来ると、本当に・・・。」

そう言うて麓の集落まで降りてきた一行はその惨状を目の当たりにした。途中で言葉を飲む筈をみて誰も反感を覚えなかった。村は、陰気に包まれ、いや、敗戦濃厚の戦場を見せられるような落ち込みようで、息さえも吐くのが躊躇われる。そんな空気だった。村自体はいくつか建物に刀傷があるが、それほど建物の造りも良く、どの建物もそれなりに立派に出来ていた。日中にもかかわらず、畑に出ている人間の数はまばらで、その顔の暗さは何ともいえない悲しさを追っていた。しまとその一行はその村を早足で駆け抜けていた。

「これはまあ・・・非道いですな。いつ、襲われました？」

半蔵は軽く合いの手を入れる。

「それは、村長に聞いてくれ。」

そう言うてしまは、何かを嫌うように早足で村のある建物に向かう。そこは村の中でもひととき大きな建物だった。

「村長！村長！」

その建物門を素通りし、演題まで行くとそこには、湯飲みで何かを飲んでいるおじいさんが一人ひなたぼっこをしていた。

「なんじゃ。うるさい！」

「ん？村長。こいつらがしつこいから、言ってくれ。何か飯の種になりそうだから、村に連れてけとかいいおつてさ。このお侍！」

「お侍さんかい。」

そう言っただけでひなたぼっこしていたおじいさんは、じつと後をついてきた信繁一行をにらみつけた。

「お主ら侍ならこの通り、報酬払うだけのモノがある村じゃない。

賊……いや、賊以下のあいつらに金目のものは全部盗られました。飯の種になりそうな事なぞ一つもありません。」

そう言う村長の目から、涙がぼろぼろ落ちた……ような気がした。

「これはいつ襲われた。」

そう聞く半蔵の目は真剣だった。

「これは……と言うかお主……いや、そんなはずはあるまい。

まあ先週の事じゃ。」

「先週か。かなり近いな。」

信繁は周りを見渡す。確かに村に男の数が少なかった。

「まあ、そうことじゃ。ここまで来ていただいたからと言って今の状態では、白湯の一杯とて出すのがはばかられます。お引き取りください。」

「そうですね、真田様。帰りましょう。」

算はそう言うのと信繁の袖を引っ張った。

「お前、こんな非道い事になった村ほつとくのかよ！」

「そんな事言いますが、この現状、どうしようもありませんまい。」

信繁の後ろで、青海と算が言い争っていた。

「……襲われたのは、本当一回だけかここ？」

信繁の質問に村長としまの顔色が変わった。

「どうも、その柱の刀傷、先週のだとは思えないんだよな。もつと新しいのもあるんじゃないか？」

「良く気が付かれましたな。そこのお侍さん。確かに、三日ほど前も来て、男どもがかっさらわれていきました。」

「なぜ隠した？」

「・・・ここには本当に飯の種になりそうなものはもうありません。食べ物も奪われ、年頃の娘はすべて連れて行かれ、男さえも先日持つて行かれました。もううんざりなのです。先日ので無からからなけなしの金を渡し、侍を雇いましたが、賊が来れば山中に逃げ出しました。もう誰も信用できません。もう雇うほどのお金も、物も作物もありません。」

その村長の言葉に全員が押し黙ってしまった。しまはその隣で悔しそうに下をおつむいていた。

「そいつらはなんて名乗っていた？」

半蔵は顔を・・・普段感じられる余裕さなぞ微塵も見せない怒りの形相を押し殺した・・・様に信繁には見えた表情で聞いてきた。表面上は・・・細かいところをのぞいてはいつもと変わらない半蔵の顔だった。

「確か、半田山なんとか次郎とか名乗っていましたな。そんな賊の事なぞ、早くも忘れたい物です。」

その瞬間、半蔵はきびすを返した。その方を信繁は力一杯つかんだ。その顔は口元は笑っていたが、瞳の奥は怒りで煮えたぎっていた。

「どこに行くんだ？」

「ん・・・そ・・・そうですね。少々用でも足しに・・・。」

半蔵の顔はすこしこわばっていた。いや、こわばっていたのか怒りで肩が震えていたのか、区別するのが難しかった。信繁自身そうだったため、彼のやろうとする事が一目でわかった。

「じゃあ、俺もその用とやらを足しに行こうか。」

信繁はそう言うと、肩を引き寄せ半蔵と、門の外に出てい行って

しまった。それをみた青海たちはあわてて後に付いていった。

「おい待てよ。用って川はそっちじゃないぜ。」

しまはそう言つと声をかけるが、皆声が聞こえたそぶりもなかった。

「・・・もし、まあそんな人がここに顔を出すとは思えないが、思った通りなら・・・。しま！」

「はい！」

村長の声につい背筋を伸ばしてしまう。

「あの旅人たちについて行きなさい。」

「はい？」

「そして、用が足し終わったのを見届けたら、もう一回家に来るよ
うに伝えてくれないか。」

「はいい？」

しまはつい抜けたような声を出してしまった。

「わかりましたよ。頭領・・・いや、村長。行ってきます。」

そう言つと、しまは走って信繁たちを追いかけた。

「用って・・・ここまで来る？」

全員は村を一直線に出て、今まで来た道を引き返していた。あつ
という間というか、すぐに村の入口を超えていた。

「半蔵殿。どうするつもりか。」

今までの冷静さが嘘のような、怒りで満ちた早足で坂をあがつて
いく半蔵を信繁は肩をつかんで押し止める。

「すまない。二、三日この村にとどまって、村の者を守ってもらえ
ないか？」

半蔵は今にも駆けて戻ろうとしていたが、その様子を青海達は呆
れていた。

「どうしてだ。」

「私は・・・。」

「戦場の習いだとはいえ、ここまで怒る必要は・・・。」

青海の一言に、半蔵はさらに声を張り上げた。

「戦場！ここが！？ふざけるな！ここが、平定されて26年は経つ。そんな平和な・・・そんな村が、襲われて！何も感じないのか？お前らは！」

半蔵の怒りで、全員が押し黙ってしまふ。

「すまなかつた。そう言う意味じゃない。」

青海が申し訳なさそうに顔をうつむかせた。戦国時代になって以降、各地で領主や山賊による略奪は横行していた。また、兵士として、領主に若い男を取られていくので、食べ物は何れず、それが飢餓を生み、山賊が発生するという堂々巡りの世の中で、このような襲われる村というのは彼ら戦場に生きるものにとっては、いつでも聞く話でもあつた。

「俺たちの戦いが！俺たちが戦ってきた意味が！こんな、村をこんな奴に襲わせるためにやる事じゃない！俺たちは・・・。」

そう言うつと、立て膝を付き半蔵は顔を伏せた。

「俺が聞いたのはそつちじゃない。」

信繁は半蔵の顔をまっすぐ見つめていた。

「俺が聞いたのはなぜ俺たちを置いていく！？」

「これはほぼ”私闘”になるう。罪をかぶる音は拙者で十分だ。」

半蔵はそう言うつと、きびすを返した。その肩をひつつかんで信繁は無理矢理正面を向かせる。

「本来俺たちはここにいないはずの人間だ。誰が死闘しようとする浪人が暴れたただけだ。それに・・・。」

「それに？」

「俺も、こんな事を許せるほど心が広い人間じゃない。だから。俺も行く。お主が止めても一人でも行く。」

信繁は、申し訳なさそうにつげる。

「ですな。このような働き場みすみす見逃すのはもつたない。体がなまつたところですよ。」

算は肩にかけた槍の笠を抜くと槍を構えて見せた。

「だな。このままでは半蔵殿にただの酒飲みに見られる。それに、このような見所が何もない村にいたら、暇で死んでしまいそうじゃ。お主はワシに死ねと。」

青海はそう言うのとにやつと笑ってみせた。

「いや、青海には留守番を頼もうと……。」

青海の方を向くと意外そうな顔で信繁は青海の肩をたたいた。

「え……。」

「誰かいないと、報復とかで来そうで怖いんだ。だからさ。」

「だからなんでわしなんじゃー！ー！」

その声に全員が笑ってしまった。

「……すまない。……取り乱してしまった。ただ、これが本当か、または誰かの陰謀か確認する必要がある。そこでだ。山の根元の三島宿までもどつて、それから、半田山とか言う輩のところに行つて、せめて、村の連中を助けてやりたい。それには……。」

その言葉に全員が顔を寄せていた。その様子にしまは、物陰に隠れていたが何か聞き取れないので、少しずつ気配を消しながら近づいた瞬間、全員がしまの方を向いた。

「うっひひい！」

しまは、声にもならない声を上げた。

「しま殿、あなたも男の用足しに付いてくるほど暇ですか？」

半蔵は引きつった顔でしまを見つめていた。

「いやあな。ほら、いきなり出て行くもんで、つい……ね。」

「半蔵どの、少しはこいつも戦力になるし、それに目標の顔もわかる。……。」

「その童、一緒に付いてこい。」

そう言う半蔵の声にしまは立ち上がった。

「どこに行く気なんだよ。」

「ついてこればわかる！」

半蔵の自信満々の声が響いた。そして……。

「で、ここまできちやっただ。」

しまは目の前の大きな館を前に呆れていた。この領主の屋敷は、地方で統治を任されている代官”半田山義男”がいる駐在所だった。当時は下っ端からたたき上げの現場主義として、治安に大きな手柄を立て、急激な出世をしていた最近の稼ぎ頭の筆頭だった。だがその急激な出世に多くの物がやつかんでもいた。それまでいくつもの不穏な噂が出てはいたが、半蔵は流石に先ほどの村の現状を聞くまでは、取るに足らない物だと思っていた。だが、実際はその出世の手法はあまりにも悲惨だった。

「人を使って調査したところ、かなり悪質な山賊・・・山賊にかこつけた人狩りを行っていた事が発覚した。」

半蔵はじつと向こうの建物を睨みつけていた。

「たとえば？」

信繁は町中で買った槍を肩にかけ、じつと館の正門を見つめていた。

「あの村だけかと思ったら、周囲の村々すべてを山賊狩りと称して襲っていた。さらにそこから村にいた女を片っ端から女をどこかに売りつけたり、男を捕らえて盗賊として処罰する事によって出世の糧としていた。」

「じゃあ、俺の父ちゃんとかは？」

「村の男どもは、まだ処刑されていないはずだ。どうも盗賊として江戸に持っていて見せしめをかける気らしい。」

「そんな・・・父ちゃん!!」

しまは目の前の館を見つめる。今まではふつつの館に見えたのがいつの間にか悪の巢窟に見えてきた。

「それで得た金を使って賄賂を上に通ったり、周辺の下っ端を使って商人に税とか甲斐って金をむしり取っている。」

「そこまで悪党だと、むしろ清々しいな。で、半蔵やれるか？」

「やれる、やれないじゃないぞ。やる!」

半蔵はタスキをきつく締め、裾をまくり上げる。

「しまは山奥で、待ってもいいんだぞ。」

「嫌だ。父は・・・村のみんなは、俺が助ける。」

しまは手に持った木の棒を青眼に構えた。

「・・・こいつを使え。少しは役に立つ。」

そう言うつと脇に刺していた脇差しを鞘ごとに引き抜くと、しまに投げつけた。

「これは・・・いいのか？」

そう言うつて、しまは鞘から脇差しを引き抜く。その刃は通常の脇差しよりも一回りは太く、鉦と勘違いされそうな太さだった。その刃からは様々な、複雑な臭いにおいがした。だが

どう見ても外見の無骨な鞘とは違うその刃物は、業物のおいさえした。

「無事に帰れたら返せよ。そいつは貴重だからな。」

「わ、わかった。」

その刃物のおいに少しこわばって、しまはコクコクとうなずいた。

「行くぞ！」

半蔵はそう言うつと手に持った黒い玉に付いた縄に火をつけ、正門に向かって投げつける。

「ん？」

正門の門番がじつとその球体を見つめっていると、急に爆発した。

『お前ら！悪徳代官はおれがゆるさねえ！成敗してやるから表えでるや！』

信繁が大声を上げた。その声に反応して館から侍たちがワラワラと出てきた。

「お前ら。何者だ。」

先頭に出てきた太った男が大声を上げる。この男一人だけ服が上質な物らしく代官みたく見える。

「お前らみたいな下郎に、答える名前なぞはない！」

「何だと、皆の物！こんな奴討ち取ってしまえ！」

そう言うと周りの侍達が信繁達の周りを囲む。

「・・・大丈夫なのかよ。」

しまは、隣に構える半蔵に声をかける。

「目の前に集中しろ。」

そう言いながらも侍達は徐々に間合いを詰めていく。

「殺すなよ。」

信繁は緊張した声で、後ろに声をかける。しまがうなずくと、その次の瞬間、信繁が槍を素早く突いた。突きのために踏み込んだ足がその勢いで砂塵を立ち上らせ、その槍は轟音を立てて、目の前の兵士の肩に吸い込まれるように刺さった。その勢いで兵士が吹き飛ばす。

その次の瞬間には槍を手元に引き戻していた。その様子にさすがに侍達はざわつき始めた。

「来いよ。腑抜けども。」

信繁がさらに挑発するが、その一突きに徐々に後ずさを始めた。「お前ら、一気に囲んでしまえ！こんな奴一人苦戦するなら給金やらんぞ！」

太った男は集団の後ろの方から大声を上げた。

「半田山様・・・。」

部下達の気弱な声が響き渡る。

「ええい。かかれ！かかれ！」

それにハツパをかけた次の瞬間。半田山の横まで一人衛兵が吹き飛ばされていた。また肩を打ち抜かれ肩から血を出していた。

「腑抜けどもが！弱い奴しかやれないのか。」

その瞬間をねらって、脇にいた兵士がしまに手に持った熊手を振り下ろす。しまはそれを見極めると、一步踏み込み相手の獲物を撃ち払った。その一撃に無音に近い音で武器が吹き飛ばされ、熊手は遠くに飛んでいってしまった。熊手の柄の太さは刀の攻撃に備え、木は太めだったがそれをあっさり切り裂いてしまう。

「す、すげえ。」

「しま殿。いくさ中ですぞ。」

しまはその獲物の切れ味に呆然としてしまつが、半蔵は目の前の兵士をじつとにらみつけて、相手の行動を押さえ込んでいた。

「お前ら、それでも侍かよ！」

さらに信繁が掛け声をあげるが、包囲が狭まる事はなかった。さすがに戦場経験が多い者が多く、その強さにその一步が踏み出せずにいた。

「・・・あれ。」

半蔵が顔をあげると、建物の方から白い煙が上がるのが見える。

「わかった。」

そう言つと、信繁は槍を低く、威嚇するような構えに変えた。次の瞬間には槍は目の前の衛兵の肩に突き刺さり、次々に吹き飛んでいった。それにあわせ、半蔵も兵士の根本に潜り込むと次々と素手で吹き飛ばしていった。その行動の早さにただただ驚くばかりだった。

「は・・・はは・・・は・・・。」

しまの乾いた笑いが終わる事には取り囲んでいたはずの兵士達は全員が地に伏していた。

「さすが、半蔵殿。流石の手際。」

そうにやりとする間に半蔵は、つかつかと、半田山らしき太った男の目の前にたつと手に持った刀を半田山の鼻先に突きつけた。

「半田山殿、近隣の村々の方々から聞きましたぞ。まさか、罪人でつち上げるとは思いませんでしたぞ。」

「お主。何者だ。」

「・・・まあ、そうでしょうな。ただ、この惨状をどう説明しましょうかね。上に。」

そう言つて、周りを見渡すと肩とかをやられ、うずくまっている兵士達がいた。

「この無礼者が！この代官である半田山に逆らつと・・・。」
その瞬間、鼻先にあった刀の切っ先が首元に移る。

「それは、本当にですか？」

半蔵の声は冷静そのものだが、その行動は何か怒りに満ちていた。「ふん。もし、今度罪人をでっち上げれば今度、こうなるのはあなたの番でしょう。」

そう言った瞬間、刀を振り上げ、横になぎ払うと、ちょんまげが断ち切られボトツと落ちた。その瞬間、半田山は口から泡を吹いて、気絶してしまう。

「これで、追っ手しばらく来そうにないですな。」

そう言い、館の方をみると、脇道からぞろぞろとぼろぼろの服を着た集団がやってくる。その集団の先頭には青海が先頭を、寛が後ろに付いていた。

「真田様。どうにか見つけましたぞ。」

「よし、青海！行くぞ！」

「お、お父ちゃん。」

「しま！」

そう言って、集団から一人の男がしまを見つけると、ふらふらになりながらも駆け寄ってきた。しまも、涙を流して男に向かって駆け寄り、そして力一杯抱きついた。

「お主達！帰り方はわかるな。」

「は、はい！」

男達がうなずくと全員が周りを見渡した。

「追っ手が来るかもしれん。早く村に戻るんだ。私たちもすぐに逃げろ。」

「でも・・・いいんでしょうか。もう一回村に代官が来るかもしれません。」

「お主達は悪い事をしていないんだろうが！まず村にいつて、お母に会ってこい！」

「お、おれは？」

「お前も、お父と家に帰れ！」

「おう！」

その言葉にはじかれたようにコクコクうなずくとそのまま、ぼろを着た集団としまはそのまま走って行ってしまった。

「我々もいきますかな。かなりの寄り道でしたからな。」

「ああ。」

そう言うつと信繁達は彼らとは違う山中に走り去っていった。

「と言うわけで、罪人どもに逃げられまして。出来れば榊原殿に兵を出していただき、山狩りを願いたい。」

半田山は、そう言うつと代官屋敷に来た追撃部隊を率いる武将の榊原に頭を下げていた。その行為自身を榊原は苦虫とすりつぶしたような嫌な顔をしてみている。

「お主、近隣の村々を盗賊さながらに襲い、罪人と言っては村の若い者をしょつ引いて、女をさらっては、女郎屋に売りつける。これが、代官のする事か！」

榊原は怒鳴り声を上げて目の前の男を睨みつけた。

「な、何をおっしゃるのでしょうか……。」

半田山の顔から汗が滝のようにあふれるが、その顔を決して上げようとしなかった。

「私も馬鹿ではない。顔を上げよ！」

榊原は怒鳴り声を上げる。その声にそろそろと顔を上げると、半田山はその顔に恐怖で顔が引きつっていた。榊原の声が怒りに震えた声が象徴するように鬼のような形相で榊原ははいつくばる半田山を睨みつける。

「流石にこの報告が信じられなくてな。ここに来る途中の村でな。どうされたと思う。」

「さあ……。」

「まさかな。全員が建物に逃げ出して、竹槍構えて出迎えたよ。どうしたかと聞いてみたら、村に兵士が来ると村が焼き討ちにあつとか言われたぞ。」

「それは……私より前の……。」

そう言い訳しようとした瞬間上げていた頭の上に足を叩き下ろし、力一杯踏みしめた。

「確か、私が前にこのあたりを治めていたんだよ！。私はあれを見た瞬間、その場で腹をかつ捌きたくなつたわ！」

「え……あ……は……。」

「盗賊討伐に來た甲斐があつたわ。ひつたてい！」

そう言つと、脇にいた侍は半田山を引きずつていった。

「半蔵殿……。すまない。」

誰もいなくなつた部屋で神原は一人ぽつりとつぶやいていた。

「結局報酬もなく、むだ働きでしたな。」

そう言つ算は、手に持つた枝を火にくべていた。周囲は暗く、夜も更けた森はもう静かであった。しま達に追いつこうとも考えたが、追つ手が来るかもしれない事も考え、わざと別路で、予定通りの江戸に向かう事にした一行だった。

「これ……。うまいぞ。食うか。」

そう言つと、半蔵は串に刺して炙っていた松茸を算に差し出した。それを素直に受け取ると一気に頬張つた。

「確かに旨いですが……。やっぱり、白い飯が食いたいですぞ。」

「いいんじゃないか。こういうキノコでも酒が進む。」

そう言つと青海は手に持つたひょうたんの酒を煽つた。

「半蔵殿。どうしてあそこまでの態度を。お主ほどの男が珍しい。」

「そうだな。ここまで來たら少し、寝るまでの間の酒のつまみだ。聞いて欲しい。」

半蔵は、近くの木により掛かると、思い出したように上を見上げた。

私の故郷は、山の奥でな。昔から食べ物は少なくとも幸せな村だった。だがな、当時の領主は村を弾圧する事しか知らず、よく村が襲撃されては村が総出になつて建物を修復していたのだ。だがそん

な日々が嫌だった。だから先代の村長はいろんな書物を研究してや
つと、そう言う奴らを追っ払った。でも、ずっとなんか事がある事
に襲撃され続けた。俺も一度、村が襲われ、友達が目の前で殺され
たものだ。だがな、それが今の時代、戦国の日常茶飯事みたいな物
だ。だがな、そんな私でも・・・だからこそ・・・こんな事が日常
茶飯事になんかなつちやいけないんだ。そう言って私は村を出たん
ですよ。まあ、いろんな事があつたんですけど・・・その中でも、
誰が相手だろうとそう言う弱い奴をいじめるようなやつは今でも許
せない。

「・・・まあそう言う事だ。俺はそれ以来、そう言う何かにかこつ
けて村を襲撃するような奴らが許せない。まあそう言うわけだ。」

そう言うて下を見ると、青海達は・・・もう眠っていた。

「そうだな。だから徳川に仕えるのか？」

と思つたが、信繁一人は起きていた。

「まだ寝ないのか？」

「まあな。」

うなづく信繁は少し眠そうにも見えた。

「ま、そうだな。何回か撃退した頃になると、村を盗賊の巢かとい
つて軍を何回も差し向けられた。そのときに村を救つてくださった
り、食料を送つてくださったのは徳川様ただ一人だった。俺自身命
を救われもした。だから俺はあのお方しか、この戦国を平定できる
人はいないと、今でも思っている。」

そう言う半蔵の目は、どこか遠くを見つめている目だった。

「・・・俺か。すこしは素直になつたようだな。」

「ふふつ。そうか。あつはつはつはははははは。」

「ふつはつはつははははは。」

少し乾いた・・・どこかヤケになつたような半蔵と、それにつら
れた信繁の笑い声が夜の森に響いていた。

「後は、ここを下れば！相模の海ですよ！」

半蔵の少しはれた声が聞こえる。

「はあ・・・はあ・・・。」

算は肩で息をしながら、最後の気力を振り絞って算用への一步を踏みしめた。その眼下に広がるのは、広大な海とそこを行き交う船達。そしてきれいな砂浜であった。

「おおー！これが、相模の海！」

「流石にここは絶景だって。真田様、ここで一つ腰を下ろして、休憩しますか。」

「だな。」

そう言つと信繁は近くの岩に腰を下ろし懐から水筒と饅頭を取り出した。

「でもまあ、予定よりは一週間は遅れています・・・流石にまあ、怒られそうですな。」

半蔵は、呆れながらも地面に腰をおろした。

「でもここは少し道よりはずれてはおらぬか？」

信繁はそう言つて海を見つめていた。小唄貝山から見える海は青く、美しいものだった。

「ここは拙者のお気に入りの場所。この道を通るときにはここによつて。海を見つめ、その広さに感動していたものだ。」

その景色はちょうど、砂浜の地平線と海と陸との境界線そして水平線の先の彼方まで 津づく海をみられる場所だ。

「でもまあ、この先の海に・・・いや、あのバテレン達が言つには、彼らはこの海を越えてやつてきた。」

「そつなのか？」

青海が海を見つめていた。その海の先には何も・・・島らしいものはなかった。

「彼らの意見が正しければ、この日本は小さな島であり、朝鮮のあるところは、これの数十倍も数百倍も大きな陸なんだという。俺はそれが未だに信じられない。こんな広い国なのに、それより一

位大地はどうなっているのか想像も付かない。だがそう言うところから人は来て、商売をしている……。まあ、人間というのはフフフフ。」

「確かにそうですね。どんなところでも民は……。いや、人はたくましいものです。」

寛も海を見つめながらそうつぶやいた。

「だよな。」

”おーい”

「でも、まあ……。本当に海は広いな。」

”おーい!”

「だよな。さて、行くか。少し息をついたら、どうにか下るくらいまではいける。後は平地だろ。早い早い!」

そう言っつて青海は立ち上がった。

”おーい!”

「青海どの、油断召されるなよ。砂は結構足が取られる故、すぐにばてますぞ。」

はっはっはっはっ。全員が声を立てて笑っていた。

”おーい!”

「何か聞こえないか?」

信繁は不思議そうな顔をして後ろを振り返るがこの場所が少し道から外れているためか、茂みで、誰の姿も見えない。

「さあ。そうだったとしても拙者達には関係あるまい?」

半蔵はそう言っつと持っていた水筒を腰にくくりつけ、立ち上がる。その瞬間茂みから勢いをつけてくり影が飛び出し……。

「さて……。」

”ばっちこおおおおっおおおおx……。がたがたがた。”

立ち上がった半蔵に体当たりする。声が聞こえるまもなく半蔵は黒い影にぶち当たり……。山頂から滑落していった。

「半蔵!」

信繁は下を見つめるとかろうじて、近くの木の下に激突した二人の影を見る事が出来た。「大丈夫かー！」

「ま・・・まあ。」

半蔵の弱々しい声が聞こえてきた。

「おいつつつ・・・。だいじょうぶ・・・か・・・。」

覆い被さった男にしては細い・・・が上半身を起こす。

「お主は・・・。」

「おお。こいつは・・・と言う事は。」

そう言っただけ振り返ったのはしまだった。

「あ・・・しま殿じゃないか。どうした？」

信繁の何ともいえないふつうの音が聞こえる。

「ああ。真田殿。やっと会えた。」

しまは立ち上がると、軽々と坂を上ってくる。

「探したぞ。」

「どうした？」

しまは、信繁の目の前に立つと懐から小刀を一本取り出す。そこには真田の家紋が刻まれていた。

「まず、これを返しに来た。」

「ああ。」

そう言っただけしまは刀を突き出し、真田はそれを素直に受け取る。

確かに前に渡したあの脇差だ。

「あと・・・これ。」

そう言っただけしまは懐から手紙を取り出した。そこには感謝状と書かれていた。

「これは？」

「村長様からだ。」

信繁は包みを取り出し、手紙を広げると、その紙一杯に字が書かれていた。

” 拜啓、真田様。村の者を助け出してくださったありがとうございます。村に謝りに来ます。あれから、なぜか、榊原という方が参って、村に謝りに来まし

た。それが真田様のお陰と思い、いても立ってもたまず、一筆したためました。”

「あ、そうだ。これ、怒って出て行ったお主にとって、村長からなんかこれが。」

”真田様が、助けてくれたから村で歓迎の準備をして待つておりましたが、なかなか来てくれないので、しまを向かわせました。今村で出せる金目のものはありませんが、せめて感謝の気持ちだけでもと思っております。”

「委細承知と言いたいですが……。なあ……。」

”そこでここでさらにご迷惑をかける内容で悪いのですが、しまをどうかあなた方のお供として連れて行っていただけないでしょうか。しまはめざとく、身軽なのであなた様のお役にきつと立てると思います。よろしく願います。敬具。村長、吉田庄右衛門より。”

……。信繁は、手紙を読み終わつた後、じつとしまを見つめていた。同じようにしまから何かを受け取つた半蔵もまたじつと、しまを見つめていた。

「「こいつを連れてく……。ねえ……。」」

そう言う二人の声は重なつていた。

「お主、この手紙の内容はわかっているのか？」

半蔵は半信半疑という顔で、じつとしまを見つめた。

「え……。村長が言うには、そのまま真田様について行けばいいんだろ。よろしく。」

そう言うつと、大きく、真田達に振りかぶるような大きなお辞儀をした。

「せっかく村を救ってくれたんだ。これぐらいしてもバチは当たらないよ。」

「やっぱり……。お主一言も聞かされていなかったんだな。」

半蔵は呆れて手に持っていた手紙をしまの方に見せつける。

「だって俺、字、読めんもん。まあ、書けませんが。」

「どれどれ。」

算が興味深げにその手紙を見つめる。

”この子には、一通りの基礎技術は身につけてはありますが、まだ粗相者で、世の中の事を知りませぬ。この子は女故、女の作法も山中ではなかなか身に付きませぬ。出来ればあなた様には、この子に見事な草としての修行をどうかつけてやってください。もしあなた方がお気に入りなら、しまはそちらでお召し抱えください。”

「女の作法って・・・こいつ・・・女か？」

そう言って二人はしまを見つめる。確かにきれいな黒髪でほっそりとはしているが服装はまたぎ達が着るような山の服装であり、女らしい格好はしていなかった。また村に行ったときのおばあさん達は確かに・・・ふつうに女性の格好をしていた。しまはその言葉を聞くと、顔を背ける。

「確かに村長は女らしくとは言ったけど、それとこれとは違う！ほんとに読めんけどそう書いてあったの？」

しまは目を丸くして、手紙を見つめるが、よく分からさそうな顔をしていた。

「まあな。あとは・・・まあ・・・な。」

信繁は、呆れた顔して見つめていた。元々真田領に隣接するところには武田忍軍の総本山があり、諜報活動を行っていた。そのため、草という隠語の言葉の意味は知っていた。ここで言う草とは諜報活動の中でも現地潜入し、地元民に慣れたり、色仕掛けをしたりして情報を投手に伝える役目を持つ一番下つ端の忍者の事である。潜入を行うときの補助をする下忍、その指揮を行う中忍。そして情報を元に作戦を立案する上忍。と言う組織で成り立っている。だから、この立派な草というのは情報をかき集めるためのいわば一番の下つ端の事を言った。それを知っていた信繁は・・・何ともいえない表情になった。

「でも・・・草とかというと事ば・・・あそこは・・・。」

信繁は思い返すように村の様子を思い浮かべようとしていた。

「何だ。知らずに恩を売っておったのか？」

半蔵は肩をすくめると、手紙を懐に入れた。

「え……あ……あの村はどこにでもある……」

「風魔の里だ。」

しまの言葉を遮るように半蔵は言い切った。

「へ？あれが……。あの村が風魔の里？」

「昔行つた事があつてな。懐かしくてつい。普通の村ならいざ知らず、見知つた者がいる里だととても許せなくてな。」

半蔵は遠い目をしていたのを見て、しまは慌てて半蔵の方を見ていた。

「え……あんた村長にあつた事があつたの？」

「ま、あのときはお館様の影で付いてきただけだが、それ以来の仲でな。顔は見せた事はないが、良く手紙はやりとりしておるぞ。」

その言葉に全員が啞然としていた。

「でも普通の村と変わらぬではないか。」

寛があわてて村のあつた方を見つめるがそこはもう森だけだった。「元々忍というのは、山の民出身が多い。だから、練習場とかなくても外がそのまま訓練場と言う事が多いから、たいした施設もいらない。だから普通の村らしく見えるのだよ。ま、あの辺一帯の村すべてがそうだがな。」

「でも、お前が村長と知り合いとはしらんかったぞ。」

しまが感心したようにまたがつて半蔵の方を見つめる。

「その首領の書に書かれているなら、仕方ないから、拙者が責任を取るが……。」

半蔵は呆れた顔をして顔を背けているしまを見ていた。

「だからなに？」

「お父や、お母はいいといったのか？」

「村長から言われた日にとつちやのところについてきただ。そしてら”この村にいても立身出世は出来はしない。だったら、あのお方達について行けば最低でも飯は食える。行ってこい！”だと。だから後悔はしてない。さてどこに行くか知らないが。一緒に行こうぜ。」

「
そう言つしまの顔は晴れ晴れとしていた。

「なら行こうか。せっかくの休憩で友が一人増えるのはおもしろい
事だ。」

そう言つと腰を上げ、信繁は坂を下つていった。眼下に広がる海
岸の先には江戸の町が広がっていた。

第三節 1614年3月下旬 真田信繁と江戸の町(前書き)

ついに江戸に着いた真田信繁御一行は江戸の街にとどまるため、半蔵にある寺の宿坊を紹介される。そこには……。

第三節 1614年3月下旬 真田信繁と江戸の町

第三節 1614年3月下旬 真田信繁 江戸観光を楽しむ

江戸。この当時の江戸は、新規開発中ではある者の、大きさは京都に匹敵するほどの大きな都市であると同時に水運が発達しており、通路には船が多く行き来していた大水運都市であった。ただ、このときはまだ幕府を開いて間もないため、まだ市民が集まるには少し時間がかかり、まだ世界一の都市としての片鱗を見せていなかった。

「だがまあ、京も大坂も見たが、ここは大きい。そして何より新しい！」

信繁は市内に入った一言目がそれであった。

「真田様。これではお上りさんみたいな者。恥ずかしいですぞ。」

と言うかけいもまた、首が落ち着く事なく左右に振れていた。

「ここが、徳川の拠点か。」

そう息巻く青海も落ち着きがない様子ではある。

「それは流石に違う。」

半蔵は、呆れたように町をあるでいた。

「でも……まあ……三島よりでっかいところを見たの初めてだぞ。」

しまは目を輝かせてあらゆるところを見渡していた。

「今、豊臣方が何かしないように半分以上の部隊を駿府の内府（徳川家康の居城、駿河城）に集めてある。だから、あんな半田山みたいな輩が出てくるのだ。だからここは秀忠様の居城というほうが今は正しいのだろうな。」

そう言いながら先頭を歩いていた。

「でもまあ、元は沼地とか聞いていたが、ここまでなるものか？」

「それはまあ、土地の改良に年月をかけてきたからな。」

「で、どこに行こうというのだ。」

信繁は周りを見渡していたがそれ相応に建物が大きいため、なかなか周囲が見渡せない。「まずは宿というわけでもないが、あるお寺で休息してもらおう。我々の手助けをしているあるお方の寺だ。」

当時のお寺はいくつもの役割がある事が多く、一つは拠点。一つは情報収集などがある。基本的にどんな乱暴者がいてもそう簡単にお寺は襲われない上、大名などが入っても怪しまれないため、密会をする場所としても存在している。しばらく歩くとそこには立派なお寺があつた。当時の寺は大きいところなら宿坊を備えている事が多く、泊まる事が可能であつた。

「結構おおきな寺だな。」

「お主らを普通の宿に泊まらせる事はできないからな。ま、しばらくはここが拠点となる。湯船もあるし、疲れを取るには十分だろう。」

「おおー。湯まであるとは、流石、徳川。」

青海が驚いたような顔をしている。

「第一、湯ってなんだ。」

「知らないのか？お主は……。まあ、そうだろうな。普通のことではまず目にかかる事はないからな。」

算は普通の顔で言っているが、にやけが止まらない。当時湯船は大名だけが入れる贅沢の一つでもある。

「そうなのか。お湯って飲むもんだとばかりおもってた。」

「だろうな。」

「どうかなさいましたかな？」

建物の門の奥から優しい老人の声が聞こえてくる。

”天海大僧正様！”

声の方を見ると、赤い衣をまとった老人が、こちらに歩いてくる。

「天海殿。こちらにおいででしたか。」

半蔵は、一歩前に出るとじっと目の前の男を見据える。その顔はなぜか緊張に包まれていた。

「碎軍の半蔵殿。お久しぶりですな。任務の帰り・・・そちらの方は？」

「あ・・・天海殿。その呼び名はこそばゆい。言ってくれるなど言っただけです。・・・しばらくしてから引き合わせる予定でしたが、こつも予定外だと困るものです。」

「・・・そうでしたか。では、明日の予定というのは・・・。」
談笑している様をしまが、口を開けて見つめていた。

「何だ。あの人・・・すっごい偉そうだな。」

「だな。すんごいな。」

「偉そうと言うより・・・偉いんだと思うが。」
三人が唾然として・・・と言うか別次元の人間を見ているように目の前の半蔵を見ていた。

「気がついてなかったのか？」

「はい？」

信繁の声に筧が振り向いた。

「あいつ、おおかたここの忍軍の頭領だと思っが。」

「へ？」

「だから、破鳥半蔵だよ破鳥。昔聞いた事があるって言っただろ、あの飛ぶ鳥落とすとか言う男。あいつだよ。」

「「「えーーーーー！」」」

「あの？伊賀の？」

「俺、腕が8本あって、口から唐辛子吐くとか聞いた事あるぜ。」

「伝説の忍者だー！」

三人の大声が重なる。その声に老人がこちらの方を向く。

「ほっほっほ。流石に客人を放置しすぎましたかな。私、仏門で、精進させてもらっている天海と申す。」

「時々城内に来ていただいて、都市計画とかの指南をしていただいているお方だ。」

その半蔵の言葉に信繁は大きく天海に頭を下げた。その姿に筧と青海はあわてて頭を下げる。

「お初にお目にかかる。拙者、真田信繁と申す。以後、お見知りおきを。」

「礼儀正しいお方だ。流石、真田昌幸殿の次男殿。良く相談に来るお方からその武勇聞き及んでござる。」

「それは……。お褒めいただきありがとうございます。」

「そんな謙遜なさらなくてもよい。今日はこちらに？」

「はい。その予定です。」

「それなら、今夜は一献どうですか。」

「天海殿。長旅でお疲れのお方を立たせたままでどうします？」

天海は微笑みながら袖口から手ぬぐいを取り出すと額をぬぐった。

「そうでしたな。私も客人の身ながらここには慣れてございます。」

「こちらへどうぞ。」

そう言つと天海は、奥に歩いていった。その声に全員が後をついて行った。そのとき袖口を見た信繁の目の鋭さを天海は見逃さなかった。

「ここは、すごいですな。」

算が歩いて宿坊に向かう途中の部屋で、しゃべり声が響く。

「そうですね。ここは子供らを預かっていまして。ただ預かるでは芸がないので、学びなどをさせております。」

「そうですね。」

この頃の寺の多くでは、孤児を預かったり貴族の三男等を預かりしている。その中でも規模が大きいところでは、学堂（勉強などをする専用の部屋）に多くの子供と一緒に仏門に入門した大人達と一緒に学んでいた。真田信繁もまた、人質だった頃に数多くの寺を回り、学問に励んだあのころの思い出がよぎった。

「まあ俺みたいな落ちこぼれもいるから。学びがそのまま生きるとは限らないものさ。」

青海の軽い声が聞こえてくる。

「ですが、これからは平和な時代がきつと来るはずですよ。そのとき

までにこの子達には読み書きぐらいは出来ない。」

「ですな……。おや」

天海は微笑みながら頷いて……。何かに気が付いたように後ろを振り返ると信繁が、柱に寄りかかり学問の様子を見つめていた。

「信繁殿。どうかなさいましたかな。」

「あ……。天海様。」

子供の一人が声に振り返ると全員が振り返り、天海の元にやってきた。

「てんかい様ー。久しぶりです。」

子供達が周りを囲むと、天海はその子達をなでる。

「みんな。いい子にしていた……。ほら、先生が見ている。戻りなさい。」

「はい。」

天海の声に全員が、学堂に戻っていく。

「信繁殿。子供の学問の邪魔になります。ささ、行きましょう。」

「ああ。」

その声に促されて、何か考えながら信繁はその場を去った。そのとき気になっていたのは学堂のなかで子供が一人だけ、天海の元に来なかった事だ。それは先ほど見た学堂にいた女の子だった。

「うーむ。色々考えさせられる。」

部屋に身内だけになった信繁の第一声がこれだった。しまは不思議そうに信繁の顔を見つめた。その顔は何か思い詰めていたような顔だった。

「いやあな。さつき学堂を見ただろ。」

信繁は周囲を見渡す。そこには青海、算、しまの三人がいた。半蔵は江戸城へ報告に向かっていた。

「はい。」

「そこに女の子がいた。」

「そう言えば……。そうだな。確かにいた。それがどうしたのだ。」

「 青海は何ら不思議でもなさそうに答える。」

「俺が子供の時と違って言うのは、女は家の事ばかりさせられていたから、学問は男の物だと思っていた。だがここでは女も等しく学んでいる。それは・・・なんていうか・・・。」

「確かに。信濃ではとんと見ないですな。」

「 算は腰を下ろすとぐいっと腰に付けていた水筒の水を飲み干す。」

「確かに平和になれば、と言うか太閤の世でもそろばんは必須ともいえた。だから教わるのは当たり前だろう。」

「 青海も算に習い水筒のふたを開けるが、水の一滴も流れてくる事はなかった。」

「そう言えば俺は今まで世の中が平和になった後の事なんて考えた事はなかった。確かにここには”平和”がある。」

「 ふすまを開け、外を見ると、日差しはほのかに暖かく、花の芽吹きさえ感じた。」

「確かに、京都みたいなどこともいえない剣呑さも、大阪みたいな騒がしさもありませんが、何というかここには独特の落ち着きがありますな。」

「 算は、畳に座り外を見つめる。そこにはまるで平和な光景があった。」

「まるでここには今年の戦なんて、なかったようにさえ見える。ま・
・ 大坂と江戸で争ってるだけだ。ほかの地域なんて関係ないから、こんな感じで平和だとは思うがな。」

「 信繁は空を見上げると、小鳥が飛んでいる・・・そんな平和な午後だった。」

「俺にとつては、戦がなくなれば浪人どもが食いつばぐれるだけだ。だから、豊臣方に付いたようなものだ。」

「 そうなのか？ 豊臣ってそんなお金くれるの？ 」

「 しまは興味深そうに聞いてくる。青海は面倒くさそうにしまの顔をにらむ。」

「そうじゃなくても、主を持たぬ侍にとっては戦は、生きていくために必要な収入源だ。そして出世の機会だ。出世すればおとうやおつかあを楽に出来ると思うから、だから浪人みたいに食いつぱぐれは戦を待つんだ。だが、まあ、平和じゃなければいつ襲われるか分からない生活だから、どつちがいいか分からないがな。・・・どつちがいいのかは分からないものさ。」

「だな。」

算が同意するように大きく頷く。

「本当に必要な物はそれかもしれないな。」

信繁はじつと空を見つめ、つぶやいた。

「天海様がお呼びです。」

寺の小坊主がふすまを開けるとそこには着流しを着た信繁達が、くつろいでいた。

「どなたをかな。」

信繁は足を伸ばしくつろぎながら、そっくり返りながら答えた。

「信繁様だそうです。後のお付きの方は夜に帰ってきていただければ自由にしていいそうです。」

「でしような。」

当然という顔で算はうなずいた。

「俺はいつてくるけど、どうする?」

信繁は立ち上がると、軽く服を整えていた。

「ま、その小坊主借りて、ここの本でも読みあさるとしますか。」

大抵のお寺では仏門等を含めて数多くの本が置いてある。その実豊臣の時代くらいから、字が書ける侍や商家の物達の小遣い稼ぎや夜の暇つぶしとして、写本という物がある。それを寺等で買い取る。また、本を寺に寄進する事で、寺とのつながりを深くする風習等もあり、そのため、お寺には本がある事の方が通例となっている。また、本を見に来るためだけににお寺に通う武家が多いのも事実だ。

「でしたらこちらにおいでください。」

「では、信繁様。私はこれで。」

そう言うと算は立ち上がると、小坊主を引き連れどこかへ行ってしまった。

「青海はどうする？」

「どうするかな。俺は寺が暇で、破戒僧になったくらいだ。寺の思入れはない。ま、少し休まさせてもらうよ。」

そう言うと、畳に大の字に寝ころんでしまった。それを見ると信繁は部屋を出て廊下を歩いていく。

「やーい、根暗！」

「根暗じゃないもん！」

「お前、かーちゃんがいないんだって！」

「か・・・か・・・かーちゃんの事なんて言うな！」

信繁が声の方を見るとそこには男の子達が一人の女の子を囲んでいた。その声に反応して振り返った直後脇で突風が吹いた・・・ように感じた。

「おまえらー！いじめてんじゃねえぞ！」

しまは一気に裸足で地面を駆けると、男を飛び出でて一足等に駆け出し跳び蹴りで胴体ごとあいてを吹き飛ばした。

「お前なんだ！」

「ふざけてんじゃねー！お前ら、かつこわるいとか思わないのかよ！」

そう言いながら、女の子の前にしまは立ちはだかった。

「でもな、気持ち悪いもんは気持ち悪いんだぜ！」

脇にいた男の子が睨みつけていた。

「気持ち悪けりゃいじめていいのかよ！」

「・・・。いいよ・・・。」

どことなく底冷えするような声に全員が振り返る。あの女の子の声のようだ。泣いていたときの興奮から一転、声に重みさえ感じた。「もう・・・いいの・・・。」

そう告げると、すたすたとしの脇を越えて、寺のはずれに行ってしまった。その様子にその場にいた全員が見えなくなるまで見守

ってしまった。

「あの子は・・・孤児でしてな。」

天海が信繁のそばで、子供達を見ていた。

「なかなか皆に心を開きません。仕方がないとはいえ、まあ・・・どうしたものか。」

「そうか？」

信繁はその様子を複雑そうに見つめていた。

「そうだ。用とは何だ。」

「ここでは何なんです、こちらで茶をお点てしましょう。」
「そう言つと、すたすたと奥に天海は行つてしまわれた。」

「そう言えばどうして江戸に・・・。」

天海は茶を信繁に差し出した。周囲はそろそろ薄暗闇で、赤みがかつた斜陽が部屋に差し込み、独特の雰囲気醸し出していた。

「半蔵殿に呼ばれたので、何か見せたいとの事だが・・・。頂きます。」

「そうですね。あの方はああ見えても熱血漢な方。もしかしたら説得したいがための一念で何かを見せたいかもしれません。」

「そう言つと天海は勺で自身の湯飲みに湯を注ぐ。その立ち振る舞いは涼しげであつて凜々しく、落ち着き払つたものだった。」

「確かに、あの人はこう・・・情熱にあふれるというか・・・。まじめな方ですな。」

「だからこそその実直さと、だからこそその信頼です。なかなかあれほどの才覚の持ち主は早々いますまい。」

信繁は茶器を置くと、奥に押し返した。

「いいお手前で。」

「感謝します。作法はどこで？」

「太閤の叔父貴の側にいたときに一度利休殿に稽古をつけていただいたのだ。」

懐かしむように遠い目で信繁は天海を見つめた。

「太閤殿・・・秀吉殿ですか。なつ・・・いや、利休殿に稽古とは流石のお手前。感激いたしました。」

天海は懐から手ぬぐいを取り出すと額の汗をぬぐった。風はまだ春先にしては少し冷たく、夕暮れという事もあって涼しさというよりは肌寒ささえ感じていた。

「やはり。」

信繁の不思議な感覚は確信に至っていた。

「やはり、太閤のおじきと似た空気を感じる。どことなくこの達観した感じ・・・。もしか・・・。」

じつと言葉を切り見つめる空気に・・・空気は張りつめ温度もあってか凍り付きそうな、誰も動けないような緊張感が張りつめた。

「叔父貴に匹敵する・・・。浅井家の者・・・。もしか・・・明智光秀殿か？」

「ほう・・・。どうしてそう思われましたかな？」

落ち着いたような、それでいて今までの穏和そうな声から一転した重苦しい武將の殺気とも思える越えに、信繁は正座していながら膝に手をかけた。正確に言えば、その殺気で膝を握りつぶさんばかりに痛みを与えねば正気を保てぬほどの殺気だった。

「門で会ったとき、法衣の裏地の一部に浅井家の桔梗紋が飾られていた。そしてこのお年・・・。もしかと思ったまです。本当にそうならもうかなりのお年の上、最早死んで・・・。」

「何をおっしゃいますやら。」

その落ち着いた声と裏腹に天海は目を細め、その目は人の魂を射すくめようとしていたようにも思える。

「こうして私は生きております。神仏の思し召しです。」

「どう取れば・・・。いいですかな。」

信繁は押し負けまいとにらみ返そうとするが、その殺気の差はいかんともしがたかった。

「私は・・・天海です。それでいいと思います。」

「・・・。解り申した。すまない。」

そう言うと信繁は頭を下げた。

「いえいえ……。もういいです。」

そう言うと天海は手を振り、その声に信繁は頭を上げた。湯飲みの湯を一気に飲み干した。それに合わせて信繁は茶器の抹茶を一気にのどに流し込む。あの一瞬、生きた心地はしない。

「何か昔の事を思い出しました。」

信繁は何か遠い目で障子を見つめる。

「と言いますと？」

「昔、太閤の叔父貴が、四国征伐の会議しているところを覗いていたことがあって、いつもは何事もない普通のおっちゃんだった太閤の叔父貴が、その時ばかりは厳しい漢の目だった。」

「それは……。まあ……。そうでしょうな。」

「ただ覗いたのがばれた瞬間見たあの、射すくめられるような殺気は流石天下を統一した男だと思った。それ以来、俺は太閤の叔父貴のことが少し好きになった。」

「そうでしたか。」

「その時の目と殺気のアナタの目が似ている……。そんな気がしましたな。何か懐かしく思ったのです。」

「そうですね……。」

天海は何か思うところがあつたらしく、しばらく黙っていた。

「色々考えていますな。私の考えていた危惧はなさそうですね。」

あなたが豊臣方にいたのでつい、勘ぐってしまいました。すいませんでした。」

そう言うと天海は大きく頭を下げた。

「いえ……。いいです。私も悪いのですから。」

「そう言ってくれるとうれしいです。」

「で、お話というのは……。」

信繁は一息つくと、ほつとして、茶を飲もうとするが、そこに茶は入っていないかった。

「本当なら、目的を聞いてから、よければ将棋なぞいかがと。」

「将棋・・・とは？」

「単純に言えば軍議で使われる駒を使った簡単な遊びです。あなたほどのお方ならさぞと思ひまして。」

そう言つて背後から、良く軍議等で使われる丸い駒がいくつか出てきた。それを見た信繁はしばらくその駒を見つめていた。

「それは・・・お断り致します。」

「それは？」

「あなたほどのお方と軍議の真似事でもしようものなら、拙者の疲れは更に増して、明日の夜まで寝込んでしまいそうです。」

その言葉に天海は急に口を手で押さえる。その手の隙間から、白い歯が見え隠れした。

「確かに、ここで泊まりに来たものを病に伏させればこの寺院のものに怒られましようぞ。おもしろいお方だ。」

「あなたほども。」

そう言う二人の会話は、端から見れば柔らかく、お互いはじつと見据えていた。

「気に入った。酒でも・・・あ・・・。」

「どうしましたかな？」

ふと見上げると、もう日が暮れて夜の闇が部屋の半分ほどまで迫つていた。

「そう言えば、私・・・そうでしたな。みだりに酒なぞ・・・。」

「いや、青海は飲んでおりましたぞ。」

そう言つと、信繁は周囲を見渡す。灯りの影も形もない。

「この灯りは食事の後に食房から火をもらつ事になっていましてな。そろそろ、夕食のあまりでも食房にございましょう。行きませんか。」

「はい。」

そう言つと、天海も立ち上がる。

「そつだ。明日、一献いかがでしょうか。久しぶりに飲み会いたい男に出会い申したので、私が特上の酒をご用意いたす。」

「それはありがたい。青海の奴も喜びましょう。」
「……。いや、あなたと二人で飲みたいものです。そうだ。今ならあそこの梅もきれいでしょう。そこで飲みましょう。」
「わかり申した。」
そう言つて、立ち上がつて天海はすたすたと、大きな明かりがある食房のほうへ歩いていった。

” 明智光秀……。本能寺の変で討たれたという、織田家を裏切つた男。どうして生きて……。いや、どうして……。どうして……。どうし……。どうして……。”

「ああー！眠れない！」
そう言つと、枕元の刀を持って信繁は外へ飛び出した。なんかこう、頭をかきむしりながら刀を抜くと、虚空を粉みじんに切り裂くように刀を振り回す。なんかこう……。自分の中の感情がうまくまとまらない。

「どうしましたかな。」
声の方に向くと、寝間着姿の天海が立っていた。

「起こしてしまつてすみません。」
「今日は遅い。明日になれば忙しくはなりましょう。」
軽くあくびをしてはいるが、信繁はその爛々とした瞳を閉じる事を考えられなかった。

「どうも、こう釈然としません。こう、どうもこうもなくむしゃくしゃ致す。」

「ま、普通はそうでしょうな。」
天海はよろよろと柱に寄りかかると、信繁を温かな目で見つめた。
「拙僧でよかつたら素振りの相手いたしましょうか。」

「……。それはお断りいたす。そのような老人に手をかけたとならば、名折れとなりましょう。」

「なら、拙僧にそのご自慢の腕を見せていただければ。」
「ならこれをお使いなされ。」

そう言つと信繁は刀を天海に向けて差し出す。

「私はこちらの予備で行いましょう。手加減は致すが、万が一があつても後悔召されるな。」

「確かに。そうなりますな。ただ私もこの齡。早々相手にもなりませぬ。それでも、わたしは早々弱いつもりはありませぬ。後悔めされるなよ。」

「それでも構いませぬ。」

「わかり申した。」

そう言つと天海は刀を受け取ると鞘から抜かず少しだけ刃を見せて身体の中央に構えていた。それを見た信繁は持っていた脇差しを抜き、構えた。お互い、分かつてはいたようだ。

「お年を召されるあなたの事だ。これで対等だろう。」
構えから一步も動かない信繁を天海は軽く鼻で笑つた。

「この年寄りに恐れをなして攻められぬなら、稽古であつても挑むあれはありますまい。」

「そう言つてくれると嬉しい。」

その瞬間、脇差しを振りかぶると信繁は袈裟斬りで斬りかかる。目を見開いた天海はその刃を鏝止めで受け止めると鞘で強引にいなし、その勢いで刀を抜いた。その瞬間信繁は一瞬の死を覚悟した。身体は鞘でいなされてがら空きになっていた。天海は身体をそのまま勢いのまま回転させて胴を打ち抜く……

「な！」

その直前で刃は止まり、天海はそのまま、ぱつたりと倒れてしまふ。

「だ、大丈夫ですか。」

信繁は脇差しをほおり投げ、天海に駆け寄る。

「流石に腕はあつても、身体が追いつかないようですな。さすがは真田殿。その気迫の打ち込み、私の身体ではいなしきれないようです。」

「天海殿。」

「大丈夫ですよ。こう見えてもそれなりには丈夫に出来ております故。」

そう言うところよると立ち上がると、廊下の縁に座る。

「さすがは天海殿。完敗です。」

そう言うところ、その廊下に座った天海よりも更に低く頭を下げた。

「さて、これはお返しします。では、明日の夜楽しみにしております。」

そう言うところ、天海はふらふらと立ち上がると自分の部屋へ帰っていった。その姿を最後まで信繁は目話す事は出来なかった。

「おはよう。皆の衆。一日ぶりだが、旅の疲れはとれたかな？」

半蔵の元気のよい声で信繁は目が覚める。打ちのめされた感情と整理が付かない苦しみで

目にクマができていた。

「……。早いな。」

算の第一声は目をこすりながらだった。

「ああ……。早ええ。」

青海すらあきれ顔で半蔵を見つめた。

「ふあああああ。おはよう。どうした。半蔵殿。」

「今日はお主達に見て欲しいものを見せようぞ。だから、早く、支度してください。」

そう言うところ、嵐のような半蔵は障子を閉め、どこかへ行ってしまった。

「騒がしいですな。」

「だな。」

そう言うところ着替え、全員は正門の前に集まると、そこには今までの半蔵を払拭するような笑顔でにこにこした半蔵だった。最早その笑顔は気味悪くもある。

「さあいくぞ、やれいくぞ、そらいくぞ」

「あれ？しまは？」

青海は見渡すがしまの姿はなかった。

「ああ。あいつは何かここの小坊主どもが気に入ったみたいで、小坊主達とどこか行きおった。」

半蔵はそう言うときくささと部屋を出てしまった。

全員が正門に集まったのを見ると半蔵は何を言うわけでもなく、すたすたと、城のあるほうへ歩いていった。それを見て一同は顔を見渡すとそのまま半蔵について歩いていった。特に信繁は眠そうにあくびをしながら歩いていた。

「どこに行くんでしょうな。」

寛は呆れたように、意気揚々と歩く半蔵の後に付いていく。

「最低でも、酒とかはなさそうだな。」

「眠い。」

渋々と半蔵について行くところには大阪城もかくやと言うほどの大きな城である江戸城がそびえていた。

「これを見せたくて、大阪からわざわざ連れてきたんですかな？」

「いや。そっちではない。こっちだ。」

そう言うとき江戸城ではなく、江戸城の脇に歩きの固まりを指さした。

「やっとあの船の修復が終わってな。昨日はそれを見てはしゃいでおったものだ。」

「ふね？・・・あれが？」

そう言うとき江戸城に横づけされた船とおぼしきものを見つめる。安宅船や鉄甲船とは違いの穂先が丸く、またその大きさは安宅船とも鉄甲船のそれとも違いかなり大きかった。そして大阪とかで見た船とは違い船底が丸く、また切り貼りした形跡はなかった立派な船だった。

「確かあれは、雅レ穩とかいう船だな。遠くエゲレスの船だ。」

「エゲレス！」

「・・・エゲレス？」

信繁は驚いたようだが、他の三人は不思議そうに船を見つめた。

「これがあの神風を越えてきた異国の船ぞ。」

興奮している半蔵を尻目に他の四人は顔をつきあわせ、信繁を囲んでいた。

”エゲレスって何だ？”

”エゲレスって・・・確か、宣教師どもがいた国の一つって聞いた事があるぞ。確かものすごく遠く、海を6つ越えた先にある国らしい。”

”海を六つってあの海か？はー。”

「何を話しておる？この船はなあ、これからの徳川の未来を背負う重要な船なんじゃ。」

半蔵の興奮は止まらないようだった。

「で、これを見せたかったのかな？半蔵殿は？」

信繁は相変わらず眠そう顔で半蔵を見つめていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。何も感じないのか？」

「いやあな。山の生まれのせいか、船にはあまり興味がない。」

流石に算達は啞然とした表情で信繁を見つめる。流石にそれはあんまりだろう。

「まあ、これが本来の目的・・・ではないしな。ささ、こちらへどうぞ。」

船にあがり船室を見ると半蔵は一目散にとに手をかけ、中に入った。中にはいるとそこには中を見回っていた一人の男がいた。

「や。ハンゾウドノ。カエツテいたんですか。」

中の男が気さくそうに話しかける。

「うむ。昨日完成したと聞いて、いても立ってもいられず、見に来たのだ。」

そう言うと半蔵はその男に歩み寄り、いきなり握手をした。その男も平然とその手を開き、握手を交わした。

「このカタは？」

「ああ。この方は・・・。」

不思議そうな顔をして中にいた男は

「拙者……」

信繁は自己紹介しようと思い前に出ようとするところを半蔵が、それを押しとどめる。

「この者はな、拙者の親戚でな。そう……。」

「信繁と申す。そなたは？」

その声に半蔵は軽く息を吐いて呼吸を落ち着けた。

「私、アンジンと申す。」

そう言つてアンジンは深く一例をした。

「この男は？」

算は不思議そうに見つめた。

「この者は、遙か遠くエゲレスから来た”航海士”だ。」

「ほう。航海士なるものか。」

信繁は感心して見つめた。

「へー。これがエゲレスの者か。」

青海はじろじろ見るがその差がよく分からない。

「で、半蔵殿、見せたい物とは？」

そう言つと半蔵は船室の引き出しを開け、茶色い紙を取り出すと、信繁達の目の前に広げた。

「これは？」

算は不思議そうにその地図に書かれたシミを見つめる。何か不思議にくねった。線がかかれていた。

「これか！これは世界じゃ！」

「……？」

全員がその言葉に首をひねった。

「正確に言えば世界の地図じゃ。」

当時地図というのは貴族か大名、武将しか持てないあまり知られていない柄だった。当時の武将達は先に忍者や斥候を先行させ、地形を調べるのが戦の習いでもあった。

「世界……か。」

そう言つと信繁はじつとその絵を見つめるが、全くちんぷんかんぷんだった。

「これがどうしたのだ？」

算はその地図を見つめてきよろきよろしていた。絵の所々には見慣れぬ棒や線が引かれていた。

「ここは地図のどこだと思つ？」

半蔵はわくわくした顔で聞いてくる。アンジンは慣れたようにあきれ顔を見るとテーブルの側のいすを引きずり出し壁際に置き座り込んだ。

「わからん。」

信繁はそう言つとじつと地図を見つめた。

「ここだ。」

そう言つて半蔵は地図の端にある小さな島国を指さした。

「？」

青海は首をひねった。

「この小さい島の真ん中。それがここじゃ。」

「じゃあ、この大きい枠は？」

そう言つて中央にある、日本の数十倍もある大きな枠を指さした。

「これか。これは明やポルトガルがある”大陸”じゃ。」

「これが大陸？すげー。」

算は純粹な目で地図を見つめていた。

「じゃあ、エゲレスはどこだ？」

信繁はあまり驚いた顔もせずその地図を見つめた。

「お主、驚いておらん。」

半蔵は意外そうな顔をしていた。

「まあな。太閤の叔父きが、”地球儀”を持っていたのでな。地図は見た事がある。その時に日本の本の大きさもじゅうぶん思い知っておる。」

その顔に露骨に半蔵は嫌そうな顔をした。

「イギリスは……。」

そう言つとアンジンは立ち上がり、地図左端の二つある島の二つを指さす。

「ここにあります。」

「お主よく遠いところから来たな。」

信繁は大きく頷くと、アンジンの肩をたたいた。その行為に青海達は不思議そうな顔をしている。

「よく分かりませんが。どうしたんです。」

算は地図をじつと見つめるが、訳が分からない顔をしている。

「よく見てみるよ。」

そう言つと江戸を指さす。

「ここが江戸だろ。で・・・ここが、大阪。」

そう言つと、指を少し動かしたくぼみを指さす。

「へ？そこが大阪？」

「で、ここが・・・エゲレス。」

そう言つて信繁はわざとらしく大きく手を振つて左端の島を指すとそこにはイギリスがあつた。

「大阪から江戸に来るのに2週間かかったのにあそこまで行くのはどのぐらいかかるか。想像も絶する。しかも船で来る奴らは大回りである。」

「信繁様。私には想像も付きません。」

呆れた顔して算は地図を見つめる。

”半蔵様！”

遠くからタラップを駆け上がる音が聞こえた。

「半蔵様！秀忠様がお呼びです！」

そう言つと、袴をつけた男が戸を開け、見渡す。

「分かった。すぐ参る。・・・。按針殿。しばらく彼らのあいてを頼む。大事な客人だから。粗相の無いように頼む。」

「わかりました。」

そう言つと按針は大きく頷く。

「信繁殿。あまりこのあたりをうろつかぬよう。船内でお待ちくだ

さい。」

そう言つと、半蔵は戸を開け、走り去ってしまった。

「そう……。ナニかキキきたいコトはありますか？」

アンジンは、傍らにある椅子を三人分抱えてくる。

「お主、どうしてこの地に来た？」

「……。ワタシですか？ワタシは……。イマならこうイえるかもしれません。あのコロのイギリスはナニカかイヤでした。そこからニゲたくて、フネをナライ、そしてニげた。カミの手をメザして、ワタシはナカマをギセイにして……。そしてここにナガれれついた。」

「神の地？」

「ロングになります。それより……。」

そう言つと船室の真ん中にある机の引き出しから瓶を一本取り出す。

「ノみませんか？これ、イギリスのサケ。ジンです。オランダのフネにモってきてもらいます。」

「おっ！酒！」

そう言つと青海はアンジンに駆け寄ると、そのボトルをまじまじと見つめた。

「ジカンある、ジンノむ、イチバン。」

そう言つと引き出しから、ガラスのお猪口を取り出し、そこにジンを注いだ。

「で、こつという体たらくな訳だ。」

そう言つとジンのきつい臭いで一杯の船室の窓を開ける半蔵の姿があった。

「ま、青海は酒が好きだし、算は元々好奇心が強い。外の国の酒ともなればこつなる物だろ。」

そう言つて床をみると、按針含め三名の倒れた姿があった。外から差し込む光はもう無く夕暮れを越え、夜半になりつつあった。

「お主はよかつたのか？」

半蔵は不思議そうに信繁を見つめる。

「俺には朝から酒を飲む癖はない。一口で十分だ。」

ト、ト、トン、トン……。

「確かに。」

「それにここは一応敵陣中央。油断なぞせんよ。」

「それは言うな。それを言い出せば拙者もそれなりだから。」

半蔵はあきれ顔で床に散らばる乾物を手ぬぐいで拭き取っていた。

コンコン。

その音に反応し、戸を開けると、そこには天海の姿があった。

「ここにおりましたかな。流石、信繁殿。」

「天海殿……。」

半蔵は驚いたようにと言うより、怪訝な表情で天海を見つめた。

「半蔵殿まで一緒なら好都合。お主に許可を取りたかった。」

そう言うのと、天海は中に入ってくる手には、大きな箱を持地、明かりもなかなかの大きさの物を持っていた。

「どうかしましたかな。」

半蔵は不思議そうな顔をしていた。

「今夜……と言うより……今から、梅の園で信繁殿と茶でも一杯どうかなと思ひまして、こうして持参して参った。半蔵殿も一緒にどうかな？」

そう言うて手に持った包みを開けると、そこには茶道具一式があった。

「……どうしてここまで……。」

半蔵は啞然と言うか、呆れた顔で天海を見つめた。

「拙僧はこの設計とかも行っていますからな。いくつかの裏道くらいは……。」

飄々として天海は床に茶道具をおろすとくすくすと笑っていた。

「一応ここは征夷大將軍の寢床だぞ。一応お庭番も見回っているのに……。」

「ほっほっほ。昔上杉の家中に忍んだときよりはまだ優しゅうございますよ。」

二人の会話を聞きながら信繁は立ち上がり、天海の茶道具を持った。

「ま、それは俺がいなくなった後でやればいい。行きましようか。」
「どこに？」

「今日は梅が見頃でしょう。梅は確か、堀の周辺に生えているので、折角だから花見でもと。」

「ここは近所の寺庭にはありませんぞ。」

半蔵は呆れながら戸を開け、外を見渡す。周囲はもう真っ暗で、手すりに駆けられた提灯以外の明かりはもう無かった。上を見れば月は明るく、甲板は白檀のような白く艶のある光沢を放ち、不思議な空気が漂っていた。半蔵は外に出ると中にいる二人はゆっくりと出て、空を見つめる。

「船室の硝子越しに見る月も好きだが、この甲板から見る月はこう・・・なんか・・・違うな。」

「ですな。風情有りますな。」

そう言いながらタラップをゆっくり降りて、天海は手招きをする。

「そう言えば、半蔵殿。見せたい物はもう、見せましたかな？」

「いいや、あれは明日の予定です。」

「ならあれのほうが早そうですね。おもしろい。」

「・・・。なんの事ですかな。」

タラップを降りる信繁は少し不満そうに天海の後をついて行く。

「いずれ全てが分かります。それを伝えるためにあなたをここにお連れしたのですから。」

そう言う天海はすたと、江戸城の暗闇の中へ歩いていった。

「ここですぞ。」

そう言うと梅林の中央で地面に座る。

「これは・・・！」

信繁は息をのんだ。そこは不思議な・・・普通見る事が出来ない
幻想的な景色であった。

梅は満開で、空からは満月の明かりが梅を淡い桃色で咲き、地面からは少し強い蠟燭と、提灯の少し色が付いた明かりの形が下から梅の色を濃く色付けする。その合間にある中程の梅は普段の少し濃い色合いの梅があるだけだった。その色合いは円形の明かりからさも梅に虹が写り込んだような色合いだった。

「天海どの・・・これは？」

「昔、殿がやった花見でな。提灯月という物でな。昔、殿は新月の日に花見がしたいとかもしてな。ちょうど拙僧が花見の場所に連れて行くと新月の暗闇でなにも見えなかった。そこで花の前に座ると提灯を置き、その明かりだけで花見を行った。それが提灯月よ。」
「なかなかの謂われがありますな。」

そう言うつと、信繁は茶道具箱から敷物を取り出すと、木の根元にひいている。

「拙者も初めて見ます。」

そう言うつと感心したように敷いた敷物に寝ころび、上を見上げた。
「よく春にあると、戦場に行った猿も一緒に花見がしたくて春の一日だけ戦場を抜け出し、皆で夜の梅や桜を見たものだ。」

「じくり

「・・・猿・・・やっぱり。」

信繁はのどを鳴らすと天海の顔を見つめた。その顔は提灯の明かりの縁と月明かりがちょうど顔を隠していた。

「今日、ここに呼んだのは。ここなら人に聞かれても早々大事にならぬここが秘密の場所だからだ。」

そう言うつと感慨深そうに空を見つめる。そこには満月が煌々と地面を照らしていた。

「あのお話を・・・。」

半蔵は驚いたような声を上げる。明かりごしに見る半蔵の顔は驚いていた。

「だから丁度いいと。」

天海は言つと茶道具箱を開けそこから茶碗を取り出す。

「そう、夜・・・戦陣に向かう日の事だった。」

天海の声は老人とは思えぬほどに若い男に聞こえた。

あのおとき思えば・・・殺害される二日目の時、朝釣った魚を昼に差し上げたのに、腐つていると言われていた。食事の事件があった私には、そんなに早く腐るとは考えていなかった。あのおとき皆の前で罵倒されていたが、その時私は体を少し口に入れてみていた。丁度その時は内府殿もいたからな。今でも覚えている。それは腐つていると言うよりも何かどろつとした痛みの感じる味だった。その時私はもしやこの中に裏切り者がいる。そう感じていた。それから酒宴が終わり、私は内通者を探すためにあえて命令を断り、領内にとどまっていた。だが、それらしい証拠はどこにもなかった。断つたり先延ばしに出来る命令にも限りがあり、ついに私は畿内（丹波方面）に向かう日が来た。殿に一言謝ろうと安土城に向かうと、京都に向かったと聞いて、私はもう一度謝りたくて私は旬の野菜を持って本陣に向かった。そこで信長様は書面を書いていた。

「信長様、今一度謝りたく参りました。」

「・・・光秀か」

そう言つて信長は筆を止め、顔を上げるとこちらの方に向き帰つた。いつもは厳しい鬼のようなお方だが、私の知っている信長様は心優しい、立派な人だった。ただ、公の場では立場のほうを重んじていた。

「先日の件、平に謝りたく・・・。」

「・・・。そうか。あれはいつのだ？」

「あのおときの鯛は私が漁師に朝に鯛を捕らせそのままお持ちした鯛を使っております。」

「・・・そうか。」

「なので、あのような味になるとは思いませんでした。すいません。」

「その後、密かに他の来客の鯛も食べてみた。その味は上手く流石だと思った。」

「は？」

「おおかた予想は付く。あれは・・・誰かが毒殺とかをはかった物だろ？」

「え・・・あ・・・。」

「それでお前に罪をなすりつけようと・・・それは宮中か？」

「当時私は朝廷との調整役として内通をする二重密偵を行っていて、相手の調略を調べる裏方の仕事を行っていた。」

「いえ、今のところ朝廷は信長様の威光を持ちいらせる事が主眼のようで、ご機嫌取りの声しか聞こえてきませんでした。」

「そうか。」

「頷く信長様は中腰まで立ち上がると顔を思いつきり近づけてきた。だれだと思っ？」

「目の前の信長の好奇心にあふれた目とともにやはり信長様も気が付いていたかとのどを鳴らした。」

「いえ・・・それは・・・。私も調べてみましたが分かりませぬ。」

「ただ・・・。」

「なんだ？」

「あのときいくつかの料理は宣教師達が言う”いねがー”を用いた鯛の蒸し物をお出ししたとか。」

「それをお主は知っておったか？」

「いえ。鯛はやはり、酒蒸しがおいしゅうございます。お一人で食べる時ならともかく、あのような多くの物がある酒宴で変わり物をお出しするのは間違いかと。」

「・・・と言う事は？」

「何者かが毒を入れたかと。」

「だろうな。」

「誰かと言われると、おおかた宣教師か・・・。又は朝廷の誰かが

工作を行うか……。」

「やはりな。」

そう言つと信長は机から書状を一つ取り出すと光秀に渡す。

「なら……誘い出してみるか。」

そう言つと信長は口の端を大きく広げ、目をランランと輝かせた

「と、言いますと?」

「京都には南蛮寺（宣教師達が拠点としている教会）はあるか?」

「ハイ。京中にはいくつか。」

「……なら、本能寺にいればあり得るな。とりあえずそなたと私は猿の援護に向かうと言え、誰かがねらう公算が高い。そこを返り討ちにする。」

「分かりました。なら私はわざと狙わせる為にあえて出陣します。」

「頼んだ。」

そう言つと信長様は後ろを向き、書面に向き直した。

その日の夜、何故か不安に感じた私は増援の手配をすませ、桂川を超えようとしたりとき兵士達がざわつき始めた。後ろを見ると、煙が上がっていた。不安は的中した。我々が考えるよりも早く誰かが事を起こしたのだ。気が付いたその瞬間私は大声を上げていた

「我が軍は今から反転する!」

その瞬間引き連れていた四千の兵はざわめき始めた。予想されていた事だ。

「敵は! 敵はいずこに!」

”あの位置は……。”

「四条河原裏!、本能寺にあり! 付いて参れ!」

そう言つと兵をかき分け全力で元々の道をたどっていった。その動きに全員があわてながらも付いてきていた。だが到着する頃にはもう朝方となり本能寺周辺は廃墟になりはてていた。もうそのころには全力に走らせた馬に追いつける物は少なかった。周囲には手勢と呼べるほどの人間しかいなかった。その焼け跡を見ながら注意深

く見渡していた。

「これは……。」

それはあまりに無惨な物だったがその一部の残骸にもっと驚いていた。そこには桔梗紋の旗やそれらをつけた兵士の死体が転がっていたからだ。歩いている兵士達はおどおどした目で、周囲を見ながら歩いていった。むろん京都民達もこの様子を見ている。ふと先を見つめると本能寺があつた。そこは廃墟ではあつたがそこに数人の人間が残っていた。馬を走らせ乗り込むとそこには黒ずくめの……髪の色は分からなかった。黒い布でかぶり物をした黒ずくめの男達がそこにいた。

「おまえは……。」

「来るのが遅い……出はないか。こうして間に合っているのだからな。ふん。」

そう言うつと黒ずくめの男は手に持った何かを私に投げつけた。それは……信長様の首だった。

「vdしあにゴアダウynvそくあd、DなSオヅdナオウウドア
nbvs、」

何を言ったか分からない発音で何か号令をかけると、周囲にいた男達は散り散りなり始めた。

「お前に手柄はくれてやる。それをどう生かすもお前の自由だ。」

そう言うつとその男は本能寺の奥に向かって駆けだしていった。その時の私は軽い・イヤ、頭がくるくる来るほどの混乱をきたしていた。

「あぐううううううあああああああああああ！」

私は声にならない声を発し絶叫した。その時、初めて世界に絶望した日だった。それから

の私は半狂乱となり、信長様を殺した人間を捜すべく兵士達を配置し探させた。だがそれは無駄骨に終わった。そうして焦燥の日々を送る内にある報告が入る。それは秀吉の部隊がここ山崎城に向かっているとの事だった。その時の私は手助けをしてくれると思ってい

だが、偵察部隊の話はそれとは全然違う物だった。どうも秀吉は私が襲ったと思っっているらしい事が分かった。……。その時あの桔梗紋の理由が分かったのだ。そう、首謀者は私を同時に消すためだけに桔梗紋を付けた兵士を本能寺に向かわせたのだと。だとして朝廷は考えがたかった。だとすると……。どちらにしろ、この事は猿に知らせないと。早速手紙を書き、使者を向かわせたが、その使者が届く前に軍隊は城の目の前にたどり着き、そして、何も言うことなく城攻めは始まった。あつという間だった。二倍近くの軍勢と信長様信任の最強兵団がそこにはあったのだ。勝てる……。いや攻撃に耐えられる見込みなぞ……。無かったのだ。頼みの使者もなく城は陥落し、私は秀吉の本へ向かっていた。だが……。だが……。

「どうした。」

信繁は不安そうな顔で天海の顔を覗いた。

「イヤあな。あのときは複雑でな。」

そう言う天海の顔は複雑そうに照れ笑いしていた。

「続けよう。あのとき私は賞金目当てに山狩りを行っていた農民達に襲われたんだ。だがそこにちょうど半蔵殿が来てくれてな。当時の半蔵殿は若くてな。ふふふ。」

にやりとすると半蔵のほうを見た。

「丁度家康様に密命を受けてな。影武者を南下させ囮に使い、二人で信長様の敵を討つべく、山中を探していたのだ。本当に光秀殿が敵ならば、さらし首にすべきと思っていたのだからな。」

そして半蔵殿に捕まった私は内府殿と一緒に私は密かに秀吉の目の前に連れ出されていた。流石に縄をまかれ、身動きはとれないようにされていた。目の前の猿の顔は、顔と目をを赤くし、涙の後がシワとなり、くつきり見えるほど頬はこけていた。自分も同じ気持ちだから分かる。悔しくてたまらないのだ。

「光秀！どうしてここに顔を出せた！親方さまをおおつつつ！

どうして手にかけた！」

その様子を私はじっと見るしかなかった。

「まあ、まちなされ。そう断定する必要はないのではないか？」

家康の優しい声が温度と反比例して冷ややかにさえ見えた。

「どうして光秀殿が裏切ったと。」

「それはあ！それはなあ！お主が襲撃したとの報を受け！確かめに参った！」

「……わたしは……。わたしは……。」

私はその声に……。いや、信長様を守れなかった罪は私にある。あえて……。罰は受けるべきだと思えた。

「……。もしかしたら、真犯人は別かもしれませんぞ。」

その家康の声に秀吉はその鬼の形相を家康に向けた。

「どういう事だ！」

「よく考えてください。その裏切りの報告。いつ受け取りました？」

「……。4日だ。」

「よくこんな大将を討たれ、混乱しているときに報告が行きましたな。しかもあり得なく早く。」

「!!!!！」

その言葉に全員が息をのんだ。確かにそうだ。急転直下に引き返したとはいえ、その報告が4日（本能寺の変は2日）に届くとは早馬でも考えづらい。特に秀吉のいた地域は丹波衆の領地を越え、山脈が横たわっていた。そこを往復するのに二日……。いや一日半では難しい。特にこういう崩御の知らせは早馬で伝える事が定例で、のろし等は使えないからだ。

「どう……。いうことだ。」

「私もよく分かりませぬ故。ここで光秀殿の言い分聞いてからでも遅くないかと。」

「わ……。わかり申した。」

そうして私は知っている限りの事を秀吉に話したのだ。

「……。そうか……。すまない……。」

その時の何か震えるような、秀吉のあの顔を私は今の世になつても忘れる事は出来なかつた。私は改めて守れなかつた自分を悔いた。「と言う事は・・・誰かが・・・光秀殿に罪を着せるために・・・こんな！・・・事を！」

家康殿は思案に切れた顔で地面に腰を下ろし私の顔を見つめていた。分かつている。私は・・・ここで・・・死んでいい。

「首を切れ。親方様を守れなかつた責は俺にある！俺の首をお！斬れ！」

そう言つて私は思いつきり地面に顔をたたきつけ、首を差し出した。その瞬間地面をこする音とともに顔面を蹴り上げられ思いつきり後ろに吹き飛ばされた。

「ふざけるなあ！」

そう言つと猿は私の私の身体に馬乗りになり拳と水滴を顔面にひたすらに叩きつけた。

「お前だけがいかつこするんじゃないやねえ！オラだつて・・・オラだつて・・・！悔しいに決まつてる！お前だけじゃねえ！」

徐々に拳よりも水滴のほうが比率が高まつていった。

「俺だつて・・・俺だつて・・・。お前と一緒に・・・親方あ・・・様を・・・守れなかつた・・・だ・・・。なんのために俺たちは今までやつてきたんだ！」

「落ち着きなされ！」

その言葉に涙一杯になつた顔を内府殿に向けた。

「悔しくないのか！」

「今は！一軍の将！そのまま部下に顔をお見せになるつもりか！」

その言葉に全員がハツとなり顔を上げた。

「・・・す・・・すまない・・・家康殿。」

そう言つと秀吉は自分の腰掛けに座つた。

「おおかた・・・と言つか、確信が持て申した。主犯は・・・宣教師・・・か・・・。」

家康は秀吉の顔を見つめていた。その時の顔も忘れられなかつた。

そう喋りながらも口から血が垂れていた。おおかた、齒を食いしぱりすぎて血が吹き出たのだらう。

「どうして。」

「実はいくつか来る際に草たちに調べさせまして。その中に、何者が持っていた光秀殿の手紙、そして信長様が来る前後に傭兵達を集めていた物達がいたとの報告が。」

「……。」

「そして、なぞの言葉とはおおかた宣教師達の言葉でしょう。我々では理解できませんからな。」

その言葉に全員は固まってしまった。

「なら宣教師どもを根絶やしにしてくれる!」

「それはお待ちください。まだ確証無きままに動くならば、敵は新たな手を考えてくる。」

「ではどうしろと。」

秀吉は呼吸を落ち着けるとじつと睨みつけるように家康を見つめた。

「ここは、光秀殿に死んでもらうしか。」

「……は?」

あまりに明るく家康が突拍子もない事を言うので二人は固まってしまった。

「正確に言えば、光秀殿には死んだ事にしてもらい、世に出ぬ事案件に釈放しましょう。」

「どうして。」

「功績もありますし……。」

「分かった。確かに、光秀殿は責任を取りたがっていた。だが、今まで我が軍を支えてくれた功績とで……しゃくほうする……。ほんとに……すまない……すまない……。」

そう言う秀吉の顔は何ともいえない鬼の顔に目元だけが悲しみに垂れ下がった顔が印象に残っていた。

「それから拙僧は、隠して置いた信長様の首を安全な土地にかくし、弔いをするべく、高野山にこもり、京のための祈り・・・勉強に励んだ。しばらくして、陰陽を習った私は江戸を訪れ、命を救った内府様のために尽力する事になったのだ。」

そのころには各々の場所に寄りかかり、天海を見つめた。だが月は頂点を越え、地の灯火は最早、顔や花びらを照らすほどの明るさは失せていた。

「そうか。叔父貴も大変だったんだな。」

信繁の目にはほろりと涙が浮かんでいた。

「信長様がいた頃の私や・・・いやその頃みんなは何か熱に浮かされたようにあの方について、戦国を駆け抜けていた。本当に・・・駆け抜けていた。」

「ですな。」

半蔵は茶碗の抹茶をぐいと飲み干すと空を見つめた。

「ただ、私はあの方の言ったあの言葉を忘れない。」

天海はあくらを組み空を見つめるその姿が月の光で浮き出させるように注がれていた。

「俺たち武将は前で戦うそれしかできない男だ。だがそんなはぐれ者の俺たちがみんなに喜ばれる仕事ができる。それが俺たちの仕事だ。だから俺はみんなのために戦う。それが吉乃との約束だ。」

その言葉に全員が黙ってしまった。

「その言葉は内府様、太閤様、そして私や織田家家臣全てに伝わっている事だ。そしてそれこそが、今我々戦国の世に生きる全ての者が・・・土がやるべき事ではないのか？だから内府様に力を貸している。全ては信長様の願いのために。」

そう言うと、周囲にある器を天海は片づけ始めた。

「分かった。言いたい事は分かった・・・。半蔵殿。俺に見せたかったのはこれか？」

「これも・・・だ・・・。」

そう言う半蔵の頬に涙が一筋流れていた。

「だがな・・・これで終わったわけではない。これはある意味始まりだったのだ。」

「・・・宣教師か・・・。」

「それを明日・・・。教えてやる。」

そう言つと暗闇の中に半蔵は消えていった。

「何か・・・こう・・・俺の知らないところで起きているみたいなんだ・・・。」

「さて、行きましようか。私もすつきり致し申した。」

そう言つと消えかかっていた蠟燭に火をともすと天海は立ち上がった。

「少し・・・待ってもらえないか？」

「どうか致しましたかな？」

そう言つ天海は不思議そうに信繁を見つめた。

「青海達を置いてはいけない・・・。俺は船室に帰るよ。」

第三節 1614年3月下旬 真田信繁と江戸の町（後書き）

後半部分の一分について、詳しく書いて欲しい方がいれば、細かいバージョンを書きます。その時はご連絡ください。

第四節 半蔵が見せたかった物（前書き）

半蔵の見せたかったもの・・・それは何尚加、考えながら帰る信繁を待っていたものは・・・。

第四節 半蔵が見せたかった物

第四節 半蔵が見せたかった物

「おつそーい！」

しまの声は朝霧の奥から信繁達にきつく突き刺さった。

「なーにやってた!？」

「まあな。ちよつとこいつらが調子乗って酒飲みすぎてな。」

「だって……。あれから真田様があ、帰ってきたらあ、飲もうぜーとか言つて、起き酒させたじゃないっすかあ。」

フラフラになりながら、算は門までたどり着くと門に寄りかかり、真つ赤な顔を押さえこめかみを押さえていた。

「だあかあらあ、俺は言つたんだつて。こいつは強いつて。」

そう言つと信繁に肩を担がれている青海はしまに負けぬ大声を上げていた。

「サケ・・・臭い！」

しまは算に顔を寄せると顔をしかめた。

「にやる、とつとと寝る！」

バシッ!

「いた、しいまあ……。ま・・・寝るぞ。俺は……。」

算は、蹴られた尻をさすりながら奥へ一人消えていった。

「でも・・・まあ・・・珍しいよあな。信繁え様が起き酒でも・・・酒誘わあれたの初めてだ。」

「ま、俺もあの酒は一度飲んでみたかった。押し、しま、手伝つてくれ。こいつ重い！」

そう言つと、しまは掛け寄り青海を反対側から支えた。

「でも、どこ行ってたんだ。本当に。」

「ま、丁度季節だから。ちよつと夜桜でもと探しに行ったけど・・・見つからなくてな。その辺で酒でも飲んでた。」

だがそう言う信繁の顔は笑っていなかった。その表情をしまは口をとがらせて見つめた。

「ま、俺はまだ坊主だからいいけど、次置いていったら本気で怒るぞ。」

「・・・すまない。」

「いいけどさ。」

「そうだ。天海殿は帰っているか？」

「?・・・なに言ってる?天海様は早くにお休みになって今朝も早くに起きてたぞ?」

しまは不思議そうに信繁を見つめる。

「は?よくわかんねえけど。じいさんなんかあ。みてねえぞ。」

青海の口が開くとその臭いにおいが二人の鼻を突く。

「お前は!早く寝ろ!」

そう言うつと信繁は、青海を部屋に連れ込むとそのままほおり投げ、上から布団を投げかけた。

「ま、これで大丈夫だろ。」

「お連れ様は・・・大丈夫・・・ですか?」

開けた障子を見ると、一人の小坊主がこちらを見ていた。

「まあ、大丈夫だろ。酒に飲まれるほどの男じゃないしな。すまないが起きたら、世話を頼めるか?」

「は、はい。」

「で、信繁様はどうするんだ?」

しまは不思議そうに見ていた。

「そついや、お前、昨日どうしたんだ?」

「まあ・・・朝さ、半蔵殿に言われて、まずは字だと。だから、俺も学堂に籠もってガキと一緒にピーチクしてたよ。」

しまは不満そうな顔をしていた。

「字は読めるようになれば、仕官しやすいからな。やっといて損はない。それに書いてある表札には意外に重要な事がかかっている事が多いから読めれば、便利だぞ。」

「だが、信繁様と一緒に出かけると言ったら、抜け出せたんだ。だから・・・一緒に江戸、まわんねえか？」

あの衝撃の本能寺を聞いた後、船室に帰った信繁は西洋の酒を飲んでいた為、按針達とほぼ寝ずに酒を飲んでた。そのためか、今でもあの船室には按針が寝ているはずだ。まあほぼ徹夜の信繁にとつて今の日光すら目がくらむが・・・。

「ま、いいだろ。ただ、あんまり頭が回らないが・・・いいか？」

「いいよ。行こう。こんな大きな町、見るのは初めてなんだ。ちょっと準備してくるから待つてな。」

そう言うとしまは走って外へ行ってしまった。

「ま、あいつも子供という事か。だが・・・。」

欠伸をすると、信繁は腕を回し首を回す。気合いを入れていないと寝てしまいそうだ。だがあんなにはしゃいだあいつの顔は珍しい。

「ほら、行くぞー。信繁えー・・・様。」

「・・・あいつ、絶対敬意とかという言葉・・・しらんな。」

呆れながらも信繁は近くにあった刀を下げ、入り口に戻っていった。

「本当に・・・人がほんに多いなあ・・・ここ。」

しまは好奇心で周囲を見渡していた。

「まあ、これでも京や堺ほどじゃあないがな。」

人通りは確かに駿河や三島よりは多いが、こういう大都市では多い外国人や宣教師の姿はほとんど無かった。それよりも寺社仏閣の数の多さに驚いていた。新しい都市（岐阜、堺）などではほとんど影も形もない寺社仏閣が多いのも一つ、水路と小舟の行き来が多い事に驚かされる。確かに多くの物を運ぶときは船が楽だが、この水路の多さは驚いていた。

「確かにここは変わっている町だ。だが、はしゃぐなよ・・・！」

しまのいたところを見ればいつの間にかしまの姿がない！

「お前！それは人が廃るつちゅうもんだろ！」

声の方を見ると、数人のごろつきに絡むしま一人の姿が見える。しまの後ろには女の子の姿がある。

「アン・・・馬鹿あ！」

信繁は声の方へ走っていった。

「だからといって、子供一人に大人が囲むんは、人じゃないぞ！」

「このくそガキ！そいつの懐！俺らに見せればいいんだよ！」

ごろつきの内の一人が、いきり立ち、殴りかかる。その瞬間にしまは男の身体の下に潜り込むとすねを思いつき蹴りつける。その蹴りの重さに崩れ落ちようと前屈みになる瞬間下がった顔に拳を叩きつける。その勢いに男は大きく吹き飛ばされた。

「情けなくないだか。お前ら！」

「よくもあ！やりやがったな！」

そう言うところろつき達は腰に差した刀を全員が抜きはなった。

「お前ら、刀を抜くとはどういう事か・・・わかってるだろうな。」

駆けつけた信繁が刀を抜きごろつき達に突きつける。

「お・・・お前・・・お前ら！」

ごろつきの頭と思われる男は抜いた刀をかたかたと振るわせていった。

「なんで。」

「お前ら！」

「応！」

「逃げるぞ！お、お前、覚えてろよー！」

そう言う頭らしい男は一目散に逃げていった。それを見た全員はそのまま、頭の方へ逃げていった。

「お前、大丈夫か。」

「うん。」

薄汚れた少女はふるえながらコクコクと首を縦に振った。信繁はその様子を厳しく見つめながらしまに駆け寄る。

「信繁様。アリガトな。」

パン！

信繁は無言でしまの頬をひッ叩くと、しまを無視して少女の前にしゃがみ込んだ。少女の握った手を見ると、少女に手にはひもにながったお金が見え隠れした。その視線に気が付いた少女は、握ったままの手を後ろに隠した。

「何する！」

しまは怒つてのび下に詰め寄ろうとする。

「お前、何したか分かっているのか？」

「子供を助けたんじゃない！」

その瞬間、しまは水路にはじき飛ばされるように飛んでいった。

水路は浅く、おぼれる事はなかったが、その顔は腫れ上がっていた。

「お前……。殺されなくなったらそれを持ってどっか行け。・

・わかつたな。」

厳しい顔に気圧され少女はコクコクとうなずき、走って去っていった。

「何するんだ！」

呆れた顔をして立ち上がるとしまの襟首をつかむと、一気に水面から引き上げた。

「お前！あんな危ないマネ、絶対するな！」

「なんで？」

信繁は首根っこをつかんだまま裏路地に引つ張り込んだ。あのままだと野次馬に目をつけらると思ったからだ。

「状況を見る。考える。」

「何を……。」

「あの子供はあのごろつきから金を盗んだ。」

「それが？だとしても困むほどじゃあない。」

「お前は盗みの片棒を担ぐのか？」

「……。」

「お前はお前の村を襲った連中助けているのと変わらないぞ。それは。」

「それは……。」

「それに。人数とか状況を見て考える。あの人数だと、下手すればお前も死んでいた。」

「でもあれは許せない。」

「草とかになるなら、まずは覚える！1に任務だ！2に命だ！」

信繁の迫力にしまはうつむく。

「自分の信条を押し殺せねば、いつかはお前・・・死ぬぞ。」

「・・・分かった・・・。ごめん・・・。なさい。」

「じゃ、行くか。もう少し回ってから。帰るぞ。」

顔を上げると、信繁はそのまま大通りに戻っていた。その後を小走りですまは付いてくる。

「一つ・・・聞いていい？」

「なんだ？」

「信繁・・・様は同じの見たら、助けに行つた？」

しまはそつと信繁の顔を覗くが、その顔はもう通常の物と変わらない。

「さあな。ただ・・・俺ならもう少し様子を見てから飛び込んだ。」

「・・・。本当に・・・そう？。」

帰ってきて部屋を見ると、まだ青海は寝ていた。

「べちゃべちゃ。」

確かに水路に突き落としたのは事実だったが、その水路は水草やもで一杯だった為、しまの身体の各所にもが入り込み、服は文字通り”べちゃべちゃ”になっていた。

「すまん。そこまでもが生えてるとは思わなくてな。」

信繁はすまなそうにしまの・・・。

「ちょ！おまえ！」

「ん？何。」

ちようどしまは上着に手をかけたところだった。

「お前、女ならもう少し恥じらえ！」

信繁は顔を赤らめるとそのままうつむいてしまった。

「ん？ハジ？何それ？」

「……ああ……な。」

呆れた顔で向き返ろうとする瞬間ハツと何かを思い出し、下を向いた。

「ああ……。はじい。端っこねえ。」

「……さすがに……。それは……。」

「でもさ。」

しまは不思議そうに信繁の前に回り込みのぞき込む。その瞬間、しまから顔をそらす。

「お、お前なあ……。」

「水場、どこだっけ？洗えねえよ。」

その言葉に……。信繁はしまを見つめると、まだ服を着たままだった。

「それは裏手にあるだろ……。服……。脱いで行くなよ。坊主達がうるさいぞ。」

「よくわかんないけど……。分かった。」

そう言うと、走って裏手にしまは走っていった。

「ごどもは……。いいですよ。」

その声に振り向くと、天海がにこにこした顔で信繁を見つめる。

「それは……。どういう意味かな？」

「あの無邪気さ。子供は……。やっぱり無邪気がいい。」

「言いようによっては……！」

「まあ、ああいう子が安全に生きられる世こそ、平和な世ですな。邪気なぞ、私たちが……。十分だと思いませんか？」

「……。ま……。確かに……。」

軽く手にかけてた刀を戻すと、近くに腰をかけた。

「昨日は？」

「あれからすぐに戻り、寝ました。」

そう言うと近くの場所を見繕い、天海も腰をかける。

「確かに、ここは平和だ。だが、全ての場所が平和ではない。」

「私も、ここに来る前ではいくつもの争いを目にしました。だが、どんな報償も、子供達の笑顔・・・や、親子の笑い声はそんなに聞ける物ではありません。こういうのが普通になる世なら、きつとやりたことができる世になる事でしょう。」

「あんだ。こうなる前にやりたい事があったのか？」

「拙僧は・・・そうですな。・・・確かに・・・ありませんな。」

そう言つと天海は裏手の方を見ながら、考えにふけていた。その裏手からは水の飛び散る音が聞こえた。

「そうか。」

「強いて言つなら、あの方と一緒にだった事・・・あの方の願いが私の今の願いですからな。だから今でもそうですな。駆け抜けている気がします。」

「そっか。それはいいな。俺にはそう言うのが無い。」

そう言つと、信繁は空を見つめた。空は晴れ渡り、その日差しは暖かだった。

「それはおもしろい。」

「俺は・・・親父に戦を叩きこまれ、上杉の旦那に寒い中を引きずられ、太閤の叔父貴のところまで、さんざん礼儀をたたき込まれ・・・」

「ほお。」

「それから叔父貴が死ぬ頃には城を出され、帰ってこれば戦の日々。勝つても結局は降伏し、親父は泣きながら、寺で死んでいった。そんな俺のやりたい事なんて・・・わかんねえよ。」

「それなのに何でそんなに必死そうな顔をするんです？」

「知らねえ。俺はわかんないけど、何かこう・・・みんなの思いみたいなのは分かる気がするんだ。だから、こう・・・何かしなきゃいけないかったんだ。」

「そう言えば、一昨日の夜、どうしてあんなに混乱したんです？」

天海は思い出したように言った。向こうでは何故か、水を掛け合うような音が聞こえてくる。そう言えば、子供らは休憩をしている

ところだったような……。

「あの日か……。あれは……。ちょうど、満月だったかな。その日は、叔父貴が泣いているのを見つけてすり寄ったんだ。」

「そんなことが……。」

「あの時、叔父貴がこういつていたんだ。」光秀……お前はこういつ時どうするんだよ。お前なら……。」とか言ってたんだ。だから、死んだと思っていた。」

「それはあ……。」

「それを裏切られている気がしてな。だから、やるせなくなった。

何か……思い出を踏みにじられた気がしたんだ。」

「それはすまない事をしましたな。」

「いや、生きている事は……関係ない。それよりも心の整理が付かない俺が許せなかったただけだ。」

”信繁サマー！”

「ご老体にあんな事をしてすまない。」

「信繁サマー！」

信繁が裏手を見つめるとびしょぬれのしまが子供達に追いかけていた。

「何してる。」

「いやあ、井戸とか言うのがあったから、服ごと身体を洗っていたらこいつら来て……。」

「なーに言ってる！お前水浴びて”チベタ！”とか言ってたから。」

「しるかよ。で、お前ら、水をこっちにばしゃばしゃ掛けてきたくせに。」

いつの間にか、信繁を挟んで子供達がにらみ合っていた。

「お前達。そろそろ住職が探す頃ですよ。戻りなさい。」

「あ……天海様。分かりました。」

そう言つと子供達は天海に一礼して、学堂のある入り口方面に走つていった。

「ぬるぬるはとれたか？」

「ああ。」

「なら、奥行つて着替えてこい。折角だから、一緒に習つてこい。絶対に字は覚えてこい。後悔はしないから。」

「あ……はい。」

そう言つと、しまは慌てたように寢床の方に向かつていった。

「いい子ですな。」

「ああ。いい子だ。ま、喧嘩つばやいのが玉に瑕だな。」

「それは……まあ……。」

照れた顔をした信繁を暖かく天海は見つめていた。

「お、信繁様。お帰りなさいましたか。」

声を見ると、本を抱えた算の姿があつた。

「それは？」

「ああ。この書庫にあつた本です。出来れば今日中に幾つかまとめておきたいので、お借りしてきました。」

そう言つと、算は両手に持った本を見せる。そこには幾つかの戦略書の姿があつた。

「大丈夫か？」

「流石に私は青海と違います。ま、暇というのもありますが、飲んだくれではいられませんからな。それにこういう本はおもしろい。」

あ……そうだ。さ……信繁様。」

「ん？」

「食堂の連中が、信繁様の食事……残しておいたそうです。後で、お食べください。」

「分かった。つて言うか、もうそんな時間か？」

「上をご覧くださいませ。では。」

そう言つと本を抱えたまま、算は奥に入つていった。空を見つめると太陽は頂点近くにあり、もう昼である事を示した。当時は一日2食なので、朝を食べ損ねるともう晩までは食事はなかった。

「あ……。」

”お前！何やってる！そんなトコで脱ぐな！”

”よく分かんないけど、何かあるのか？”

”恥を知れ！恥を！端で着替えてこい！端で！”

”ハジハジハジハジ・・・うるさあーい！”

「確かに飯は忘れてた。」

「行きますか。」

そう言うのと二人は立ち上がり食堂のある裏手に歩いていった。

「遅かったな。」

食堂に着いた二人を待っていたのはお椀の飯をおいしそうに頬張った半蔵の姿だった。

「……………」

二人は啞然となって見つめていた。

「半蔵殿……………」

「いやあ。食堂に来るとちょうど飯が置いてあったのでな。おいしく頂いておいた。カピカピにするのはもったいない。そうだ。相変わらずこここの飯は旨い。まだありますかな？」

「いや、まあ……………」

後ろの掃除中だった坊主達の顔は何か呆れていた。

「それ…………おれのじゃあ……………」

「なら遅かったな。惜しかったな。感謝。」

そう言うのと半蔵は膳に向かい手を合わせ、合唱をした。

「で、何のようだ。」

不機嫌そうに半蔵を睨みつけていた。

「そろそろ起きた頃だと思って参った。拙者もまた忙しいのでな。」

「…………俺の昼飯食うやつがか？」

「…………しつっこいな。嫌われるぞ。」

半蔵も半眼で信繁を睨む。

「食い物の恨みは恐ろしいという。あまりそう言う恨みでも買いに行く物ではないか？」

「確かに。」

そう言うと半蔵は立ち上がり、懐から何かを取り出した。

「これは？」

「干し芋。結構旨いぞ。」

そう言うと、幾つかの茶色の固まりを取り出して手渡す。それを信繁は無言で口に入れた。

ふと、故郷の事が思い出された。ちょうど芋が乾いた頃に親父は嬉しそうに持ってきたっけ。

「おぬし……これ……。」

「俺の田舎とかだと、これは非常食だな。いつも幾つかは持っている。どんなときでも生き残れるようにな。」

「そうか……。」

そう言うと干し芋を口の中に入れる。かみしめる味はいつもの・微妙に残るほのかな甘みだ。

「今夜、江戸城の門番には話がつけてある。正面から来い。そこで待っている。ただし、あんた一人だ。」

「わかった。」

そう言うと半蔵は立ち上がり、つかつかと外に出て行った。

「あ……あの……。めし……。」

「ん？」

「どうした？」

天海は不思議そうに坊主の方を見つめた。

「半分ぐらい残ってますから、軽い物……お作りしましょうか。」

「すまないが頼む。」

「ワシの部屋で頼む。」

「はい。」

天海はそう言うと振り返り廊下をすたすたあるいていった。その後を黙って信繁はついて行った。

「どうなさいました？」

「まあ、折角だから、一緒にどうですかな。」

「ま、いいが。」

そう言うと天海は近くの部屋に入る。

「おおかた……。」

「分かつてはいる。どっち向きでも覚悟ぐらいはしている。」

「まあ……私もどっち向きでもかまわないと思います。半蔵殿から聞かされる内容は、今まで前提を覆すほど物でしょう。それを聞いた後の決断はあなたにお任せいたします。」

「知っているのか？」

「まあ。」

落ち着いたように座布団を取り出し、信繁の前に置くと、自身も座布団を置き、その上にすくと座った。

「大方は。」

「ただ、私はあなたが気に入り申した。だから……。」

「すまない。」

信繁はその言葉を聞いた瞬間、頭を下げた。

「ん？」

「どうしました？」

不思議そうに天海は、信繁の顔を見つめた。

「俺は……あんたの言うような……気に入られるほどの立派な男じゃあない。上杉の旦那も、叔父貴も、あんたも……みんな……そう言う。俺に……！俺に何がある！」

「……。それですよ。」

天海は落ち着いた顔で見つめてきた。

「普通の人間は気に入ったと言え、喜び有頂天になりました。ただどあなたは違う。」

その言葉にじつと信繁は唾を飲んだ。

「それに重圧を感じ、悩める人間だからこそです。後……もう一つ言うなら気に入ったいらぬは私の自由。あなた様ではありませんん。」

「それは……。」

「相手がどういおうとも、あなた様はあなた様であればいいのです。」

だからあえて申します。もし気になさるようなら、それだけの活躍をこれからなさればよい。お世辞の1回や2回で一喜一憂するようなら、それだけの者だったと言ふ事です。」

「・・・分かった。」

「すみません。お持ちしました。」

「ああ。ありがとう。」

そう言つて信繁は膳を受け取り、たくあんと冷めたご飯を口にしました。その時のたくあんの味は少し・・・いつもよりしょっぱかったのを覚えている。

「よお。信繁・・・殿。どうした？」

部屋に帰つてきた信繁を一番に迎えたのは青海だった。

「あれ、算は？」

「ああ。俺をたたき起こした後、どっか行きやがった。」

「そうか。で、どうした？」

青海は信繁の神妙な顔を見つめていた。

「少し・・・出掛けてくる。頼んだ。」

そう言つて信繁は背を向けた。この頃には夕方でもう日は暮れかかっていた。

「・・・ちよつと待て。」

青海は少し声を荒げていた。何かに気が付いたようでもあった。

「どこ行く気だ？」

「いやあ・・・ちよつとな。」

その信繁の声はどこか上の空で、声に張りはなかった。

「あんたは俺たちの親分だ。どこに行こうが気にしねえ。だがな、一人で背負い込むのだけはやめろ。」

「・・・ああ。」

「行ってこい。予想は付く。半蔵だろ。行ってこい。ただ・・・。」

「何だ。」

「危ないは助けに行つてやる。だから。安心して行ってこい。そし

て・・・そんな不吉な事は決して言っんじやねえぞ。」

「分かった。」

そう言つと、走つて信繁は去つていてしまった。その背中は・・・何かを振り切つたそんな感じだった。

「ん？青海。」

算は廊下をゆっくりと歩いてくる。その手には大量の本が積まれていた。

「今、誰か走つていかなかったか？」

「ガキじゃないのか？それよりも飯はまだか？流石に腹がすいちまつてな。」

「そう言えば、今日、私が腕を振るつのでな。懐かしの味噌鍋だ。今日は。」

「そつか。今日は味噌鍋か。今日は楽しみだな。」

そう言つて青海は舌をなめずる。

「信繁様が帰つてこれば、喜ぶだろうに。そつだ。信繁様はこつちに来なかつたか？」

「・・・いや。知らんな。それより今日は早く飯にしよう。朝から飯を食つておらんなのでな。」

「こちらでお待ちください。」

「分かった。」

信繁が頷くと、兵士はそのまま歩いて帰つた。外を見渡すと、遠くには明かりがついた大きな船があつた。信繁が江戸城の門番に案内されたのは、外壁に建てられた兵士詰め所だった。中の戸を開けると、番所みたいな簡単な置作りとなつており、その縁に座ると、何気なく見渡していた。明かりなどが備えられ、城に目を向けると、城の明かりは煌々と照らされていた。

「待たせたな。」

戸の方を見ると幾つかの書面を抱えた半蔵の姿があつた。手には包みと酒が握られていた。

「どうしてここに？」

信繁は不思議でならなかった。内部仕事を仕掛けるなら、普通城内に入れる物だ。

「まあ……な……。秀忠様はな……。器量がある程度狭いのでな。」

半蔵は荷物を信繁の目の前に積みかさねた。

「……。そうなのか？」

「昔、関ヶ原の後で降伏したときにお主らの首を斬れと言い出したのが、秀忠様じゃ。押しとどめるのに時間がかった。だから、もし見つければ、速攻でお主の首が飛びかねない。」

「確かに。」

信繁はふと九度山を思い出す。あのとき聞いた徳川方の大将が秀忠だった。あの時に戦功を立てられなくて、窮地に立たされたとは聞いていたが。

「だからこういう所しかなかった。すまない。」

半蔵は軽く頭を下げる。

「気にしないでいい。だが用とは？」

「本来ならお主の連れ達も連れてこさせなければ何か勘違いされるとも思っただが、これだけは知られる人間の数を最小に留めたかった。」

「そう言うと半蔵は包みを開けた。そこには乾物の小魚があった。

それを信繁の前に置くと、酒をお猪口についだ。

「で？」

「お主に伝えたかった事……。それは……。宣教師の陰謀についてだ。この話、流石にここでなければ、伝える事は出来なかった。」

「そうか。」

「先日、本能寺の変は聞いたな。あれには続きがある。それは、その時報告を受けた秀吉殿の周りの人間に不思議な人間達が増えていった。当時、織田家という困いしかない小国の大名ともいえる各武将達は一度集まり、領地を再編した。だがこの後、どうも相変わら

ずの手紙操作や偽手紙などで攪乱を始めた。この頃私たちはある噂を耳にしていた。」

その間も信繁は周囲の監視を怠る事はなかった。

「ジャワ王国が、内乱の末滅びたという物だった。しかもその後、ポルトガルに占領された。それを聞いた我々は、先に海外に出た日本人達を通じて、調査を行った結果、ある事が判明した。」

「内乱で疲弊させ……。又は都合のいい国だけ残して……。占領。」

「そうだ。その後の按針の報告では、我々が考える宣教師の神とはなんだ？」

「ん？それは……。デウスか、基督……。」

「それを按針は不思議がっていた。按針の国も基督教を信じてはいたが、デウスという物は知らないそうだ。」

「ん？」

「単純に言えば宣教師でも二種類いる。そして……。一方は……。」「偽物……。か。」

「だが、ここから様子はおかしくなる。どうも、毒殺などをしてきたのは……。本物の方だ。」

「は？」

「どうも彼らは自分の思い通りの国を作る為に国を破壊するのを厭わないらしい。」

「坊主達とは全く違う考え方だな。」

「で、そいつらは、最大勢力である織田家の勢力を削ぐ為に、最初にわざと手紙で攪乱を行い柴田勝家達のいる北陸を狙った。そして文字通り、壊滅した。」

その言葉に信繁は黙ってしまふ。ちょうどその時には大阪にいたからだ。

「……。ん？全滅？あの時……。淀君は残ったのではないか？」

「それが……。秘密の一だ。どうも……。我々が不審に思い調査したとき、城の武器庫周辺で、子供達の死体を発見した。しかも三体

だ……。」

「え……。」

「そう。我々の推論が正しければ城の爆破の際、逃げ出した者はいなかった。と言うのも、城の隠し通路は何故か土で埋まっていた。」

「だがあの時三人は救出されていた。」

「それが問題なんだ。その時幾つかの部下達とともに三人は救われていった。だがこうとも考えられる。元々すり替える気なら……あり得ると。」

その時信繁は愕然としてしまった。どう見ても半蔵が嘘をついているように見えなかった。

「どうしてそこまでする必要があった？」

「あの報告以来、秀吉は扱いやすいと考えられ、そのためにつけ込まれたと思われる。」

そう言うつと資料の一部を取り出すと、信繁に手渡した。

「すまない、母ちゃん達を頼んだ。日々城の中が怖い。俺が狙われたのだ。」

この手紙の筆跡に覚えがあった。これは、叔父貴の物だ。

「これは、母上殿が来たときに髪留めに縫いつけられた手紙だ。」

母上というのは秀吉の母の事だ。

「その前後に何故か大阪城に来るように秀吉から頻繁に手紙が来るようになっていた。本来この二人は信頼関係があつく、信長様がいるときには何かの祝いや相談時には、いの一歩に駆けつけるほどの仲良しだ。本来来なくても気に掛ける話ではない。」

そう言うつて大きめの書状を見せる。そこには確かに太閤の判子はうたれていたが、筆跡は……少し違っていた。

「ということは……。」

「そう、あの連中は家康様を誅殺する気だったのだ。実際謁見に向かった時に確認もしたが、そのような手紙を出した事はない……そうだ。」

「そうか。ちょうどその頃には何故か俺とかも領土に戻されていた

「からな。」

信繁はあの怖い太閤の顔を思い出ししていた。

「そして、その時に確認したところによると、この頃の太閤は何か決めようとすると部下に阻害され、ほぼ一人では決められなくされてしまった。」

・・・。

「そして秀頼様が生まれた・・・。」

「これもどうも様子がおかしい。わざと太閤殿に会いに行ったとき、変な話を聞いた。それは色々警戒してか、淀君の部屋にさえ近づかなかった秀吉殿との子供が淀君に宿ったのだ。」

「は？」

自分も子をなした事があるから分かる。相手とふれる事が無く子を成すという事はあり得ない。

「ま、キリシタンの連中はばかばかしくもこれも神の子だとかのたまい、あり得るとか言っていたが、それに勘ぐった我々は調べる内に、大方その子は不倫の末に出来た子だという事が判明した。」

「それは・・・。」

最早、それは淀君が謀略の末にやりたい放題していたという事だ。

「それを我々は太閤殿に伝えていた。だがあの方はこういったよ。”あの子は誰の子だろうと関係はない。このような世界で唯一愛せる事が出来る物が出来たのだ。誰の子でもワシの子だ。”とな。」

その頃には信繁の頬に涙が伝っていた。確かに俺も確かに言われた事がある。

「俺も驚いていたが、もうそれ以上口を出す事はなかった。それからもキリシタンが徐々に豊臣家に入り始め、そしてあのようになってしまう。」

「そして、傀儡化させた豊臣家から金とかは船で外国に売り渡され、数多くの資産は海を渡った。」

「それが本当なら・・・。」

「だが、秀頼様を傀儡に淀君が権力を握ればどうなるのか、それは分かり切っていた事だ。我々が戦ってきたのはそんなわけも分らない奴らに国を盗られる為じゃない！だから、無理矢理でも喧嘩をふっかけた。」

「それが・・・関ヶ原・・・。」

あのころはお互いが疑心暗鬼となり、戦国大名の命運が決まったともいえる一戦だった。

「その話を父上が知っていれば結論はちがっていたかもしれないな。」

こんな話、信繁には大きすぎて信じられ・・・いや納得できるところが幾つかあったので、何となく頷いていた。

「その後の情報はまだ集めきれしていない。一説には妖怪を呼び込んだだの、様々な噂があり整理に時間がかかっている。」

「と・・・言う事は・・・もしか俺を妖怪なんかだと思ったのか？」

信繁は何となく思い当たる節を探してはいたが思い出せなかった。

「それはない。」

「は？」

「最初の真田のおじさんが来たときにある確認をしてもらっていた。本物かどうかだ。」

「え・・・あれが？」

そう言えば何か様子がおかしいと思っていたが・・・それか。まず本人かどうか確認を取っていたのか。納得がいった。

「だから二回目では、人間性を試させてもらった。」

「はは、とんだ笑い種だな。散々試されていたわけだ。半田山もか？」

「あれは・・・予定外だ。予定は普通に歩いて行くだけだった。だが、あのような事になったのは自分でさえも悔しい。」

半蔵はそう言うつと自分のお猪口についだ酒を一気に煽った。

「そこでお主に頼みたい・・・。」

「断る！」

その瞬間、半蔵は啞然となった。

「……何を言っているのか分かっていいのか？」

「例えそうだったとしても、家族は今、大阪で俺の帰りを待っている。そして俺の少なくともかけがえのない家臣達が大阪にいる。そのような状態で、そんな奴らの元にいるのなら、なおさら裏切れば殺される可能性が高い。」

「……流石真田殿だ。……確かに家臣に裏切れとは……言えないか。」

「例え、裏切ったとすれば最早相手も手段を選ぶまい。内部から押さえる者が必要ではないか？」

「確かに……。もう説得しても無駄だろう。」

その瞬間、周囲から殺気が放たれるの信繁は感じていた。そのざわめきは周囲を多い、今にでも襲わんばかりであった。

「そう言えば、あの時帰してくれると言ったよな。あれは嘘か？流石にそれを違えるなら……」

「退け！」

そう言い、半蔵が手を挙げると殺気は何故か退いていった。その言葉に刀に掛けた手を元に戻した。

「元よりお主を殺すつもりは毛頭無い。例え捕らえてもすぐに抜けそうな男に縄なぞ無意味。」

そう言つとあきらめた顔をして半蔵は信繁を見つめた。

「だが……あのような女に忠誠は無意味。」

「分かっている。こつちとかは単なる兵士にしか見ていないだろうよ。今まで散々忠告とかしても聞き入れた事はないからな。だがな、それでも今できた家族を棄てるのは出来ん。ま、戦争が終わったら、手助けでも何でもしてやる。今少しはまってくれ。」

そう言つと信繁は立ち上がった。その戸を開けるともう外は真っ暗だった。

「そこまで明かしてくれた事に感謝する。では。」

そう言つと、信繁は歩き始めようとした。

「しばしまたれい！・・・せめて出口までは案内する。こつちだ。」
そう言つと半蔵は走つて信繁の前に躍り出た。詰め所には空のお猪口と手のつけられていない小魚・・・そして一口も手のつけられなかったしびれ薬がそこにはあつた。

信繁はゆっくりと歩いてきた。月は少し欠けていたが美しかった。
・・・あんな話をされて俺は何をすべきだ。叔父貴の仇か？信長殿の仇か？言つては悪いがそれも戦場の習いだ。

どうと言つ事はないが・・・でもそれでも俺はどうしたらいいのか・・・。

「信繁さまー。探しましたぞー。」

暗闇の武家屋敷通りに声が響いた。

「算。どうした？」

「どこに行つてらつしゃつたのです？探しましたぞ。」

「いやあ・・・月がきれいだな。つい散歩しておつた。」

そう言つとほつとした顔で算を見つめていた。

「今日は、信濃の味噌鍋。拙者が腕によりを掛けた物。そろそろ奥方の料理が恋しいでしょうが今日は拙者ので元気になってください！ささ、冷めてしましますぞ。」

そう言つと信繁の袖をひっぱり、算は小走りで寺に向かっていた。つい信繁の顔に笑みが生まれた。こういう事が幸せな事だとこの時初めて感じたのだつた。

第四節 半蔵が見せたかった物（後書き）

一度不手際で消えたため復旧に遅れが出てすみませんでした。

第五節 1614年四月上旬 甲か乙か（前書き）

半蔵に答えを突きつけ帰った信繁は江戸脱出を図朗と一度仲間の元へ。そして待っていたのは・・・。

第五節 1614年四月上旬 甲か乙か

第五節 1614年四月上旬 甲か乙か

信繁は、ゆつくりと目を覚ます。昨日一日、あまり眠れなかった。ここは江戸城の側。本来ならいつ殺されてもおかしくない敵の本拠地。しかも相手はこちらの位置まで指定している。殺そうと思えばいつでも殺せる。そう言う状況なのだ。だから、仮眠だった為、昨日や一昨日みたいな熟睡感はない。

「お早う。信繁様。」

朝早く、眠そうな顔をしてしまが目を覚ます。

「はえーな。」

その声に顔を向けるとそこには、青海の姿があつた。近くの柱に寄りかかり眠そうな顔で、ひょうたんに入った酒を煽っていた。

「お前。起きてたのかよ。いつもはもつと寝ているくせに。」

「口の利き方には気をつけな。せめて青海おじさんと言え。」

そう呆れると青海は近くの布団に潜り込む。

「どうだった？」

青海の少しいつもとは違う緊張した声が布団の中から聞こえる。

「これが結果だ・・・。」

「そっか。あと少し寝るから後は頼んだ。」

そう言うつと青海は沈黙した。

「ん？何言ってるの？」

しまは不思議そうな顔をした。

「いいのさ。俺はもう少しここで庭でも見てる。お前は字でも習つてこい。」

「わかったよ。」

そう言つてしまは学堂に走っていく。向こうではいつも通り、寺の坊さん達が掃除をしている最中だった。

「お早うございます。ああー。昨日の鍋旨かったですな。」

「そうだな。」

そう言つと内側を見ると算が服を着替えている最中だった。

「頼みたい事がある。」

「はい？」

「半蔵の用件は終わった。だから、出立の準備だ。」

「は。」

その言葉に、着替え中でも算は立て膝を付き、かしこまる。

「ここにいる内は大方天海殿を気使つて来ないだろうから、準備ぐらいは出来る。そこで、2週間分の物資の調達を頼む。」

「！・・・。は。人数は3人ですね。」

算は全てを理解したように頷くと覚悟を決めたような顔をした。

「いや・・・念のためだ。4で頼む。」

「了解しました。」

そう言つと、算は持ってきた旅でもつてきた道具を見渡し計算を始める。元々、算を旅に連れてきたのは護衛の為ではなく、計算が得意な為だった。そのためこのような任務が得意なのだ。しばらく、道具の確認をすませるとそくささと着替え、算は外に出て行つてしまった。

「おまえ・・・なに・・・あるんだ？」

気になつたんだろう、算の表情を横で見ても不安そうに遠目から覗き飲んでいた。

「ん？まだいたのか。」

「ああ。」

不安そうな顔をして信繁をのぞき込むがその表情はいつも通りだった。

「どうしたんだ。お前ら。何か・・・こう・・・いつもと違うぞ。」

そのしまの顔は不安に満ちあふれていた。

「ま、いつもはこのぐらいの空気なんだが・・・。気にするな。お前は気にせず行ってこい。」

「え……信繁様……。」

「行ってこい。」

その信繁の少し強い押し切りに渋々学堂に歩いていった。信繁は立ち上がると、庭の縁を歩き始めた。これ以上ここにいればしまがまた泣きつきそうな気配だ。だが、そう遠くに離れるわけにはいかない。

「どうするか……ん？」

ふと、庭を歩いていると、棒を振る少女の姿が見えた。当時、女性であっても護身用に剣を習わせる言えも多く、棒などを振るう少女自身は少なくはない。ただ、その場合でも父親とかの親と一緒に事が多い。しかも今は朝も早い。

「どうした。」

信繁は声を掛ける。

「ん……。おじさん。」

眠そうな顔をしてこちらに顔を向けるとその顔に見覚えがあった。来た当初にいじめられていた子だ。

「あ……。そうだ。おじさん。けん……。おしえてくれよ。」

「それが。振ってみろ。」

そう言つと、近くの地面にどかっとな腰を据える。その様子を見て少女は棒を振ってみせる。だがその様子は剣の素振りとは遠く、棒を振っているとしか感じられない振り方だった。

「……。どうして……。剣なんてやってみたいんだ？」

「いつも……。みんなに……。イヤな事されて、嫌なだけだ。だからなんか……。できないかとおもった……。だけだ。」

「そうか……。それは大切だぞ。」

そう言つと信繁は剣を向いた。業物の一つで村正の中でも傑作の4つ振りの一つ”四法院”と呼ばれる刀で、当村上客だった真田家に献上された物だった。むろん後でお代と、鉾物使用の権利を与えられている。その傑作の一降りは戦場を意識された一本で、その刃先は太く、どんな甲冑でも割ってみせる剛刀だった。それを少女の

側で構えると、何も無い外の方に向ける。

「見てる。これが・・・武士の一振りって奴だ。」

そう言うと、刀を上段に構え、その場で一瞬身体をこわばらせた。次の瞬間足を半歩揺り出すと刀を高速で振り下ろす。

「ん！」

その衝撃で少女の髪が巻き上げられ、周囲の草が波を立てそのざわめきが周囲にとどろいた。あまりの刃風に少女は目をつぶってしまった。開けた次の瞬間には何事もないように見えた。だが、その空気の振動は周囲にまだ影響を与えている・・・ように見えた。

「す・・・ご・・・い・・・。」

ふと気になった少女は地面を見つめた。地面には刃風で出来たであろう刀傷が地面にくっきりとついていていた。

「本気の素振りだとこんなもんだ。どうだ。分かったか。」

信繁のその言葉に少女は首を横に思いつきり振った。その顔はさすがに青くなっていた。

「・・・ま・・・そうだよな。」

ぼりぼりと信繁は頭をかく。

「まずは構えてみる。」

「は・・・はい。」

そう言うと少女は急いで立ち上がると手に持った木の棒を構える。

「ふーん。そこからいくか。」

そう言うと少女の肩を掴むと片方を無理矢理引きずり、身体を半分傾かせる。

「まずはそのの体制のまま、振ってみな。」

その言葉に頷くと少女は振ってみる。少しだけ力がこもっている・・・気がする。

「その感じを忘れるな。ただ、そのままだと、剣を振っても当たらん。」

そう言うと信繁はまた構える。その姿に少女はびくっと身体を強張らせた。

「見ている。」

その様子を見無視しながら刀を納め、足のみを踏み込む。その踏み込みのあまりの強さに少女は唾然としてしまう。

「この踏み込みに力を入れられれば振った彼方に力がさらに入る。振ってみる。」

「は、はい。」

少女は慌てて構え、振ってみせる。その様子はぎこちないものの少しは様になっていた。

「もう少し踏み込みを。」

そう言つと少女の前に回り込むと肩をがっしりと掴む。

「よし、足裁きだけ、剣を振る感じでやってみる。」

「は……はい。」

そう頷くと勢いつけて身体を前に押し出す。それを信繁は両手でがっしりと受け止めていた。少女にしては……女にしては……この年にしては……強い打ち込み。その熱い思いをひしひしと感じていた。

「お前……変態か？」

その声に振り返るとしまが呆れた顔で立っていた。

「ん？」

「何か様子が変わったけど……恋人がいないのは分かるが、そこまで小さいのを手込めにするのは……。」

しまは何か汚いものを見る目で信繁を見ていた。

「手込めってなんだよ。ただ……。ま……。だからな？」

「リッスン……。？てごーめ？なに？」

「ま、いっか。関係ねーし。そうそう。天海様が呼んでたけど……ま、ほどほどにな。」

そう言つと、しまは向き帰り、一目散に走っていった。

「何考えてるんだか。」

そう言つと改めて少女の方を見る。

「これで基本は終わりだ。後は……。がんばれよ。」

そう言つと信繁は肩のほこりを払つと、すたすたと宿坊の方へ歩いていった。

「昨日はどうでしたかな？」

天海は落ち着いた顔で茶を点てながら、信繁の顔を見つめた。

「ま、流石に私には家族がいてね。」

そう言つとじつと胸を張り老人を見つめた。

「……そうですか。確かに家族がおられると色々充実してそうですね。」

天海はそう言つと茶を入れた器をそつと信繁の前につきだした。

「息子さんとかはおられますか。」

「ああ。いる。ちようど一歳になるかならないかだ。」

「そうですね。確にかわいい盛りですな……。お飲みにならないので？」

そう言つと茶道具入れからそつと干し柿を取り出すと、先ほどの茶の横に器ごとやんわりと置いた。

「……ちようど子供の事を思い出して……。」「

天海はその一挙一頭足をじつと見つめていた。

「大丈夫。私はあなたの考えるような野暮な事は致しません。」

そう言つと天海は差し出した茶器を手に持つと少し口に含んで見せた。

「分かった。頂くとしよう。」

そう言つと覚悟を決めたように信繁は茶をぐつと飲み干した。

「どうですか？お味は。」

「なかなかのお手前で。」

そう言つとそつと茶器を天海の前に置いた。

「半蔵殿はどこまで言いましたかな？」

「……。浅井の方の事ぐらいは……。」「

「それ……ですか……。」「

そう言つと天海は遠い顔をした。

「まあ、このご時世です。どれが正しく、どれが間違いかはあなたが判断されるとよい。」

「。。。。。」

その言葉に信繁は押し黙ってしまふ。そう、少しおかしいところもあるのだ。

「あなたはもしかして。。。。。」

「どうかされましたかな？」

「もしかして、あなた様はそれほど家康殿の事。。。。。」

「それはどうか分かりません。ただ。私からすれば、お市の方の娘さん達は生きていて欲しいのです。ま、他愛もない願いですがね。」

「そういうもんかね。」

「私にとってはどちらも昔、大恩があるお方。その家族だけでも願うのはやぶさかではありません。」

「そっか。」

「でもまあ。。最近では本当の事に思えてなりません。」

「？」

「最近のあのお方は何故か様々な陰謀を。。いやこれは他家の方であるあなたに言う事ではありませんな。」

そう言つと落ち着いて自分の分の茶器に茶を注ぐと、ぐつと飲み干した。

「私はある意味死人。いつ死んでも惜しくはありませんが。。。。。」

「そう言うものか？」

「私はこういう局面の時ある言葉を覚えていきます。そのお方はこういう風に言っていました。」

”何も信用できない時はなあ！感で行け！自分を信じて前に進め！何か起きる！”

その言葉に弾けるように信繁は笑った。

「それ以来、人事を尽くしたその時は、私は何も考えず、勘で行くようにしました。」

その言葉に更に信繁は笑ってしまった。何を自分はしているのだ

るうか。

「私はあなたの事を気に入ったと申しました。私はただ、気に入った人間を失う事はないように・・・ただ・・・生きるばかりです。」
そう言うところじつとこちらを見つめた。

「分かった。」

そう頷くと立ち上がる信繁の顔は晴れやかだった。

「ありがとうございます。天海僧正。」

そう言うって信繁は障子を開け放ち、足早に去っていった。

「・・・まだ伝えたい事が・・・ま・・・この方があの方らしいのですが。」

そう言うつと天海は立ち上がり戸棚を探り始めた。

「よ。」

朝焼けも近いとき、青海は眠そつな顔をして信繁を見つけた。

「よう。よく眠れたか？」

信繁は剣を一振りすると青海に向き返る。

「ん。大丈夫だが、お客さんとかは来たのか？」

「それはここにあの人がいる限りはな。」

「そっか。」

頷くと青海は近くの庭の石にどかつと腰を下ろす。

「結局どうなつたんだ？」

「ん。断ってきた。」

明るく言うその言葉に後悔の文字は微塵もなかった。

「そっか。ま、予想通りだわな。で・・・どうするんだ。」

「ここに陣があると見積もっていたのだが、それはここにはないようだった。しかもあの様子では見せる気はない。」

「ならどうするよ。見に行くか？」

「大方偵察がばれないように各地の兵を集める手法をとると思う。」

偵察は大方無駄骨に終わる公算が高い。」

「ならどうするよ。」

「今それを考えている。一番簡単なのは北だと思うが、敵の数も多い上に山を最低2回も超えるのはきつい。」

「でも生きて出るのが、一番だぞ。」

「でも時間が間に合わない。予想が正しければいつでも出立できる準備を行っている。駿河（現在の静岡県静岡市周辺地域）周辺に部隊を展開しているなら、到着（大阪城に部隊展開終了）までに各地の部隊集合を合わせ、全部隊到着終了後一月はかかる。それまでにはつきたい。」

「その条件だと突っ切るしかないぞ。」

青海は髪はないものの頭をかきむしる。北に抜けて日本海まで出て、魚津に向かいそこから船に乗り、丹後につきそこから南下して今日に入り、そこから大阪に行けそうと言えば行けそうだが、そのためには徳川方に付いている上杉領を抜ける必要があり、それが難関でもあるが、駿河の本陣を抜けるよりは多少は楽だ。だがリスクが多いのもまた事実だ。

「だから考えている。ま、とりあえずは北だ。行ってから考えればいい。」

算がそつと音を立てないように現れる。背中には背負子を背負い、一見すると修験僧にも見える。

「準備出来申した。とりあえず集められるだけの食糧とわらじなどの旅道具は集め申したが、これで足りるとは……。」

「一週間分ならどこかで調達すればいい。」

「で……今から出発か。だから……。」

「まあな。」

朝も薄暗く、大阪を出立した日を思い出してしまう。違いと言えば霧があるか無いかだ。

「あいつはどうする？」

そう言っ部屋の中を見ると、しまが一人で寝相悪そうに寝ている。

「あいつもここにいればきつといい草になれる。それにきつとどっ

ち向きでもあいつの出番は増えるさ。だから気にしないで置いていく。」

「了解。」

そう頷くと三人は立ち上がると正面に向かう。

「江戸はどうだった。青海？」

「まあ、悪い町ではないがこう・・・あの懐かしき大阪の雑多に比べれば、おとなしくて物足りんな。」

「青海にとつてはだろ。私には・・・ま・・・ちよつと本が寂しいですな。昔いた京都とかに比べれば・・・まだまだですな。」

「俺は・・・まあ・・・好きには好きだが・・・いくか。」

そう言つと栓抜きを開け、門を開ける。

「・・・。」

目の前には天海と半蔵の姿があつた。

「は？」

算はあまりの事に啞然となつてしまった。

「昨日・・・お伝えしませんでしたな。お見送りの為、しばらくはついで行こうかと思うと。ただ、急な出立なのは分かっていましたから、支度はしておきました。」

天海はにこりと焦る三人にほほえんだ。その姿は旅仕度らしく三度笠を持ち手荷物を抱えていた。

「でも・・・まあ・・・半蔵殿は意外でしたな。」

「ふん。言つたはずだ。お主を殺す気はないとな。」

半蔵はそれらしい旅道具らしい手荷物は持っていた。だが三人に緊張は走っていた。

「ただで付いていく気はない。」

そう言つと、三人の目の前に書面を三つ投げつける。

「これは？」

「手形の書状だ。内府様直々だ。これでほとんど全ての関所は通れる。」

”え・・・。”

確かに信繁達は獣道を使い多めの日程で行く気はしていた。だが、これがあれば相当に短縮が出来る。街道を安全に通る事が出来て、しかも道は選り放題だ。

「これは？」

信繁は不思議そうに半蔵を見つめる。

「拙僧の分も……。」

「本来なら一条あれば全員通れる。気に召されるな。」

天海の言葉に半蔵は露骨に嫌そうな顔をしていた。

「どうして……。」

「言ったであろう。お主が帰るまでは攻めはせぬと。だから出立の日の朝に早馬をとばし、内府殿には、攻めぬように連絡はしてある。だから……。」

「は!？」

流石にこれに全員が絶句した。

「本来なら大阪城の工事後、すぐに攻める予定であった物を、お主の為に待つてもらっている。」

「いや……。だから……ほんとうにしたのか？」

信繁すらもあまりの意外さに驚いていた。わざと意気込みを調べる為にやってもらっていた物を本等に真に受け行うとは思えなかった。

「それが”約束を守る事”だ。」

流石に全員が啞然とした。

「流石に拙僧でも……驚き申した。」

「まあ……これぐらい出来なくては三河武士の名折れ……との言葉も頂戴してある。」

「流石に……それは……。」

寛達も驚いていた。今までであった武将の中でもこれだけスケールのでかい事は初めてでもあった。

「だから、せめて出て行くまでは見定めねばなるまい。」
半蔵はにやりとするとぐっと拳を握った。

「お主達の分は用意していいないぞ。」

算は慌てていった。

「それは承知だ。」

半蔵はそう大きく頷いた。

「私について行ける範囲までと言う事で。」

そう言うつと天海も頷いた。

「そうだ．．．この子も．．．一緒にいいですか。旅の費用はこちらでお出しますのぞな。」

そう天海は言うつと後ろに手を回す。そこから小さな女の子が一人、よろよろと出てくる。

「この子は．．．。」

信繁は見覚えがあった。朝練習につきあっていた子だ。

「この子は．．．いろいろな事を経験させたく思いました。出来ればど。」

「お前．．．。もしかしたら山道とかい로운な事があってつらいかもしれないぞ。いいのぞよ。」

わざと怖い顔をして青海は女の子を睨む。

「．．．いい．．．いい。私．．．もうあれ．．．以上怖い事なん．．．て．．．無い。」

少女はふるえながらもきつと青海を睨んでいた。信繁はその瞳に強い意志を感じていた。

”どおおおおおおおおおおおおおおお！りゃあああああああ
ああ！”

その声が響くと信繁は後ろに腕を回すとその腕に勢いをつけた蹴りが刺さるが、それを軽くいなすとそのまま、全員の目の前に引きずりおろす。

「しま。どうして。」

「あんだけ騒いでいれば誰でも気付くぞ！」

しまはいつもの格好ながらも息を荒くし、じっとこちらを見ていた。

「お前ら、おれえ、置いてくなんて・・・なんて薄情な！」

しまの顔を見ていると・・・うつすらと涙をにじませていた。

「お前はここで勉強しながら草を目指せばいい。俺たちはこれから・・・死ぬかもしれん。そんなのに付き合わせられるか。」

信繁の言葉にしまの顔は更に赤くなつた。

「それは仕えるちゆうー事には何ねえぞ？だかつてそんなに信用出来ないか？」

「そうじゃないが。」

算は慌てて否定する。

「なら・・・連れてけ。それが・・・俺が村長から受けた・・・任務だ。」

そのこのしまの強張つた顔の裏に頬をふるふるすると震わせ、ちらちらとこちらの表情を伺うしまの姿があつた。

「分かつた・・・なら付いてこい。お前ら・・・全員！」

そう言うつと、信繁はひとかたまりの人々を押しつけ、北に向かつて歩いていった。それを走つて算達が追いついてきた。

”もしかしてこれを予想してあれを・・・。”

算は近づいて耳打ちした。

「なんとなくだ・・・なんとなく。」

そう言うつと後ろを振り返る。そこには数多くの人間がいる。

”感で行け！感で！きつと何かが起きる！”

その言葉が頭の中をこだましていた。

第五節 1614年四月上旬 甲か乙か（後書き）

少し短めでしたが、いかがでしょうか。只、不手際で、投稿が重なった事をここでお詫びします。

第六節 徳川家康という男（前書き）

真田御一行は只とりあえず北へ向かった。だが無目的に見える真田御一行に何者かが近づいて来る。それは・・・。

第六節 徳川家康という男

第六節 徳川家康という男

本当に真北に向かった真田信繁一行は朝は、話しながらのゆっくりとした歩みで、しまや少女に様々な事を大人達が聞かせながら歩き、夜の宿泊では半蔵が、子供達に武術や技術を仕込む様子を信繁達が酒を飲んで見た。そう言う旅だった為か、普通の旅人よりは遅い歩みで北に向かっていた。と言うよりも全員が天海の身体を気遣っていた。流石に齡九十を超えるご老体である。気を遣わない者はいなかった。

「でもまあ・・・これはこれだな。」

青海はゆっくりと宿から街道を見つめ、つぶやいた。ちょうど二階を一面借りていた彼らにとって下を歩く人々は、せわしなさそうに見えた。

「どうしたんだ？青海？」

不思議そうに信繁が聞き返す。

「今まで何というか、行き急いでいたからな。こつゆっくりとした時間も悪くないかと思えてきてな・・・。」

「お前らしくもない。」

算の呆れた顔ではあるがその着物は着流しであり、宿で提供された物だ。

「風呂・・・入って来いよ。滅多に入れん。」

「いやあな。半蔵はどうした？」

「あの方なら・・・。」

「よ。拙者の事がお気に入りなら、そう言えば。」

笑いながら入ってくる半蔵の手には川魚が握られていた。

「それは？」

「ああ。近くの漁師に掛け合って酒の肴をゆずってもらった。」

「いいのかよ。」

呆れた顔で半蔵を見ながら笥の背負子の中に手を突っ込む。そこには酒の瓶が一本とっついてあった。

「でもまあ……いつも思うのだが……お主……ワシ以上の飲み道楽……食い道楽だのう。」

青海が呆れた顔で半蔵を見つめる。確かになんだかんだ言っつて半蔵は食料の調達に事欠かない。

「まあな。生きている楽しみの一つだ。気にするな。」

無邪気に笑い、七輪を外側に起きながら火種を取り出す半蔵の姿は無邪気そのものだった。

「おい。でたぞ。」

そう声が聞こえてくると、下の階から一気に駆け上がってくる声に半蔵は邪魔されたようなむっとした顔になった。

「早いな。」

「ああーな。あつついのは苦手じゃ。」

「待ちなさい。まだ頭拭いてないですよ。」

天海僧正の慌てた声が聞こえる。こういう声が聞けるのもまた、この旅の醍醐味だ。

「ま、そう言う事だと思った。」

呆れた顔で立ち上がると、半蔵はふすまを開けるとちようどふすまに手を掛けようとしたしまの姿があった。頭は……何とも言えないほどにぼさぼさだ。

「そうそう、風呂は貴重だ。戻れ、戻れ。」

「そんなこといってもなー。」

「そうだ、天海殿。」

「ん？」

「連れは？」

「あ……まだ風呂ですな……。来い！しま……。あの子に謝るんだ。」

慌てた声が、下に降りていった。天海じいさんもまた……。大変

そつだ。

「さて私は、下に行つて少し、しま達に稽古でつけてきます。後はお願いいたす。」

そつ言つてちらちらと七輪を見ながら半蔵は下へ降りていった。

「でもまあ……。大所帯だな。」

青海は呆れた顔で手持ちのひょうたんを覗いていた。

「でもまあ、こうなる予感はしていました。」

「すみませんねえ。」

そつ言つ声に入り口のほうをみると、天海が手ぬぐいで頬をこすりながらあがつてきた。

「いい湯でしたな。ささ、他の方も入られませい。」

「おう。」

「先行つています。」

「分かつた。」

そつ言つと二人は手ぬぐいを片手に下に降りていった。

「いい風ですな。」

「確かに。」

町は夕暮れで下を見ると、呼び込みの女達が旅人の腕を持つて引きずり込んでいる姿が見える。皆が皆、生きるに必死なのだ。

「平和な物だな。」

「ですな。」

「そつだ……。天海殿に相談しておきたい事がありましたな。」

「どうなさいました。」

「あなたほどの博識な方ならお築きかと思うが、この先の道中……。」

「どちらをお通りになるおつもりで。」

天海は側により声を潜める。それに合わせ、信繁は声を小さくする。

「このまま北に行く振りをして中仙道を通るつもりだ。ま、本来はこれが目的で来たような物だ……。」

信繁は遠い山を見つめる。ちょうどこのあたりで西へ向かえばちょうど中山道だ。ふと天海は頭を巡らせてみる。確かに、徳川に従ってはいる物の、あの地域は武田家遺臣団とかがいる地域、そうそう襲撃も出来ない。それに……。

「兄上……ですか？」

天海はちょうど上田の地にいた、真田家の当主の事を思い出す。

「まあな。半蔵とかが関所を通してくれれば後はどうにかしてあそこに行くつもりだった。だが今回の通行書のお陰で、行けそうだったからな。目的を果たすつもりだ……。」

「では……。どういった相談で。」

「まあな。そこでは俺たちの名前は知れ渡っていると思うんだ。」

確かに真田の物が徳川軍に大立ち回りのしたのをむろん上田や信濃の人々は聞き及んでいる事だろう。

「だが、事がおおつぴらになれば半蔵でもかばいきれなくなっていく。」「

むろん、書があるとはいえ、名前を明かせば豊臣方だとばれている人間がいればよからぬ事が起きる可能性がある。

「でだ。名前とかを考えていただけぬか？」

天海はその言葉に頭をひねってしまう。

「どうしてそうなりますか？」

「いやあ……。まあね、偽名を旅の間考えてみたんだが……。なかなか思いつかなくてね。」「

「とりあえず思いついたのを一つ言ってみてはくれまいか？」

天海はいぶかしげなかおをして、信繁の顔を見つめる。

「うーむ……。真田信の繁……。とか？」

その言葉に突っ伏すのをぎりぎりこらえる天海は近くの柱に頭をこすり当てる。

「で……。算がカッケルだろ……。青海は……。セイーカイだろ。」

「少しお待ちください。それではほぼ変わらぬし……。それにあまりに酷い。」「

信繁のあつけらかなとした顔に一抹の不安を覚えてしまう。

「こういう事に不慣れでしてな。それに僧正様に名前を付けてもらえばそれだけでも縁起物という物だ。何か……こう……お願いします。」

そう言うのと大きく信繁は頭を下げた。

「ま……。たしかに名前を付けるのはやぶさかではないが……。わかり申した。考えておきましょう。ただ……。」

「なんですか？」

「流石に……青海殿や笥殿はそのままでもいいかと……。」

「あ……そう……わ……分かったよ。」

信繁のなんともも間の抜けた声は、天海の心に何故か心地よく染み渡った。

次の朝は晴れ渡つては……いなかった。どことなく曇り空であり、雨の予感さえした。春の雨は山に暮らす者にとっては危険でもある。雪解けを加速させ、また山崩れの危険もある。

「で……だ。信繁殿。」

半蔵は声を急に低く下げる。その感じに笥達も身構える。

「急で悪いが……ここにもう一泊……。いいかな。」

「どうか……したのか？」

「俺もまあ……な……。」

半蔵が歯切れの悪い声を上げる。

「で……どうしたんだ。」

半蔵のその顔では想像が付かない。

「それについては聞かないでくれ。俺も信じがたいと思っているんだ。旅費は俺が払っておいたから、飯ぐらいはでる。だからな。」

「ま……かまわないが……。」

信繁はあまり気にしていなかった。と言うのも、このゆっくりとした旅はある意味目的通りだからだ。本当にこの男が忍軍の長ならば、この男の足止めは百日の軍備より効果があるからだ。それに言うて

いる通りなら、帰る時間を遅くすれば、それだけ時間が稼げるとい
う物だ。だが、それでも遅すぎる。

「歯切れの悪い半蔵というのも珍しい。どうしたんだ？」

「いやあ・・・な。あ・・・この天候だろ。危険かなと思ってな。」
確かに空の様子は不安だ。だがこの程度でひるんでは山越え
など出来はしない。少し詳しく言うなら、この頃の街道と言っても
木が切つてある程度な事が多く。街道整備が本格化したのは江戸中
後期がほとんどである。ましてやこの時代で整備とは木がない程度
ではない。それでも獣道よりかは大分歩きやすいのだが。

「ま、そこまで言うなら・・・すまないが頼む。」

そう言うと、履いた草履を元通りにすると信繁は宿屋の中に戻
っていった。

「え・・・今日は行かないん・・・。」

少女が寂しそうに空見つめていた。

「今日は、家の中で勉強だよ。」

天海は優しく諭すと、少女に優しくほほえんだ。

「そうだ・・・。」

信繁は空を見つめながら少し考えると、またわらじを履き始めた。

「青海。」

「おう。」

「ついてこい。魚・・・取り行くぞ。」

「あ、おう。」

青海は頷くと荷物をおいて、外に？けだしていった。

「お・・・俺は？」

しまは驚いたように周りを見渡すと各自、行動を起こしていた・・・
あれ・・・半蔵の姿が見えない・・・。

「ん。こういうときは信繁様の後について行ってこい。」

「おいよ。」

掛け声をあげると、しまは掛けだして外に行った。

「あれ？半蔵殿は？」

算が慌てて周囲を見渡すと半蔵の姿が見えない。

「さあ？」

天海は首をひねるが、いつの間にか・・・姿が見えない。

「そうだ。天海様。せっかくの機会です。幾つかお聞きしたい事が・・・。」

算は背負子をおろすと、そこには手書きの書があった。ふと天海は少女の方を見つめると、うずうずした顔でこちらを見つめていた。「そうだ・・・ミリア・・・。信繁様のところに行って、魚取りでも見てきておいで。」

「は・・・はい。そうじょう様。」

そう言つと嬉しそうに少女は走っていった。

「珍しい名前ですな。」

算は感心した顔で、嬉しそうに少女が走っていく後を見つめていた。

「ま・・・確かに・・・。で聞きたいのはどこですか？」

「こここの所なのですが・・・そちらの本に書かれていたのは・・・。」

算は本を手に階段を上がるのをそろりそろりと天海がついて行った。

「でだ。久しいのお。」

信繁は川に仁王立ちしていると青海は呆れていた。

「大阪の河原につつこんだあんたが言つ事じゃあないな。」

「まあな。」

青海は笑っていた。

「よ。」

その声に河原を見つめると、しまがにこにこしてこちらを見ていた。町にも活気が取り戻せて来たらしく、馬の駆ける音とかが聞こえてくる。

「お前らー。魚・・・とれっか？」

信繁は憮然とした顔でしまを見つめる。

「こつ見えてもなー……。こつ見えても……。」

そう言っつて声先細りになる中、川を見つめると確かに川魚が幾つか泳いでいた。

「いじめてくれんな。こつ見えてもお偉いさんの息子なんだ。」

「ま……。お手並み拝見。」

しまは歩いて川側まで来ると、その場で座りじつと川面をもにやにやと見つめた。

「こつやっつてな。」

そう言っつと信繁は川面に乱暴に手を突っ込むと魚はさつと逃げ出していった。

「……。こつやっつてな。」

そう言っつと信繁は荒っぽく手を突っ込むが、魚は手に一匹も入っていないかった。その様子にしまは笑い転がっていた。

「ま、見てるや。兄貴達の所で教わったのはな……。」

そう言っつと青海は両手を上に上げ、息を潜めててじつと動きを止めた。

「こつだー！ー！ー！」

そう言っつと身体を大きく動かし、魚を捕ろうとするが、寸前のところで逃げられる。その様子を見ていたしまは更に腹を抱えて笑い転げる。

「まあ、流石……。武士様。俺が手本見せてやるよ。」

そう言っつとしまは河原から石を一つ拾うと立ち上がり、川面をじつと見つめる。その瞬間張りつめる空気みたいな者を感じる。しばらくじつと構えるとしばらく空気が凍り付いたようにしまの様子を見つめていた。

”びしゅ……。 ”

石をしたから這わせるように投げると石は川面にスポツと入ると音も立てずに川に沈んだ。次に浮かんできたのは川魚だった。

「おお。すげーな！。お前。」

感心したように魚を拾い上げるとそれを河原にあげた。

「……。そう言う感じなら行けるのか。やってみるか。」

そう言うつと、信繁は感心してみつめると、何かひらめいたように足を構えじつと水面を見つめる。

「どうした？」

青海は見つめるが、信繁はじつと水面を見つめたままだった。次の瞬間からだがすつと動くと、信繁の手が水面を叩く。

「「は？」」

その次の瞬間、魚が水面から河原に飛び出していった。……しまはおつかなびっくり見てみると魚は気絶しているようだった。

「すごいな。」

青海は感心して信繁を見つめた。

「ドンだけ怖い顔して漁してるんだよ。漁師は。それじゃ疲れるだけだよ。」

そう言うつて川下を指さすと、漁師が魚籠を持って水の中につけていた。

「のぶ……しげさま……。」

その声に河原を見つめると息を切らした少女の姿があった。

「お……どうした。」

そう言うつと少女がと手と手と歩いてくると、信繁達がいる河原に入ってくる。

「僧……上様が……。魚の取り方……。見て……。つて。」

「取ってみるか？」

そう言うつて信繁は河原を見つめると魚たちが岩苔とかをついばんでいた。

「うん。」

そう言うつと、少女はしゃがみ込み手を水の中につけるとじつと待っている。その間にも遠くでは青海や、しまが各自それぞれの方法で魚を捕ろうとしていた。

「それだけじゃあ……。」

少女の手の中を見ると魚が数匹手の中に収まってるのが信繁には見えた。

「何とかしないとお．．．。」

半蔵は焦っていた。その報告は昨日の夜には届いていた。

「内府様って人はあ．．．。」

馬が街道を全速力で駆ける。このまま行けば一刻前後で次の宿には着くはずだ。

「内府様の姿が見えない。」

「いつからだ。」

「それが．．．半蔵殿の手紙を見てからだ。この報は昨日あたりに届いた。」

「は？」

「で、秀忠様は内密に半蔵を捜しておられる。せめて事情だけでも．．．。」

その言葉を聞いてじっと昨日一日布団の中で考えていたが．．．どういふ事か理解出来ない．．．このまま布団の中にいれば幸せそうだ。

「もしかして．．．。」

走りながらも半蔵はある事が頭をよぎる。

「昨日．．．信繁殿をやつと三島までお連れ申した。もう少しで目的の江戸にお連れ申す。私から見ても好青年．．．。きつと日の本の礎になりましょう．．．。」

確かにそう書いたが、説得は不調。念のために預かった手形を使う羽目になった。

「あの方の事だ．．．大方．．．。」

「こんな小さな魚．．．川に返せよ。」

そう言つて魚籠を持った漁師に手に持った魚を捕られた信繁は意外そうな顔をした。

「どうしてだ。お主も魚を捕るだろう。」

「お侍様だけど、そんな事も知らんのかあ。」

呆れた顔で魚籠の中を見せる。中には大きな魚しかいない。

「そんな小さな子まで奪われたら、親は怒るだろうさ。」

漁師は河原にある大きな石に腰を据えて、腰からキセルを取り出した。

「子供がいなくなれば親もいなくなる。」

その言葉に二人の子供は真剣そうに聞いていた。

「ま、言ったとおり、魚籠は貸してやるけど。少し話を聞いてくれ。」

「お．．．おう。」

「まあな。お侍様は皆が皆．．．戦ばつかすんだけど。なんだかいねえ。」

漁師は遠くを見てたばこに火を入れた。

「．．．。」

「おさむらい．．．。いくさ．．．。」

少女のつぶやきが聞こえる。

「だな。」

しまは大きく頷いていた。

「．．．そうだな．．．。つまらないことさ。最初はな。」

信繁は河原に腰を下ろすと対岸を見つめる。対岸は小さな小屋が幾つか見えた。

「例えば．．．あそこに小屋があるだろ。」

「おう。」

「そのこの住人が対岸を見ると誰かが洗濯していた。でだ。対岸の奴に言っわけさ。」

その言葉に信繁をみんなが見つめた。

「俺んちの川上で洗濯するんじゃないやねえ。汚れる。魚が捕れねえ。」

「つてな。それで怒ったとする。」

「ああな。」

「それで対岸の住人同士が諍いを起こす。で、呼ばれるのが暇な衆さ。それが俺たち”侍”って奴さ。」

「だけんど、戦ばっかしていて、みんな幸せじゃないべ。」

漁師は煙草をゆっくりとくねらせ、川を見つめる。暇になった子供対が、魚相手に苦戦する青海の所に行っていた。

「それはみんな分かっている。最初は喧嘩でも、大きくなれば戦さ。誰かがやられれば、どっちかがいなくなるまで戦は続く。だから終わらない。誰かの名の下に統一しない限りはな。全員が同じ所に付くその時まで。」

「あんちゃん・・・おもしろいな。」

感心したように漁師は信繁の顔を見つめていた。

「そうか？」

「よく分かんないけど。ここは魚を旅館に届ける仕事が多いんだけど。こういうのばかりしていると・・・どっかこつたで刺したただ、刺されただつて聞くと訳分かんなくてな。」

少し悲しそうな顔で、空を見つめる。空は青くて輝かんばかりであつた。

「そつだ。ご老人。」

「ん？」

「折角だから、漁の仕方とか教えていただけませんか。」

「ま・・・普通に採るよかおもしろい・・・。いいだよ。」

半蔵はもう少しで本庄と言う所まで来ていた。

「予測が正しければ・・・。」

「でだ・・・何か聞いていなかったか？行き先について。」

「んー。何か、鶏卵を探しておられたような・・・竿は持って行かなかつたぞ。」

「で、いつからいない？」

「手紙をもらった直後だから・・・十日前ぐらいか？」

頭で思い浮かべる。あのお方の行動はよく一緒にいただけの予想

が付く。だから……。

『ここら辺で休みませんか?。』

聞き覚えのある声が聞こえてくる。半蔵は即座に馬を走らせ、高台で馬を止める。そこから目の届く範囲に街道を進む、馬をゆつくりと歩かせた三人組が見える。老人を馬に乗せ、二人は馬を引いていた。その様子を見て半蔵は頭を抱えた。悪い予感がしたからだ。

「だから……。さっきのところで休めばよかったですように。」

「そう言うな。ほれ……。釣れた魚が逃げてしまっから急ぐぞ。」

老人が疲れ顔の二人の若者を手に持った杖でせつついている。

「でも……。」

「でももくそもない。」

半蔵は念のためにゆつくりと馬をあるかせ、近づく。このご時世・
・確かに多くの地域では平和になったとはいえ、まだ旅人は少なく、街道の宿屋とかも何件かは頼みこんでしてもらっているところだ。だから旅人というだけで珍しい。しかも当時の馬というのはとても高く、街道で馬を借りるのはどんな駄馬でも結構な値段がしたのは事実だ。それだけで珍しい。わざと街道に降りると、静かに馬を歩かせる。向こうもこちらに気が付いたらしく。急にだまり込むと、ゆつくりと歩いてくる……。

「御老じ……。」

「久しいの。半蔵。」

その声に半蔵の偏頭痛は三倍ましとなる事になった。

” お前ら……何で来させた。今は大事な時期だろうが……。”

” だって……。発見したときには行く準備万端で……。”

” 行く気満々で、早馬でとばす予定なのを無理矢理付いてくるだけでも手一杯……。”

「何話しておる。」

老人は後ろ向きでひそひそ話している男達三人の顔を覗きこむ。

「あ……あ……いやいやいや。」

半蔵は慌てて、老人の方を向き返る。

「半蔵・・・流石にあつた直後に背を向けるとかは失礼だぞ。」

「今・・・こんな所で会う自体も失礼です!」

呆れた顔で半蔵は言い返すが、老人には効いた節もない。

「そう言うな。お主の話聞いていても立ってもいられなくてな・・・

・あの小倅どう成長したのやら・・・。」

「いや・・・ま・・・。」

老人の楽しそうな顔とは裏腹に半蔵は焦っていた。

「そう言えば・・・どうしてここにいる?」

「いや・・・ま・・・せつと・・・。」

「どうした?」

不思議そうに効こうとする老人の前に急に半蔵は片膝を付く。

「誠にすいません。」

「ん?」

「説得には失敗しまして。現在は監視中です。」

半蔵は申し訳なさそうに頭を下げる。

「だろうな。予想通りという事か。だろうと思って来たんだ。」

「すいませんでした。」

「でだ。」

「は。」

「半蔵・・・あの男・・・どう見る。」

その時の老人の顔は温厚そうな顔から一転思慮深い瞳に切り替わる。その頃には脇の二人の立て膝を付き、神妙そうに頭を下げる。

「流石に将の器と・・・。」

「だろうな。」

「ただ、家族が肝要と言ってくるあたり・・・。」

「それは違つぞ半蔵」

「は?」

「家族とかを守る思いがない者は結局部下でも何でも切り捨てる愚か者になる。それに比べれば。」

「は。」

「で、真田の小倅は？」

「いや・・・あ・・・何をなさるつもりで・・・。」

「当然だろうが。ここまで来たらやる事は一つだ。」

「結局漁師が一番だな。」

そう言っただけで歩かなくなった。手には魚が幾つか握られていた。

「そう言うなよ。」

信繁はとぼとぼと歩いていた。少女はその後をにこにこしながら歩いていた。

「そうだぞ。酒の肴とはこうもありがたい物だ。」

そう言う青海の服はびしょぬれだった。

「結局酒かよ。」

しまは呆れながら、手元の魚を見つめる。

「ま、俺が傭兵でうろつろつしてた頃がある。」

青海はと遠目に見える夕日を見ながらつぶやく。

「食事に事欠き、一握りの米を仲間と奪い合った事もある。」

「・・・。」

「変な話なものさ。そう言うときに限ってそう言う小魚とかを捕ってくるとかの事には知恵が回らなくてな。」

夕方の涼しさと合間って、寂しさが漂う・・・感じがした。

「それで死んでいった連中をいくらでも知ってる。飯にありつけるのはこの時代当たり前かもしれないが、それで死んでいった奴らがいた事は忘れちゃあいけねえ。」

「そっか・・・。すまない・・・。」

しまは神妙そうにうつむいた。

「ま、ただ普通に酒飲むよりかは、つまみがあっ方が旨いと言うだけだかな。」

と青海はがはがはと笑っていた。そう言えば・・・信繁自身あまり青海の過去を聞かされた事はない。

「おま・・・っ、結局ただの酒飲みじゃねえか。」

しまは顔を真っ赤にして青海に詰め寄る、それを見た青海も駆け足で逃げようとする。

「あっはっはっは。肴に追い回されるのもまた、たまらん。」

そう言っつて宿に向かって青海は走っていった。ちようど宿ではまた呼び込みを・・・。

「こちらは部屋が空いていますかな。」

「一部屋だけど・・・空いてるには空いてるよ。」

「で、食事は・・・。」

ちようど自分たちの宿の前で交渉をしている一人の老人とあきれ顔で見つめる二人の付き人の姿を見かける。格好だけを見ると商人にも見える・・・。あまりみすばらしくなく、それでいて、武士みtainな堅さもない。だが、その商人を見た瞬間信繁には悪い予感を感じた。

「足湯とか・・・。」

「おう。女将。」

青海は店前で交渉している一団を無視するように女将に声を掛ける。

「今日はこいつを頼めるか？」

「これ、これ！」

その声にしまは前に出て魚を突き出す。その瞬間・・・商人の付き人達の異常な殺気を信繁は見逃さなかった。それを小さな身振りだけで商人らしき老人が制した。

「それを見せてもらえるかな？」

老人はしまの前にしゃがみ込む。その時の老人の瞳に何故かしまは固まってしまった。ただ・・・青海はその様子に気が付いていなかった。

「あ・・・ああ。」

そう言っつてしまは魚をすつと目の前に突き出した。

「これは・・・。」

「今日俺たちが採ったんだ。」

「そうか・・・おいしそうだね。」

そう言って老人がほえむと、それで一気に老人ではなく、周りの人間の緊張がはれていく。

「これを・・・。」

「ん・・・。」

そう言つとしまはその魚の半分を突き出す。

「ん？」

「やるよ。疲れてきたんだろ。今日ぐらい旨い魚でも・・・食べよ。」

「そうか・・・ありがとな。少年。」

そう言つと付きだした魚を受け取ると女将に渡す。

「これ・・・おいしくしていただけませんか？」

「あ・・・はい。じゃあお泊まりで。足湯はすぐに持たせますので。」

そう言つて女将は嬉しそうに奥に向かった。

「さて。俺は上で、涼んでる。じゃあな。」

そう言つて青海は、商人に一例を見ると、そのまま店内に行った。その間近づいた信繁はじつとその商人を見て固まっていた。この人と・・・昔会つた事がある・・・ような気がする。

「すみません。」

信繁は優しく声を掛ける。その瞬間一瞬だけ、獲物を見るような刺す瞳になつた事を信繁は感じていた。普通の顔を見る限りでは温厚そうな顔なんだが・・・。信繁の直感が告げる。直感が合っているならここにいるはずのない人物だ。

「どうかなさいましたかな。」

「もしや・・・。」

「そうだ。こちらの宿にお泊まりになるのでは？」

「あ・・・ああ。はい。」

商人の老人は大きく頭を下げる。

「私。長野で絹糸を扱う商人の徳左右衛門と申す。」

「ああ……。」

その言葉に面食らうように頭を下げる。

「拙者……真田……と申す。」

そう言つて礼儀正しく頭を下げる。

「それは……それは……。」

目を細めてじつとこちらを値踏みするように商人は見つめてくる。

「で、どうしてこちらに？」

信繁は顔を上げると、じつと付き人を牽制するようにつめる。

付き人は何かを警戒するように顔を強張らせた。

「私ですか。商人ですから……。大商いの香りを感じては放浪す

る日々です。」

「そうですか。私は連れが先に中に入ったので、こちらで失礼いたす。」

そう言つと信繁は一礼すると、そくささと奥に逃げ込んでいった。

「流石……。」

老人は小さくつぶやいた。

”あの男……いや……老人は大方……。あの人に間違いない……。”

信繁は湯船に深くつかりじつと考えていた。この地域には川がちかく、宿に温泉は完備されていた。それを見越してこの宿に決めていた。その分周りの宿に比べればかなり高い。

”だとして……何故……。あ……。ま……。そうか……。だから半蔵が慌てて……。”

信繁はぼおつとしながら風呂の縁を見つめる。ちようど岩場で、離れで、落ち着いて考えるにはちようどよい……。温泉だ。

「失礼してよろしいかな。」

遠くから声が聞こえてくる。先ほどの老人だ。

「私は出ましようかな？」

そう言つて信繁は立ち上がるうとする。その時老人のからだが見える。商人にしては所々に切り傷がある身体だ。

「いや、折角ですから。」

老人はそう言つと、小走りで近づくと桶を抱え、湯船にはいる。

「ま、ここでは無礼講と言つ事で・・・お願いします。」

湯船に入った老人うつすらと笑みを浮かべ、ほほえましくこちらを見つめる。その顔に信繁はある確信が持てた。

「ですな。内府殿。」

「・・・。」

「・・・。」

「いつから・・・と言つわけでもないか。」

声が先ほどに比べて濃く、どす黒くなる声が風呂場一面に低く響く。

「ま・・・昔、一度お会いいたしましたぞ。」

「確かに。」

「で、何用かと。」

信繁にはだいたいの予想が付いていた。大方半蔵の穴を埋めに来た・・・気がする。

「物見遊山だ。」

「え。」

そう言つと桶から瓶と猪口を出すと、すつと信繁に差し出す。

「お主とこういういい男を見に来たんだよ。」

「あ・・・ああ。」

「でも本当に・・・いい男に育つたな。」

「それはありがとうございます。」

そう軽くお辞儀すると手を差し出す。そこに猪口を置くと老人が酒をついだ。

「大丈夫だ。さっきそこで入れてもらった奴だ。」

「あ・・・。」

そう言つと老人は自分についだ酒をクイって煽る。

「でだ・・・お主、江戸を見てどう思った？」

「いい町ですね。水路があつて、みんなが幸せだ。」

「ほう。」

「ただ・・・光が濃ければ闇も深い。」

「そうか。」

その言葉に何かを感じ、老人は考え込んでいた。

「だとして・・・それはもう俺の仕事ではないな。」

「どうしてまた？」

「単純だ。俺はもう年を取りすぎた。老体に鞭打ち、戦場を駆けても、昔ほどの動きは出来ない。やはり私は・・・。」

「だとして、あなたは様々な事を成し遂げた。これぐらい。」

「かもしれないが、お主のような男にはかなわないよ。」

そう言つて老人は信繁の身体を見つめる。信繁の肉体は他の者のようにそれほど筋肉があるように見えないが、ちゃんと付いているところには付いている、そう言つて身体だ。

「それでもあなたほどの男なら・・・。」

「分かつていても年を取るのをやめる事は出来ん。それに・・・年を取るのをやめた奴らの悲惨さも知つておる。人間は人間だよ。」

「ですな。」

そう言つと、お猪口に入った酒を少し口に入れる。

「お主、半蔵の報告は受けたよな。」

「はい。」

「それでどうして・・・どうして・・・何も感じなかつたのか？」

「感じないわけはありませんが・・・。話が大きすぎて見当が付きませぬ。それに家族が大阪にいます。」

そう言つと信繁はわざと風呂の縁に腰掛け、半身をさらした。

「それは知つている・・・。彼らを江戸に呼べば来てもらえるか？」

「それは・・・。」

「この通りだ。この日の本の為・・・俺の為、徳川の為とは言わん。」

日本の為にお前の力を貸して欲しい。」

そう言つて信繁に大きく老人は頭を下げた。

「頭をお上げください。」

「今の俺にはいくら人材があつても足らん。頼む。」

「……。」

「頼む。」

「私は、あれから旅路の中で考え申した。」

「……。」

「半蔵殿に聞かされた事、この世を覆う大きな闇の事。確かにその前では些細な忠義は霞み、大儀の為には全てを捨てねばならないかもしれない。ただ……ただ……。」

その言葉に老人は唾を飲んだ。

「私が旗揚げしたときに付いてきてくれた皆がいます。そのみんなに恩返しをしたい。そして……。」

その言葉に温泉内は静かな重みに包まれている……そんな感じがした。

「あなたが許しても、きっと息子さんは私を許さないでしょう。」

「それは俺がどうにかしてみせる。」

「二君に仕えたとあらばいつかは誰かのそしりを受けましょう。それに、そう言う裏切つた男を貴方が必要するとはどうてい思えない。」

「

「……。」

「と云つよりも……。一度確かめとつてございます。」

「何を？」

「内部から、どこまでが真実なのか。」

「内部からか？連中は手強いぞ。」

そう言つと手に持った瓶を老人はつきだした。信繁はそれに呼応し猪口を差し出す。まるで長年つきあつた仲のようにも見えた。

「だからこそ見える真実があります。」

そう言つて老人を見つめる信繁の顔は真摯に前を見つめていた。

「ふ。負けた。」

その瞬間、老人は大きく笑い出した。

「行ってこい！ワシはいつでもお前を待っている。危なくなったらいつでも庇ってやる！だから行ってこい！そして思いっきり見てこい。」

「はい。」

「やはり。今日は無礼講だ。後でそちらに向かう。今日は一杯やろう。」

”徳左右衛門さまー。そろそろ出ないとゆだりますぞー！”

遠くからの声が聞こえる。きつとお付きの人だろう。

「わ、わかったー、今行く。」

そう言っただけで立ち上がる老人の目もまた、輝いているように……きつと湯があつて湿っぽいせいだろう。老人は立ち上がると、急いで上に歩いていった。

”あれが、徳川家康……か……。”

信繁はつぶやくと、温泉から上がり、じっと待っていた。流石に自分もまた、茹で上がりそうだったからだ。

その夜は、徳左右衛門らがやってきて一緒に食事を取った。突然の事にまわりの連中は喜んでいたが、実際を知る天海や半蔵達は冷や冷やしていた。その日は酒も多分に出され本当に酒宴となつていき、皆は徳左右衛門も含め皆、旨い酒を飲めた。その夜はほぼ皆が寝静まり、信繁はゆっくりと窓から煌々と照る月を見つめ、酒を口に運ぶ。春の夜長は秋ほどではないが、若草が香り、なんとも言えない色合いになる。

「こつ月夜も見飽きたら、ただの夜となる……。」

川の音が細かくサラサラと時折響く。夕方はあれほどせわしないこの宿場も、昔をたどれば戦道。整備されて十数年のこの時ですら、感慨に深い。幾多もの人間がここを駆け抜けていき、また、これから駆け抜けるのだ。俺は……そう言う仕事を……出来るのだろ

うか。

「いや、考えるまでも・・・無いか・・・。」

「そうそう飽きるほど月を見たのか？」

「そう言い、徳左右・・・家康が近づいてくる。」

「そうじゃあないけどな。見る暇が最近はちょこちょこあって。」

「だよな。」

「平和ってなんだと思います。ご老人。」

「ん・・・。」

「平和か・・・。ま、こうやって月を見上げる時間が生まれるという事かな。」

その言葉に二人は宿の窓から見る事の出来る月を見上げた。その月は白・・・に少しなんとも言えない黄色と・・・何か混ざったような色合いだった。

「そんな余裕があれば人はきつと・・・そこまで人々を満たせばきつと盲信に頼らなくても生きていける。」

「昔、わ・・・ある殿様がな。父が死に、就任した直後、葬式をあげようとする寺の坊さん呼んだ。その時の欲深い顔を見て・・・父の死を侮辱されているように感じられた。それに腹を立て、少しの金で追っ払ってしまった。皆は反対したが、それだけを許す事は出来なかった。もしたら、ある内乱が起きた。それは寺が寄進料に腹を立てたのが始まりだった。」

「それで・・・。」

「そしたら、今まで家族のように扱ってくれた家臣達の一部が裏切った。寺を裏切る事が出来ないと・・・。説得に言ったときのあいつの顔を今でも・・・もう時代が違うはずなんだがそれでも忘れる事が出来ない。あの何とも言えない複雑な顔を・・・そしてあいつを捕らえ、寺の住職に降伏を求めたときのあの情けない顔を見た時に思った。俺の家臣はこんな・・・こんな情けない奴の為に・・・こんな寺の本分を忘れた馬鹿の為に殺されたのかと・・・。」

その声は今でもどこか、震えていた。

「部下に示しをつける為にお・・・殿様はそいつを斬った。そして寺を焼き討ちにした。私は思うのだよ。盲信が原因で・・・人々が操られる世界なんて・・・どこかがおかしい。」

その言葉の端々で言葉が震えているように聞こえる。信繁は老人を見つめる。そこにいたのはただ、何かを後悔する老人の矮小な姿にも見えた。・・・いや、だからこそ天下統一とかの考えが揺るぎようがない・・・ようにも見えた。

「宣教師の話聞いたとき、私は我が目を疑ったよ。何か人の生や死が侮辱されているようにも思えた。そんな・・・もっと腐った連中がどこかにいる。だからこそ、俺は・・・こうして・・・。」

「空はきれいですな。」

その言葉にハツとなつて信繁を老人は見つめた。

「昔・・・上田の地で勝った直後に見た月は・・・もっと赤々しく禍々しい・・・見たくもない月でした。」

その言葉に全員が押し黙ってしまふ。

「血しぶきが天に届いたようなそんな赤い月。叔父貴もそんな月を幾たびも見たのでしょうか。大阪での夜で気が付いたとき、月が赤かったのです。だが今の月は白く・・・黄色く・・・寂しくも柔らかい。」

その言葉に空を見るとその月は白く、煌々と輝いていた。

「だからこそ、この平和こそが必要なのです。」

信繁はじつと前を見つめた。その姿を見た老人の目にはないか、菩薩みたいな姿にさえ見えた。

「こういつ月が見飽きてしまえるような世の中が・・・。」
「だな。」

じつと月を見る信繁の姿はどこか、寂しそうだった。

「これからどうするんだ。」

次の朝、それぞれが旅支度を終え、宿の前に立っていた。

「ワシはこのまま江戸を目指す。」

徳左右衛門は明るい顔で、周りを見渡す。

「私は・・・そうですね・・・一度・・・故郷を目指したいと・・・」

信繁は少し考えてから言った。ちょうどこの道は中仙道。このまま街道を行けば、上田の地にも到着はする。

「なら拙僧はこの辺でお別れですな。」

そう言つて、天海は徳左右衛門の方に歩いていった。

「そうか。」

「今後、きつい道のりですが・・・精進だけは忘れぬよう。後・・・

これを・・・。」

そう言つて天海は書状を信繁に手渡した。

「これは？」

「先日頼まれていた物です。そこに書いておきました。後、しま達には字の勉強をさせるよう、手引き書を算殿にお渡ししておきました。何かの役に立ちましょう。後一つ・・・。」

「ん？」

「この子を・・・せめて堺までお連れ出来ないでしょうか。」

そう言つて少女を前に押し出した。

「いいのか？」

「ハイ。この子は元より独り身みたいな物。この世に頼る物は少のうございます。この事を考えると、一緒にいればきつと何かの役に立ちましょう。」

少女を見つめると、少女はにっこりとしていた。きつとついて行く覚悟もあるのだろうか。

「分かった。預かろう。ただ堺に着いたらどうする。」

「堺に着いたら、廻船問屋に頼み、こちらに手紙を届けてください。その時に判断いたす。」

「分かった。」

「お坊さんが一緒であれば何かとおもしろい。」

わざとらしく徳左右衛門が笑う。むろん何者かは彼自身が一番知

っている。

「では。」

そう言うと、徳左右衛門は深く信繁に礼をして、背中を向けた。その姿に付き人も軽く一礼すると、徳左右衛門と天海は街道を歩いていった。

「じゃあ俺たちは。」

「ああ。このまま上田に行くぞ。」

そう言いきびすを返し、徳左右衛門達と反対方向に歩き始める。

「俺の故郷。上田城の兄貴の所に向かう。行くぞ。」

”おおー。”

全員がときの声を上げ、ついに決まった目的地の元、全員が歩き始めたのだった。

「家康様。」

徳左右衛門が街道の先に進みお互いが確認出来なくなってきた頃、半蔵は息を切らせ走ってきた。

「どうした。」

今までの温厚そうな老人の顔から一転する。

「本田殿から一報が。内堀工事どうにか押し切る事が出来たと。」

「そうか。淀君は？」

「淀君は最初は渋っていたそうですが、最後は不敵な笑みを浮かべていたとか・・・大方あれを使う気では。」

「あれ封じの手配は？」

「手配済みです。前回みたいな真似は絶対させません。」

「分かっている。後、陰陽衆には出来る限り金を撒いてでも。」

「手配はしていますが、今のところは・・・。」

半蔵は不安そうに顔を曇らせる。

「分かっている。出来る限りの不安要素を排除する。全力で・・・

・今度こそ決着をつける。」

「で、真田はどうしましょう。」

「あの男、殺すには惜しい・・・だがあの様子では自害し兼ねん。流石真田、筋だけは通す武士よの。昨日で話を受けるようなら、飼い殺しするところだった。」

その顔は穏やかというよりは・・・悪人にも見えた。

「監視だけをするように。あの様子では本当に淀君を破らぬ限り説得は出来そうにない。後は半蔵に任せた。定期連絡だけは・・・。」

「分かりました。では」

そう軽く一礼すると、信繁が行った道の方に駆けだしていった。

「今度こそ。終わりにする・・・。今度こそ・・・平和にしてみせる。」

そうつぶやいた老人の執念に似たうなり声は天海の耳にまで届く物だった。

第六節 徳川家康という男（後書き）

プロフィールとタイトルが一分違う事をここで謝罪いたします。

第七節 鬼か妖か（前書き）

徳川家康と別れを告げた一行は人目に付かぬように街道を避け進む。
そこである一軒家にたどり着く・・・。

第七節 鬼か妖か

第七節 鬼か妖か

旅は天海がいなくなっても遅い・・・と言うよりははゆつくりと進んでいた。旅の資金はそれほどでもないが、ちょうど彼らがこれから通行する信濃の周辺は、武田の遺臣が多くまた、信繁いわく”意地汚い”連中のすみかと言う事もあり、人の目を避けるように街道沿いの獣道を旅していた。

「こう・・・山奥の空気は都に比べ、いいですな。」

算のはつらつとした声とは裏腹にいつもは威勢のいい青海はくたびれた顔をしていた。

「俺はなあ、こう見えても都の出だ、やっぱり付いて来るんじゃないかな。」

青海はそう言うのと近くの切り株に腰を掛ける。

「もう動けねーぞ。」

青海の切れ切れの息での叫び声が響く。

「でしような。」

半蔵はあきれ顔で近くの木に寄りかかる。

「拙者もこう・・・少し休みましようぞ。」

「だな。」

そう言うのと、信繁は少女を見つめる。少女は黙って付いてきてくれてはいるが、その顔に疲労の色が伺える。

「みんな情けねーな。」

しまは元気そのものだった。

「それは・・・生まれも育ちも違う皆がいればそうなる。」

半蔵は冷静に懐から水筒を取り出す。

「でもさ。だったら街道行けばイーじゃん。」

しまはふてくされてその場に腰を下ろす。

「流石にこつから先は一度関所を通らなくてはな……。」

「大丈夫なのか。」

一応街道を通っている物のこの先の碓氷峠を越えるには碓氷関を越えねばならない。いくら、内府直々の書面があるうと早々簡単に越えられる物ではない。またそれ以外のルートを通るのも、幼子を連れては無理な事が多い。

「まあな。あそこを越えればしばらくは大丈夫だが。」

警戒しているのは書面等の手形ではなく、名前の事である。もし名前等で怪しまれば、手形があるうと一発でダメになる。

「そこでだ。算。」

「は。」

「天海殿の書面を出してくれ。」

「は。」

二つ返事で頷くと、算は背負子を下ろし、中から天海の手紙を取り出す。

「前々から気になってはいたが……これは？」

半蔵は不思議そうに手紙を見つめる。

「いやあな。天海殿に頼んで、偽名を考えてもらっておいた。」

「ほう。」

青海は珍しそうな顔を品柄懐から水筒を取り出すと、口の中に注ぎ込む。

「偽名？」

「まあな。俺や半蔵とかは目立ちやすい。だからせめてその分を補うべく、折角僧正様がいるのだ。と言うわけな……。」

喋りながら……書面を覗いていた。

「……と言うわけで俺の名前が……真田幸村？」

「ほう。」

”真田様はそれなりに由緒正しき父上の幸の名を持ちかつ、田舎らしさを出してみました。これなら、信之殿の遠縁とか言えば通じましょうぞ。”

「でだ。半蔵殿・・・お主にもあるぞ。」
「拙者か？」

半蔵は干し芋をかみながら書面をのぞき込む。

”半蔵殿は呼び方が近く、印象に残る名前をと言っわけで”

「霧隠才蔵”ねえ。確かに似ておるが。」

”青海、寛殿はこのままでもそれほど問題がないと思われる。”

「なんだか・・・まあ・・・確かにそうなんだが。」

「なんか・・・こう切ないですな。」

青海が手紙に悪態を付く。

「じゃあ、これで終わりですか・・・。」

半蔵は足筋を伸ばしながら立ち上がるうとする。

「いや。」

”しま殿はどこか遠縁のご子息として見られそうなので・・・あえて名前ごと変えてみました。”

「え・・・俺の分あるんだ。」

そう言うつと信繁の肩越しに書面を見る。

「これか？・・・よくわかんねえ。」

「これか？猿・・・飛・・・佐助。だな。」

”しま殿は色々動きたがるので・・・どう見ても猿に見え申したので、この名前でもよいかと。まあ幼名ですし、後で変えて頂けてもいかと。”

その分を読むと男達は一斉に腹を抱えて笑い出・・・いや笑いを押し殺していた。

「ういつひひひひ。そりゃあいい。」

「ま・・・確かに・・・私たちですら・・・くくくく。」

「ま・・・だよな・・・つつつつ。」

「お前ら！何笑ってんだよ。」

しま・・・佐助は不満そうに怒りを表す。

「だってこれ・・・男の・・・。」

「それはこれが男の・・・。」

「これはなあ。男の奴だ。」

笑いを一巡通り越して元に戻った信繁にまじめな顔で言われたしまは、かたかたと震えだした。

「・・・な・・・なあ・・・。」

「でも・・・よく考えればこれでいいかもしれない。」
「どうしてだ。」

笑いをぎりぎりで抑え、干し芋を吹き出すのをかるうじて押さえ込んだ半蔵が不思議そうに信繁の顔を覗く。

「変に女が多ければ、それだけで勘ぐるやもしれん。それに比べれば男の格好をしていれば変に勘ぐられる必要はない。」

「確かにな。」

「あ・・・おう。」

半蔵のうなずきを見てしまも言葉を飲み込んだ。

「それに、折角僧正様とか言うお寺のお偉いさんだ。罰は当たるまい。」

「お・・・おう。」

「と言うわけで、お前の名前は猿飛・・・佐助だなよろしく。佐助。」

「分かったよ。佐助だ。よろしく。」

渋々ながら佐助は頷いた。

「後はいるのか？」

青海は期待して周囲を見渡すが、もう・・・該当者はいないはずだ。

「いや・・・ちよつと待て・・・。」

”ミリアは元々按針殿と一緒に船にいた婚約者殿の娘。按針殿がある程度は異国の言葉の幾つかを教えるそうです。拙僧の所にいたのは日本語と、彼曰く進んでいると言われている学問を教える為でした。なので、もし宣教師と会う事があるなら彼女はきつと役に立つでしょう。”

「・・・天海殿。」

”ただ、彼女はあの寺で一人疎外感を味わう日々でした。だから世が広い事を知ればきつといい子に育つと思います。だから、今しばらくはお連れくださいませ。”

「そんな意味が・・・。」

「どうかありませんでした？」

「い、いや。」

信繁は慌てて首を横に振る。

”この子の名前は美井ならきつと偽名でも通じるでしょう。よろしくお頼み申す。”

手紙を読み終わった信繁はじつと少女を見つめる。

「美井。」

「はい。」

少女は反応してコクコクと頸を縦に振る。今までは、あまり反応がない少女の感じも少し明るく見えた。

「これからもよろしくな。」

「はい。」

「それは？」

「この子の名前だ。」

「そうか。」

「よろしくな。美井。」

そう言うと言は美井の頭をなでると、にこりとほほえんだ。

”按針曰く、この少女ある国の・・・どこだか忘れましたがの国の忘れ形見だそう。名前だけは知られていけないと言っておりました。ご注意くださいませ。”

いつもの往来・・・いつもの木の梢、田舎の山奥の碓氷関は関所である。だが関所と言っただけ合っ怪しそうな人間は通す気はない。ここの勤務でも仕事があれば楽ではあるがここは閑職と言われても仕方のない僻地である。今日も旅路を急ぐ旅人の手形を確認する日々である。

「お前ら、名前は？」

「拙者、真田幸村と申す。」

「ん？真田？」

顔を覗いてみるが、よく分からない。

「どうしてここへ来た？」

「あ……いや……。」

「あの……ですね……この方……。」

そう言っつて小さい男がしゃしゃり出てくる。どうも、この集団で旅行しているんだらうか……。

「かの有名な真田信之様の遠縁に当たる方でして。」

野武士……幸村は不満そうにじつと役人を見つめる。その顔はきつとどこか不満があるのだな。

” おおかた職業など色々聞かれるので、こう答えれば、すんなりと通れると思ひ申す。半蔵殿にも徹底していただけるようお伝えください。 ”

「流石に江戸に行ってもなかなか飯が食べぬので、一度聞いた縁を頼ろうとこうして、一家で参っている次第でございます。」

「手形を見せてみる。」

役人の俺たちにはいつもの作業である。

「ほう、これは……。」

確かによく発行されている手形だが……珍しい、内府様の物だ。どうして……内府様の名前がある？」

「それは……。実は……妻が……大奥にいまして……。」
「ほう？」

多くはこの当時新設された世継ぎを生む為の特別組織である。

「そのついで頂いたので。」

「じゃあ、その妻はどこだ。」

「今は大奥でございます。」

「確か大奥つてのは？」

となりの与五平ならよく知っているはずだ。

「ああ。確か、女だけなんだと。だからそこで飯炊きぐらいはするだろうさ。」

「それですか。」

俺は納得したように手を叩く。

「じゃ、まあ通っていいぞ。」

そう言っつて真田一家達は通り過ぎていった。今日も平和な物だ。

こうして立っているだけでおまんまが食えるのだ。彼らもまた生きていくのに必死なのだ。

「でもさ、大奥つてさ。どのぐらい奥なんだよ」

「さあ？」

碓氷峠は今日も平和だった。

「ま、こんな物か？」

「焦ったな。」

青海は汗をぬぐう。

「あせった。」

しまも緊張したようだった。関所の横には番所があり、そこには常時二十人前後が待機している。

「これはまあ、普通の関所だ。むしろこれから先の方がきついぞ。」

「まあな。ここからが勝負だ。またしばらく街道は使えないしな。」

この周辺には街道筋に関所があるのには幾つかの理由がある。一

つは往來の確認。そしてもう一つはこの先に要因がある……。

「どうして……？」

少女は不思議そうに山を見つめる。

「ああ。この先は地獄だ。」

「ん？」

しまも不思議そうにこの先の峠道を見る。笥も額から脂汗がたれる。

「今までののは楽しい旅でも、こつからは死ぬほど難所の碓氷峠だ。」

「今まで出来るだけ食糧を使わなかったのは、ここの為だと言っつて

もいい。気だけは張ってくれよ。」

信繁はそう言って真剣な顔つきで峠を見つめた。

それからの道のりは日々がけや獣の警戒の日々だった。昼は周囲を警戒しながら進んでいた。夜は火を囲みながら佐助や美井達に字や武術、半蔵や信繁からは忍びの技についての話を教えていた。その間の山道は彼女達にとってはある意味修行そのものであった。

「まあ、こういう時も悪くはない。」

信繁はそう言いながら空を見つめた。最後の関所からもう1週間以上は経っていた。時折山の中腹を休みながら進む強行軍だった為、もう日の感覚が薄れつつあった。

「それでもある程度は急いでくれよ。俺も仕事がたまっているからな。」

半蔵は言いながらも空を睨んだ。

「でもこれは……。」

算も心配そうに空を見つめる。雲の流れが速く、また、肌に湿り気が吸い付いていた。

「ああ。確か、このあたりだと……。麓に村があるはずだ。」

「ん……？どうしたの……？みんな……？」

美井が周囲の慌てぶりに不思議そうな顔をしていた。

「雨がそろそろくる。」

しまが珍しくまじめな顔で空を見つめる。

「一刻か二刻（今で言う二時間から四時間）か……。それぐらいだな。」

信繁が空を見つめていた。

「雨具はあるのか？」

「雨具はあるが……このあたりは土がもろい。だから流される危険もある。念のためだ。降りた方がいい。」

そう言いつつ、下を見つめる。周囲の暗さはもう夜半と変わらぬほどである。曇りの雲の流れも速い。

「行くぞ。」

そう言つと信繁は一気に麓まで降り始める。

「は。」

その声に全員が下に向かつて走り始める。しばらくすると・・・日は沈み、夜も暗くなつてきた。当時の人々の多くは新月の暗闇にならなければある程度の物が認識出来る程度に夜に物を見る事が出来ていた。そのため夜走る事へは不安がない。

「でもこのあたりは・・・。」

「ああ。」

青海の不安そうな声とともに周囲への警戒を強めているようだ。

「何かあるのか。」

「昔聞いた事がありましたな。」

寛も不安そうな顔で急いで信繁の横を押さえるように固めにはいる。

「ん？」

「昔ですね。このあたりに、ちょうど武田の残党・・・まあ我々もそうですが・・・ガコの周辺一帯で悲惨な死に方をして・・・。」

寛の青ざめた顔を全員で見つめ、足を止めてしまふ。

「で、この辺一帯でその時の亡霊が出ていると言つんですよ。」

「ぼ、亡霊？」

佐助が驚いた顔で周囲を見渡すが、もう日が暮れた山。周囲に見える物はもうほとんど無い。

「おれ・・・。そんなの話でしか聞いた事ねえぞ。」

「まあ。昔この辺にいたときに話を聞きましたな。ちょうどすぎたあたりだったので見逃していましたが・・・。まあ・・・来るとは思わなかったのでつい忘れていました。」

寛の焦りが周囲に焦りを与える。

「そうか・・・。なおさら急ぐぞ。そんな変な物に邪魔はされたくないからな。」

信繁は焦りで額の汗をぬぐうと、周囲を見渡す、麓近くまで降り

てきている。

「少し待ってくださいよ。」

半蔵は近くの木を見繕うときにすると登り始める。

「あそこに光が。」

半蔵が声を上げると木を飛び降り、指さす。確かにあのあたりは少し明るい・・・ように見える。

「行くぞ。」

そう言つて全員はその明かりの下に全員が走つていった。そこには小屋と言つには大きい。家がそこにあつた。暗くて見えないが周囲には畑もあるみたいだ。

「頼もつ。頼もつ。」

信繁は全員を制し、前に立つて、戸を叩く。

「どなたでしょうか。」

そう言つて出てきたのはみすばらしい感じの・・・夫婦だつた。

「拙者達道に迷い申して・・・一泊お願い出来ないでしょうか。」

そう言い農民らしき男は外を覗く、雨は降り始めていた。雨はぽつりぽつりと降っていて、シトシトと音が鳴るような雨だつた。

「いいだよ。ま、ふとんはねえから、そこだけはんべんな。」

「ありがとうございます。」

そう言つと全員が中に入る。中はそれなりの広さで、全員が寝そべる・・・ほどはない。

全員が中に入ると窮屈にも見えた。中はそれなりの大きさの小屋だつた。そこに男が4人、少女が二人押しかけるわけだ。

「ま、よく来ただな。」

「はい。」

そう言つと中央にあるいろりの前に全員が座る。普段は、二人だけだろうが、こうしてみると・・・やっぱり全員がいるだけの場所がない。半蔵と算は壁に寄り添い、外側にいた。

「あんたら、どうしただ？」

「いやあ、道に迷つてしまつて。ちょうど見たら明かりを見かけて

ね。」

「そつか。大変だったな。」

男は、いろりに薪をくべる。

「はい。」

そう言うつと妻らしき女性の人は奥から大きめの鍋を一つ持つてくる。そして奥からあまりであろう物を続々と鍋の中にぶち込んでいく。その間も男はじつと信繁を見つめていた。

格好だけで言えば、信繁の格好は侍と言えば侍そのものであった。

「お前さん……。名前は？」

「俺か……。俺は、真田……幸村と申す。」

そう言うつと、信繁は大きく頭を下げる。それに合わせるように全員が頭を下げる。

「で、どうしてこんな所に、来ただ？……いや……ここを通る人はほとんどいねえ。推して知るべしか。」

「すいません。」

そう言うつて更に大きく信繁は頭を下げる。

「いいだよ。そろそろか？」

「すこし……。」

そう言うつて半蔵は鍋のにおいをかぐと懐から何かを取り出し鍋にほおり込む。

「これは？」

信繁も不思議そうに見つめる。

「拙者の身内らで昔開発した……特製兵糧丸だな。で見たら、調味料とかが無かったみたいなのでな。そこで入れてみた。折角泊めてもらったお礼でもある。その御仁も食べてみたら。」

兵糧丸とは、当時忍者達が開発した非常用食糧の一種で、その多くは味噌に何かを混ぜ、固めて丸くて、乾かして、持ち運びが出来るようにした滋養強壯食である。その内容は里ごとや国ごとに違い、味付けや効果も違う。この戦国後期ぐらいになると、兵士に持たせた兵糧丸から”味噌汁”が開発され、”味噌汁”が全国的に広まる

前後とも言える。兵糧丸の食し方には色々あり、”そのままかじる”、”串に刺して焼く”、”鍋の中にほおりこんで、溶かして食べる”、”肉にすりつけて、一緒に焼く”などがあり、ある意味戦国時代が生んだ生活習慣とも言えよう。

「変わっているだな。」

そう言つて箸を取り出すと、男は中の物を一つ取り出し、口にはおり込む。

「こ、これは……。」

「特にこれは……今日みたいな寒い日とかに飲むと非常に旨い。」

半蔵は水に指を突け、なめてみる。思った通りの味らしく、満足そうな顔だ。

「おっかあ。食べてみる。うめえぞこれ！」

男は興奮して手招きすると、妻はゆっくりとお玉と器を持ってくる。

「皆さん。今日はこれしかありませんが、どうぞ。」

そう言つて全員の目の前に器と箸を置いて回つた。しまは食べようと箸を構えるが、それを信繁が手で制した。その後、皆の前庭つて座ると、自分の器に汁を器に入れる。茶色の液体が香ばしい香りを部屋中に満たしていった。

「これは……おめ……これはうまいだ。」

「だろ。」

半蔵は満足した顔だった。

「では、頂かせていただきます。」

そう信繁は器にお玉で汁をよそつと、皆にお玉を回し、食事を始めた。その日は鍋に満足すると、皆がそれぞれの場所で寝始めた。そのままシトシトと雨が降る中、皆が眠り、そして朝になった。

「昨日はほんとに……あれは……。」

「おはようございます。」

男は朝目が覚めるとそこには起きて座っていた信繁の姿があった。農村の朝は早いがそれにも増して朝が早かった。

「おはよう。」

「あんた・・・お侍さんなのはええな。」

「そうですか。」

「やっぱりお侍さんか。」

「はい。」

素直に信繁は頷いた。朝になると雨は晴れたようで、刺す日差しは明るい。だが、その男はじっと考えていた。しばらく下を見つめると、思い立ったように顔を上げた。

「お侍様。ここであつたのが縁だ。お願いがありますだ。」

そう言つて男は改まつて正座をすると信繁をじつと見つめる。その顔に信繁は答えるようにじつとみつめた。

「どうしました？」

「実はこのあたり・・・妖怪だかが山に住み始めたらしく、皆は不安がつていますだ。近くの奉行様に頼むんだけど取り合つてもらえねえだ。」

「ほう？」

「でだ。その妖怪を退治か・・・して欲しいだ。」

「・・・。」

その言葉に信繁はじつと考え込んでしまふ。

「詳しく聞かせて欲しい。」

「やつてくれるだか？」

「それも含めてだ。」

厳しい顔で外から見える山、を見つめる。

「とりあえず、聞いて欲しいだ・・・。それはもう10年ほど前ぐらいたつたと・・・思うだ。昔はあつちの山の所まで、山菜とかを採りに行つただよ。だけど、時折山ん中から大きな音とかするだよ。んでな。」

「時折？」

「んだよ。昔ん時に行つたときに”オウオー。オウオー”って不気味な声がするだよ。」

「狩りとかは行くのか。」

「ああ。昨日の夜の鍋とかに肉混ざってただる。だから狩り似も行くけど昔聞いた妖怪だっけ、その声はもつと大きくて不気味だよんでな。その山ん中歩くとさ。大きな声がしてさ。村のもんはどうしても大きな声にこわがってさ、んでな。そこである時・・・そだな・・・二年ほど前に一度村の若いもんがその山ん中に行っただけんど一行に返ってくる気配がないんだ。それ以来その山の事をみんな怖がって誰もいかねえだ。」

「その山はどこだ。」

「ああ、向こうだ、家の裏手の方の山だ。近くに田んぼもあつて、そこから何か来るかもしれないねえと思うと、不安になるだ。」

「そうか・・・。」

そう言つて信繁は歩いて家を出ると、そこには険しく大きい山がそびえていた。今までの山よりも更一層に山が深いようにも見える。「分かった。」

当時の武士がいかに非道をして、その多くの人々が村を離れない理由の一つはここにある。いかに武士が非道でも、村の外に出れば何者に襲われるか分からないからだ。山賊や獣、妖怪や怨霊と呼ばれる物それらが村の周りにいると思えば、そんないつ殺されるか分からない所に行くよりかは村の方がどんなに非道い事をされてもましに思えてくるからだ。

これが改善されるのは、江戸時代よりもずっと後になる。また武士の多くはこつという怪異とかから村を守るのも仕事の一部とされていた。

「だとして・・・どういう手を・・・。」

「どしただ？」

そう言い、信繁は近くを歩いてみる。夜には気が付かなかったが家の隣には畑があり、田んぼらしき物もあつた。田んぼ沿いを歩くと小さいが小川もある。なかなかの環境のようだ。

「ん？どうした？」

声に後ろを振り返ると半蔵が立っていた。

「この旦那にその山に済んでる妖怪とやらを退治して欲しいというな……。」

「ん？それなら受けねば……。」

「受けるつもりだが、少し見ておきたい物もあつてな。」

「何が……。」

そう言つて半蔵は周囲を見渡すが、そう言うほど変わっている物はない。遠目には泊めてくれた家の主人がじつとこちらを見ている。「昔、上田にいた頃の話だ……。」

信繁は近くに腰を据えると、その山をじつと見ていた。半蔵は意を察したのかすぐ横に腰を据える。

「あの時は山賊がいるとか言われてな、言つてみたら村八分にされたよぼよぼの親子がいたただけだったと言う事があつてな。それ以来、そう言う話は話半分聞くようにしている。」

そう言つて半蔵も山を見つめる。そこには切り立った岩盤がいくつも見える険しい山だった。

「だとしても彼らの不安も変わるまい？」

「だよな……。後もう一つ不安なのがある。」

そう言つと、信繁は首を山裾に傾ける。そこには朝日に照らされた、集落が目映る。

「この村か……。」

この地は集落からは一刻（二時間）前後かかるであろうと思われ

る。「だから、よけいに勘ぐっているが……。」

「だとしても、どうする。ある程度は急がねばならないだろ。」

半蔵は呆れたように空を見つめる。

「親父とかは言っていた。困ったときに手を貸すのもまた、侍の努めだ。」

「分かつてはいる。だから”どうする？”って聞いたんだ。」

その言葉にごろつと信繁は仰向けに倒れ、空を見つめる。

「とりあえず、やってみようと思う。すぐに結果が出るとも思えないからな。そこら辺をどうするかだ。」

そう言つと晴れた顔で信繁は空を見つめていた。

「親父！」

「はい！」

そう言つと男は走って駆け寄ってくる。

「決めた。受けよう。でだ。幾つか条件がある。」

「はい。」

「一つはしばらくの間ここに泊めて欲しいという事。大方あの山だから山狩りに時間がかかる。その間だけでいいから頼む。」

寝転がりながら大声を出す信繁につい背筋を伸ばして答えてしまふ男であつた。

「はい。」

「もう一つは・・・その間、子供達の世話を頼む。」

「は・・・はい！」

その声に嬉しそうにコクコクと頷く顔に半蔵は一抹の不安さえ感じていた。

「と言つわけで、俺たちはしばらくここにとどまる。」

「はあ？」

開口一番に不思議そうな顔を青海はした。朝もしばらくした後、全員が外の畑に集まっていた。まだ四月中旬なので、まだ畑は耕されてはいないが、いい畑に・・・みえる。

「んあ。妖怪なんて俺たちには関係ないだろうが。」

「だとしても、一宿一飯の恩義。返すのが筋であろう？」

「確かにな。」

青海は洪々と頷ぐが、その表情は納得していないようにも見えた。

「でだ、幾つか考えてみたんだが・・・。」

「一宿一飯の恩義というわけじゃないが、青海にはちとあの山道はきつい。」

そう言つて裏山を指さす。

「で、青海には旦那さんと一緒にこの畑を耕してやつて欲しい。」

「ん……まあ……暇だからいいがそれでいいのか？」

「まあな。で、箕も一緒をお願いしたい。」

「それはどうして？」

「なんかな……見張りもかねてだ。後、そこに小川があるだろ。」

木を幾つか見繕つて細工物とあがればきつといい物が出る。頼んだ。

「分かり申した。」

何となく意味が分かったのか、箕は頷くと、立ち上がると、近くの山の中にすつと入つていった。

「美井。」

「……はい。」

「青海と一緒に留守番だ。農作業とかも覚えておいて損はない。」

「……はい。」

そう言つと少女はとぼとぼと歩いて行った。

「で、拙者は……当然山狩りだろ。」

半蔵はそう言つて腕をまわす。

「いや……別を頼みたい。裏取りを頼む。念のためもある。」

「……了解。」

そう言つと半蔵は立ち上がり、すたすたと麓に降りていった。

「で？俺は？」

佐助は不安そうに周囲を見渡す。

「俺と付いてこい。山狩りに行くぞ。」

「お、おう！」

そう言つとしまは立ち上がり、信繁の後をついて行った。信繁は家にいた男と幾つか話すと、妻が青海に駆け寄つていく。大方聞き入れてもらったようだ。それが終わると、信繁はしまに近づいてきた。

「とりあえずは話をつけてきた。山狩りなんだが、一緒に山をある

いて見るぞ。」

そう言って信繁は山の麓に向かって歩いていった。

それからしばらく、信繁一行の山狩り生活が始まった。青海は畑を耕したり、巻きを割ったりする仕事だった。算は木を数本切り出してきて、何かを作っているようだった。元々大阪の家中でも家具の幾つか簡単な物は算が作ったりしていた経験もあり、何かを作っていた。

美井は算達の後に付いてじっと作業を見つめていた。信繁達は裾野から少しずつ山頂に向かって歩きつつ調べていった。そして夕方になると半蔵がどこからともなく帰ってくる生活だった。その後半蔵は妻に捕まり、なにやら料理について教えているようにも見えた。「結構かかりますな。」

算の呆れた声と共に算の組み立てた簡素な小屋を見ながら周囲をうかがっていた。

「これは？」

「川が近いので、風呂などはいかがかと。後は土が乾けばできあがりです。後は、暇つぶしで小物などはどうかと思いました。」

「そうか。」

「で・・・そちらはいかがでしょうか？」

「こっちは予想以上に険しくてな。山頂まではなかなか行けん。信繁は呆れたように裏山を見つめる。」

「でしような。わたしでも上りたいとは思えない山ですからな。」
と算はため息をつく。

「で、そっちはどうだ？」

「まあな。幾つか話は聞けたが・・・肯定する物しかない。後はこっで・・・。」

半蔵はもったいつけたように信繁に顔を近づける。

「ん？」

「ここのお百姓さんは・・・。」

「どうした？」

信繁もつられて顔を近づける。

「炭団子とかの加工品をしている。だから家が離れていた。大丈夫だ。聞く限り怪しい物はない。」

当時の炭団子、炭というのは早く火がつくとして重宝された燃料である。だが製作に大量の黒い煙が上がる為、村からは距離が離れている事が普通でもある。だがこれの有無は越冬に関わる為、珍重されていた。

「わ、分かった。」

呆れたように信繁は顔を離す。

「ただ妖怪がいる話によく聞いた。それとも一つ……。お主にはつらいかもしれないがこの周辺の谷で昔、武士が落ちたという話があつてな。それももしかしたらと言つところだ。だから村の者は近づかないらしい。だからと言つわけでもないが、このままいなかつたとか言つて帰るべきではないのか？ただの気のせいという可能性もある。」

「お化けが怖いのか？」

「そうではない。」

半蔵は無然とした顔で信繁から顔を背ける。

「なら、明日から手伝つてくれ。大方、数日で決着が付く。」

「了解した。」

「そう言えば算の方に変化はあつたか？」

「こちらにも無いですね。」

算は平然とした顔で組んだ木の様子を確認していた。

「一応聞いておく。お主は……。どうなのだ？」

半蔵は怪しそうに信繁を見る。ここ数日の成績はないに等しいからだ。

「まあな。幾つか確証が持てる。幾つかの歩行痕と、何者かがいるらしい。妖怪……。かもしれないが、何者かがある……。しかも複数かもしれない。まあ……。村で他の者で山狩りをさせたりしている

かもしれんが、それにしても様子がおかしい。」

「ふむ。それならある程度退魔の装備はしておいた方がいいか。」

そう言う半蔵は頭をかき始める。この頃の忍者の多くは最新技術である陰陽にある程度の知識を持っている事が多い。退魔法、天候観測、医療や呪符などである。

「あるなら頼む。」

「わかった。」

そう頷くと、ぶつぶつぶやきながら半蔵は家に入っていった。

「大丈夫ですか？」

算は心配そうに半蔵の背中を見つめる。

「大丈夫。あいつはそう言うところははっきりしている。信頼出来る奴だよ。」

そう言うときちょうど日が暮れて赤くなる山の頂を見つめていた。

次の日の朝、信繁達は近くの小川から山頂を目指し歩き始めた。

「ここは？」

「昨日調べた怪しいところだ。」

そう言い、信繁は近くの木を指さす。そこには枝が不自然に折られた跡があった。

「確かに・・・これは・・・。」

「誰かがいるという事だ。」

そう言うとき、じつと上を見る。そこには所々折れた枝があった。

「だがこれが声の主とは限るまい？」

「まあな。」

そう言うとき信繁はゆっくりとした足取りで音を立てぬようにゆっくりと山を登る。それに合わせて全員がゆっくりと音を立てぬように上っていく。それから一刻も立つだろう、そろそろ中腹と言うところまでやってくる。佐助が急に左右を見渡すと、口に指を当てる。その行動に全員が硬直をする。しーんとなった事を確認すると佐助が近くの岩盤に生えた草むらに腕をつっこむ。

「やっぱり。」

「ん？」

「この先・・・奥がある。」

そう言つて草を押し分けた先に空洞があつた。それを見た瞬間、全員が息をのんだ。

「いくぞ。」

そう言つて信繁は先頭に立ち、洞窟の中に入っていった。中は暗く・・・当時夜目が利くとはいえ洞窟の暗闇を見通すほどではない為、それほど先が見えるわけではない。

「またれい。」

半蔵は懐から小さな鉄の板を取り出すと近くの草を引きちぎり、鉄の板の上へのせ、火をつける。すると、周囲が明るくなった。

「おめ、これ何だよ？」

「ああ。これは簡単な明かり取りだ。こうやると、丁度いい高さになるんでな。」

そう言つて明かりで洞窟内を照らす。どうもここは自然が作り出した洞窟らしいが。

「ここかもしれない。」

信繁が軽く警戒しながら周囲を見渡す。

「ん？どうして」

「この洞窟・・・他の動物の気配がしない。普通このあたりなら、コウモリとかの生臭い臭いがするが、それが少し乾いている。」

「そうなのか？」

佐助は不思議そうに周囲を見渡す。彼女自身洞窟には縁遠いため、よく訳が分からない。

「だと思つ。警戒は解くなよ。」

「おう。」

そう言つと佐助は腰の刃物を抜いた。半蔵は佐助の前に出ると、いつもよりはゆっくりと歩き始める。

「でも、どうしてこんな所に洞窟が・・・。」

「さあな。只。ひんやりしている。」

信繁もゆつくりと歩いてはいるが、様子を窺う色合いが強い。

「が、人・・・かどうか分からんが、何かはいる。」

半蔵は明かりの先を指さし告げる。その先には木の板らしき物が壁みたく道をふさぐように建てられていた。中からか細い・・・。明かりみたいな物がこぼれている。信繁はそれに気が付くと、乱暴に木の板を叩く。

「どなたかおりませんか！拙者、真田幸村と申す。」

「え、へあ、へ」

奥から女性らしき声が聞こえるのを確認すると、信繁は木の板野周辺を探りはじめる。

「おい、大丈夫なのかよ。」

しまは不安そうに半蔵にすり寄る。

「これで合っている。第一、木の壁があるなら、木と木の隙間で誰かがいるのは分かっているはずだ。警戒しているなら、おびき出せるし、敵意がなければ、それなりの反応があるはずだ。」

そう言っって緊張した面持ちで信繁を見つめる。

「だ・・・誰だ？」

板の間の奥から声が聞こえる。

「俺は真田幸村だ。幾つか聞きたい事がある。」

奥の声の主はしばらく沈黙すると板の壁の一部が開き始める。

「入れ。見つかりたくない。」

そう言つと三人は言われるままに中に入ると適当なところに腰を下ろす。

「で、お前ら、何のようだ。」

「幾つか聞きたい。お前、この辺で暮らしてどのぐらいになる。」

「・・・。わかんない。」

暗がりから聞こえる女性の声は薄明かりの燭台の光を持ってしてもなかなか全容が見えない。

「そうか、じゃあ・・・どうしてここにいる？」

「オラ・・・逃げてきただ。」

そう言つとふと女性の声の主の視線を感じる。不審がつているよ
うだが・・・。

「どこから？」

「南の山からだ。」

「南の。」

「どうして？」

「ん、あそこは・・・夜な夜な変な奴が徘徊してる。最近はこのあ
たりまで来てる。」

そう言つと、声の主は信繁によってくる。漏れ出る光からは鳥の
羽が見える。・・・臭いもきつい。

「・・・徘徊？じゃあ、時折雄叫びを上げたりしているのか？」

「いや、オラはしてない。第一あいつらに叫び声あげても何も反応
しねえ。」

「村の者に手をかけた事は？」

「・・・ある訳ねえ。」

そう言つと、一度外を確認したらしく、しばらくして元の位置に
戻る。その頃にはしまがおびえたような顔を・・・いや、確実に怯
えていた。

「そつか。麓のもんに頼まれてよ。この辺に妖怪がいると。ならそ
の徘徊している連中だと思いが、いつ見た？」

「そだな。最近こつちに来ているから、今夜あたりに来るかもしれ
ん。」

「そうか。なら、そいつらをも見てみたい。夕方に来る。」

「・・・お前らそう言つて騙す気じゃ無かろうな。」
暗がりから女性の声の主のきつい視線を感じる。

「・・・」
その言葉に全員が押し黙ってしまう。

「そつだな・・・。」

”あ、お前ら！”

遠くの声に振り返ってみると、子供達であろう、数人の小さい影が確認出来た。

「ん？」

子供達は一目散に信繁に走ってくる・・・。

ドガッ！

勢いをつけて跳び蹴りを背中にぶち当てる。

「んってー！」

「お前ら、トリさんをどうする気だ！離れる。」

「・・・。お前ら・・・。」

子供達の顔は暗がりで見づらいが、暗がりの中でも、何か鼻をすすする音と、目のあたりで輝く反射光があるのは分かった。

「おめえら！何してんだ！」

しまは立ち上がると、睨み詰める。

「・・・ん？村の者に頼まれてな、妖怪退治だと。」

「ん！おめえ！」

そう言う子供達は走ってトリさんと信繁の間に割ってはいる。

「トリさんは・・・妖怪なんかじゃねえ！だから、だから・・・。」

「わかつてる。」

信繁は落ち着いて座ったままじっとその子達の瞳を見ていた。

「だからトリさんから妖怪の話聞いていたのさ。・・・だからその妖怪を退治してやるから安心しろ。」

そう言う信繁は強く音が聞こえるほどに大きく胸を叩いた。

「じゃあ、トリさんを連れては行かないんだな。」

「連れるってどこにさ。」

信繁の声に子供達全員が涙を流す。

「お前ら・・・信じていいんだな！信じていいんだな！」

「オラ、大丈夫だ。だから泣かないでくろ。」

トリさんも涙声で子供達に覆い被さり、涙した。

「少し、外の様子を見てくる。今夜・・・ここにいていいな。」

信繁は冷静にそう告げる。

「・・・分かっただ。この子達に迷惑かけねばいいだ。」

トリさんはそう言うのと渋々と頷いた。その声を聞き大きく信繁は頷くと信繁は外に出た。

「どうするよ。あれ。」

佐助は外に出ると不審そうに洞窟を見る。

「あいつも・・・妖怪だろうな。」

「・・・だが悪い奴ではない。どうする気だ？」

半蔵は言葉を続ける。

「うなり声を上げる奴を確認する。俺はここにいるつもりだ。」

「そうか。」

半蔵は大きく頷く。

「でだ、しま、頼みたい事がある。」

「おうよ。」

「下の村人に知られないように青海を連れてきてくれ。青海の事だ、かなり時間がかかるが、あいつが必要だと思う。」

「分かった。」

そう言うとしまは、左右を一度確認すると一目散に山を駆け下りた。

「で、拙者は？」

半蔵は空を見つめる・・・日はちょうど真上にあつた。

「俺と一緒にここにいろ。あいつが不審がる。もし暇があるなら、ある程度の用意をしておいてくれ。」

「どうしてだ？」

半蔵は不思議そうに周りを見渡すが、何も見えない。

「麓を調べていたときに複数の具足跡を確認している。人里を避けてかどうか分からないが、いくつもあつた、だが少し様子がおかしくてな。」

「ん？」

その言葉に半蔵は信繁に顔を近づける。

「それが、どうも足の間隔が普通の奴より短い。だから、けが人だ

と思っていた。だからさっきの場所にいた奴かもと思っていたが・
・。

「それは違った。」

「だな。」

「だと知れば、叫び声の正体が何者かだ。」

「何もなければ・・。」

「だろうな。」

信繁は周囲を見渡すと、山の斜面に経つ険しいところの為、下の川も遠くに見える。

「今晚わざと泊まって確認するつもりだ。」

「了解した。」

そう言つと半蔵は入り繰りにどかつと座り込んだ。

しばらくすると山は夕刻になり、子供達も心配層ながらも帰つて行つた。その間半蔵が木の枝を見繕い、子供達にオモチヤを作り、子供にあげていたりしていた。だが帰ると洞窟にも静寂が訪れる。

「お前、こんな生活いつまでしていた？」

信繁が、洞窟の入り口に座り奥に声をかける。

「そだな、生まれてからか・・もう覚えてねえ。」

「そつか。」

「お前、これが終わつたら、俺たちと上田にこねえか？」

「うえだ？」

「上田にやあ、お前みたいな奴がいてな。そいつん所に行つてみてはどうだ？」

「そだな・・それもいいかもな。あん子には迷惑かけねえ。」

トリさんは感慨深く話していた。

”おおー。おうおーん”

「でも、おめえ、オラみたいな奴が怖くないだか。」

「そういう奴と幾つか出会つた事があつてな。こんな事でこわがりやしねえよ。」

”おおおおおー！んんおおおおうおん”

うなり声とも、叫び声とも付かない声が周囲にこだまする。

「来たか！待ってるよ。」

「・・・オラも行く。オラの事でもあるしな。」

そう言っておくからどすどすと音が聞こえてくる。

「！！！」

入り口を見張っていた半蔵と信繁も一度目を丸くしてしまった。

月明かりを浴びて出てきた姿は確かに二足歩行であった。トリのよ
うな毛むくじやらの足をしていた。トリのような体毛がびっしりと
身体を覆っていた。腕は太く、背中にも羽毛がびっしりと生えてい
た。顔は人に近いが、毛は長く、至る所に毛が生えていた。だが驚
いた事はそこではない。その大きさだった、二尺（196cm前後）
ほどもある巨体と腕や足の太さであった。

「ん？どしたただか？」

トリさんは不思議そうに半蔵達を見つめる。しばらくして信繁は
その身体をなめ回すように見つめていた。

「なんか・・・こつ・・・いいねえ。」

「・・・！お主！」

半蔵が驚いて信繁の顔を見る。だがその間にもつめき声は近づい
ていくる。

「だが、拙者の予想通りなら・・・。たのもしいな。」

半蔵は刃物を抜き払うと声のした方角を見つめる。

「あの声に聞き覚えがあるのか？」

「・・・お主、大阪城にいて、一度も会っていないのか？」

「ん？」

「なら、説明の一手間が省けた。お主、怨霊退治の経験は！」

半蔵は懐から水筒を取り出すと持っていた直刀に水をかけ始める。

「昔はよくやったもんだ。」

信繁は腰の短刀を抜き払うと声の方を睨みつける。

「なら善し！」

半蔵は構えたまま声のした方に明かりを向ける。

「なにがあるだ？」

トリさんは不審そうに明かりの向こうを見つめる。明かりからはぼろぼろの具足を身にまとったゆっくりと歩く人間が近づいてくる。口々にうめき声を上げている。数人は何故か木にかぶりついている。

「死人だ！」

その声に反応して数人・・・数体の死人が声に反応してノタノタと歩いてくる。

「こいつらなんだ？」

トリさんも近くで見るのは初めてらしく、興味深そう見つめていた。

「お主！南の山で何か見かけなかったか？」

「そだな・・・そう・・・そうだな・・・昔の事だ。山で黒い奴が何かしているから、なんだと思ってみてただ。こいつらが立ち上がった。よく分けわかんねえから帰ったけど、それから叫び声がるさくて。」

「そ！れ！だ！」

半蔵は呆れながらも死人に駆け寄ると一気に距離を詰め、斬りつける。しばらくすると死人は動かなくなった。

「気をつける！死人は近づいた者全てにかみつく。」

「了解！」

そう言つと信繁は近づいて来た一体を短刀でぶち当て吹き飛ばす。だがしばらくすると立ち上がり、よろよると信繁に近づいてくる。

「離れる！」

トリさんの周りに数体の死人がからみつくが、無理矢理ふりほどく。

「死人にかまれると！しばらくするとあいつらの仲間になって復活するぞ！」

「あ・・・ああ。分かった！」

「わ、わかっただ。」

二人はコクコクと頷いた。

「その水は！」

半蔵の様子を見た信繁の危機感ある声が死人の間に響いていく。

「これか！これは清めの水だ！これが一番効く。！」

「なら、悪霊と変わらんか。」

そう言うつと短刀を構えると呼吸を整える。

「行くぞ！村正！」

その掛け声とともに短刀が少しばかり輝きを増す。次の瞬間！信繁に飛びかかる死人に短刀でなぎ払う。その勢いにとばされた死人は動かなくなつた。

「それは？」

「ああ。代々伝わる物でな。退魔の刀よ！」

そう話しながらも数体を信繁は吹き飛ばしていた。

「流石にこの場所じゃあ刀は振り回せねえ。だからこれしかないのが玉に瑕だな。」

確かに周囲には太い木々が生え、刀を振るえる環境ではない。半蔵の刀は森林戦を考えられた少し短めの刀が用いられている。

「おらはどうするだ？」

トリさんが死人数体に距離を取り、はじき飛ばすも効果は薄い。

「自分の命は自分で守る！」

半蔵が答えるが、置いた燭台からの光の先を見ても死人の群れが途絶える事はない。

「だがこれは数が多い！」

信繁はトリさんとの距離を少しづつ縮め、庇うがその数は多い。

「何か・・・手はあるか？」

「・・・何体いるかだな。」

半蔵は答えながら刀を振り回すが、少しずつ、入口に追いやられてくる。

「トリさん！はいれ！」

「分かつただよ！」

トリさんは急いで洞窟の中にはいると信繁はその入口を身体でふさぐ。それに伴い半蔵も入り口を固める。だが数は多く、しばらく模すると二人の顔に焦りの顔が見えてくる。もう戦い初め、半刻（一時間）は経つ。

「早く来いよ……。青海……。」

”ぬうおおおおおおお！”

遠くから死人とは違う野太い声が聞こえてくる。

「青海！」

下の方から走って駆け上がってくる青海の姿が見える。その横では佐助も死人達をなぎ払いながら駆け寄ってくる。

「なんだあ！こいつら。」

「噛まれるなよ。」

信繁は声を上げる。その声にはっとしたところがあるのを半蔵は聞き逃さなかった。

「こいつら！悪霊みたいな奴らだ！青海、あれを頼む！」

「応よ！」

大きな体を揺らし無理矢理入り口まで来ると武器である鉄の棍棒を立て掛け、手を合わせる。

「時間だけは稼いでくれよ。」

「わかった。」

青海は信繁のうなずきを待たず、念仏を唱え始める。その声は周囲に響き普段の青海とは違う一心不乱に念仏を唱える姿に威厳さえ感じられた。念仏が響いてしばらくすると死人達の歩みが徐々に遅くなっていく。倒れる者さえ現れ始めた。

「……これは……。」

「まあな。これが縁でこいつと会ったようなものさ。」

しばらくすると青海が首を縦に振る。それとともに声の根元に向けて歩き始める。信繁は先導して歩き始める。半蔵も明かりを持って前を照らす。周囲は死体の山となっていた。

「これは……。」

半蔵は驚いて青海を見つめていた。

「こいつ腕はいいんだけどな、酒が好きで寺を出てな。それで俺ん所に来たわけだ。」

「そ、そうか。そう言う事が出来るなら早く行って欲しかったな。」

半蔵は呆れて青海を見つめていた。しばらくうつろつくと、死人の姿は見あたらなくなり、周囲に死体だらけになった。

「これ・・・位でいいか・・・。」

青海は息も絶え絶えに信繁に聞いてくる・・・まもなく木の幹に無理矢理寄りかかった。

「ああ。感謝する。」

「すごいな・・・！お主・・・！今までお主の事・・・只飯食らいと思っておったぞ。」

半蔵は感心したように青海を見つめた。

「それはないぜ。」

青海は口を少しつり上げた・・・それぐらいしかできなかった。

「すごいな・・・お前ら。」

トリさんが感心した顔で近づいてくる。

「これ・・・結局何なんだ？」

「これか・・・死人だ。」

「それは分かった。」

信繁も不思議そうに死人の跡を見つめるが、もう普通の死体に見える。

「昔な、戦場跡があるとその死体をよみがえらせる反魂の法を試した奴がいてな。それは理性さえなく只歩き、かみつくだけなんだ。

ただな、かみついて死なせた奴はあいつらの仲間になっちまう。」

「そんなのが・・・。」

半蔵はじつと死体を見つめる。具足の胴の部分には四菱が刻まれている。昔・・・武田の兵士であったのだらうと思われる。

「拙者が見たのは各地でもあるが、一番最近は大坂城だった。」

その言葉に青海達は言葉を飲んだ。

「拙者たちがいた、正門周辺は最初普通の攻城戦だった。だがしばらくして何故か同士討ちを始めた。不思議に思い兵をかき分け近づいてみればどう見ても死んでいる兵士達が立ち上がり、味方に向かって襲いかかっていた。どうも近くで動いている奴に本能的に襲いかかっているようだった。これで混乱した兵士達は一目散に逃げ出した。むろん後続は突撃する。」

そこで混乱した兵士達は撤退を余儀なくされた。むろん死人を確認した我らは退治したが、その時には兵士達の士気はなくなり、攻める事は出来なくなった。そして、冬のあの日。俺たちは引き上げる事にした。」

その言葉に全員が絶句した。

「例え死人がでるにしろ、戦闘中で死人が出た事はなかった。だから徳川軍は慌てて対策を立てようとしますが、それが数多くの人間がいる戦場で出来るはずもなく、裏門は・・・お主が奮戦したお陰で攻めきれなかった。」

その言葉に信繁はうつむいてしまった。正門でそんな事が起きているとは考えた事もなかった。

「そして・・・撤退した。」

「だからお主は死人の事を知っていると聞いた。」

「俺は・・・退治はしてきたが、使った事はない!」

信繁はじつと地面に転がる死体を見つめた。もう動き出す事はない。

「おれが豊臣を嫌いのなのは、これのせいでもある・・・。だから・・・。」

そのまま半蔵は押し黙ってしまった。全員がその姿をじつと見るめるしかない月の明るい夜の事であった。

「でもいいだか?」

「幸村兄ちゃんが言ったんだ。いいだろ。」

結局朝まで念のため洞窟で仮眠を取った一行はトリさんを連れて山を下りる事にした。いつまでも逃げていては為にならないと判断

したからだ。むろん子供達にも説明した。最初は不安だったが最後には折れてもらった。

「来いよ。」

信繁は先に行つて家の主の所に向かつていた。

「なにがある？」

「付いてくれば分かるつて。」

そう言つて信繁は旦那を引きずつてきていた。

「どれ……。ああ！よ、ようかい！」

旦那が顔を上げるときに隠れは恥ずかしそうな顔をしたトリさんの姿があつた。

「やつぱだめだあ。」

「すまん。頼む！こいつをここで引きつてもらえないか！」

「確かに退治はしてもらつても……。」

急な事で腰を抜かした旦那はそのままの格好でじつとトリさんを見つめていた。

「すまん。頼む。」

そう言つと信繁は腰を抜かした旦那の前に正座すると頭を思いっきり下げる。それを見た子供達も駆け寄つて頭を下げる。

「「お願いします！」」

頭を下げた声に算も遠巻きでこちらを見つめる。

「……。」

黙つたまま立ち上がった旦那は、そろそろとトリさんに近づぐ。その大きさは極端な物で、かなりの巨体でもある。

「手伝える事なら何でもしますので、置いて……。ください。」

トリさんのか細い声が旦那の頭上から響く。

「……。おらを食わないだか？」

「……。くわねえだ。」

「……。分かつただ。お侍様。退治してもらつたから……。村長には明日、紹介するだよ。家に来い。今日から……。家族だあ。」

声がかすかに震えながらも、旦那は信繁を振り返つた。その声を

聞いた瞬間トリさんは喜び旦那を抱き上げるとそのまま一緒に回り始める。

「あんりがとだよー。」

「感謝する。」

信繁が頭を下げたまま答えた。子供達も嬉しくて、振り回されていた旦那と一緒に回りはじめた。・・・旦那は・・・気絶していた。

第八節 四月下旬 上田（前書き）

長い？旅をした信繁たちもついに信繁の故郷上田にたどり着く。そこで待っていたのは・・・兄、信之であった。それでも又信繁たちは・・・。

第八節 四月下旬 上田

第八節 四月下旬 上田

死人を退治し、トリさんを村人に紹介した次の日から信繁一行は山中にいるかもしれない死人を警戒し、街道沿いの山道を進む事をやめ、街道から直接中仙道を進む事にした。そして一週間後の四月下旬……。

「おおー。懐かしい！懐かしいぞ！」

信繁は街道から見える都ほどではないものの人が多くそれなりの城下町を見つめる。

「おおー。久しいですな。」

「ん？ここは？」

青海達ははしゃいでいるが、半蔵は複雑そうな顔をしていた。

「真田の居城だ。」

「え……。」

佐助は驚いた顔で信繁を見つめる。

「正確には信繁殿の兄、真田信之の城だ。」

半蔵の苦虫をつぶした顔は更にひどくなる。

「……ほんとに？」

佐助と美井はふしぎそうに信繁を見る。長旅で髭がぼさぼさで、どう見ても良家の人には見えない。

「じゃあ……あの言い訳って……。」

「半分本当なんだ……。あのいいわけ……。」
「しまは呆れた顔で算を見つめる。」

「まあな。」

「ふん……。ここが目的のくせに……。」

半蔵は何かふてくされた顔をしている。

「お主はどうしてふてくされる。」

算の不思議そうな顔を見つめる。

「ここにも忍びの里があつてな。またしばらくは仕事ずけだと思つと少々腹が立つ。」

「？」

しまは不思議そうな顔をしている。

「徳川領地内・・・まあ大半以上の場所の忍びの里は今、ほとんどが確か・・・。」

「お庭番・・・。」

「そう、お庭番という形で併合されておる。」

「へー。」

青海は感心したように半蔵を見つめる。

「でもさ、どうしてお庭番？」

佐助は不思議そうに見つめる。

「ああ・・・まあ・・・。雑な物さ。主の庭によく来るだろ。」

「ああ。」

「で、近くの大名とか来たときに職業を聞かれると、お庭番（庭の整備をする者）と言ってごまかす。だから、お庭番。」

「・・・何かかつこわるい。」

「正式名称なぞ知っているだけで、そいつは暗殺対象だ。・・・お主とかも知りたいか？」

「い、いや、いい。」

半蔵の苦虫な顔とは裏腹に、算は歩きながら周囲を見渡す。むろん一行は城近くの屋敷に向かつて歩き始める。

「でも、どうして・・・じゃあ、だからといってここで仕事が増えるんだ？」

「・・・ん。ここでは言えん。」

半蔵は周囲を見渡すが、もう、武家屋敷の町並みを抜け、目の前には大きなお屋敷があつた。そこには老輩の門番と、若い門番の二人が護衛していた。

「よ。」

信繁は手を挙げて挨拶をする。それを見て、門番は目を丸くしていた。

「の……ぶ……しげ……さま？信一……繁様ですよ……ねえ。」

「せ、先輩、知ってらっしやるんでスか？」

若い方の男が不審そうに男達を見つめていた。

「お……。信一！」

「あ……。はい！」

「この方達を奥へお通ししろ。俺は伝えに行ってくる。」

「お……。あ……。はい！」

「本当に……。そなんだか。」

しまは呆れて門番達の動きを見ていた。

「これは旨い酒が飲める。」

青海は下をなめずった。大名の本家なら、大抵いい酒を常備しているのは当たり前とも言える事だからだ。

「こちらへどうぞ。」

その声に訳も分からず門番は奥に指さす。そこには大きな門構えがある。家中では時折悲鳴や、叫び声が聞こえる。普通の人からすれば何が起きたかと思つほどの騒ぎだ。

「酒は……。旨いのが飲めればいい……。」

青海に同意する信繁の顔は少し緊張してい……。次の瞬間身体を強張らせ、信繁が右方向に構えをする。それを見て全員が不思議そうな顔をする。しばらくすると砂利を走り抜ける足音がする。その音に横を向こうとした瞬間には信繁の姿が無くなり、目の前にはこざっぱりとした髪をおおざっぱにまとめただけの青……。中年がそこにいた。

「……！」

全員が絶句する中、その男は左側だけを見つめていた。

「相変わらず……。」

「久しいな。」

「兄貴……。」

その姿に左を向けば、腕に草履の跡を残して膝を払い立ち上がる信繁の姿があった。

「……その様子で……病気ですか？」

半蔵の呆れた半眼の顔は、全員が見つめていた。

「お……。これは……伝令どの……。いつの間に豊臣に鞍替えを……。」

あっさりとした顔で受け答えるする姿は、どことなく卓越した何かを思い浮かべる。

「いや、お目付役だ。」

「そうだろうな。お主のような信者が簡単には寝返るまい。」

そう言っ懐から手ぬぐいを取り出すと中年の男は汗をぬぐう。

「そうだ……。こいつらは？」

「供の者だ。幼子もいるから、激しいのは無しな。」

そう言つと青海達が啞然とする中、中年の男は大きく一礼をする。

「信繁がお世話になっている。上田城城主……真田信之と申す。

お見知りおきを。」

そのきれいな礼と声と、先ほどの行為とのギャップはあまりにも……。啞然とさせるには十分な物であった。

「久しいな。」

応接間の一室、懐かしい畳のにおいのする部屋に二人は向かい合うように座っていた。

「だな。」

信之は大きく頷く。

「で、この城に何のようだ？」

「これだ。」

そう言つと信繁は懐から、大きめの手紙を一条取り出す。

「これは？」

信之は手紙をじつと見つめる。その手紙には大きく”真田信幸へ

”と書かれた手紙だ。

「父上の・・・遺言だ。」

信之は覚悟したようにその手紙を開く。しばらくじっと字を読んでいた。雀のさえざりだけがその部屋に響く。

「そうか・・・。感謝する・・・。」

そう言っつて信繁に大きく信之は一礼する。彼にとっての一番の心残りには父昌幸の事だけであつた。

「葬式は？」

「九度山でそれなりの物をあげた。」

「・・・お前はやっぱり豊臣に付くのか？」

信之は不思議そうに信繁を見つめる。幾つか顛末は聞いていたよ
うだ。

「まあな。それに昔いた大阪城が焼けるのは忍びない・・・。」

「分かるが・・・死ぬぞ？」

静かに・・・それでいて力強い声が、周囲にまで響く。

「戦場では、死はつきまとう。」

「死に行くだけが土道ではないぞ。」

「・・・まあな。だが、一度決め、主君を持ったのだ。・・・それもまた土道。」

「なら止めはしない。」

信綱は一息大きな息をつくとあぐらを少し崩す。

「そうだ、兄貴。半蔵から・・・。」

そう言っつて信繁は声を潜める。

「関ヶ原とかの話は聞いたか？」

「どんな話だ？」

「宣教師とか・・・。」

「まあな。立場上と言った方がいいがな。」

呆れた顔で正面を見つめた。

「でも、信用出来ない面もある。それにそれほど精度も高くない。」

「だと言っつて無視する話じゃあない。」

「分かつてはいるが……。まあ、俺の方も調べてはいるが、なかなか確認までは至らない。お前の方が思い当たる節があるんじゃないか？」

信繁は頭を巡らせ、じつと考える。そう言えば、淀君の側には数人の黒づくめの男がいたような……。それほど気にはしないし、戦場で黒づくめや宣教師は珍しい事じゃあない。

「まあ……。色々あるが……。」

「まあ、言えるのは、今、外の国は……。朝鮮出兵の頃前後もそうだが、海の間こうは大混乱期にあると言う事だけだ。」

「そうか……。」

じつと外を見つめながら信繁はいくつもの思いを巡らせるのだった。

「城、城見せてくんねえだか？」

しまはわくわくした顔で、算と先ほど見かけた門番の所に向かっていた。

「う、上田城ですか？」

若い門番の男は慌てたように近くにある上田城を見つめる。

「そだそだ。」

しまは目をきらきらして隣接するあまり大きいとは言えない城を見つめる。

「……無茶を言う物ではありませんぞ。本来城というのは戦などの緊急時以外は人が立ち入らぬ。ま……。住民の為の避難所でもありますからな。」

算も上田城を見つめるが、みすばらしいとまでは行かない物の、それほど堅牢な城には見えない。

「これが十数年前に、徳川軍5〜6万を3千で追い返した城とは……。」

感慨深く算は見つめていた。

「私はそれ以降に来たのでよく分かりませんが、この辺り一帯では

それが一種誇りになっているようで……。」

「ん？」

「当時上田城には1500しか兵がおらず、もう一つの城も守っていた為、この城の戦闘では住民達も一丸となって戦ったとか……。」

「

「では統治も大変でしょうな……。」

じつとそのぼろぼろの城を見つめる。この話をしまはじつと感心したように見つめる。

「と言うわけではないでしょうが。このあたりの上司の方や、昔からいる人々は皆下々と仲がよいのですよ。」

「そうですね。」

そう言っ普通よりはこじんまりした武家町を見つめる一同だった。

「でも……ここでゆっくりしていいのか？」

「どういう事だ……兄貴。」

信繁はあぐらをかき、信之が持ってきた大阪城周辺見取り図を囲みながら、目印の付いた木の駒を所々に配置していく。

「今、急速に戦の準備が進んでいる。」

「やはりな。」

「……知っていたのか？」

信之はそう言いつつ駒を置いていく。

「まあな。だが、こうして手をこまねいている訳じゃあないが、先に父上の手紙を渡しておきたくてな。」

「だとしても……そうか……。」

信之ははたと手を止め、じつと駒を見つめた。

「それでか……この動き……？」

「どうかしたのか？」

「いやあな。変な命令が裏で回っておつてな。」

「ほっ？」

信繁は自分の近くに置かれた木の駒を手に取ると確認を始める。

「それに不審がっておったところだ。」

「どんな？」

「大阪入りの直前で何故か全員待機せよというお話だ。部隊もあるから、あまり待機させると費用も馬鹿にはならん。」

「で、兄貴は向かうのか？」

「いや、俺は親父から・・・代々のこの地を守るだけさ。あんなのに興味はない。」

そう言つと”真”と書かれた駒を大阪城側に置いた。

「で・・・戦はいつ頃だと思つ？」

「早ければ・・・5月ぐらいか？」

「急にだな。」

お互い・・・何故か下の盤面に集中し、信之は大きな駒を奥の方に並べる。手垢が多くついていて、かかれた”徳本”と書かれた字がかすれてはいた。

「だからこんな所でとろしていると戦が終わるといふ事もあると思つぞ。」

「でもまあ・・・お前も大物になつた物よ。」

呆れて信之は信繁を見つめる。その様相はあのころと少し・・・大人びてはいるがそれでもあのころの無邪気さは失われてはいないように見える。

「そうか？」

「こうして駒として並べられるだけな。」

そう言つて二人は盤面を見つめる。そこには多くの大名の名前が書かれた駒が各所に置かれていた。

「それだけ成長した俺を褒めてくれてもいいが・・・厳しいな。」

そう言つて、相手の駒の数を数える。今回の駒の数はどう見ても・・・徳川方が4倍以上ある。数万を超える軍隊同士での3倍は覆し難く、また歴然とした差として現れる。

「そうだな。今回の徳川殿は本気だ。前回までの遊びとは違つ。今

回は正式出陣とは別に向こうにも出陣要請があつた。流石にあつちだけは断り切れなかつた。」

「ここで言う”あつち”とは、北部にある忍びの里の”旧武田忍軍”の部隊である。数多くある忍びの里の中でも破壊工作と地脈（鉱山関係や、水脈関係）に詳しく、この地に置いても数多くの温泉の開発を行つていた。」

「それは構わない。」

信繁はきつとした目で見つめる。お互い本気という事だ。

「でも・・・あのお方が相当怒れてはいよう。」

「だな。と言いたいところだが、こうして平和が長いとこれはこれで思つてしまう。」

信繁の顔をじつと信之は伺い、頷くのをもと近くの駒をするすると動かしていく。

「ここで言うあのお方とは、”旧武田忍軍”相談役”お吉の方”のことである。」

「だからこそだよ。」

そう言うと言繁は動かしたのを確認してから、幾つかの駒を動かす。しばらくお互い無言で駒を動かす。しばらくして信之の手が止まる。

「お前・・・。」

「今回籠城線は出来ない・・・だろ・・・。」

「ちよつど動かし終わった駒の後には”徳本”と”真”の駒が隣り合つていた。」

「お前・・・ちよつど工事が終わる前だから、知らないか・・・。」

「まあ・・・お前が向こうで確認するといひ。只・・・この通りならその前に落ちる公算が高い。」

「そう言つて近くの駒ですつと”真”の駒をどける。」

「どつ思つて？」

「・・・出来るが・・・。」

じつと配置図を睨みつける。

「駒が四つか五つ多すぎる。全滅の可能性が高い。」

信之はその盤面を見つめる。

「そこは・・・キツツキが突いて・・・敵でも削るぞ。」

「そっか。」

「確かに・・・。」

信之は黙って幾つかの駒を地図の外に出す。

「これなら行ける。」

「・・・上手くいくか？」

信之は信之が動かした後の盤面を見つめ、唾を飲んだ。そこにもまた・・・”徳本”と”真”が並んでいた。だが、もつどかす周りの駒はない。だが周囲には多くの駒が取り囲む状況には変わらない。行く、行かないではない・・・やるしかないさ。」

「そっか。なら、今夜は軽い酒宴と行こう。覚悟は決めろよ。」

「ああ。」

そう言う信之の目はどこか寂しそうだった。

「久しいな・・・半蔵殿・・・。」

山奥のある庵・・・夕方にもなるうこの時に半蔵は酒を持って来ていた。

「ああ・・・お吉の方。」

「その名は人が付けた名よ。」

目の前の半蔵をじつと見つめていたその女は威圧するような目でじつと半蔵を見つめた。年齢は妙齡ではあるが、その妖しさはこの庵の雰囲気とは合いそうになかった。その女性の視線に半蔵もあらがうのではなく、何か悲しそうな目で見ていた。

「入りな。せつかくだ。水の一杯ぐらいなら出すよ。」

そう言うとお吉の方は奥にすつと入っていく。その後をついて行った。そこはすぐに畳があり、匂いもよく見える。

「頂きます。」

「一応は上司なのだから、もつと胸を張りな。」

「貴方相手に胸を張るのは……」

「分かつてはおるよ。お互いな。世の趨勢を悲しむのには丁度いいと言ったところだ。」

そう言つと半蔵は畳にあぐらをかいて座る。

「昔やり合つた仲がこうして上司……部下で座るのはいつも複雑よ。」

その昔、関ヶ原が終わつた直後、最後の障害である上田城を陥落させるべく、半蔵達はこの周辺にある”旧武田忍軍”を襲撃した。

その時二人は刃を交え、半蔵は退かされた。だが、半壊までなつた忍びの里はもう、上田城への援軍も出来なくなつていた。結果、真田家は投降に応じざる終えなかつた。

「でもそれが時代。貴方が一番知つておりましように。」

「長く生きた中でもこうして……まあよい。」

そう言つてお吉の方は頷くと茶碗に水をすくい持つてくる。自分の所にも一杯の水が置いてある。

「で……今回は？」

「出来れば今度こそ。大阪に手勢を向かわせて欲しい。そしてあの死人を押さえて欲しい。そのために各地の忍びの里に伝令を飛ばしている。」

「……やはりか。」

お吉の方はしばらく半蔵の顔を見つめる。

「どのぐらい来るかね。」

「今のところ、前回出兵した風魔は村の再興で忙しく、黒脛は動くが伊達政宗の出方しだい。こっちは前回と一緒に部隊は出すが、死人相手の戦闘に不慣れな者が多く戦闘は不利だ。他の里も行っては見るが……。ここしか頼りになる連中はおらん。頼む。」

前回の冬の陣ではこの里の者は戦闘には参加しなかつた。この里の者を人里に晒すわけにはいかなかつたからだ。

「この事には信之殿からの意志もある。」

「・・・そうですね・・・。」

半蔵はうなだれた。

「攻城戦まで持ち込む事が出来れば紛れる事が出来よう。それ以降ならお助けいたします。そう、頭領には進言しておこう。一応私が手勢を連れて行く予定だ。」

その顔に半蔵はぱつと顔を上げた。このお吉の方というのは頭領はいるが実質の権力を握る事実上のお頭でもある。

「・・・感謝いたします。」

その言葉に大きく頭を下げた。

「その言葉しかと受け取った・・・だから・・・その代わり・・・出来れば彼らに酒をくれてやってくれ。」

そう言ってお吉の方が横を見ると、酒の匂いにつられた数名の小さな妖怪達が玄関先にいた。

「分かり申した。で・・・杯とかはあり申すかな。」

半蔵は立ち上がると杯を探し始めた。

「酒があると待ってみて・・・これか・・・。」

と、目の前の食卓を見つめる青海の目は嫌そうであった。

「皆の衆、今日は・・・これから旅立つ弟の戦勝祈願だ。無礼講だ！」

「俺は好きだぞ、これ、村じゃなかなか食えんぞ、これ。」

信之の挨拶を横目にしまは興味津々と皿に盛られた小粒の物を見ていた。

「これこれ、その坊様。早々このような珍味はなかなかでないですぞ。」

向かいの奥方らしき女性はにこにこして皿を見つめていた。

「この・・・虫い・・・みたいのは・・・。」

青海のげんなりする顔とは裏腹に算は皿の佃煮に手を出していた。「蜂じゃ、蜂。精が付くぞ。」

そう言い皆が食べる様に青海はそろそろと箸を突き出す。

「いやあな……。昔……。だな。蜂に刺されそうになって……。な。」

「こいつは人を刺す蜂ではござらん。今日の馳走ですぞ。」
そう言つてパクパクと口に放り込む筧とは対照的に青海のに箸は止まっていた。

「ま、それは人それぞれさ。俺も昔はこいつを食うに抵抗あつたし、こつ見えても仏門の身。それは当然だろ。」

「確かに……。そうでしたな。すまない青海。」

そう言い素直に頭を下げる筧とは裏腹に、青海はまた微妙な顔になつた。

「すまん。これは格好を見れば分かるはずなのに……。酒も飲めぬ……。訳ではないな。だとすると……。すまん。」

そう言い、信之は近くの女性を手招きし、耳打ちする。それを聞いた女性は廊下を抜け歩いていった。

「こちらこそ……。お気を遣わせました。」

青海も丁寧に礼をする。

「でも……。お殿様つつつても……。そんな偉そうじゃないだな。」

「まあな。」

信之はさわやかな笑顔で応じる。その様子を微塵にも介さぬまま、周囲の女性達と笑いながら、会話をしている……。

「殿様とか言つても結局は周囲の人から食わせてもらっている居候見たいな物だ。だから、むしろここの皆とかに敬意を払う。それが真田の教えの一つだ。」

「へー。」

蜂をつまみながら、佐助は感心したようにじつと信之を見つめる。その間にも美井は白米をよく噛みながら食べていた。

「こちらでもどうぞ。」

そう言つて青海のとなりに来た女性はそつと少し大きめの野菜の漬け物を置いて、そそつと部屋の外に出て行つた。

「これは？」

「ああ。家でつけたぬか漬けた。」

「それはありがたい。」

青海は蜂の佃煮の小皿を脇にどけ、ぬか漬けを一口口に入れる・
。

「お・・・これはいい感じだな。」

その味に感服したのか、器一杯に酒を注ぐと青海は一気におおる。
「まあな。京の都には及ばぬが、ここはここでいい所よ。」

信之はそう言い開けた障子から庭と外を見つめる。そこには美しい月と、青々とした木々の波打つ様が見える。涼やかな風が酒宴場に入り込み、若草の香りが一帯を覆う。

「そうだな。」

信繁は落ち着いたのようにじっと空を見つめる。空に雲はなく、月が煌々と輝いていた。

「みんな・・・生きている・・・。だよな・・・。」

ぼつりと言う信繁の声に全員が振り向いた。その声はどこか寂しげで・・・それでいて何かこう悲壮な事を連想させる感じであった。
「早々寂しい事を言うでない。」

声とともに吹いた一陣の風に皆が目を背けると、一人の簡素な着物を着た・・・如毛とを思わせる妖艶な女性と・・・半蔵が庭に立つていた。

「お・・・お吉の方様！」

信繁は驚いたように慌てて正座した。それにしまや青海達は驚いて女性を見るが・・・。普通の人間にも見える・・・。と言いたいところだが、青海は何かに気が付いたようで・・・顔をしかめ、苦虫を押しつぶしたような顔をしていた。

「よいよい。無礼講であろう。儂も・・・一杯貰えぬか。」

そう言うつとワラジを脱ぎ、信繁の横に座る。その様子に周囲の女達は驚いたように少し距離を置いた。

「久しいのお。」

そう言いつつなめ廻すようにじっと身体をしばらく見つめる。

「本当に……いい男に育った。昔はあんな可愛い稚児だというのに……。」

「い……いやあ……それ……ほどでも……。」

信繁は緊張やら何やらで押し固まってしまふ。その異様な雰囲気一同は押し固まってしまふ。……半蔵もちやっかりと端の席に座り、青海の側の酒瓶から酒をついでいた。

「お吉の方様……。からかうの其処までにしていただく。見てご覧なさいませ。信繁がこんなにも恥ずかしくて視線を合わせようとしないじゃありませんか。」

信繁も軽い口調で制しようとしてはいるが、その声に潜む緊張は誰の耳にも明らかであった。

「分かつておる。久しくて……つい……な。ま、こうして元気なら嬉しいという物よ。」

「この御仁は？」

算が勇気を振り絞って声をひねり出す。

「あ……ああ……。このお方は……。」

信之の声を遮り、お吉の方が算達の側に寄る。

「儂はなあ……。ま……。信繁の師匠と言ったところかな？」

「……へ……？」

半蔵はつい間の抜けた声を上げてしまふ。

「昔からよく知っておる仲でな……。赤子の頃はそれはもう……。二人とも可愛かったもの……。」

「本当か？」

佐助が驚いて信繁を見つめるが、その気恥ずかしそうな顔は本当だと……。顔だけでも物語っていた。

「……お前……。おもしろいな。この私に気圧されぬ者がいよつとは……。」

「……関係ねえ。」

「おもしろい子じゃ。」

笑いながらお吉の方はしまを見つめる……。

「お前・・・きつと大物になるぞ。」

笑いながらお吉の方は信繁に向き返る。

「信繁・・・ここに来たついでだ。ここに残れ！」

その言葉に全員がお吉の方を見る。その顔は明るく爽快な笑顔だった。

「・・・。」

一部の人間は啞然とし、一部の人間はぐつと息をのんだ。

「すまねえ。師匠。俺にも・・・こう見えて・・・守る家族と子供がいる。」

「だったら儂が一走り、そいつらを連れてくる。」

急に悲愴な顔になるお吉の方の顔を信之はつらそうに見つめる。

「それだけじゃねえ。こう見えても、馬鹿かもしれないが・・・主もいる。」

「だったらそんな馬鹿、見限ればいい。お主達はやはり両方ともこの地に残つて、おればよい。主が追いかけるなら、お主だけは偽名を使えばよい！この領地にいる限り誰も・・・誰もお主に仇成すものはおらん！」

「師匠・・・俺がいる。」

その言葉に全員がまた絶句してしまう。

「どんな主でも、命がけでついでに行くのは親父が言った・・・親父から教わった事だ。親父だけは裏切れねえ。主を裏切った俺を・・・家族やみんなを裏切った俺を・・・俺が許せねえ。」

「信繁・・・。」

お吉の方からひねりである声は・・・かすれ、聞こえる者は少数だけだった。

「師匠がどう言おうとも今回だけは・・・俺は主を違える事は出来ぬ・・・。こうして付いてきてくれる奴らがいる。そして家族もいる、そして・・・それらの出会いの場を作った主がいる・・・。裏切る事はできんよ。」

その思い・・・覚悟は信繁の目を見れば全てが納得出来た。

「ふ・・・信之殿・・・」

お吉の方は何かすがるように、信之の方を振り返り、何かを話そうとした。その時の信之の・・・信繁と似た覚悟の瞳に一瞬たじろいでしまう。

「・・・知っておったな。」

「それは・・・。」

信之は何かに気が付き目を伏せる。その行為にやっと、青海と寛はこの酒宴の意味を悟ってしまう・・・。

「なら仕方がない。」

そう言って近くの酒瓶をひったくると、信繁の前にあぐらで座り、酒を注ぐ。

「朝まで無礼講だ。」

「・・・それは私が言いました。」

信之は呆れたように立ち上がる。

「皆、今宵は全てを忘れ。飲む。飲もうぞ！」

「応！みんな！朝まで騒ぐぞ！」

その声に全員が料理に手をつけ始めた。

「・・・俺の酒・・・。」

青海の寂しそうな声だけが酒宴の場に寂しく・・・かき消されていくのだった。

「すまない。俺はここまでのようだ。」

次の朝、出発の準備を終え、正門に立つ一行を前に残念そうに半蔵は見つめた。

「仕方ないな。」

馬に乗った信繁は馬の調子を確認していた。

「でもまあ・・・すいませんここまでしてもらって。」

寛は深々とお辞儀をする。脇には馬が一体存在する。青海も馬に乗っていて、しまはちょうど青海の背中に掴まり、美井は信繁の背中に掴まっている。

「お吉の方様は？」

「ああ……お吉の方様は今朝早くに洞に向かわれた。用があるそ
うだ。」

「そうか……。」

信繁は残念そうに下にうつむく。

「あのお方の事だ、別れはつらいのだろうよ。」

「そうか。」

信之はそう言っていると信繁に近づぐ。

「これを……。」

そう言い、信之は紙に包まれた固まりを渡す。中を紙を開けて見ると其処には金子が少々入れられてあった。小さな声で耳打ちする声で話を続ける。

”……兄貴”

”これを持って、臯月堂に行け。”

”分かった……感謝する”

軽く礼をすると信繁は信之の側を離れる。

「しま……どうする？」

「ん？」

佐助は信繁に張り付いたまま、半蔵を見つめる。

「拙者と一緒に来るか？」

半蔵はしまに手をさしのべる。しまは寂しそうに首を横に振る。

「……よく考えたけど……信繁様のほうが……俺を必要としてくれている……そんな気がするだ。」

「分かった……止めません。行ってこい。」

「あいよ。」

「兄貴……ありがとな。」

「お前も……。」

そう言つと、言葉を詰まらせ信之は馬を走らせる。それに追走するよつに青海と寛も馬を走らせ、しばらくすると一行の姿は見えなくなっていた。

「どうしますかな？」

後に残った半蔵をじつと信之は見つめた。

「すまないが馬を一頭用立てて欲しい。拙者も行くところがあるのでね。」

そう言う半蔵の顔は信繁達を見ているときとは違い、普通の表情に戻っていた。

「で・・・我々はどうして・・・ここで足止めなんですか？」

算は呆れたように城下町にある、とある一軒の間屋の前に立っていた。ついでに言うつと屋敷から30分もかからないところにある。

「ああ。ここな。臯月と言ってな。よく遊びに来たものだよ。」

そう言うつて店内にはいると若い番頭が待ちかまえていた。

「どういったご用件で・・・。」

中は米問屋らしく、米とかかれた暖簾が目立つ。

「店主を呼んでくれ。」

「いやあ・・・どういったご用件か・・・。」

「だから・・・店主をよべつて。呼べば分かるつて。」

いらついた様子の信繁に番頭はおろおろしていると、奥から、老の店主らしき、着物が立派な男がやってくる。が、信繁の顔を見ると、かたかたと震えていた。

「の、信繁さまー!!」

そう言うつて信繁に向かつて走り抱きつく様は異常でもあった。

「久しいな。」

「ですよね。お、おい！繁八！茶ー持って来い！」

「あ、あ、はいー!!」

番頭は慌てて奥に走っていった。

「ささ・・・皆様はこちらへ。」

そう言うつて店主に奥に一同は通されて中にはいった。

「お久しゅうございます。」

「こちらの御仁は？」

算は不思議そうに目の前の商人を見つめる。

「ああ。昔よく遊びに来た商人でな。家にもよく遊びに来たんだ。んで、これ。」

そう言っつて先ほどの金子を取り出す。

「これがどうかしましたかな。」

不思議そうに金子を見つめる。

「違う違う。こっちだよ。」

そう言っつて紙を引きはがし渡す。全員がその様子に不思議そうに見つめる。

「これ……ですか。」

そう言っつと少し顔を曇らせ、周囲を窺う。

「とりあえず、当方が仕入れた情報おぼ。」

そう言っつと周囲の人間に手招きをすると、それに応じ、商人に顔を皆で寄せる。

「とりあえず……現在徳川軍は大阪直前の京に入り、部隊を再編中です。」

「な……!」

商人の言葉に全員が驚く。

「どうも……仕入れた情報が真実なら……京に死人が現れ、それを阻止に入つた徳川軍を豊臣軍があれを自分たちの兵士だとのたまい、そのため、その報を聞いた徳川軍が駒を進める事になったとで、現在最終決戦に向けて兵をかき集めています。」

「この者は？」

算は不思議そうに商人を見つめる。

「情報を集めてもらっつているんだ。商人達の情報はあながち馬鹿には出来ない。」

信繁は少し戒めるように算達を見る。

「ついにか……。」

青海は息をのんだ。

「だが、そこで兵を止めた模様。本当に戦闘をする気はないらしい

のですが、現在本隊が到着していないので・・・まあ・・・部隊数の差だけで大阪城を圧倒出来るだけの兵力が集まっているらしいのですが・・・。」

「急いで・・・あ・・・それで馬を・・・。」

何かに納得するように算は感心していた。

「それに伴い、現在、伊賀と甲賀の忍軍が部隊を集結、北上予定です。」

「それだけか？」

「・・・今回は何故か、延暦寺の僧侶1200名が安土周辺で待機。」

「術封じか・・・。本気で押しつぶするつもりだ。」

当時陰陽術を用い戦闘などあるが、延暦寺はその研究では当時先端をいつており、数多くの町の建設を担当していた。だがその活用に置いて術の技術は封印や防衛に主眼が置かれているのが仏教系陰陽の特徴でもある。術がなければ、実際数を覆す方法はほぼ無いに等しい。

「豊臣側は・・・。」

「あまり・・・いやそう言えば・・・貿易船が一度港に入ったぐらいか・・・。」

「あまりいい情報ではないな。」

「だとして・・・まあ・・・。」

算達の歯切れの悪い返事はあまりいい報告ではない事の総称でもある。

「信幸様のお手紙を見る限り・・・最後まで貴方をお止めしたかったようで・・・。」

商人の男は少しがっかりとした顔で、信繁を見つめる。

「だとしても戦う。大阪へ。」

「・・・幾つか・・・。」

そう言つと商人は立ち上がり、後ろの戸棚から大きな包みを取り出す。

「それは？」

「お持ちください。昔、九度山送りにされる直前……こちらに
来られまして、もし、もう一度ここへあなた様が来られるようなら
・そして立派な漢に成長しているならこれを渡せと……。」

信繁は息をのみ、包みを開けると二振りの刀があった。

「本来、初陣祝いに渡す予定でしたが、製作が間に合わず……。
「いいさ。」

そううなずき、名を確認する。名は入っていないがその美しさは
異様とさえ思えた。

「村正作二本刀、紫雲、叢雲。そして、こちらも。」

そういつて、商人は今度は下の引き出しからもう後二本の太刀を
取り出す。

「村雨作大業物、霧風と紫光でございます。」

「こんなに多くは使えないって。」

四本の刀を抱え信繁は呆れたように顔をしかめる。

「お父上殿いわく、その刀、もし気に入った者があればその者に渡
せ……だそうです。」

その刀の出来に青海や笈、しま達もぐつと唾を飲んだ。実用性あ
ふれるデザインでありながら、波紋はあっさり目に流れていながら
も、鋼紋の波はしっかりとした稜線を描き、伝う輝きは正に妖刀・
・そのものであった。

「分かった。受け取ろう。」

そう言い、青海に四本の刀全てを渡す。

「後は……ここに来た豊臣の方だと思います。お子様みたいな
若武士の方が来られまして……。」

「ん？」

信繁は何か思い当たるのか、頭をひねっていた。

「もし……こちらに信繁様が寄られるようなら……京に寄る前
に一度伏見城から京に向かうようにと言う話ですが……私にはさ
っぱりで。まさか……あなたが来るとは思わなくて……あの

時は軽く聞き流していたのですが……。」

信繁はじつと考えていた。

「そう言えば……秀頼様は？今いずこに？」

「はい。公式なら確か……今は伏見へ太閤の菩提を祀りに……。」

「

「分かった感謝する。」

信繁は幾つか思い至る事があつたようだった。

「あとは……。」

「今のところはこれまでが限界のようです。」

商人は申し訳なさそうに頭を垂らす。

「急ぎませんと。戦には間に合いません。」

算の焦る声が聞こえる。

「……。」

しばらく信繁は頭を抱え込む。

「すまない。馬があるし……伏見経由だ。」

「は……！」

その言葉に急いで立ち上がると青海達は急いで準備を始める。

「書かれた品は……向こうの商人経由で家に運ばせます。」

「わかった。」

信繁は頷くと立ち上がる。

「御武運を……またこちらに来られ……今度こそ……米菓子
をせびりに来る事お祈りいたしますよ。」

「そうほほえむ商人の顔はどことなく……寂しそうな物だった。」

「……そうだな……。」

「そうほほえむ信繁の顔もまた寂しそうだった。」

「それで思い出した。米菓子……あの子達の為に幾つか見繕つて
くれると嬉しい。」

「……承知いたしました。」

「そう言うと商人は深く一礼をした。」

第八節 四月下旬 上田（後書き）

次回で、江戸旅情編、最後となります。お楽しみください。

第九節 忘れ形見の二人（前書き）

商人から聞いた一言「ある若い武者が信繁様に……。」

その言葉を聞いた信繁は指示通りに南回りで大阪に向かう。

その若者とは……そして……何が待ち受けるのだろうか……。

第九節 忘れ形見の二人

第九節 忘れ形見の二人

「でも何でまた・・・伏見経由に・・・。」

馬を走らせ、街道を疾走する信繁一行は西に向かっていった。

「もしかしたら・・・だ。」

懐に美井を縛り付けさせ、信繁は馬を失踪させていた。もう・・・一刻の猶予さえも無いように感じられていた。

「もう・・・戦が始まるかもしれないぜ。」

青海もいつももの気楽さが抜け・・・真剣に前を見据えながら馬を走らせる。戦場慣れした二人とは違い、曲がり角では不安さえ感じさせる。

「意外とそれはない。」

信繁は普段の疾走とは違い、少し速度を落とし、街道を注視しながらの疾走である。

「どうして？」

「家康・・・殿が其処まで卑劣な男とは思えない。」

「だとして、何で伏見経由？」

馬が操るが精一杯の青海の背中にしがみつくしまは馬の早さにかみつくだけで精一杯だった。

「俺のいる位置を読んでいた若武者の事だ。」

「それがどうして・・・。」

「・・・いるかと思ったが・・・。」

顔を曇らせ、信繁は先を見る。視界の先には坂内の宿手前の村の入り口がある。

「すまない・・・急いでいるところで悪いが、馬をつぶすわけにはいかない・・・。」

信繁は馬の速度をゆるめる。ここまでに四日間、ほぼ走り通しだ

つたため、上田から伏見までに二日かけ、そこから街道沿いに走る事二日目、もう今の時間では空を見ると赤くなり始めていた。それまでか移動の宿場を無視していた為、もう、馬の疲労は限界だった。坂内から人力だけで大阪に帰ろうとしても馬をつぶすより、ここで休んで朝駆けで大阪に帰る方が早い・・・そう信繁は判断した。

「了解しました。」

そう言つて算も馬をゆつくりと歩かせ、じつと宿場町を見据える。只、今から馬を休ませる為に宿場にはいるわけにはいかなかった。単純に今・・・あの宿場には大方戦場に集まる徳川軍の傭兵部隊や、下手すれば旗本部隊がいる公算が高い。そんなところに行けば休むどころではない。

「でもまあ・・・。」

青海はじつと馬をぎりぎりの所で止める。

「こういときは・・・。」

信繁は左右を見渡す。広く周囲には木々もない・・・。

「少し戻るぞ。」

そう言つと信繁は馬主を返してゆつくりと引き返す。それに三人も合わせる。

「そうだ・・・しま。」

「ん？」

青海の後ろから首だけを横から出して信繁を見つめる。その顔は青かったりもする。

「しま・・・俺たちはこちら辺で少し休む。で・・・少しこのあたりで隠れるにいいところを探してきてくれないか？」

「りよ・・・了解・・・。」

しまは気持ち悪そうな顔をして、馬からゆつくりと下りる。

「どうした？いつもは元気なのに。」

「いや・・・さ・・・ここ数日馬で揺られっぱなしでな・・・。慣れなくて・・・気持ち悪い・・・。」

「・・・なら俺が行こう・・・。」

信繁は心配そうな顔で馬を下りようとするのをしまが手で制した。
「それでも俺が行くよ。・・・確か・・・心当たりがあるしな・・・」

「そう言うときはフラフラとした足取りで、来た道を引き返していった。」

「俺たちは馬を隠して待機だな。」

「そう言うのと、近くの木陰を見つけると、馬を引いて木陰の側で馬を止める。」

「でも・・・強行軍だな。本当に。」

青海は算の馬に近寄ると背負子にかけてあった酒瓶のひもをほどき始める。

「それで最後だぞ。」

「分かってるって。」

算は呆れたように言うが、猛暑いこの中身も少なく、ぼろぼろにはきつぶされた草履と

算愛用の本とかの数々があるだけである。

「食糧もこれで最後・・・。」

「分かっている。」

「そう言うって算が懐から取り出したのは木の実が小さな袋に入っている分だけだった。」

「でもまあ・・・。予定よりかなり大回りになって、ここまで残っているって言うのは・・・運がいいという事だ。」

馬たちは近くの草を食べ始めていた。こちらの休憩の意図をくんでいるようだが、それでも馬たちの疲れの色は濃い。

「水は？」

「上田で補給した分もありますが・・・。一瓶・・・ですな。」

「下げていた幾つかの水筒を確認するが、ほとんど空だった。」

「馬にくれてやってくれ。」

「了解。」

算は自分の馬に掛けてあった水筒を取り出すと、水を手に移し馬

の口に寄せる。馬たちはそれを気力がないような感じでぺろぺろとなめる。

「・・・ハング・・・お腹・・・空いた・・・。」

美井もまた疲れたように暗い顔をしていた。

「これ・・・食べ。」

そういうと、先ほどの食糧の袋から木の実を幾つか取り出すと、信繁はそつと美井の前に差し出す。

「信・・・繁の分・・・は？」

美井はじつとその木の実と信繁の顔を首をかくかくさせて見ていた。

「俺の分は・・・気にするな？」

「・・・いい。」

そういうと美井は下を向いてじつと我慢していた。

「おい。とりあえず。廃墟があつたぞ！」

もう普通の顔に戻ったしま・・・それでも疲労の色はまだ濃かった・・・は少し遠くから手招きをする。それに全員が疲れた顔でゆっくりと歩いていくと、今にも崩れ落ちそうなよく分からないが、昔はお寺だったように見えるぼろぼろの建物があつた。中を見ると幾つかの床が抜けてはいるが、それでも夜露はしのげる。

「とりあえずは休憩だ。」

その言葉に青海は床に寝ころび、篁も建物に寄りかかる。

「でも・・・よかつたですな。」

篁も感心したように屋根を見ると・・・一応屋根はぼろぼろではあるが存在はした。信繁は床を見渡すと、何かを感じ、外に出て行った。

「俺は、ちよつと食糧と水探しに行ってくる。」

「了解。」

しまはそういうとフラフラとしながらも、外へ歩いていった。それにすれ違つように幾つかの木の枝を持っていた。それを黙ったまま、床に突き刺すと周囲の土埃を集め、簡易的な暖炉を作る。

「とりあえずは休めるが……。」

「もう……限界でもありません。」

笥は建物内を見る。青海も疲労困憊の色合いを隠す事もないし、美井も疲れがたまっていた。

「とりあえず、今は暖を採って休むぞ。」

「了解。」

まだ夏が近いとはいえ、うつすらと寒く、暖も無しに寝られるほどの暖かさはなかった。

「でもさ。大将……何を探していたんだ？」

流石の青海も顔を信繁に向ける。

「もしかしたらと思っただけ。」

「何が？」

青海の声は流石に怒っているように見える。笥もそれを止める気力はなかった。だが信繁はその答えを躊躇った……。その時、草を踏み歩いてくる音が聞こえてくる。その足音に全員が固まった。

「ん？」

青海も動かなかったが、寝ころびながらも武器を手元に寄せるくらいはしていた。笥も周囲を見るが、もう暗く、少し先も見えない状況ではなかった。

「すい……ません……。」

若い……それでいて気の弱そうな声が聞こえてくる。信繁は堂の奥で柱に寄りかかったまま刀に手を掛ける。

「どなー……たかいらっしやい……ますか？」

流石に返事しないわけにも行かないだろう笥が立ち上がると、扉を開ける。そこには火の光で照らされたほっそりとした後ろの髪を紐でとめただけの長髪の……。この暗さだと男か女かみ分けが付かないが……。人間が立っていた。

「どうしました？」

静かに、それでいて緊張した空気が流れる。

「道に……。迷ってしまいました。そしたら……。明かりが見えま

して。できれー．．．ば入れて貰えないかと。」

「どうします?」

笥は振り返るがその顔は露骨に嫌そうでもあった。

「入れてやれ。」

信繁は刀に手を掛けたまま、じつとその若武者を見る．．．身体は細く、女性を思わせる。だが、雰囲気自身は男．．．小姓としてはありだがそれ以外だときつい。

「分かりました。」

「本当に．．．助かります．．．。」

そう言つと若武者は空いたところに座る。

「あなた方は?」

「たまたまここを見つけて．．．来ただけだ。」

青海は不機嫌そうに口だけを動かす。その声をした方を見るとおつかなびつくりしながら、少しずつ接近する。そして、顔を確認すると、またそろそろと先ほどの位置に戻る。

「そ．．．そうなんですか．．．。」

若武者の顔は引きつりながら．．．。

「お主こそ、どうしてこのような場所に?」

「ま．．．まあ．．．。色々．．．あります。」

若武者はしどろもどろに答える。

「こんこん。」

「おや．．．。」

戸を叩く音に全員が入り口を見ると、疲労困憊のしまの姿がある。「一応さ．．．これは一匹いるんだ．．．だが．．．それだけだったよ。」

しまはずかずか中にはいると、虫の息ではあるが．．．兎が一匹真ん中に置かれる。

「え．．．あ．．．これ．．．。」

その様子に若武者は驚いているようだった。と言うよりは怯えているように見える。

「……信繁様……この人は？」
「……。」

只、信繁は黙っているだけだった。と言つよりか……何かを思
い出しているように見える……。

「え……信繁……様？」

「あ！ああな。このお方は真田信繁……」
と算が説明途中、名前を聞いた瞬間何故か若武者が立ち上がる。

「信繁……なのか？」

その声とともに若武者は信繁に抱きつく。

「の、のぶしげー。」

走ってきた若武者は信繁に若武者が抱きつく。その行為に全員が
驚く。その様子に信繁は只ひたすらに困っていた。

「あ……あの……。」

「あ……は……。」

しばらく抱きついた後に、急に驚いてバツト離れる若武者。世の
様子はどう見ても……女性に見える。その様子に更に全員がしら
ーっとした目で二人を見つめる。

「あー。」

算は呆れたようにその若武者を見る。

「その方をお知り合いで？」

「……。」

そう言つと信繁は立ち上がるとその若武者の前に片膝を付く。

「失礼しました。」

その言動に更に全員が驚く。

「え……あ……あの……これ？」

慌てる算の声に信繁が手で頭を下げる指示をする。更に若武者が
何故か、手で制した。

「いいよ。そういうのは好きじゃないよ。」

何というか明るい声がひびく。青海はもう疲れ切っているのか倒
れたままだった。

「この方は……。」

算の焦る声に信繁は慌てた声だった。

「このお方は……。」

その焦る声は夜も深くなり、火の明かりに写る顔は緊張しているのが全員に伝わってくる。

「この方は……豊臣秀頼様だ。」

その言葉に一部の除く全員が驚く。

「は？」

「それはこういう所じゃあ……言っても……ね。」

照れているが……この若武者は否定していない。

「でもどうしてここへ……。」

算もまた、立て膝しているものの、不思議そうな顔をしていた。

「いやあな。上田の時、聞いただろあれ。」

そつえばと算はおもいだす。たしかあの時……。若武者が伏見から来るようにとか……。

「あれを聞いてきて、来れたってことは……やっぱり信繁ー。」

声は甘く女性みたく見えるが、これでも外見は男だ。

” どうしてまた……。”

” こう見えてもな……まあ……。”

じつと信繁は秀頼を見つめる。

” まあ、結構こう見えても読みの精度だけは高くてな。仕えた当初、鬼ごっこしたした時、すぐに場所を見つける勘の良さは天性の物だ。”

算は驚いたように目の前の若武者を見る。

「ま、予想通りだったからね。」

秀頼は少し胸を張る。その様子を立ったまま……空気を読めな
いまま、しまは見つめる。

「この人……誰？」

その空気を読めない表情でじつとその若武者を見つめる。

「……すまないが……そのお方が……我らが主でもある……。」

「え？」

「豊臣の当主様だ。」

その絞り出すような緊張の声で答えるしまは頭を抱える。

「え．．．確かと豊臣って．．．え．．．あれ．．．。」

「確信はなかったからな。」

信繁は普段の様子に戻り床に座った。

「信じてたよー。」

秀頼はにこにこしていた。

”流石にこれは説明していただかないと。”

算は不満そうに信繁を見る。青海は．．．もう寝ていた。

”まあな。半分予感みたいな物だ。若様はよくお忍びで城から抜けていたからな。何となくだったが当たってよかった。”

”そ、そうなんですか．．．。”

算は呆れた顔で見つめる。

「でも．．．何があったんです？この時期に城を抜け出せば、大事にもなりましょう。」

信繁も優しく秀頼を見る。

「信繁がいなくて．．．寂しくて．．．。つい．．．。」

猫なで声に近いその声音に何故かときめくものを感じてしまう。

「供の者は？」

「途中で撒いちゃった。」

「あ．．．そうですか．．．。」

その言葉に呆れて信繁は秀頼を見ていた。

「もう．．．なんて言うか．．．戦．．．来るんだよね．．．。」

「ですな。」

その声は不安げではあるが、人をひきつける．．．何かがある。

「怖くて．．．。」

その言葉に全員が押し黙る。

「戦が怖いのか？」

信繁の声が優しく響く。

「うん。」

もう全員が自然と腰を下ろし、火を囲む。

「怖いのは・・・お母様だ。」

その声は少し震えているのが分かる。しかも何か言おうとするのを臆に制されている。

「どうしてですか？あれはあれでも必死ではないですか。」

信繁も流石に顔を引きつらせていた。

「・・・。」

何となく、暗い空気へと加速的になっていく・・・気がしてくる。

「昔もそうだったけど・・・最近のお母様の様子はおかしい。」

「どのように・・・。」

「それは・・・何か・・・最近は何もなくて・・・変なおじさんばかりとしかしゃべらないし・・・。」

「それは・・・戦が近いからであって、普段と一緒にでは？」

「そう・・・そうじゃないんだ！何て言うか・・・目が昔みたいに優しくないというか・・・。何か目が・・・目だけじゃない・・・。雰囲気もおかしい・・・何か突然気が触れたように笑うし・・・。」

「そんな・・・母ちゃんが怖いのか？」

しまはいても立ってもいられずに声を掛ける。だがもう誰も制しようとはしなかった。

「いや・・・まあ・・・普段から確かに怖いのですが・・・。」

箕も頭の中で淀君の事を思い出す。噂に聞くだけでも恐ろしく突然怒る方のようにその世話で疲れる様子は聞き伝えてはいたが・・・。

「何というか・・・目が爛々としていてもう・・・人の物ではないような・・・。」

その言葉に全員が押し黙っててしまう。

「それに・・・あの黒ずくめの人たち・・・何かこっちを嫌そう
な目で見ると・・・。」

「それは……。」

信繁の声に全員が押し黙ってしまった。

「それは確かにあります。只、当主がいな……。」

そこで信繁はある事を思い出す。そういえば昔……。豊臣秀頼とか言つてなんかよく分からない大男を出したとか出さないとか。だから家臣の間でもどっちが本物か論争になった時があつた。先日の戦いではそれはなかったが、今度もやらないとは限らない。そう思つて改めて信繁はじつと目の前の若武者を見つめる。複雑な人……。そう思えた。頭の中をいくつもの言葉がよぎるが、どういつても慰めなんかにならない。

「どうしたの、信繁？」

押し黙る信繁を全員が見つめる。

「いろんな事があるうとも……。私も昔そうでした。人質とかいわれ……。各地で囚われておりました。」

「そうだったな。」

「そうなのか？」

しまは不思議そうに信繁を見つめる。

「まあな。あの上田城……。見ただろ。あの城で一万や二万の軍を相手になんかは出来ない。だが周りの国はどこも大きいあの地では昔から、俺みたいにな次男坊とかは政略結婚とかみたいな物で、同盟の時に相手方に送られるのさ。何かあつたら殺される為にな。」

その言葉にしまは驚いていた。

「そんな……。事が？」

「まあな。いろんな所に行ったさ。上杉家、織田家、豊臣家。」

その言葉に秀頼を含む全員が聞き入る。

「だって、お前の父ちゃんとか……。お前の事……。大切じゃないのかよ！」

しまはつらそうに信繁につかみかかる。

「逆だな。大切だから相手から見れば人質の価値がある。」

冷たく話す信繁の顔を怒って睨みつけるしま。だけどそんな事を

しても何もならないのは知っていた。しばらく襟を握った手を……押し黙る信繁を見て……しばらくして離れた。

「長男を取るのには、家督のしきたりでダメとなれば俺の出番さ。ま、行く度に親父は泣いてたけどな。」

「……何……言……言……いいのか……分からない……。」
美井も寂しそうにじつと信繁を見つめた。

「だからといっていいのか、いろんな家の考え方が分かってくる。俺にとって足りない物も特殊な物も……。だから、俺はこうして戦って来れた。そのほんの少しの合間を縫って俺は色々学んできた。」

信繁は近くの柱に寄りかかる。

「だから、どんなに怖くても、俺は、引き返すのだけがいやだった。そこにしか俺の価値は……大人達から見た価値は無かったからだ。」

そのあっさりとした語りとは裏腹のない用に只じつと信繁を見ていた。

「だから秀頼様……。貴方もあの大阪城から逃げ出してはいけない。あの淀君から逃げ出してはいけない。きつとそこに何か……。口では表せませんが……。きつと何かがあるでしょう。」

「ありがとう……。信繁……。」

その言葉に全員がにこつとほほえんでしまった。

「只……。もう少しだけ聞いて貰える？」

「はい。」

もう何かが落ち着いたのだらう。秀頼も近くの柱に寄りかかると火を見つめていた。火の周りの木をちよつとずつ算がくべていた。

もう夜は深く、建物の隙間から上を見れば星空が輝く。

「なんか、不思議に思っておじいちゃんの死んだ時の話を聞きに伏見に行ったんだ。その時に変な話が聞けた。」

しまも落ち着いたように信繁のとなりに腰を下ろす。ここで言うおじいちゃんとは太閤秀吉の事だ。

「変な？」

「算も不思議そうに秀頼を見つめた。」

「あ・・まあ・・ね。お坊様が言う限り、伏見城に来る前にもうなんか、命を振り絞って伏見まで来ていたらしいんだ・・。そして何かを伝えようとしていたらしい。」

「それは？」

「わからない。ただ・・あ・・そうだ・・これ・・。」

「秀頼は周りを見て口をふさいでいた。」

「すまない。みんな。他言無用で頼む。」

「その言葉にその場にいたみんなが頷く。それを見て秀頼も頷く。」

「もう敵はいない。だから・・秀頼を頼む」と言っていたらしい。

「・・なんとなく・・信繁の涙が頬を伝った。」

「どうしたの？」

「いや。何となくな・・俺の想像が正しければ・・。叔父貴はすげえなって思っただけだ。」

「只、この敵はもういないってどんな意味が分からなくて。」

「今・・あの時の意味が分かった。」

「信繁の声は震え、頬を伝う涙が止まる事はなかった。」

「ん？」

「俺は何でもういらなんだよ！」

「真田信繁・・この時25歳。目の前の老人に今にも襲いかからんとしていた。」

「貴方の役目は、秀頼様誕生によりいらなくなったのです。だから、貴方はもう、上田の地にお帰りください。」

「老人の横の冷たそうな男はじつと冷たく見つめていた。」

「もう・・すぐにも、上田から使者も参りましょう。」

「だからいらぬかよ！ふざけるな。」

「その様子を老人はもの悲しい顔で見つめていた。」

「家臣でもいい！小姓でもいい！置いてくれ！叔父貴！」

男は叫んでいた。目の前の男は豪華な服装とは裏腹にその風貌はシワだらけで、小さな・・・老人にしか見えなかった。その老人はよろよろと近づくと急に信繁を抱きついた。それに合わせ取り押さえていた男と達は少年から手を離れた。

「お前は・・・もうここにいては行けぬ。あ・・・無い。」

”こんな所に・・・いては行けない。こんな所に・・・。”

徐々に小さくなる声に・・・後半は最早信繁しか聞き取れないほど小さかった。

「お前も・・・秀頼も・・・行長も・・・みんな家族じゃ！」

ここで言う行長とは、小西行長の事である。

”だから・・・生きてくれ！”

「だから・・・だから・・・だからだよ！」

信繁は秀吉の耳元であつても大声を上げる。いや、必死でもあつた。

その声に秀吉は改めてぎゅっと信繁を抱きしめる。

「お前はわしの息子だ！だから・・・だから・・・。」

そのまま更にぎゅっと・・・いや・・・万感の思いを込めて力一杯抱きしめる。その力強さは昔ほどでもないが、周囲はその様子にただただ黙ってしまふ。

「いや！わしの息子であるとともに昌幸殿の息子でもある。今は・・・今は・・・今は・・・帰れ！」

そついう老人の顔は涙でぐしゃぐしゃであつた。

「ま・・・そついわれてな。」

その昔話に全員がじつと聞き入っていた。特に秀頼は頬に涙を浮かべていた。

「叔父貴に言われるままに城を出た時、訳もわからなくて、親父の所に帰つた時にあつけにとられた顔をされたよ。」

「そんな事が。」

算も驚いたように見つめていた。

「あの時は分からなかったけど、あの時、叔父貴はあの城から逃がしてくれていた……んだと思う。だから……だからこそ……今度こそ……立ち向かうべきじゃないか？って思っただけなんだよ。」

信繁は一通り語り終えると、目をつぶる。

「今日は早く寝ましょう。」

「ですな。明日は早うございます。秀頼様。今日はお疲れでしょうからお休みください。」

「うん……あ……ああ……。」

秀頼は頷くと全員が床で横になる。算も全員が寝れる位置にいるのを感じると、火を消した。

「……信繁……。」

秀頼の寂しい……それでいてか細い声が聞こえる。

「はい。」

「今日は……そっちで寝ていい？」

「はい。秀頼様。」

そういつと秀頼は信繁の懷にそっと潜り込んでいた。その時見えた秀頼の顔は……どことなく寂しさに押しつぶされそうな顔をしていた。そう、誰もがその不安に押しつぶされそう……そんな感じであったのである。

「おはようさん。……で……こいつだれ？」

朝、信繁が起きて聞いた第一声がかれであった。ちょうど信繁のお腹のあたりに丸まって寝ていたのが秀頼でもあった。頬を見ると信繁以外では見えづらいもしれないが、涙の跡がほっそりと付いていた。

「ん？この人か？秀頼様だ。」

「秀頼様？あんたが様をつけるのは相当偉いつて事だろ？じゃ？今は戦寸前だろ？どうしてこんな所にいるんだよ？」

ちょうど背伸びをして筧が起きあがる。空が少し白ずんで、もう少しで日が昇ろうとしていた。

「まあな……。いろんな事があつたのさ。それを言い出せば俺たちも一緒だろ。」

そういつてそつと起きあがる信繁の脇で秀頼はぐつぐつと眠っていた。

「じゃ、どうするよ。」

青海は起きて肩を回して扉を開く。馬も起きているらしく、近くの草を煩でいた。それなりに体力も回復している……ように見える。馬でとばして夕方ぐらいには……大阪に着く。

「連れて行く。そうしなければ、あの淀君の事だ。一心不乱に探すだろうさ。」

「でも……若殿がこのような方だと思いませんでした。」

「まあな。好奇心が強くて……子供みたいな人だ。大阪に遊びに来た時によくあつていたんだが、いつあつてもこんな感じだな。よく鬼ごつことかさせられた物だ。結構なつかれてはいたんだが……幽閉されてからはあつていないからな。」

懐かしそうにすすつと足を更にかがめる秀頼を見つめる。

「そうですね。拙者が聞いていた秀頼像とは違い申してな。」

「それは……追々話す。」

「そういつと仕度を始める。その音に秀頼としまが目覚めます。」

「お早う……ございます。」

秀頼の礼儀正しい置き方と対照的なしまの起き方に、品の差を感じてしまう。

「んあ……どうした?」

「みんな起きたらとりあえず、大阪に行くぞ。」

「了解。」

「……もう少しゆっくりしようよ。」

秀頼の寂しそうな顔での語りについぐつと来る。夜は暗くて分かりづらいが……よく見ると……ものずごく可愛い……。筧は

その表情について見とれてしまう。

「すいません。私の予想が正しければ……。一両日前後で戦いは始まり申す。その場に貴方が居合わせなければきつと、数多くの者が死ぬやもしれませぬ。」

もし、このまま秀頼が帰らずに近くまで逃げる手はあった。だがこの時徳川軍の誰かに見つければ、その時は即時に殺されるかもしれないなかった。そうでなくとも、戦う前に敗北はあり得る。信繁はそう考えた。

「いっぱい？」

「はい。いっぱい。」

「分かった……。怖いけど……。行くよ。」

秀頼の泣きそうな顔についてしまはば「っ」と顔を赤らめ見つめてしまふ。

「お前ら、準備だ。」

「「お……。応！」」

その声に全員が答えて動き出す。馬にもう食糧もなく軽くなった荷物を載せ、各自いつもの所定位置に……。

「しま。」

「はい？」

「すまないが、一つ仕事を頼む。」

そういうと懐から小さな袋一つを手渡す。しまが不思議そうに中を見ると、金が……。結構多めに入っていた。

「そいつで、坂本宿で食事でもしてから……。徳川方の陣容を出来るだけ高いところから確認を頼む。」

「でも、俺、お前家、しらねえぞ。」

「大丈夫だ。大阪に入ったらそのまま城に向かってくれ。あ……。それと、旗と家紋を覚えておけよ。」

「分かった。とりあえず、紙は持って行く。」

そういうと、先ほど馬に掛けた背負子から紙と炭を取り出すと、懐に入れる。

「大丈夫か？」

寛は不安そうにしまを見つめる。

「まあ、どこまでの物が来るかは分からぬが、やらないよりかはましだ。」

「拙者は？」

寛が聞く頃には、しまは走り出しても見えないところに行っていた。

「後の物は帰るぞ。青海。」

「おう。」

「美井を頼む。」

「わかった。」

「秀頼様。」

「はい。」

そのきつぱりとした発言でつい背筋を伸ばし両手を伸ばす。

「秀頼様は拙者の背中に掴まってください。馬がこの数しかないので、すまないですが……。」

「いいよ。そういうのは気にしないよ。」

そういうとにこつとした顔で秀頼がほほえむ。

「じゃあ、みんな行くぞ！」

「応！」

全員が馬に乗ると、そのまま走り始める。しばらくしてしまを抜き去ると、そのまま脇道に入り、山を疾走する。分かってはいた。

大方……戦国最後の戦……そしてその結末……。分かっていて求められぬ何かが……。そこにはある気が……。信繁にはしただった。

第九節 忘れ形見の二人（後書き）

これで、江戸回遊編は終了します。次回からは決戦大阪城夏の陣編になります。今後とも・・・がんばって生きていきますのでよろしくお願
いいたします。

第十節 4月31日 決戦前夜（前書き）

大阪に着いた信繁は短い時間の中戦支度の為各所を回る。そのなかで事実を付き合わせ、一つの結論に至る。その事実とは・・・

第十節 4月31日 決戦前夜

第10節 4月31日 決戦前夜

「お帰りなさいませ。」

「すまない。時間がかかった。」

門の前で深々とお辞儀をする根津を前にして信繁は、申し訳なさそうに軽く頭を下げる。

「早速お伝えしたい事が……。」

根津は、焦りながら信繁の側に寄るが、その動きを手で制した。

そして傍らにいる女性を唐突に、そしてぎゅっと堅くぎゅっと抱きしめる。

「ただいま……。」

「お帰りなさいあなた。」

そう静かに、声を上げ、妻はじっと抱かれていた。門からずっと見ていた彼女は目の前に来る時までは不安な顔をしていたが、その様子はすぐに晴れていった。その様子をじっと美井は見つめていた。「すまないが、その間に何があったのか、聞きたいから、お前達は奥で待つてなさい。」

「はい。」

そう涼やかに奥さんは答えると、そのまま奥に行った。それに合わせ皆を奥へ手招きをする。それに応じ全員が信繁の部屋に……。

「やっと来たか。」

ヒゲモジャの……無骨そうな身なりの男が一人、先客で座っていた。

「後、後藤殿。」

そういつと信繁は急いで、座るとその後ろに青海達が付く。”後藤基次”先の戦で武功をたて、侍大将筆頭（実質上の現場監督者）である。また真田丸（城の一カ所に建てられた防衛拠点）の作成の

時には一緒に手助けをしてくれていた信頼出来る盟友でもある。

「久しいのお。」

「は。」

そういつて信繁は軽く一礼をする。それに合わせ皆も礼をする。

「早々堅苦しいのは嫌いだった。でな。」

「そういつと先に妻が置いたのであるう、器に入った水をぐいつと飲み干す。」

「此度の戦、お主ならどうするのか聞きたくての。」

「此度ですか……。」

信繁はじつと考えていた。確かに戦になるならと道中考えていた事もある。だが実際戦が避けられるならそれに超した事はない。

「出来れば、今までに何が起きたのか、ご説明願えないでしょうか。城内で聞くわけにはいかないので。」

「だな。」

後藤は鷹揚に頷くと、腰を浮かせ、そそつと信繁達に近寄る。

「先日……三日ほど前までに徳川軍は大阪に向けて行軍を開始したとの報告があった。交渉は上が行ったようだが、とりつく島もないというよりは……戦を上が望んでいるようにも思えた。」

「は。」

「でそれに伴い城内で、大野智治による奇襲案が採択され、奇襲が行われ、奇襲郡山城を奪うが、精鋭軍を目の前にして包囲され敗北、智治一人が逃げ帰ってきた。淀君は怒り狂ったが、どうしようも出来る雰囲気ではない。」

「それが……。」

「昨日の事だ。」

その顔は苦虫がかみつぶした顔だが、それ以上の考えはないように見えた。

「でな、淀君とかが、名案を求めて会議しているが、結論が出ないらしい。そこでだ。」

「はい。」

「ここでお主がぱっと、名案なんかくれれば……。」

「……。」
「算達は押し黙ってしまふ。ここまで旅行に出掛けているのだ。そうそう名案なぞ……。」

「今まで、色々見回ってきて、結構見えてきたものがあり申す。」
「ほう?。」

「ただ、今まで思案がまとまり申さぬ。そこで、明日まで待つて欲しい。」

「明日か。」

「髭をしゃくり、後藤はじつと信繁を見つめる。その髭の中でもつぶらな瞳は何とも言えない素直な……いや……何も考えていない目つきに見える。」

「ま、明日の会議も大方問答して終わりだから。明日聞きに来る。」
「はい。」

「そういうと後藤は立ち上がり、手に持っていた器を口元に添えながら……中身は空のようだ。」

「そうだ。」

「ん?。」

「後藤殿。」

「堺には兵を置きましたかな?。」

「いや。あそこには徳川が陣取っていると思う。」

「あそこから食糧を運ばれると、いくら籠城出来ても負けですから、どちらを取るでも、兵を向けるべきでは。」

「分かった。明日伝えておこう。今日はゆっくり骨を休めて考えてくれよ。頼んだぞ。」

「そういうと、大股で後藤は部屋を出て行った。」

「いいんですか?。」

「算は不安そうに信繁の顔を見る。」

「ま、そのためには、お前達に協力してもらおうぞ。」

「は……。」

全員が膝を突き、声を上げる。この飾らない人の扱いこそ、この信繁の際の真骨頂とも言える物なのだ。

「まずは・・・根津。」

「は。」

「今までの留守を守ってもらった事。感謝する。」

「・・・もったなきお言葉。」

「ありがとな。それで、とりあえず何が起きたのか人と落ち話して欲しい。とりあえず、皆で聞いてもらおう。」

「は。」

そうかしく根津は、どかっとう腰を下ろすと、周りを見渡して話を始めた。

信繁様がですすぐの事、徳川方の工事舞台に異変がありました。・・・それが、どうも外堀のみならず、内堀の埋め立て工事も始めてしまいました。只・・・これには淀君も顔を真っ赤にして怒っておられました。・・・それが、実際に内堀を掘り返そうとした直後何故か、南蛮の衆と淀君が急に方針を転換、戦をすべからずと言う事で、そのまま徳川軍を返してしまいました。

「結局は？」

内堀はなくなり、平野が広がるばかりとなりました。只、淀君には何かお考えがあるはずなのですが・・・拙者や後藤殿の耳には入らず、訳が分からぬ始末。そして、しばらくして、兵士の脱走騒ぎと聞きました。夜に兵士が脱走したそうなのですが・・・その後今日に行くと、死人が歩いていたら・・・聞きました。しかも徳川殿がそれを退治していたらしいのですが・・・こちらにもその時、脱走した兵士を虐殺している徳川達を止めてこいと言われ、拙者達は出陣したのですが・・・その時・・・その時・・・

「どうしたんだ？」

拙者達が行った頃には最早、事は終わっておりと言うか・・・そこには生きている人を拙者はしばらくの間見る事が出来ませんでした

た。

「そうか……。」

隠れていた傷ついた兵士達はどうか回収したのですが……それが……。

「それが？」

どうも青く顔が青ざめた徳川ではない兵士に襲われたとか。すぐに拙者達は引き返しました。最後には何故か、顔が青ざめた兵士達が南蛮衆に率いられて帰還してきてして……。その現場の悲惨さが伺えます。それから私たち傭兵衆は城近くでの待機を命じられました。またその頃からちらほら……。戦の噂が聞こえていまして……。噂通りなら……。もう旅に出る前後には密かに、南蛮衆に武器を頼み、それはもう城内に届いているとか……。拙者が見る限り、今まで雑賀集や国友銃であつてもあそこまでの鉄砲は見た事がございませんでした。今回それが各部隊に配備されるそう。

「それは……。今まで聞いた中では一番いい報告だな。」

只訳の分からぬ人形やら不思議なものもたくさん来まして、もう現場は混乱しております。

「そうか……。苦労掛けたな。」

いえ、それで話は終わりませぬ。

「うむ。」

それから今まで……。拙者と後藤殿が聞く限り、ほぼ評定にも顔を出さずなにやら儀式ばかりをしているそう。聞いた限りでは戦勝祈願だそうですが、不気味な声が、ずっと城内で響いているので、それはもう見張りの衆が怖がって。

「そうか。」

で、それとともに南蛮衆はなにやらしているとか……。

「そういえば秀頼様は？（今朝……。そういえば城近くまで送って入ったものの、どうなる事か……。）」

それが……。拙者も含め、誰が秀頼様か分からぬ始末で……。

「は？」

と言うもの、一応拙者たちで戦があるかもと言う事で幾度か、訓練に秀頼様をと嘆願いたしました。そしたら……。

「そしたら？」

訓練は数日行われたのですが……そのたびに違う秀頼様がでて……。

「はい？」

ある日は金髪の長身の隆々とした上半身裸の秀頼様がでて、次の日には2尺はあろうという大きさの顔だけが細い、とてもまるまるとした秀頼様がでて……。流石に兵士達にこれを見せると兵が動揺するといつて、淀君ごとお止めしましたが、流石にあれを見せられた我々の士気は下がる一方で、それからはもう訓練に呼ぶ事もございませんでした。上はやる気がないとしか……。

「……本当に……本当に苦労掛けたな。」

は。只、それで、戦準備が始まり……。それを察知した徳川軍が上洛。今に至ります。

「分かった。」

深く頷くと、信繁は今まで聞いた根津の情報を思い返す。予想よりも……。いや……。しばらく徳川に行っていただけに分かる。出来るだけ蒸し返さないようにしていたものが、こちら側の失態で蒸し返されている局面もある……。それでか……。半蔵が来た意味を今理解する……。最悪でも内堀埋めの時間稼ぎだけでもか……。消極的でもあるが……。それだけ万全を期す必要があったのだ。いかに向こうが手を抜かずに来ているかが分かる。

こちらは自滅するほどにどたばたなのに、向こうは水の一滴も漏らさぬ構え……。考えれば考えるほど、絶望的だ。だが、それに輪を掛けて分からないのが味方とは……。淀君は何を考える……。まずそこから見定めねば、策略は全て無駄撃ちになる。

「根津！」

信繁は立ち上がると、根津を見る。

「俺と一緒に埋められた内堀を見にいくぞ！」

「俺たちは？」

青海が不思議そうに見つめる。

「お前達は・・・大方戦は街道の兵数から察するに家康本隊はまだ・・・もう数日かかると見た。だからそれまでに戦仕度・・・いや、死に仕度を頼む。」

その言葉に場にいる全員が凍り付く・・・美井を除いて。

「大方徳川・・・いやこの日の本全てが大阪をつぶしに来る戦ぞ。」

その言葉に全員が唾を飲み込む・・・美井を除いて。

「それほどの戦ですか。」

「まあ予想はしていたが。」

信繁は部屋から見える黒塗りの大阪城を見つめる。それに合わせ全員が大阪城を見つめる。まだ昼過ぎで、黒塗りが更に黒く見える・・・美井だけはどこに大阪城があるのか分からなかった。

「先の戦で、徳川の手勢・・・いや徳川だけで滅ぼせぬと分かれれば、どんな手でも使うのが関ヶ原と一緒に・・・いや、下手すれば此度は前よりひどく、酷いものになるう。」

「関ヶ原よりですか・・・。」

寛の言葉は全員の意見を代弁していた。

「だから・・・生きても死んでも・・・悔いがないように各自仕度をしてくれ。」

「分かりました。」

そういうと、寛と、青海は改まり、一礼すると、信繁の部屋から颯爽と出て行った・・・美井を除いて。

「よく分からないけど・・・すごい・・・事が起こるの？」

残された美井一人がじつと信繁を見つめた。

「まあな。この国・・・最後の戦だ。」

「・・・よく分からないけど、すごいが・・・分かった。」

「この子は・・・。」

根津は不思議そうに小さな少女を見つめる。この時代連れ子は珍

しくないが……。

「とある仕官の子息でな。頼まれて……いや拙者の為にと連れてきたのだ……そうだな……。」

ふと、いろいろな事が信繁の頭をよぎる。

「そうだな、折角だ、焼ける前の大阪、見に行くぞ。」

「はい。」

美井は素直に頷く。その言葉の響きにあるむなしさを感じぬままに。

「あれか。」

ふと、小高い丘から周囲を見渡すと大阪城が見える。昔は外堀があり、美しい曲線の堀が一回り小さくなっている……？あれ……。

「あれが大阪城か。」

「はい。」

根津が頷く。

「で、あれは？」

信繁が指を指したところは何故か内堀さえも埋まっていた。

「あれですか。拙者も気が付きませんでした。あの位置……ちようど武器の搬入を行った時に船があつた位置でしたね。」

その言葉を聞き信繁は更に全体を見渡す。山を二つ挟んだ南側はちようど平野が広がったみたいだ、間隔さえある。ここで農業すればさぞ楽にみんなが生活出来るだろう……。只あの城がちようど目立つ……。いや町になるな……。頭を都市計画がよぎる。だがここ、ちようど城の堀と相まって盆地みたいだ……。そういえば先の戦いで、防衛側が粘った俺がいないところはちようど谷間だった……。風は……。ちようど南側に吹いている……。死人しひが出た……。

「根津。」

「は。」

「先の戦いで、南口の話は聞いた事があるか？」

「いえ。」

じつと考えながら地形を見つめる。この地形を把握する事。これそのものが、軍師全てにいえる必須事項・・・”地の利”である。例えば生まれ育った地元であってもこれを欠かせば破れる事さえある。そう父から教わった。実際上田の戦いでも戦鬪前に領地を必ず見回り、策を建てた。ここは埋め立ててすぐらしく、人の姿さえない。確かに内堀から、大砲を撃てばここに殺到する徳川軍は手痛い打撃を受けるだろう。だが先の戦いでも天守閣に届くほどの銃は知っているはずだ・・・この程度を分からぬほど淀君は馬鹿ではない。ここに敵軍を足止めしても、東側からこれば終わりだ。だが、堀が機能し、一度南側に迂回しなくてはならないが、その時は・・・。だが、城にある大砲をどう足しても15万を討てるほどはない・・・。と言う事はこの上に更に何かを足すという事だ。何を足す？それが今の段階でも後藤殿の頭に入ってははいない。と言う事はかなり人外じみて・・・死人・・・。今まで何回か死人と戦った事はあれど、あの黒づくめの連中とやらが使う方法に知識はない・・・それが先だ。そういえば、前、何故か涙ながらに去っていった兵士がいたはずだ。その時は聞けない何かがある・・・。いや・・・きいて・・・。

「根津。」

「は。下八の居場所は知っているか？」

下八というのは、その当時、大阪城につとめていた兵士であったが、何かと信繁とつきあいがあった為、覚えていたはず。確か、冬の陣である南の防衛を担当していたはずだが・・・。

「それは・・・堺とかに今は居を構えているそうですが・・・。」

「いくぞ！」

そういつと馬を町に走らせていった。ここから堺の町までは二刻（4時間）ほどである。

「でもまあ、ここも忙しいな。」

信繁は堺の町を馬に乗り、少しゆっくり目に歩く。

「ですな。」

町は人々がひっきりなしに歩き、手には武器とかを抱えている。この町は対抗がいるよりかなり前から、自治組織がはっきりしており、大阪が淀君の手にあつても、協力であつて服従はしないという態度を取ってきたいわば”自由都市堺”であつた。只、自由都市であると言う事は自分の身は自分で守らねばならない。そう、此度の戦でここが戦場となるなら、堺は徳川相手でも牙をむきうる都市なのだ。だが・・・逆を返せば、徳川でも金を払えばお客様と言う事でもある。それが商売なのだ。だから、こうして入ってきて誰もとがめなかつた。しばらく馬を走らせると、一見の着物屋の前に来る。ここはそれほど大きくないものの、建物はそれなりのものだ。

「ここは？」

「ここは拙者が聞いた中では一番下はちと親しい・・・確か親戚との事ですが・・・。その家となります。」

「おおきいな。」

美井も珍しそうに着物を見つめる。いかに江戸が大きくとも、堺で扱う繊維量は桁が一つ違うだけあつてその着物はどれをとつても鮮やかだ。

「いらつしやいませ。」

奥から声が聞こえる。大方この規模の店なら番頭と言つたところであろうか。駆け寄つて・・・。

「よ。」

「これは・・・信繁様。」

そういつて大きく一礼をした番頭らしい男を見ると信繁達は馬を下りた。

「久しいな下八。」

「どうかなさいましたか？この忙しい時でしょうか・・・。」
「聞きたい事がある。中に入れて貰えまいか。」

そういつと信繁はじつと下八を見つめる。

「分かりました、よくは存じませんがどうぞ奥へ。」
「そういうと奥へ通されていった。」

「何の用でしょうか。」
「少しこじんまりした部屋である。大方一番小さな矢であろう、奥には幾つかの部屋がある。」

「お主はここで何を？」

不思議そうに根津は聞いてくる。

「ここで・・・番頭をさせてもらっています。城をやめて暇していたところを、この主に拾われまして・・・。」

「そうか・・・それはよかった。」

信繁はほつとした顔で見つめる。その顔は年老いて、しわしわであるが、その暖かみがある顔はどこか人をほつとさせる。脇から、茶を取り出すと人数分目の前に置いた。作動で使うものではなく、もつと薄いものだ。

「用件とは？」

「・・・どうして城をやめた？俺に一言言ってくればどこか紹介したのに？」

「・・・それは・・・あの時は・・・色々嫌になり申して。」

「どこが・・・。」

先ほどまで柔らかく笑顔だった下八の顔がみるみる、誰が見ても分かるぐらい曇る。

「・・・あなたはきつとあいつらとは違います・・・。だから・・・あなた様こそ、あの城から逃げ出してください。今ならきつと逃げ仰せるでしょう。」

その必死そうな顔を見て根津が不安そうな顔になった。それを信繁が軽く手で制した。

「もしかしたらだが・・・あの戦の時・・・何かあったな？」

「そう問いたただす信繁の声に反応はなかった。」

「死人・・・だな。」

その言葉に今度は根津が驚いた。むろん下八も顔をハツと上げる。

「そこまでご存じなら分かるでしょう。あれは・・・いや、城の連中は・・・人じゃありません。」

その顔は嫌悪に満ちていた。

「詳しく・・・聞かせてくれないか。あの日、南側で何が起きて、徳川軍を追い払ったのか？」

「・・・。」

じつと下八は信繁の顔を見つめる。その顔は泣きそうな・・・いや、地獄を見たような顔だった。

「覚悟は・・・。」

「覚悟なぞ出来ている。」

「分かり申した。もしかしたらこれが天命かもしれませぬ。お話し申そう。」

そういう覚悟の声に、根津はただ、見ているしかなかった。

「ちょうど真田丸から歓声が上がリ、勝利の音が響く頃・・・私いた南側は鉄砲とかで門を死守しておりました。負傷兵も多く、それでもぎりぎりの所で踏みとどまっていました。」

その時です。私も要して参りまして、一度持ち場を離れ、用を足しに行きました。その時、急に・・・門の開く音がしたのです。確かにここを越えても城までもう少しありますが、これは一大事だと、鉄砲窓に向かいました。・・・そこには南蛮衆がいて・・・何か手に黄色い粉を撒いておりました。」

「南蛮衆！」

「だと思いません。妙に大きな黒ずくめがいましたからな。それで門の方を見ると南蛮衆が門を開け始めましたそして手に持った粉を徳川にも撒き始めました。」

その顔は悲惨その物だった。

「敵が来ると思い、一目散に逃げました。そしてしばらく奥まで逃げるのですが・・・何の音もしないで・・・少し立ち戻り先ほどの持ち場を見ました・・・。」

そこで下八は目と口を押さえる。

「どうした？」

信繁は立ち上がり、下八に駆け寄る。

「思い出しただけでも吐き気がします。」

「無理なら言わなくてもいいぞ。」

根津も心配そうに見つめる。

「いや・・・お気遣い感謝します・・・。そこで見たのは・・・。

人を食らう人の形をした鬼の姿でした。」

「・・・。」

「その時見たのは生きているものを見ると敵味方構わず、襲っているようでした。只・・・何故か南蛮衆だけが襲われず、高いところからじつと見つめていました。信じられないと思いますが・・・本当です。只、その鬼どもは徳川、豊臣どちらの格好をしたものもありません。・・・しばらく見ていると、噛まれたものはどんどんその鬼になっていきました。」

その言葉に全員が息をのんだ。

「あれは・・・今でも思い出したくありません。すぐ逃げました。

すぐ上の所までいきました。物陰に隠れ、鉄砲口からじつと見て・・・いや・・・逃げれませんでした。死人どもの肉を食らう音がそこから中でして・・・それで、怖くなって、物陰に隠れていました。しばらくして・・・音が無くなり・・・それでも怖くて・・・しばらく待つて顔だけ出すとそこには食い散らかされた死体の山と・・・列になって歩いていったあの死人どもの後ろ姿でした。あれ以来、怖くて・・・誰にも話せませんでした。あんな事があるのでしょいか？」

「いや・・・まあ・・・感謝する。」

信繁は深くお辞儀をする・・・半蔵のいつていた事は本当だったのだ。それはそうだ。死人相手ではいたずらに軍を向ければ只相手の数を増やすだけだ。事実上落とせる城を死人の前に敗北したのだ。それはあんな執念を燃やす。今まで死人を用いた戦術など・・・ありもしなかった。

「それからというものの、城を守る事に疑問を持つようになり……やめました。」

「そうか……。」

根津も頷いているが、その顔は動揺していた。

「戦は……ここまで来ますかねえ。」

下八は根も抜けきったような声で話す。

「徳川殿はここを戦場にはしないし、豊臣もそうはしないだろう……」

・只夜盗は来るやもしれん。注意はしてくれ。」

「分かり申した。」

そう頷くと下八は立ち上がる。

「そうだ。」

信繁は立ち上がると懐を探り財布を見つめる。

「……後二つ用件が出来た。頼まれてくれるか？」

「は、はい。」

「一つは……明日ぐらいに拙者の家族をこちらによこす。しばらく……」

・戦が終わるまでかくまってはくれまいか？」

「……先ほどの事……城へは？」

「言わん。言えば城のものに俺が殺されてしまいそうだ。」

「確かに……。」

下八は頷くと軽く……気弱そうにほえむ。

「分かりました。戦が終わるまでならお受けいたそう。只、戦が終

わったら……。」

「わかつている。」

そういうと信繁もまた悲しそうな顔で微笑み返す。」

「そういえば……。後一つの用とは？」

「そうだ。ここに幾ばくか金がある……これで、この子に少しき

れいな着物と見繕ってはくれまいか？」

そういつて、熱いお茶を息で冷ましながらちびりちびりと飲んで

いる美井を指さした。

「分かりました。」

そう頷く下八から笑みがこぼれた。

「信繁……ありがとう……。」

そう自分の新しい着物を見て美井は嬉しそうだった。あの店によつた後はゆつくりと港まで馬を歩かせていた、堺の町を美井達に見せていた。もしかしたらこれで見納めかもしれない……しばらくすると、何番街が見える。この先に南蛮船を泊める専用の港があった。普通の船と区別がしてあり、一種独特の空気が漂っていた。と言つのも南蛮の船は外洋向けの大きな船で、普通の船と一緒にすると事故が起こるからだ。

「でもまあ、なかなかいいものを……。」

根津はじつと根元に置いた美井の姿を見ていた。少し明るめの赤の着物で、その模様に酉をあしらっている。なかなか鮮やかで前の着物よりはきれいだった。

「見てみる、ほら、懐かしいだろ……。」

「そういえば信繁様……。どうしてここに……。」

不思議そうに南蛮町をあるく信繁をいぶかしそうに見ていた。

「ん？状況を聞いた時にな、大きめの貿易船が来ているとかで、その大きめの船って奴を見てみたくな。」

「ああ。あの黒い。」

根津は納得したように馬を先に走らせる。

「こちらです。」

そう言つと根津は港の開けたところに連れて行く。そこには幾つかの船があり……普段よりは少なめである。むろんこれは戦が近いので逃げ出したのであろう……当然だな。

「あ……あれ……あれ……あ……！あれ！」

港から船を見始めた時美井が急に震えている。根津もその様子に押さえるように美井を抱きしめる。その様子を見た信繁は馬を美井に寄せる。

「どうした？美井。」

「あ……」

美井は身体が震えながらも港に泊まるある船に指を指す。確か苦い用船にしては一回り大きい船、そしてその黒塗り加減が何か……大阪城に似ている気がする……。

「log……lodrigs fantazmu」

「どうした？」

「なにが……」

「逃げよう……パーパが……殺される!」

美井の錯乱ぶりが激しくなっていく、あの船に何かがあるのだから。信繁は根津の馬を叩くと、自身も引き返し走り去る。しばらくも走ると、郊外まで抜ける。その頃には落ち着いていたが、ちょうどそこからも船を見る事は出来る。近くの小高いところに陣取り、馬をつなぎ止める。

「大丈夫か？」

根津を馬から抱きかかえて美井をおろすと、美井をその場に寝かせる。

「ご、ごめん……あの火から……あの火から……」

「大丈夫か？」

「う……うん……」

「この子はどいう……」

根津は心配そうにそう言うと、船の砲を見つめる。貿易船は三隻ほどあるが大きく、ここからでやっと全容が見える。その大きさは確かに異常だ。

「この子が……三浦按針殿の娘と聞いている……エゲレスの子だ。」

「はあ。」

「で何で？船見て痙攣するんです？」

そう言いながら物珍しそうに美井を見つめるが……。よく様子は分からない。

「あの船……イスパニア……。イスパニアの軍艦……。世界最

強……。パーパはその船に追われ、船が壊れ……。あそこにいた。

美井は頭と顔を手で覆い、震えていたが、そこから震えるように……絞るように声を出していた。

「あれは……。イスパニア……。ヨーロッパ……。ここで言う伴天連最強の艦隊……。パーパは……。あれに追われ……。イギリスから逃げた。」

「大丈夫だ。俺たちが守る……。」

「本当？」

「ああ。」

信繁は大きく頷く、その声に美井は手を開く。

「本当に？」

「ああ。」

そう言うとしばらくして手を顔からどけて、じつと船を見つめる。

「あの船がどうして……。ここに……。ここにいるのか分からないけど……。あれはパーパを追ってきた船。そして……。イスパニア最強の船。」

そう言うって美井は特にひときわ大きい船を指さす。

「あれは貿易船だ……。」

「それは違う。あの横の線……。」

「あれか……。」

そう言うって美井を抱きかかえ、少し横が見えるところを指さす。

「あれ……。全部大砲。」

「は？」

根津は驚いて指を指し数え始める。船に横線は三本引かれ、よく見るとそれは船一杯に引かれている。

「しかも、大方、カローネだと思う。」

「カローネ？」

「うん。最新の大砲で、山を一つ越すぐらいは飛ぶ。」

「……。」

その言葉に信繁は押し黙ってしまふ。そんな船が世界にあるんだ。

「それでパーパの船は遠くからぼろぼろに……。」

「そうか……それは確かなのか。」

「うん。」

気むずかしい顔で船を見つめる。そんな軍艦が増援なら確かに勝てる……。だが町に被害を出す事は出来ない。大切な港だからな……。そして何より大砲で城も壊されるわけにはいかない……。

「いきますか。これなら万全でしょう……。この子には悪いのですが、そんな強力な艦隊が味方なら……。信繁様？」

信繁はじつと船を見つめる。只ひたすらに安心していいというわけではない。何か……。策を練っているに違いない。これだけで大砲持ちの15万を相手に勝てるとうてい思わないはずだ。少し整頓してみるか……。大方あの南蛮衆……。確か宣教師だ。南蛮だからとはいえ世界最強の軍艦とかというものを呼ぶほどにすさまじい……。それが三隻……。

だとして……。何かが結べそうな……。頭の中がぐるぐると回る。「イスパニア……。嫌い。自分の事しか考えない……。」

美井は小さくつぶやいた。さっきの根津の言葉に反応したのだから。

「大砲とか地上向けに討つ……。少ない。人、いっぱい死ぬ。」

「それが戦だ……。」

「でも……。あんなのは……。戦じゃないよ……。只……。人が死ぬだけ。」

「だとしても、いこう。さっきの話が本当なら、ここには長居すべきじゃない。」

「は。」

そう馬に戻る信繁の胸に悪い予感がずっと去来していた。

誰でも戦いで死にたくはない。それは当然だ。だが味方の被害を考えず大砲を撃つ戦いは今までした事はなかった……。だが……。あの淀君はそれをしかねない。だがどうする……。死人が制御出来

ても相手に対策がある。半蔵は最低限度、対策を持ち込む。確かに数があればどうか分らないが……。確かに大砲があれば相手を制圧出来るが……。だからといって押さえられるほどじゃない。何しろ味方がいるところで使う事は出来ない。それが大砲の鉄則……。なぜなら大量の死傷者がでる……。そう言えば……。あの本の外堀は広いが、地形上半分盆地みたいな作りだ。埋め立てた時のこともあり、かなり立地的に低いはずだ。じつと夕食後、頭を働かせ、信繁は部屋に籠もるが、結論が出ない。そんな平気がいくつあろうと15万という大群では……。3倍ぐらいある戦力差では覆すだけの切り札ではない。それを集中的に……。集中……。そうか……。だとして粉は……。ア……。そうだ。死体でも動かす事が出来るなら……。相手が死んでいてもいいなら……。相手が死んでもいい状態なら……。大砲は相手も巻き込む……。

「何となく分かった……。だがこれは……。人が行う戦術ではない！」

信繁は怒鳴り声を上げてしまう。だが夜も遅く……。朝には後藤殿が来て、戦略を聞くだろう。でも会議をしていると言う事は……。この事は限られたものしか知らされてはいないのだろう。懐から一つの袋を取り出し、信繁は近くの棚から、地図を取り出す。そこに袋の中にあつた駒をゆっくりと置いていく。駒の配置は戦の後半、外堀後に攻め込まれた時の形だ。

「確かにここなら15万でも誘い込めるし……。それにここなら大砲がどんなに精度が悪くとも、誰かには当たる。被害は甚大だろう。だがこれを行い、相手をここに押しとどめるには……。5万の部隊を持ち込む必要がある……。」

駒を横に並べてみるが、どう見ても数が足りない。しかも薄ければそこを機転に強行突破されてしまう。むろん入り始めたところから大砲を撃つだろうが、それでも……。ちょうどこんな所に山が……。そうか。そう何か頭にひらめくと、淀君の作戦というものを考えてみて……。夜は更けていくのであった。対策とかを考えなければ

自分が巻き込まれ・・・死人にされしまつのを阻止しなくては・・・。

「おはようございます。」

妻の声を聞くと欠伸をしながら信繁は広間に向かう。今は戦仕度で全員を向かわせた為、家人はおらず家族・・・いや、美井がいるか。

「今日はこちらを。」

そう言つて出された膳には赤味噌のみそ汁とご飯・・・そして漬けた漬物と焼かれた魚があつた。

「これは・・・。」

「もうすぐ戦なのでしよう。これで精をつけてください。」

「ああ！ありがたい！」

うつすらと信繁の頬に涙が伝う。家計は戦に向けて苦しく、最早食費はほとんど無かつた。だからこの焼き魚を見た時、つい涙が出てしまった。いや、これからの事に・・・。

「すみません！」

飯に箸を付けようとしたところ、外から声が聞こえると、庭に荷車が入ってくる。

「お！」

外を見るとそこに下八の姿がある。

「信繁様！」

「どうした？」

そう言う中に入ってきた荷車を見る。むしろが掛けてあり、中を見ると幾つかの樽が入っている。その荷車が12ぐらいはある。

「機能、信繁様が帰った後に大旦那から、ここにこれを運ぶように言われて・・・来ました。」

「これは？」

不思議そうに信繁は樽を開けると・・・

「確か・・・真田信之様でしたっけ？あの方からここに運ぶように

言われたものです。」

「そうか・・・そうか・・・そうかそうか！」

何回も頷くと信繁は頬をゆるませていた。

「こんなのをこんなに送りつけて・・・何をするつもりです？」

そういつて不思議そうに樽を見つめる下八の手を信繁は握りしめた。

「これがあれば俺は百人・・・いや・・・千人力だ。助かる。」

「いや・・・まあ・・・」

「どうなさいました？」

妻や子供達は不思議そうにその様子を見つめた。

「そうだ・・・。お前達。」

「はい。」

信繁は落ち着いて妻達を見つめる。その顔は真剣その物だ。

「お前らは逃げてくれ。大方ここも戦場となり、きつとお前達は死んでしまうだろう。」

「それでも・・・。」

「いや、もし俺が生き残ってもお前達が死んでは帰るところがない。そこだ。」

「はい。」

「この人についてしばらく堺で身を隠して欲しい。」

その言葉にじっと旦那の顔を見る妻であったが、何か覚悟を決めたようにきつと唇を噛み・・・しゃもじを握りしめていた。

「・・・分かりました・・・。只・・・せめて仕度はさせてください。」

「ああ。」

そう言つと妻と子供は奥に入つていった。その顔は覚悟はしていたものの、寂しそうでもあった。

「大変ですな。」

「まあな。結婚してすぐだけど・・・それでも・・・愛した女だ・・・せめて生きていて欲しい。」

「そう言えば・・・仕度なら荷物は・・・。」
「そうだな。」

そう言うつと荷車のムシ口を取り除くと、樽を下ろし始める。
「荷物はこいつに載せていってくれ。樽は俺が責任持って運ぶ。」

「分かりました。お前ら！樽を卸してそこに並べろ。」
”はい！”

そう言うつと荷車を押していた人足達が荷物を下ろし始める。

「・・・せめて・・・荷車一つは置いていって欲しいな・・・運びやすいから・・・。」

そう小さく言っている言葉は男達の掛け声に消されていった。

「で・・・これですな・・・。」

呆れたように筧は、庭に置かれた一つの荷車と、無数の樽がそこにあつた。かなり重い為運ぶには手間だ。

「これは？」

「これか？これは塗料だ。」

「は？」

「兄貴からの贈り物だ。」

そう言うつてにたにたした顔で樽を見つめる。

「いつ？」

「あの時商人の所に行つたろ。あの時に手配してもらつた。」

「ああ。あの時。」

そう言うつて樽の中身を覗くとそこには赤い塗料があつた。

「・・・。」

筧はつい押し黙ってしまふ。赤い塗料・・・。

「これは・・・もしや・・・。」

「そうだ。ある意味・・・武田最後の戦いだ。」

「赤備え・・・。」

昔戦国に置いて”赤備え”とは伝説みたいなものだった。無敗を誇る最強武田軍の唯一の特徴。それがこの装備を赤く塗る”赤備え

”である。赤く塗った”赤備え”を装備した部隊は武田軍に置いて勇猛であるものという優秀な人間達の証であり・・・誇りであった。「そつだ。これには親父からある伝説があつて俺の胸も赤く塗つてある。」

そつ言つて、今は戦に向け日干し中の甲冑は真つ赤であつた。

「算は昔、甲斐にいたつて。」

「はい。だからこれは感慨深くございます。」

そつ言つと懐かしく、赤く塗られた甲冑を見つめていた。

「昔・・・武田軍は奇襲を主とした部隊だつた。だから全ての甲冑と衣装は夜の闇に紛れるように黒く染めていた。」

信繁は旅でも使つていた水筒を取り出すと中の水を少し口に付ける。

「ある日、拠点を取つた武田軍は、近くの豪族の部隊に囲まれてしまつ。兵力にして500対3000。城の中には数多くの民もいた。」

「それはまあ・・・かなりの差で。」

「その時に信玄公は自分の血を甲冑に掛け、赤く塗つた。そして俺に付けてこい」と言つて戦場に一人飛び出していった。むろんお付きの者も全て後を追い戦つた。その血まみれの信玄公を見た兵士達はその色におののき、その戦に勝利を収める事が出来た。」

「すさまじい話ですな。」

そつ言つて算も縁側に腰を掛け、じつと塗料を見つめる。

「それ以来伝統で、”赤備え”にはある儀式を必要とした。そして・

・・・」

そつ言つと部屋に入つていった信繁は古くなつたぼろぼろの切れ端を取り出した。

「それを俺が行う番だ。」

そつ言つと草履を履き、塗料のふたを開ける。そして刀を抜き放つ。

「なにを・・・!」

筧が止めようとする瞬間、信繁は自分の腕を切りつける。腕からは鮮血が飛び散り、塗料に入ってしまった。

「赤備え」と黒の部隊”これが武田軍常勝の秘訣よ……。「だ……大丈夫ですか。」

そう言っただけでしゃべっている間にも信繁は歩き、赤の塗料に自分の血を注ぐ。

「まあな。どのぐらいの量が分からぬがこれで十分だろう。」

そう言うのと全ての樽に自分の血を注ぎ、そして縁側に置かれた水筒の水を傷口に掛け、傷口を布できつく縛ると、しばらくして血は止まった。

「……これにどんな意味が……。」

「ま、願掛けだよ……後は目立つ事によって囷の意味合いを強くして、他の部隊の援護を行う。何より……これで血が繋がった……父はそう言っていた。だから家族みたいなものだ……。」

息も絶え絶えに信繁は縁側に座るとやり遂げた顔をしていた。

「それは……拙者とかにも……。」

「ああ。そうだみんなの分だ。」

そう言っただけでこりこりとしていた。

「うあ……なんだこれ。」

その声に二人が振り向くと、後藤の姿があった。

「これは何か妙に臭いぞ。」

「塗料ですよ。」

信繁が軽く答える。

「でだ。何か名案あるか？」

「はい。とりあえず策は固まっています……。」

「ますか？」

後藤は不思議そうな顔で信繁を見る。

「これは各侍大将の皆に知って欲しい事がございます。ですから、会議の後でいいので、こちらに寄っていただけませぬか？御前会議では出来れば、少数でもいいので打って出る方針で。」

「分かった。会議が終わった今日昼過ぎにはこちらに来る。」

「そう言つと後藤はさつと去つていつてしまった。戦はすぐそこ。当然だろう。」

「で、傷は……。」

「後はこれを昼前には食す。」

「そう言つて奥の棚から肉をひとかたまり取り出して、切り始める。」

「これは？」

「桜肉だ。駄馬を処分する時のものを譲り受けてきた。」

「これは……。」

「仏教とかの信心が多いこの頃で肉というのは珍しい食材でもある。」

「東洋の考え方らしいのだが、”医食同源”という。何でも同じ所
のものを食べれば同じ場所が直るといふ。そこで肉を食べ、血を増
やすという算段だ。」

「そうですか。」

「そう言つてこの血なまぐさい固まりを見つめていた。」

兵士達を呼び集合所に塗料を運ばせた直後に侍大将達が続々と信
繁の家に集まつてくる。そして手招きして部屋に招き入れると奥の
座いっぱいに鎧を着た男達がひしめき合う状態になった。

「信繁。何するつもりだ。」

侍大将達は不思議そうに信繁を見つめる。

「少し説明したいのですが、その前にお聞きしたい事がございます。」

「

”応”

「先の会議で淀君様はなんと……。」

「ああ。城前に兵士を並べ、大砲で全員をなぎ払えばどうにか勝て
るだろうと。流石にそれで勝てれば誰も苦勞はしない。」

「やはり……。」

「信繁は手に持った地図をばさつと広げ皆に見えるように駒を置い
た。」

「これは……。」

「先の作戦を見せるところです。」

そう言つて信繁は城の外堀が欠かれたところに駒を置き、近くの海に硯を置いた。それを侍大将達が食い入るように見つめる。

「あのお方は何も言つてはいませんが、作戦としては……ここで戦鬪を行い、拙者達と敵兵を巻き込み……。」

横の硯から何かをとばす仕草をする。横の硯は大阪湾の西の海にあり、硯の大きさもあつてかなり大きく見える。

「前と横から大砲を撃ち、第一陣を沈めます。」

ごく。誰かの唾を飲む音が聞こえる。

「それ死んだ兵士達を南蛮衆が死人に変え、徳川軍に襲わせる。それで撃退する為に広い広場みたいな場所が欲しかった。何万という死人なら、相手の数が多くとも勝てる正気が見え、我らは死ぬ事により、軍事費は払わなくともよいと。」

「そんな事があり得るのかよ。」

若い侍大将は声を震わせていた。何かこう今まで言われてきた事の符号が合った瞬間であつた。

「だから、南蛮衆が……。」

「それで……。」

ざわざわと周りがなり始める。それらしい事があつても、なかなか形になつてはいないようだった。むろん後藤もまたうなつていた。本当にこれが起こるなら、侍なぞ捨て駒でしかない。むしろ死体を増やす為の肥やしである。

「だから……。拙者は、単純にここまで下がらぬここで決戦をすべきだと思います。」

「淀君の作戦に乗つてもいいのではないのか？」

「それは……大方最悪の出方としては、敵と勘違いしたとか言つて味方相手でも大砲を撃ち、死人化させてしまつてしょう。」

そう言つて指さしたのがその外堀の南に位置する茶臼山であつた。「……。」

「元より、出陣するならここまでで押さえねば大砲を城まで持ち込まれ、すぐに落城されてしまいます。」

「だからここまでで押さえる。俺たちも味方から大砲は撃たれたくない。」

後藤は唸るしかなかった。

「だが・・・相手は15万・・・こちらは6万でむしろ士気も低い。どうする？」

「それをこれからご説明いたす。必ずとは言いません。結局多大な犠牲が必要ですが勝つ方法はございます。只・・・各自これだけは覚えていて欲しいのです。」

「なんだ。」

「城に帰れば死人にされてしまう恐れがあります。彼らにとって味方なぞ本当にならないので、後ろから刺されかねません。」

「ああ。」

「もし、敗れる事があれば、そのまま武器を持ったままでもいいので、山中に逃げてくだされ。そのまま帰ってこなくてもよいと兵士にはお伝えください。」

その顔は迫力さえある顔で信繁は見つめていた。

「わ、分かった。」

「では・・・作戦をお伝え申す。・・・只・・・聞いた限りは各自、覚悟召されよ。」

そう言い、信繁の鬼気迫る顔を全員が見つめるしかなかったのだ。

第十一節 啄木鳥の一突き（前書き）

ついに始まる大阪夏の陣。信繁は作戦を実行するため戦場に向かう。そこに立ちはだかるのは東北最強”伊達正宗” ついに決戦の火蓋が切って落とされるのであった。

第十一節 啄木鳥の一突き

第十一節 啄木鳥の一突き

ゆつくりと銃を構え、5月の夜の風を信繁は感じながら家で一人、じつと色いろいな事を考えていた。もう家には自分一人しかいない・・・これほど悲しい武家屋敷というのも珍しい。部隊への指示や細かい事を算や青海に伝え、自分は一人ある事の確認を与えられた武器を見渡し、考え直していた。

「本当・・・。ここまでたどり着く方がつらかったぜ。」

しまは入り口からずかずかと家にはいると、縁側にどかっと座る。「遅かったな。」

「ああ。よく分からなかった事が多かったから本当に・・・大変だったぜ。」

「とりあえず前に教わっているよな。」

そう言う遠くから、先ほどの会議でも使っていた地図と、丸い駒を取り出す。そしてそれを見ると、駒を着々と配置していく。

「これが・・・敵軍の配置だぜ。」

そう言って配置された駒をじつと信繁は見つめていた。

「そうか・・・かなり・・・きついな・・・。作戦は・・・念のためも含め、全て起きそう・・・。最悪かもな・・・。」

そう言って盤面を見つめる。そこには東、南全てをふさぐような布陣が敷かれた徳川の布陣が描かれていた。だが・・・それは信繁の想定通りの展開でもあった。

「でもさ・・・これって役に立つのかよ。」

「まあな。ここから相手の動きを予想し、作戦を立てるのが俺の役目だ。」

「そうか。それなら俺も役に立ったというわけだ。」

「そうだな。」

そう言いつつ月明かりが照らす中、じつと地図を指さす。

「やはり・・・仕掛けるなら湿地しかあるまい。」

「あの沼か？」

当時の大阪城東側にはまだ整地されていない湿地帯があり、これが防衛に一役買っていた。だが、これは向こうも承知のはずだ。むろん何かを仕掛けてくる。いや、構えてくる。

「ここなら・・・ここか。」

そう言い、決戦地域の南側に眠る村を先の林を指さす。

「後・・・報告は？」

「お・・・応・・・半蔵が言つてた通りに聞くんだな。おまえ。」

不思議そうな顔で信繁を見つめていた。

「三つほどあるぜ。一つは北の村での報告。何か・・・お坊さんがたくさん北の山の中に行つたとか。」

「それは・・・分からんな。次。」

「ああ。その北の村とかだと何故か、水がここ数日少なくなっていて、稲作しているお百姓さんが困っていた頃。」

「・・・ん？」

「でさらに言つと、南に構えていた集団が最近東へ向かつたとか・・・。」

「と言う事は・・・忍者部隊は中央に集まる。最初か次点で戦線投入か。統率力は高いから。」

そう言つて盤面に黒い駒を中央に足す。状況にいい報告は一切無い。

「で最後だ。最後に寄つた南での報告。船の一団が北に向かつていつた事。」

「・・・流石に淀君の浅知恵も見きるか。」

そう言つとつい口に笑みをほころばせる。だが相手は美井が行っている報告が正しければ、海戦慣れした”世界最強艦隊”早々簡単に沈む事はないと思うが・・・。

「と言う事は読んだとおりの展開・・・。」

そう言つとふつと口から小さな笑みが漏れる。

「ん？おかしいか？」

「いや、自分が思い描いた最悪の状況が今……ここにある。」

そう言つと地図を見つめる。15万の軍が来る。大方軍隊が整列しきるには時間がかかる。早期決戦でしか勝機はない。だが、先陣は伊達と藤堂、伊達はもつとも傷の少ない戦国大名であり一番戦慣れしている軍団でもある。そして戦国で名をはせた傭兵一族”藤堂”の部隊。数は大方奇襲確率の高い方に大軍を置いている。予想出来てはいたが、最悪でもある。

「魔、俺は少し休みながらだから楽だったけど、でもまあ……どうするよこれ？」

偵察してきただけ合つてしまでも分かるほどの絶望的な差だ。

「そうだな、奇襲を一度掛ける必要があるか。すまないが、すぐに一つ頼まれてくれるか。」

そう言つと奥から大きめのひも付きの筒を一つ奥から持つてくる。

「これは？」

「これか。これはよく忍者が使う連絡筒でな。半蔵に聞いて作つてみたんだ。これ。」

「ああ。」

先日、半蔵がしまに忍者の技術の説明をしていた時、緊急連絡に使う連絡筒というものの説明を行っていた。それは手に持てるほどの大きさで中に発破が入っており、爆発するようにでている。大きな音と、煙で味方に位置を知らせるものだ。色つきのものもあり、色の作り方は格差との秘密となっている。むろん半蔵は教える事はなかった。

「で、俺なりに作つてみた。」

そう言つて見せている筒は少し大きく隠し持つわけにはいかなかった。

「でもこれ、緊急とか言う割に大きくねえか？」

そう言つてじろじろと筒を見つめる。

「改良したんだ。ある目的でな。」

そう言つて筒を投げてしまに渡す。

「これを持ってここに行つて欲しい。」

そう言つとある村を一つ指さす。

「ここ？」

「ここだ。」

そう言つて指さした村を見つめる。そこは少しへんぴともいえる。

「この近くに小さな林がある。そこで、敵の部隊が見えたらこつに火をつけて・・・逃げ出して欲しい。」

「・・・逃げていいのかよ。」

手に持った筒を見ながらじつと見つめていた。これに早々殺傷力があるようにも思えない。

「そうだ。これ、しばらくお前が使え。どこかで役に立つ。」

そう言つと信繁は刺していた脇差しを投げてよこす。手に筒も持っていた為、慌てて掴んだ。

「これは・・・。」

「そいつは村正作の脇差し・・・」死に名月”。

”死に名月”・・・。」

そう言つてその刀をみつめる。刀に付く名としてはあまりに珍しかった。

「親父はこういつていた。何でその名前かというと、よく侍が切腹とか言つ時に腹に刺すのがそう言う脇差し。」

じつと見つめている信繁は寂しそうな顔をしていた。

「そして切腹する奴がよく言う辞世の句があつてな。その作者はそう言う死に急ぐ奴が大嫌いだった。そこでこれで腹を突くなら好きにしる・・・だから“死に名月”。」

「嫌な謂われだな。」

そう言つて憎々しげにしまはその脇差しを見つめる。

「でな。親父は最後この刀を渡す時にな、自分の腹をかつ捌く予定の刀だ。大切にしろつて言われたんだ。」

その言葉を聞いて改めてその脇差しを見つめる。何となくその刀の重みがました気がする。

「俺も何か忠義に反する事があればそいつで腹をかつ捌く。」
その言葉にしまはじつとその刀を見つめていた。

「だから、俺が自身の腹をかつ捌く時まで、生きる。その役目に失敗すれば俺たちは全滅しかねない。だから・・・成功・・・もしくは失敗でも構わない・・・生きる。」

信繁の頬から涙が落ちていているようにも見えるが、その顔をまともに見ることは出来ない。

「んな事言っんじゃねえよ。俺が絶対成功させて、見事大勝利だぜ。」

「生きていれば立つ瀬もある。覚えておけよ。」

その並々ならぬ覚悟にしまはごくつと唾を飲み込むとともに、しよっぱさも感じていた。

「お前ら！準備は出来たか？」

そう掛け声は黒ずくめの部隊全てに行き渡っていた。その周りでは大合唱の念仏とかが響き渡っていた。

「わしらこれでお役ご免かな。」

疲れ果てた僧正の一人が、近くの気によりかかりへたれながら答えていた。

「分からぬ。この量以上はもう必要ないと思うが・・・。」

半蔵は樽の数を数えさせていた。この数日間、最終調整に余念はなかったがそれでも万全だとはとうてい思えなかった。そこまでさせるほどにあの時の敗北は忘れがたかった。

「妖隊第二陣。皆持ったか？」

その掛け声の方を見るとできあがったばかりの水を持った妖怪達の姿が見える。移動に自身がある部隊ばかりだ。完成まで時間がかったが、親方様の出陣までに間に合う。

「半蔵様、設営地点周辺での釜の準備が出来ました。」

走って来た忍びが急いで報告を持ってくる。周囲はさながら戦場

さながらのようであった。

「分かった。霧隠れは五日、五日に発動させる。その日が一番濃厚だ！只、油断するな。合図があればすぐに出来るようにも伝える！」
「了解しました！」

そう言い先ほど報告しに来た忍びは駆け足手はしって去っていった。

「妖隊第一陣は山野を通り、死人確認が、死人をそいつで払ってくれ。」

後ろの方では水の使い方を説明する忍びの姿があった。頭はあまりよくないらしく、聞き入っていた妖怪の長達が、かみ砕いて妖怪達に説明している。

「こうして追いかける坊さんをわしらが一緒とはな。」

呆れた顔でお宮の方がじつと念仏を大合唱する坊さんと、念仏の対象である水瓶を見つめる。その姿は下から照らす姿は今まで見た姿より更に妖艶に見える。

「お吉の方。」

「でもまあ、このような作戦・・・あまりに大規模で、初めてだ。そこまでの脅威があつた城にはあるのか？」

そう言い見つめる先に暗闇に浮かぶ黄金の破片が火に照らされる様子に見える。大阪城はこの当時、夜の大阪城はある意味平原に浮かぶ黒塗りのでもあり、不気味でもあった。

「大方日の本を揺るがす最大の敵。今までの騒乱の黒幕・・・正真正銘の黒幕があそこにはおり申す。」

そう言い、苦々しい顔であの城を見つめる。あの日会った・・・あの地獄の風景を彼は忘れるわけにはいかなかった。

当時作戦を採るものがいなかった南側の調査の為、半蔵は南側攻めにいた。ついでに言うつと真田丸とは、反対側である。当時真田丸はあの銃撃打ち下ろしの為、銃しかとおらず、南側の進捗次第では撤退が視野に入っていた為、様子を見に来ていたのだ。ちょうど戦

線が硬直していた時、彼の目の前で、門は開いていった。しかも内側から。全員はそこから弊誌が出るのではないかと身構えていた。その瞬間何か粉を投げつけられ、兵達がたじろいだ瞬間のことだった。突然前線の兵士達が慌て始め、兵士達の足が止まった。Sの瞬間足に触れるものを感じた俺は下を見つめると下にあつた死体が動き始めた。素早く飛び退くと、その場を離れた。次の瞬間見つめたそこは地獄しかなかった。立ち上がった徳川と豊臣の死体が、所構わずかみつき始めた。直感的に死人と感じた俺は懐から死人対策を取り出すその瞬間殺気を感じ飛び退く。

「ようこそ！観客達よ。」

その声の上を向くとそこには黒ずくめ・・・黒いマントをつけた黒ずくめの・・・宣教師の姿があつた。足下には阿鼻叫喚の姿があつた。それを見た半蔵は反射的に懐から手裏剣を取り出すと投げつける。それを悠々と交わしなお高台に達続けた男の姿であつた。

「貴様！」

「皆の衆。この異教徒どもが！神の裁きを受けよ！」

訳の分からぬ事をしゃべりだす男の目は・・・爛々と輝き、異常でもあつた。

「貴様！名を名乗れ！」

そう言つと近くの槍を拾い上げ、その男に投げつける。それをその男はマントの一振りではじく。

「そうだな・・・指令はこう名乗れと行っていたな・・・。」

そう言つと腰に手を当てて、下の死肉をむさぼる死人達の上で胸を張る。

「俺の名前はなあ・・・トヨトミヒデオーリだ！」

そう聞く間にも、死人が死人を生む状況になつていて、どんどん徳川の兵達が死人として立ち上がってきている。

「引き上げる！」

そう半蔵が大声を上げると、後ろで怯えていた部隊達も引き上げ始める。手に持っていたお清めの水を刀に掛けると、構える。中に

は徳川の兵士達の死体も混ざっているのがとてもつらかった。

「お前ら！行けい！神罰を下すのだ！」

その掛け声とともに、それまで無軌道だった死人達が、立ち上がり、一斉にこちらに向く。その瞬間体の芯をぞくつとしたものが走る。今まで一の言うことを聞く死人なぞ見たことがなかった。

ふと半蔵の頭をあの日のごとがよぎる、ぎりぎりで増援が間に合い撤退出来たものの、最早攻めることはかなわず、そのまま兵糧攻めを決定していた。その後聞いたが、その時やけくそで撃った空砲が天守閣に届いた話を聞き無駄ではないと思っただがあの時もまた、講話の使者が来た時に無駄ではないと思えてしまう。そこまでに・絶望じみた徳川方の敗北であった。その日を今でも忘れることは出来なかった。それから始まった寺の再編と死人対策の徹底を行い、今ここに至る。

「何を考えているかは知らぬが……。一応はまとめ役ぞ。頬を伝う涙は拭きな。」

そう言い、懐から手ぬぐいを取り出すと、半蔵に差し出す。それに気が付くと半蔵は頬をなでる。液体が指にびったりと付いてくる。

「これは……。きつと清めの水の……。」

そう言って一息つく、半蔵は顔全体で顔をぬぐう。

「感謝いたす。」

「だしても、あの城かどっかには信繁がいるのだろう……。寂しいものよ。」

「確かにそうですね……。我らとしても彼とは戦いたくありません。」

「お主がそう言うとはな。」

意外そうな顔をして半蔵のしんみりした顔がお吉の方には意外だった。その間にも後ろではへばったお坊さん達に妖怪達が食事を運んでいた。

「これでも二月ほどは一緒に飯を食らった仲ですぞ。惜しいと思わ

ぬはずはない。」

「そうか・・・お主ほどの男さえ揺り動かすとは・・・流石・・・真田よの。」

そう言うのにたにたした顔でお吉の方は歩いて去って行ってしまふ。その歩みをじつと半蔵は見ながらも、次の作戦の準備を考え始めていた。

「塗り終わってございます。」

そう言うのと信繁の前に並ぶ部隊の鎧は全て赤塗りとなり、その様相はどこを見ても”赤備え”である。青海がかしこまり、各部隊は大坂城前に整列していた。佐助と算の姿はここにはないが、作戦の為、一足先に現場に向かってもらっている。

「よろしい。」

信繁はその返事とともに鷹揚に頷く。こうしないと遠くまで頷いた様子を見せることは出来ない。全員の鎧が同じ色になったことにより、気持ち引き締まったように見える。

「皆に告ぐ！」

信繁の声が大坂城いっばいに聞こえる。その周りには各侍大将達も整列している。

「この戦いは負け戦である！」

その第一声全員がざわつく。

「だから・・・この先の戦いは生きて帰る保証はない！」

その声更に全員がざわつく。

「もし命を惜しむもの、残した家族が気にかかるものがあるなら、今から帰れば罪には問わぬ。帰るが良い！」

その声にしばらくざわつくが、誰一人として帰る者はいない・・・いや、帰れないだけかもしれない。

「今ここにいる者を！俺は！豊臣に忠義ある者だとは・・・決して思わぬ！」

その言葉に侍大将達が全員信繁の方を向く。

「この世において最後の一花を咲かせようと言う・・・戦場に生きる強者だと皆を思う！かぶき者だと俺は信じる！だからこそ聞いて欲しい。これから俺たちは15万もの兵がいるこの日の本と戦う！」
その言葉に全員が注視していた。

「例え、これから会う者全てが仏でも親でも敵と思えば全てを切り捨てよ！全てを敵に回しても己を信じ突き進め！それでも俺たちを信じてくれる仲間がいるならそいつを助ける！俺たちは死に行くわけではない！死ぬつもりで勝ちを拾う男いや、かぶき者だ！」

その怒号に近い声が、埋められた外堀にいた者達5万の魂に全て響いていった。

「俺たちの生き様を奴らに思う存分見せつけてやれ！俺たちがいたことを存分にこの世にいる奴らに見せつけてやれ！後悔するな、後悔させるな！だから・・・生きて帰れるように・・・全力を尽くせ！余すところを作るな！備えをしたか！万全だったか！無ければその手に全力を携え・・・俺に付いてこい！俺が・・・こいつらが！」
そう言っつて信繁が手を広げた先には聞き惚れていた侍大将達がい

た。
「お前達を最後まで輝かせて・・・そして活かしてやる！」

信繁が腕を突き上げるとそれに合わせて誰が言っつわけでもなく全員が怒号をあげる。

「各自！おのが持ち場に着き！存分に戦え！」

そう言っつと侍大将達が各自手を挙げる、そして各自各々の持ち場に向かっつていった。

「よーやるな。おまえ。」

後藤が感心したように駆け寄っつてくる。

「いや。これは・・・お恥ずかしい。」

台から降りると信繁は照れくさそうに頭をか

く。
「これで全員に気合いが入る。後は作戦次第だが・・・。」

「そればかりは相手次第かと。只、忍びの報告だと敵の配置は読み通りで。」

そう言っで自分が行く先の南を見つめる。

「そつか。お前・・・忍びなんて部下がいたのか。すげえな。」

そう感心している後藤であったが、その様子は頭が良さそうに見える。

「でもあの通りなら後藤殿の位置が一番危うい。文字通り全滅さえありつります。」ご注意召されよ。」

「分かつている。だがな、俺も弱い男ではないさ。お前の作戦で勝てるなら・・・俺は盾になってやるさ。」

そう言っで髭面が笑っのを少し信繁は寂しそうに見つめた。

「お前ら！行くぞ。俺たちだけが遅れたとあつては恥だ！行くぞ！」

そう言っで背後の部隊に声を掛け、後藤は去つていった。

「いいお方で。」

後ろを振り返ると青海が声を掛ける。

「だな。」

「でもまあ・・・あのお方らしいですが、よくまあ訓辞を我らに。」

「仕方ないさ。それが出来る奴はここにはいない。」

そう言っで周りを見渡す。各自部隊を率いて持ち場まで向かい始める。三日ほどあるので、どうなるか分からないが、それなりの位置に陣取れると思う。

「俺たちもどうなるか、誰が生き残り、誰が死ぬのか分からない・・・それが今度の戦だ。只、こいつがある分だけ俺たちの方が有利だ。」

そう言っで手に持った銃を見つめる。先日運ばれてきた・・・美井が言っには見たこともない形の銃だ。

「ですな。」

そう言っで青海が腕を上げる。それに合わせ皆が配置となる道明寺に向け出発を始める。

「啄木鳥の一突き、決まればいいが・・・。」

不安がるも、この作戦成功するかは相手次第なのだから。

「配置についてございます。」

半蔵はじつと周囲を見渡す。木を切りあつらえた釜に全員が準備を行い、号令を待っていた。

「これから・・・霧隠れ清めの術を行う！お前ら始めろ！」

半蔵の掛け声とともに全員が釜に火を入れ水を炊き始める。総勢6千の忍軍が全て釜をたき、一部の者がうちわで釜を扇いでいる。ちょうど前後の火は数日間北向きの風がながれることは分かっていたので、それに合わせ水を相当量焚いて一時的に戦場を充満させる・・・これが徳川・・・いや伊賀忍軍最終手段の一つ”霧隠れ”である。霧で視界を封じることにより、銃の使用を控えさせ、あまつさえに火薬を湿気させることで銃を封じる・・・関ヶ原で行った実験により、より広範囲で行うことが可能な対銃の最終兵器である。今回は更に死人対策用に各寺院に頼み、お払いさせた清めの水を使用して戦場に充満させ、死人を封じる為にそれを霧にすべく兵を配置させた。

「各員連絡。戦場予 positioning へ！」

そう言つと各自忍者達が走り始めた。その様子をじつと半蔵は見つめていた。この作戦に当たり、各所に見張りを立て、万全を期してはいるが相手はあの真田である。何が起こるのか分からない。

「つーわけでー。お前ら、行っていいつぺえ！」

伊達政宗は忍者の報告を受けると刀を突き上げる。それに合わせ、全員が行軍を始める。

「皆の者進軍！」

片倉の掛け声が響く。

「でもさ。マジ・・・霧濃くね？」

そう言つて伊達政宗は周囲を見渡すと、合図がでた頃には霧隠れが完成しており、周囲は深い霧に包まれていた。

「と・・・言われましても・・・。作戦通りな分半蔵殿を褒めるべ

きでは……。」

「ちよつとさ……とばしていかね？」

少し苛ついて伊達政宗が聞いてくる。……片倉の腹は微妙にいたくなってきた……気がする。

「お前らさ！俺とあそこまで競争しねえか？」

そう言つて正宗は兵士達に声を掛ける。

「まずだりいからさ。あそこまで走つていったら一番な。」

「おおー！」

そう言つと兵士達が走り出そうと構え始める。

「よーい！行け！」

そう言つと伊達政宗は急に片倉から逃げるように馬を掛けて走り出してしまふ。

「ちよつと待つてくださいよ。これ！どうするんですか？口上で使ふんでしょ？」

そう言つて片倉は脇に置いてあつた巨大な十字架が置いてある砲台を指さす、伊達政宗はそれを知らずか、全速力で走り去つてしまふ。

「ちよつと……待つてくださいよお。」

片倉は情けない声を上げて、少しはやめるように手招きをする。

それに合わせ部隊は少し早く動き出した。と言つより出発をせかした。そして……片倉は懐から胃薬を取り出すと口の中に流し込んだ。

「報告します。」

「おう。」

後藤は道明寺に一番乗りすると、早速斥候を放つていた。

「まだ真田様以下各部隊は着いておらず、銃の準備に少しかかりません。」

そう行つて斥候は近くに座る。周囲を見れば霧が深く、斥候無しでは部隊の状態も分からない。只川が近いことだけは分かる。

「でもまあ……ここまで霧が濃いと作戦うまくいくのかね？」

不審そうにじつと霧の向こうを見つめる。後藤はあの時間いた作戦を思い出す。

「今回の作戦は籠城に持ち込むにしても、戦うにしても最初に敵兵を減らす必要があります。」

そう信繁はそう言って川を指さす。

「古来戦場に置いて一番守りやすいのは川。ですが、川で待ちかまえたのでは相手は警戒します。」

そう言って信繁は川を叩く。

「でもどうするんだ？」

「川で待てば大方相手との銃撃戦が待っていると思います。だから川で待つのは下策。」

そう言って徳川の川の側の部隊を川向こうの道明寺側に渡す。

「なら・・・どうするんだよ。」

若い侍大将が聞いてくる。

「そこで・・・渡った直後の銃を構えていないところを狙い申す。」

そう言って駒を渡った直後の周囲に味方の駒を配置する。

「ここで襲撃か？」

「いや・・・ここを銃で狙います。」

「え・・・。」

そう言って少し距離を置くように信繁は駒を配置する。

「このあたりには村や古墳などで、隠れるところが多く、川の側以外は森となつて申す。ここなら圧倒的有利で叩けます。また、ここで時間を稼ぎ、退くことも出来ます。」

「それは・・・いいのか？」

「数が多い為、これでも引き時を誤れば全滅もありうります。」

その言葉に侍大将達はごくつと唾を飲む。

「只・・・この作戦には致命的な欠点があります。」

そう言って顔を曇らせ、相手の駒を突く。

「この駒・・・動く時にどこに飛び込むのか分かり申さぬ。そのた

めにはここで足止めする部隊が必要です。」

その言葉に全員が息をのむ。相手はいくつの兵力が来るのか分からない上に、その部隊の足止めなぞ出来るわけではない。

「他に作戦は・・・皆もあるか？」

後藤は見渡す。だが誰も口を開こうとはしない。

「俺は気に入ったぜ。これなら、相手をつぶせると・・・俺は信じている。」

そう言っただけで後藤は立ち上がる。

「ま、こつという役目は誰も引き受けたがらない者さ。なら・・・俺がやる。」

そう言っただけで後藤は胸を叩いた。その言葉に信繁はぐつと涙が出そうになるのをこらえるしかなかった。

「お前らはお前らのやることをやれ・・・後・・・俺が何かあったらこいつに全てを託す。お前ら・・・頼んだぞ！」

「見栄をきつちまったものはしかたねえが・・・これはねえべ。」

そう言っただけで後藤は霧の向こうを見つめるが、対岸を見ることは出来ない。晴れならばここからでも対岸を見ることは出来る。ま・・・相手も川向こうを見ることが出来なければ

こつちに撃つてくることはないが・・・はてさて・・・どうしたものか。じつと後藤は自分の無い頭で考える。

この辺一帯の川は浅く、確かに川を渡っている最中でも足止めは可能であるが・・・。

「報告！」

先行させていた偵察部隊が戻ってくる。

「何だ！」

「敵部隊の一部を確認。どうもこちらと一緒に夜通し進行している模様。」

「な・・・！」

その報告に後藤は唖然としてしまう。計画よりも早い敵陣の動き

とは予測はしていなかった。

「はい。確かに食事の煙がありました。明日早朝にも渡航を開始かと！」

いくつもの斥候を放ち、遠目からの確認をさせていたが・・・後藤は慌てていた。どうするか。天候を見つめる。前聞いた話だと、信繁の作戦は設営には数時間がかかりそうな作戦だ。今も霧は深くこの暖かさから考えて明日も濃霧・・・ふ・・・惚れた男に準ずるか・・・これもまた一妙だ。

「お前ら！川あ渡るぞ！覚悟決めろ！お前ら！」
後藤は周囲に掛け声を掛ける。

「マジはええな、おめえら。俺感激だぞ。」

伊達政宗は息を切らし、周りの連中を見やる。全員息を切らしていた。おかげさまでずいぶん予定地点よりも先の地点で休憩する羽目になっている。

「・・・殿・・・。馬を一頭潰してでもやることですか？」

片倉が後方から呆れながら、休息させている部隊達から抜けて伊達政宗を見る。

「いや・・・ああ・・・まあな。ほら・・・先陣前駆けてかつこいいじゃん。」

そう言って申し訳なさそうに片倉を見つめる。

「それは敵がいる時です！敵がない時に先駆けて何するんです本当に！」

そう言いつつ苦笑いする伊達であるが、部下はこういう性格だからこそ付いてきている。それは片倉も承知であった。だが・・・物資の調達もままならないこの大阪では殿が乗るような馬はなかなか調達など・・・。

「京で買ってこればいいじゃん。馬。」

「ふざけないでください！京って・・・敵陣ですし、こちら先頭ですよー！」

「えー。」

正宗が不満そうに村を見る。周りの兵士も先頭もしていないのに、食事しているその様子は全力を使い果たした後にも見える。

「ま、寝るぜ。俺は。」

そう言うのと近くの木によりかかり、周りを見渡す。渡ってきたところが湿地帯であつた為、片倉は周囲を警戒していたが、正宗はそう感じていなかった。湿地帯で奇襲すれば帰れない。当然のことだ。帰る前に銃で蜂の巣にされる。銃がこうして多数ある今、この湿地での奇襲は成り立たない。なら・・・早く行けば相手が奇襲する前に奇襲が出来る。そう直感的に感じていた。半蔵が言うには今日あたりには戦線を張ってくるとか言っていたが・・・買いかぶりすぎだつたか？

「は。」

そう言うのと片倉は周囲に斥候部隊を派遣させる。当然伊達家にも忍者を雇ってはいる。だがそれでも直感が上回る時がある。

「報告！」

先に行った先遣部隊が帰ってくる。どうも急ぎ足のようだ。

「敵の部隊が川を渡った模様。」

「見たのか？」

伊達の目がぱつちりと見開く。

「は。確認したところ、かなりの人数が渡って・・・。」

「何人かわかるか？」

「いえ・・・。」

「そっかあ。」

そう言うて正宗はまた目をつぶる。数が分からないと・・・この先は谷沿いに行けば少し曲がってそして川にでる川の前。狙撃はされないとはいえ・・・。相手があの川を渡る利点はない。それにそこまで斥候などが、機能していないとは考えにくい・・・と言うことは・・・背後狙いか？なら先端を潰せば作戦は崩壊か・・・。ここまで浅はかなのか、あの真田とか言う男は・・・。

「お前ら！少し休憩してから、前に出るぞ！道をふさげ！片倉！」
「は！」

この時ばかりはいつもふざけているように見える正宗もまた本気である。

「相手がどうであるか分からん。また、夜に他の部隊が渡るかもしれない。」

「は。」

「だから、設営位置を変更する。川が見えるところで待機だ！」

そう言つと周囲の人間もざわつき始める。どうであるか分からないがこれで半分以上の手は防げるはず。派手な方がいいが・・・相手の出方次第ではどうにもならない・・・。渋い顔で山を見つめている。

「川を全員渡りましたが・・・信繁殿の作戦違反では？」

「時間を稼ぐ。」

その後藤の言葉に全員が息を飲む。

「到着しても銃とかの準備に時間がかかる。だからせめて時間だけでも稼ぐ。お前ら！俺に力だけでも貸せ！」

「おお！」

そう言つと後藤は近くの山を指さす。

「この中に潜むぞ。」

そう言つと全員が山の中に進軍を始める。その時、先に行つていた部隊が走ってくる。

「敵兵に動きあり！進軍を開始しました。」

走ってくる部隊は慌てている。後藤はそれでも落ち着いていた。

「せめて、朝になれば援軍が来るやもしれん！時間を稼ぐぞ！走って入れ！」

「応！」

そう言つと全員が駆け足で山に走っていく。

「どうも・・・何も動きがねえなあ。」

川を見える位置に陣を取った伊達は、舶来品の遠見筒を片手にじつと川向こうを見る・・・。とりあえず、向こうの様子は分からないう・・・と言つより暗くて見えない。

「そう言えば、上がってきた部隊というのもここまで見ませんでしたな。」

そう言つて周囲を見渡す片倉ではあるが、その敵部隊の様子は見えない。一万を超える部隊ならまだ川を渡っているはずだ。

「ちいつと様子がおかしいな。」

正宗も前を見つめるがその様子はない。一番前の部隊には鉄盾を構えさせてはいるが銃も飛んでこない。まあ・・・周囲は霧だから早々飛んでは来ないだろうが・・・。ここまで来ると遠見筒もまた役には立たない。

「と・・・いいますと・・・。」

「まずは部隊とか言っていたやつはいねえ・・・いるとすれば・・・。」

そう言つて横の山を見つめる。ちょうど鷹外で、周囲を見つめることも出来る。

「その山だ。」

その言葉に片倉はじつと山を見つめるが敵がいるようにはみえない。

「でも・・・。」

「だが・・・ここから離れば敵の部隊が横を突いてくるんじゃないか？」

そう言つて川向こうをじつと正宗は見つめる。川はあまり深くない為か、突撃すれば壊滅しかねない。だとすると・・・。

「敵に動きはあつか？」

周囲に伊達は聞いてくるが返事はない。無いと見る方が正しい。

「なら・・・先に先行部隊を潰すぞ！気張れや！」

「おお！」

「大砲はどうします？」

片倉は退かせてきた大砲の数々を指さす。

「いらね。むしろ音と小さくしてあいてを引き寄せる方が楽っしょ。」

「

は。」

「片倉。後ろの部隊に使い出して、その山囲むっていつとけや。」

俺たちは山狩りすっぞ！」

「は。」

その言葉に頷き、手で合図を送る。それに伴い馬が走って後ろの部隊に向かっていた。この行動の早さが伊達の売りでもある。

「部隊……。動き始めたようだな。」

じつと山頂から下に向かい後藤は望遠鏡を除いていた。斥候用にと城の中から大名用の者をつぱらつておいたのがここで役に立つ。それに伴い全員が銃を構えじつと部隊を狙っていた。信繁から聞いたあの話を基にじつと銃を構える。

「えつと……。銃って……。ここにぼつち……。ある。」

美井は銃の一部を指さすと根元の凹がある板の部分を刺す。全員が食い入るように見つめる。信繁が言うには西洋人には西洋人の銃の扱いがあるらしい。それを知れば少しは命中があがるとのこと。「ここを覗くと……。前に……。凸がある……。でしょ。」

そう言つて銃の先端にある出っ張りを指さす。まさかこの年になつてこんな小さな娘に者を教わるとは……。やはり周りもその考えは一緒らしいが、実際そのことを知らないのだから仕方がない。

「へこんだところ……。ここ……。覗く……。金属の先……。敵……。撃つ……。当たる。」

そう言つと信繁が、言った通りに構えると的と思われる木の板を撃つ。すると素直に前に向かって放たれ、そして命中する。その命中に全員が声を上げる、自分もまた口が開きつばなしだ。

「狙う・・・まっすぐ飛ぶ。」

「これには射程があつて大体・・・一町か二町（約110mから200m）前後は届く。そこまではまっすぐ飛ぶ。」

信繁は撃つた銃の底を叩くと火薬の粉がばらばらと落ちてくる。

「今回の作戦はこの銃の扱いが基本だと言つても過言ではない。後もう一つ。覚えていて欲しいことがある。」

そう言つと信繁は根津からもう一丁銃を受け取る。そして、近く
の程々に太い木に狙いを定める。

「むろん相手も銃を持つてくるでしょう。だから覚えておいて欲しいのです。」

その言葉に信繁が狙う木のほうを侍大将達が全員が見つめる。そして・・・そのまましばらくの静寂の後、銃は撃たれ・・・弾は木に当たる。

「このようにある程度太い木とか・・・柱とかなら銃は貫通しません。もし戦う時にはこういう場所を選んでください。」

そういつて信繁は木を指さす。木に傷は付くものの平然と立っていた。

「また、木とかに登つたりすれば、頭上からは警戒されにくいですが、かわしにくいので、出来れば各自配置にはきをつけてください。」

言つたとおり、後藤は木の裏に各兵を構えさせている。だが、火の明かり通りなら、横からも銃が飛んでくる。これは・・・きつい・・・。ザッ。だが・・・これ以上の進軍をさせる・・・。ザッ。音に反応して周囲を見渡すとどうも先行部隊がこちらの山狩りを始めたみたいだ。上がってくる敵の部隊が確認出来る。

「お前ら！分かつてるな！敵は赤くないぞ！撃て！」

後藤は掛け声をあげると銃がうなりを上げ大音量が山に響き、銃は敵陣に放たれた。この時五月六日の午前0時。これが大阪夏の陣の始まりでもあった。

「なんだあ！」

伊達の怒号が広い川原いつぱいになり上げる。その音ともに山狩りの第二陣の為に立っていた兵士達に弾がぶち当たる。

「は！山中に敵発見。どうもこちらの動きを察知している模様。」

「んなのわかってんだよ！とつと行つてこいや！」

報告に怒鳴り声を上げる。向こうの部隊も同じらしく泡を食っているみたいだ。正宗の怒号が響くと部隊が山中を指して突撃を開始する。

「お前ら、盾構えるの忘れんな！」

徳川から各部隊に渋滞策として幾つかの鉄立てが配布されていた。先人用である。気休めかもしれないが、銃の弾は貫通しないので被害は少ない。無論銃対策として、機能している。伊達政宗はそう声を上げてはいるが、兵士達はとまどっている・・・そう見える。次の瞬間また銃声が響き、山から人が転げてくる。坂は急でここからだ、両手を使わないと上れない。そこを狙われると盾を構えるわけにはいかない。しかも霧で遠くを見渡せない。なら！

「お前らあ！」

伊達の怒号がさらに響く。

「山狩りはやめだ！先に山に銃撃てや！あぶるぞ！」

そう言う手短な銃を構え狙いをつける。だが、夜と霧が重なり、視界はとても悪い。向こうも悪いが・・・向こうは適当に撃つてもどこかに当たる。これに対しこっちは狙わないと当たらない。だが行けるか・・・。

「撃て！」

それとともに、構えた銃の部隊が山の中に撃つが、声一つさえしない。当たった様子はない。

「あああ！ふざけんな！マジぶち殺すぞ！」

「落ちて着いてください！殿！殿！」

怒りに震える声が聞こえるがそれでも全員がこの時悪い予感がし

ていた。長期戦の予感である。

「報告！」

信繁は戦闘地域の周辺の村人達を堺に誘導する手はずの最中に急ぎで斥候が帰ってくる。

「何だ！」

「戦闘が発生している模様。どうも先に陣を構えた後藤殿との戦闘かと。」

その声に周囲の部隊の人間全体が凍り付く。

「だあ！どうなってるんだよ！戦闘はこっちの合図だって言ってるだけだろっが！」

青海が斥候に当たり散らす信繁は馬にくくりつけてあった地図を地面に押し広げると川の周辺を指さす。

「どこだ！」

「ここ・・・だと思われませぬ。まだ敵部隊は川を渡っていません。そう言っ指さしたのは敵が川を渡る前の場所である。」

「後藤殿からの連絡は？」

「ありません！」

緊急の為か、全員に緊張が走る。周囲の足軽大将達が慌て始めるがそれでもじっと地図を信繁は見つめる。

「どうするんだよ。」

じつと信繁は地図を見つめる・・・このままだと作戦は台無しだが・・・このまま撤退命令を出すとしま達は死んでしまう。それにここで防げねばもう・・・こちらは背水の陣と言っことになる。大方後藤殿は考えがあつて・・・。

「ここは作戦が失敗だと言っことで、引き返し！態勢を・・・。」

「ふざけんな！助けに行くぞ！後藤の旦那を見捨てるのかよ！」

青海と根津がにらみ合う。

「・・・各部隊に通達を出せ、決戦は今朝！川に銃を向け、戦闘準備だ！」

信繁は近くの男に指示を出す。それに合わせて各部隊の兵士達は伝令に向かっていった。

「助けに行かないのかよ！」

青海はじつと川向こうを見る。きつとそこでは凄惨な戦いが行われているのだろう。

「助けに行けば、消耗戦となり、助けに行くどころかこちらが全滅する。だから手はず通りに行うだけだ！」

「信繁！」

青海は信繁に怒鳴り、信繁を睨む。その時その目は固い意志がある・・・一瞬青海は信繁の手元が見えてしまう。信繁の手は震え手の平からは血がにじんでいた。その時全てを察する。相手の位置や数を考えればどちらが大切か・・・冷徹な判断がなければ部隊を預かる男ではない。だからこの男は仲間を守る道を選んだ。友を見捨てても・・・だがそれは頭で分かっている、心で納得出来るはずはない。それを理解し・・・青海は押し黙ってしまう。

「すまん・・・青海。ここは勝つ為だ。」

「すまん。」

そう言つと青海は陣から出る。しばらく歩くと、青海は物陰からそつと信繁を見つめる。その姿は全身がまだ小刻みに震えている。・・・あの絞り出すような細かい声はまだ頭の中に残っている。

「そろそろ朝か・・・」

後藤はそつと空を見上げる。戦闘は北、東から部隊が侵攻するものの、山の上を陣取る後藤が、一進一退のようだった。この時初めて信繁のあの緊張した顔の意味が分かった気がした。あの作戦から今までずつとふさぎ込んだ顔・・・今なら分かる。数の暴力がこの少し冷たい霧の中映る人影で分かる。ここまでぎりぎり堪え忍んできた部隊の皆の体力や気力は限界である。それは一番自分がよく分かる。

「大将！」

「どうした！」

その声に隣のぼろぼろとなった木の向こうの兵士から声が聞こえる。魔が散発的に銃声が響く為、声も大きめだ。

「弾が・・・もうこっちの弾はありません！」

その掛け声で、後藤は自分の手元を見つめる。こちらの銃も弾は最早無い。担いできた火薬もつきている。もう周囲もそうなのだろう・・・。白んできた空をじっと見つめる。もう・・・時間は稼げたかな・・・。

「お前ら！撤退すつぞ！傷ついた奴は近くの奴に武器渡して山降りる！」

周囲に聞こえるように後藤は大声をだす。下を見るとまだ上ってくる部隊がいる。後藤は刀を抜くと立ち上がる。

「他の奴らは近くに來た奴らを叩き斬るだけにしろ！」

そう言つと隊列の後ろにいた負傷兵達が引き上げ始める。

「まだ立ち上がれるものは時間稼ぐぞ。そして順次・・・引き上げる！」

その言葉に全員が頷くと後の者は立ち上がる。まだ周囲は霧でまだ晴れる様子はない。奇襲で稼げる時間はあるはずだ。

「まだ霧・・・晴れねえな。」

苦い顔で正宗は山を見つめる。

「しかも・・・来るかと思つた敵もこねえな・・・。」

正宗の嫌そうな声を背景に片倉も不安そうに見つめる。もう4刻（8時間）くらい経っている気がするが、時々銃声が響く。

「敵ですか？」

片倉が素直に聞き返す。確かに幾つかの部隊に川を見張らせていた。

「まあな。川の横から撃ちらの横っ腹ぶん殴る気だつて思つてただけだよ。どうも・・・こねえ。」

正宗はじつと川向こうを見るが襲撃の気配は感じない。

「大方、あの敵が潜入しようとしたら失敗した・・・それだけです。うちの部隊とか優秀ですから・・・。」

「それなら・・・期待した俺が馬鹿だったのか？俺が行くぞお！こんなの終わらせてとっとと飯食うぞ！」

そう言つと正宗は刀を抜きじつと山の上を睨む。まだ苦戦しているようだが・・・もう山から響く銃声はまばらになっていた。

「北の部隊から怒号が！」

「脱出は！」

後藤は掛け声をあげるこちらの手元の武器はもう・・・刀しか残っていない。

「ほとんど終了しました・・・もう俺たちだけです。」

その言葉に後藤は満足げに頷く。

「最後は俺の番だな。お前。」

「はい！」

「先に行った奴らに伝える。状況を伝え・・・後は信繁について行けと・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・分かりました。」

その伝令・・・必ず伝えます。」

隣の足軽大将が頷く。大方意味を理解したのだろう。足軽大将とその一団は近くの兵士の肩を叩くとそのまま下山していった。もう残っているのは後藤只一人である。

「まあ・・・この様子じゃあ・・・俺の下山は無理だわな。」

下を見つめると北の部隊の一団が駆け上がってくるのが分かる。

「だとすると・・・行くかあ！」

後藤は深く深呼吸をする。心が落ち着いてくるのが分かる。後藤は木の隙間から覗く、もう投げつけられるような敵の武器もない。

”おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！”

木々の中を野獣ともとれない叫び声が木々の間に響く。そして刀を構え後藤は山を一気に駆け下りる！最初に見えた兵士を・・・構

えるまもなく飛び込み踏みつけるとそのまま山の中を駆け下りる。

「後藤基次！参る！」

掛け声の中、山を駆け下りる。その速さに驚いて一気に駆け下りていく。数分もしないうちに麓まで駆け下りる。むろんそれまでに切り結べる相手には斬りつけていったが、もう数回振り抜く力も後藤には残されていない。

「やるじゃ？お前！」

そう言っただけで構えている三日月の兜をつけた男がいた。その周りには多くの兵士達が従っていた。

「行け！お前ら！」

片倉が兵士達に発破を掛ける。その声に触発されるように近くの兵士達が槍を構えて突っ込んでくる。それを後藤が紙一重に避ける。と刀を鎧の隙間にえぐり込む。そしてそのまま近くの兵士の方に無理矢理向けると槍を無理矢理差し込ませる。そして刺さったのを確認すると、刀を引き抜き横に蹴り飛ばす。それに合わせて兵士たちがばたばたと倒れていく。

「おめえら！俺に出番ぐらいくれよ！」

そう言っただけでそれを見ていた三日月の兜の男が一步前に出てくる。

「お主・・・名前は？」

「俺か？聞くと凄すぎて・・・ちびんぞ？」

そう言っただけで刀を構えながら少しずつ三日月の兜の男が間合いを詰める。

「折角・・・首を切られるのに土左衛門でもいいのかな？」

少し口元をゆがませて後藤は目の前の男を睨む。今までの兵士とは違う圧迫感がそこにはあった。

「そこまで言うなら・・・覚悟はあるようだな。冥土のみやげに覚えてとけ！俺の名はなあ！」

そう言っただけで三日月の兜の男はしばらく構えたまま黙っていた。しばらくすると、ちらちらと後ろを見つめ始める。

「俺の名はなあ！」

ちら．．．。

「俺の名はなあ！」

ちらちら．．．。

「俺の！名はなあ！」

ぎよる。三日月兜の男は素直に後ろを向くと片倉を殴りつける。

「あれだよ！あれ！」

そう言つて三日月兜はもう一度後藤の方を振り向く。その頃には後藤の息も大分整えられてきた。

”やるんですか”

”この時位しか．．．やる時ねえだろおがぁ！”

”分かりましたよ”

そして伊達政宗はもう一度後藤の方を振り向くと、片倉は数人を手招きし、何か準備させている。

「俺の名はなあ！奥州組頭にして奥州最強の伊達男！奥州にその名をア知られた最強の組頭！その名を聞けば幾人が振り返り！数万の男がひざまずく！そんな俺の名はあ！」

そう言つと片倉達は昔作つた人よりも大きい金の十字架を立ち上げる。そして空砲だろうか数人が鉄砲も打ち鳴らす。

「奥州筆頭組頭！伊達政宗とは俺の事だ！」

その言葉にも後藤はじつと刀を構えるだけだった。

「．．．やるじゃねえか。何にも反応しねえとはな。」

少し驚いたように後藤を見つめる。だが構えを解くことはなかった。その間にも後ろの人たちが片づけに追われていた。

「ふ．．．。関係ないわ。」

低く構えた刀を少しあげると後藤はじつと見つめる。

「あまりに凄くて言葉もないんじゃないね。」

「行くぞ！」

そう言つと身体を倒れ込むように傾けると後藤はそのまま身体をひねり切り上げようとする。それを伊達政宗は刀を狙い打ち込む。それに弾かれ後藤は元の構えに戻る。だがそれでも狙うように今度

はしたからすくい上げるように突きを打ち込む。それを狙って、正宗は水平に斬ってくる。それを頭を低くつつ、突き上げるが伊達も身体をひねり突きをかわす。その瞬間更にもう一ひねりを加え更に一回転すると、ちょうど確認の為に顔を上げた後藤の首を捕らえる！次の瞬間、後藤の首に正宗の刀が突き刺さる。

「む……やる……な……おれ……」

そしてそのまま後藤は崩れ落ちていった。

「お疲れ様です。」

そう言い片倉は手を叩くが、正宗の顔は晴れなかった。

「こいつ……何だぁ……。覚悟がちげえ。」

「それは……分かりませぬ。」

そう言う正宗は後藤の顔を見た。それは必死の形相であった。

「信繁様。配置。終わりました。」

各部隊の兵士達の様子をじっと信繁は見る。もう紐上がってきて暖かくなってはいるが、未だ霧は晴れない。大方……そう言えば、展開殿は半蔵のこと……霧隠とか……まさかな……。

「信繁様。後藤殿の部隊の使者が……」

根津が報告すると信繁は立ち上がり周囲を見渡す。設営場所の村の入り口方面の小屋で、傷だらけの男達が収容されている。その男達に走って駆け寄っていく。

「信繁様……後藤様からの最後の言葉を……」

「何だ！」

「後は……頼んだと……」

言葉を聞いたその直後、信繁の涙腺はゆるんでどっと涙がこぼれ落ちる。

「傷ついた部隊を後方に回せ。彼らが着くまでは決して下がらぬぞ！」

そのまま全員に号令をとばす。戦闘準備は完了しており、後は合図を待っただけだ。じっと南の方を見つめる。

「徳川の使者の方が！」

伊達正宗はにぎりめしをかぶりつき、じつと川を見つめていると徳川の旗を背にした男が入ってくる。

「伊達殿。家康殿が”後ろがつかえておるのだからせめて川を渡った向こうで陣を張れ”とのことです。」

「ああ！お前らさっきまで戦ってたんだぞ。」

「承知の上です。」

「状況伝えるや。そしたら行ってやる。」

「は！」

そう言つて使者は顔を上げる。

「現在東の部隊は順調に進軍中。ここだけが戦闘の為、各所で進軍が滞っております。」

「あ・・・そ。」

じつと伊達政宗は川向こうを見つめている。敵がもし遅れてくるなら今頃向こうで陣を這っている公算は高い。だが催促されては奥の8万前後の部隊は向こうで展開出来ない。そう考えるものの、向こう側は分かつてはいないだろうな。だとするとここで進軍させるしかないか。一刻の猶予さえ俺たちにはないのか・・・。

「仕方ねえべ。片倉。お前が先に部隊を揚げておいてくれ。飯食つた後に俺も行くからさあ。」

「は！」

そういうと立ち上がり霧で見えない対岸を見つめる。どうやらまだ戦は終わってはいないようだ。そうこう言っているうちに隊から選抜された部隊が鉄盾を持ち、警戒に当たる予定だ。じつと見え詰めると手に持った握り飯を飲み込むと近くの水筒の水を腹に流し込む。部隊の半数は準備が出来たらしい。先ほどの戦闘の負傷兵達は後方の陣に運ぶ算段に一刻はかかり、その間に準備をすませたものまだ戦闘の興奮は冷めやらない。しかも陣を引き締めた為、戦闘の緊張は続いている。そのためか、兵士達の顔は暗い。

「これは・・・明日はもう出れないかもしれないが・・・霧にも限界がある。それまでに決着させたいが・・・無茶かもな・・・。」
何となく感じるものの、自分たちが前に出ねば・・・更に行軍が遅れる。しばらく双眼鏡を見つめると、片倉が渡航に成功したみたいだ。川向こうに伊達家の旗が立つ。それに合わせ、正宗が手を挙げると、各部隊も前進を始める。

「お前ら、とつと渡って、向こうの村で休むぞ！」
「おお！」

発破を掛けると兵士達とともに川中まで歩く。甲冑の重さが重しとなり、歩いて渡れるが、体力だけは奪われる。

「お前ら、鉄砲だけは濡らすなよ！」

相違井川を歩く次の瞬間川の上流、南側から轟音が響く

「片倉！」

「は！」

対岸から大声が聞こえる。片倉の声だ。

「今のは!？」

「分かりません。こっちを狙う鉄砲だと思いますが。」

「当たった奴は！」

「いません！」

戦闘の緊張が川を渡っている部隊達に走る。それを感じて正宗は早歩きで川を渡る。川も霧に包まれ、この霧がいかに濃いかよく分かる。片倉も警戒して周囲に盾の向きを指示し始める。・・・何か悪い予感が・・・。

「マジ！待てやあ！」

”撃てー！”

どこかから響く轟音はちょうど陣の対岸から一直線に陣をなぎ払う。それに伴い上陸部隊の半数が銃弾に倒れてしまう。特に盾を構えていた部隊の大部分が鉄砲にやられてしまう。

「片倉！」

「殿！大丈夫！」

正宗が大声を出すと・・・生きてはいるようだ。最初は右つつら・・・次は正面・・・。

「盾を前方にかまえ・・・。」

「左に構える！」

正宗の声に反応した手を左側に構える。

「殿！」

「盾を読まれてんじゃねえのかよ！だとすれば、今度は構えたところから別に飛ぶ！」

正宗は川から上がると手短の盾の所に隠れる。

「来るんでしょうか？」

「お前ら、盾で囲いを作れ。後続をその中につっこめ！頭低くするのを忘れるなよ！」

「了解！」

その掛け声で、後続の足軽大将たち後続部隊に指示を出す。

「片倉、地図！」

「は！」

そう言つて懐から地図をだすと、伏せながら正宗に近づく。その時轟音が響き渡ると左側の縦に鉄砲が当たる音が聞こえるが、上陸部隊にも一部当たつてしまい、川に沈んでしまう。

「あの野郎う！」

正宗のうなり声が周囲に響くが、それも轟音にかき消えてしまう。

「第一射成功！」

根津はじつと霧の向こうにいると思われる標的を見つめる。

「よし！」

信繁は自らも火薬を詰め、物陰に隠れる。

「音から十を数える作戦。成功ですな。」

根津は頷く。もう昼も近く、霧はまだある者の、視界は徐々に晴れてきている。信繁は双眼鏡で敵の状況を見つめる。屋根裏から双眼鏡だけをつきだしている。下では兵士達が隙間から銃を構えている。

普通の人間は状況判断を行うのに少し時間がかかる。むろん川を渡った直後なら川中にいる時の襲撃を警戒するあまり油断する。その油断を最初の一撃で警戒に変えさせる。最初に奇襲する手も考えたが、そこは流石に徳川家康。もう一重ね策を巡らせることにした。それがこの銃を数えての銃撃である。かめた方向と違う方向から弾が飛ばば、勘違いしても早々構えることが出来ず混乱させることが出来る。隊列が整えば、こちらがわざと差し込み、構えさせず、行軍させ無ければ、この銃の前に兵を失わず、こちらが一方的に退却させる事ができる。

「相手もさる者だな・・・あれは・・・伊達政宗か・・・東北の男がこんな所まで・・・ご苦労なことだ。」

いつもの物静かで穏和な感じから一転冷たささえ感じさせる声で観察を続ける。後は銃を撃ち、しま達が帰ってくるまで待つだけだ。相手は川に上がると盾をこちらに向ける・・・いや一部はやはり次の部隊の方へ縦を向ける。そしてその縦に弾が当たると川向こうに散っていった玉が川を渡っている最中の人間達に当たる。

「流石に・・・やるな。だが少数しかまだ揚がってはいないが・・・だが・・・まだ手がある・・・だが・・・この相手ならばれる。しばらくは泳がせるか。撃て！」

その掛け声とともにした下の銃撃隊が銃を放つ。それとともに慌てた相手の部隊がばたばたと倒れる様子を未設中、信繁は望遠鏡から目を離すと手に持った弾を込めた銃を青海に手渡す。そして近くの弾切れの銃を掴むとまた銃に弾を込め始める。部屋の後ろの方では弾込め専用の男達がせつせと弾を込めている。まだ、第2手には早い。そういうしている間に向こうの部隊からも銃声が響いてくる。むろん計画通りである。

「どうなつてんだよ！敵！」

銃弾が飛び交う中、正宗は地図を見つめていた。この状況、もう少しすれば部隊が全滅しかねない。鉄盾を構えていても時々弾が貫

通し、ばたばたと倒れていくそれを走って後ろの兵士が起こして、庇ってはいるがこの環境であることが盲点だった。それは川を渡った際に銃に火を入れる為の火打ち石が濡れてしまい、銃を撃とうにも火がつかない。しかも霧もあるが、どこから弾が飛んでくるか見当も付かない。地図を睨みつけるが包囲されているとしか・・・考えられない。

「分かりませんが、反撃しなければ全滅しますぞ！」

「お前ら、火打ち石とかそこに揚げて、川の中に身体つつこめ！全員だ！後・・・旗！おろせ！」

「は！」

そう言つと片倉と近くの部隊はじりじりと川際まで交代させる。

その間も絶え間なく銃は飛び交っている。また川を渡ろうとしている部隊は弾の轟音に渡ってくる様子はなくなってしまう。

「片倉！お前の部隊は、川に一度入って、川から下流に回り込め！そこから一部隊ずつ片づける・・・後お前は後続の部隊を川向こうに並ばせる！そこからここ！」

そう言つて指さすのは古墳のある北側である。むろん扇状に陣を這った安全地帯である古墳地帯にも信繁は兵士を配置している。

「ここ！ここ！、このあたりに必ず兵隊がいる。川向こうから撃たせる！」

その言葉を聞き、片倉は地図を丸め、地図を持った腕を川に着けぬように飛び込む。

「了解！」

そう言つと片倉は周囲に指示を出すと川を泳いで向こうに行ってしまった。

「俺たちは囷だ！旗を立てろ！俺たちの意地をあいっつらに見せつけてやれ！」

「おお！」

その声に兵士達全員の怒号が響く。この魅力こそが伊達政宗の武器でもある。

その動きをむろん信繁も双眼鏡から見つめる。

「周囲に伝達だ！上から打ち下ろせ！」

その掛け声にサムライ隊長達が隣の小屋へ大声を上げる。それとともに下にいた銃撃隊がはしごを掛け、屋根に上り始める。盾を持ち込むぐらいは当然予想していた……だがあれには非常に重い欠点がある。それは上からの攻撃に弱いことだ。むろん兜がある為、矢を打ち上げたときでは早々人を殺すまでは至らない。なら銃を打ち下ろせばいい。

屋根の中から望遠鏡で覗くがまだあの上陸部隊に……いや……旗を掲げ始めた。何かの合図か……？

「信繁！」

「帰りましたぞ！」

声に下を覗くとしまと算が小屋の中に入ってくる。

「良くやった！」

そう言っ駆け下りるとしまと、算は所々傷を負っていた。

「途中さ、相手の斥候部隊に襲撃されちゃって。」

「大丈夫か？」

そう言っ算を見るが、それらしい傷はない。

「まあ、全員片付けました為……大丈夫ですが……。相手は連戦ですからほぼ……疲労の限界ではないかと。」

算は土間に腰を下ろすと、敵のいる方から身を隠すように座っていた。

「だとしても相手にはまだ後続部隊がいる。」

「でもさ。あれっでどんな意味があつたんだ？あの筒？」

「あれか……凄い音がしただろ。」

そう言っ信繁はしまの顔を見つめる。しまの無邪気な顔を見るとここが戦場じゃあない気がしてしまう。

「あれ……すごい音がするんで驚いちまったぞ。」

そう言い大きく手を広げて腕をばたばたさせていた。

「あれで敵を驚かせるのが目的だ。ありがとな。」

そう言つと信繁はしまの頭をくしゃくしゃとなでる。今はこれぐらいしかできない。

「でもまあ・・・見事に成功したようすな。」

算もじつと外を覗く。致命傷ではないものの、ほぼ相手の部隊は壊滅状態だろう。

「だとして相手はあの伊達政宗。一筋縄ではいかない。」

「あの・・・伊達政宗ですか・・・。」

「でもさ。どうするの？」

「しばらくはここで銃を撃つて敵の数を減らす。そして・・・負傷兵が陣の後方にたどり着くまでの時間稼ぎをする。だが・・・。」

「だが・・・。」

「相手のことだ。何か仕掛けてくる。それ次第では撤退する。お前らはその準備だ。先に・・・。」

そう言つて近くに置いてある握り飯をしま達に渡す。

「飯・・・食べとけ。長丁場になるぞ。」

そう言つと厳しい顔をして家の中にあるはしごを登り、屋根に据え付けた隠し双眼鏡を覗みつける。

「何か・・・怖いな。」

「覚えとけ。これが戦だ。」

算は厳しい顔をして、家の小窓から外を見つめる。血の香りはこの場所まで鼻につくほどに敵側の死傷者は増えていった。その時々小さく始める音がどこかから響き始める。

川に半分身体を押し沈め、自分自身も盾を持つことで、弾をかわし、じつと・・・じつと伊達政宗は待っていた。その音が響くまで轟音が後ろから響き、後続部隊が川を渡り始めたのだ。無論これが反撃の合図だと・・・信じていた。

「叫び声が聞こえねえ。」

普通、初段の縦断には負傷者がつきもので、当然相手に銃撃を行

えばそれなりの打撃を与えることが出来る・・・はずだ。その時・・・こちら側に銃弾が更に飛び交う。まだ相手がこちらを狙っている様子だ。

「お前ら！まだ行くなよ！」

その掛け声に立ち上がるうとした兵士達が更に身を潜める。川側の土の詰めただが鎧を通してからだに伝わる。もう下手したら身体が動かないかもしれぬ・・・。そして、手にもっと遠見筒を先ほどの音の方を見ると徳川の本隊が川を渡り、北側から進行を始めた。だがこちら側はまだ包囲されている・・・まだ・・・待つしかないのか。

「御注進！御注進！」

「なんだあ！」

そう言い青海が頭をぼりぼりかきながら入り口まで行くと思慣れぬ部隊の旗をつけた使者が家の中に飛び込んでくる。この家紋は・・・長宗我部の者だ。

「信繁様！長宗我部様が見事お役目をお果たしになりました！それに伴い！兵を退きました。」

「損害は！」

「木村様の部隊が壊滅したものの、長宗我部様が回収。退却出来ました！」

そう言う信繁の耳に事が聞こえるもじつと望遠鏡を見つめた。川向この遠くのほうに土埃が見える。上陸したのだろう。味方を見ると、傷ついた兵士達の姿が見える。もう限界だろう。念のために守りやすい東側に少数兵を配置させ、奇襲することで、敵の部隊を足止めし、敵部隊を壊滅させ、敵を固めさせる。そのために他の部隊に後藤殿と同じ事を伝え、兵を配置させておいたのだ。無論。無視されるようなら背後を突かせる為でもあつたが流石に徳川。東からもやはり攻めてきたか・・・。

「分かった！お主！暇か？」

そう言つと信繁は望遠鏡を手の下に降りてくる。

「は？」

「他の部隊に・・・引き時と伝える。俺たちもそつちの退き具合を確認した後に引き上げる。」

「了解しました。」

この時には最早2時半、日は傾き始め、野戦となれば霧もあり戦鬪すれば混乱必至である。その前に引き返せば疲労も押さえられ、今後につなげられる。じつと見つめると、使者が走り、古墳周辺に隠れる味方達に向かって走っていく。

「お前ら！後一踏ん張りだ！ここをしのげば帰れるぞ！」

「応！」

その掛け声にしまでも震える思いがした。・・・これが侍・・・。幼い彼女の頭に残るこれが真の侍を見た瞬間である。

「片倉・・・久しぶりい。」

正宗の疲れた声が聞こえる。夕暮れをバツクに来る片倉は弱っているようにも見える。

「殿・・・大丈夫でしたか。」

「だめだ。」

そう言い、ついに来れた敵達の拠点だと思われる一カ所を見つめる。そこに力なく地面に座る。

「おめえは？」

「敵はこつちが部隊を整えて、進行を始めた時にはもう引き上げていて、残存兵を討ち取ることには成功しましたが・・・。それでも・・・大部分には逃げられました。」

「結局は俺たちの負けか・・・よ・・・。」

じつと夕日を見つめる。部隊の疲労感も合わせてもう伊達の部隊を動かすことなぞ出来ようはずもなかった。

「徳川の旦那に伝えてくれ。俺たちの兵は疲れすぎてもう戦つことが出来ない。後方警戒にさせてもらつとな。」

「それは……。」

「この状態で戦場に行けるかよ。」

そう言っただけで周りの兵士達の状態を見つめる。川に半日以上浸かっていた事による体調不良や負傷兵ばかりでもう戦闘出来る状況ではない。それは徳川の部隊も一緒らしく、進軍する気がないようだ。

「ですな。」

片倉も途方に暮れたようにその場に座る。

「ここに陣を張り、明日にはでるぞ。ま……後方警戒でも部隊は動かせるように再編は頼むな。」

「使者を向かわせておきます。」

「なあ……。」

「はい？」

伊達はその場に倒れ込むと空を見つめる。カラスが鳴き、空の彼方へ飛んでいく。

「俺たち、真田相手に……手も足も出なかったな。」

「ですな。」

「完敗……だな……。」

「はい。」

そう言い空を見つめる……こうして本当に長い伊達の一日は終わろうとしていた。頬に伝う涙は兜に隠れ、片倉以外には誰にも見えなかったのだった。

第十二節 最後まで人らしく（前書き）

徳川との最終決戦に向け着々と準備を整えてきた真田信繁・・・。
佐野齊五野氏上げでもある戦国最後の決戦”天王寺の戦い”が今始
まろうとしていた・・・。

第十二節 最後まで人らしく

第十二節 最後まで人らしく

急ぎ撤退した信繁達は茶臼山に陣を隠れて張ることにした。予定通りではあるが・・・その代償は大きい。だが・・・これに甲うのは勝利の二文字しか・・・なのだろうと自身も知ってはいた。それにしてはあまりにいたい損害である・・・損害で友の死を語るのさえ・・・つらい。

「お前ら！準備は出来たか！」

「は！」

信繁は掛け声とともに気にくくりつけた赤い鎧達を満足そうに見つめてた。

「こんなのに役に立つんだよ。」

しまは変な顔をしてに鎧をつつく。

「さあな。」

「奇襲を掛ける。」

信繁は鎧の具合を確かめるとにやりとした顔で、今川の入り口あたりで陣の設営を始める徳川方を見つめる。

「は？」

「夜襲ですか？」

「今夜襲すればきつと返り討ちに遭う。」

そう言っに入ってきたのは今回の出陣組の頭でもある。毛利勝永公である。後藤達を信任し、じつと後ろで構える大将である為、淀君の陰に隠れてはいるが気骨だけは一流でもある。

「確かに。」

「でもさ？こんな鎧くくりつけても兵士なんか増えないじゃん。」

そう言っしてしまは不満そうに見つめる。それを勝永がギロリと睨む。その様子にしまは肩を無意識にすくめてしまつ。

「こいつは？」

「忍びでして……。」

そう言っすつとしまを庇うように信繁は立ちふさがる。

「猿飛佐助と申す。此度の戦。こいつがいなければあそこまで押さえられる自身は拙者にもなかった。だから拙者の顔を立てて。」

「それは分かった。だが小僧。」

その言葉にじろつとしまを見つめる。

「控えるところで控えねば、戦では死ぬぞ。特に今回はそうなりがちだ。分かったな。」

「……分かったよ。」

しばらく勝永を見つめると、しまは頭をぺこりと下げる。

「信繁……このような小僧まで狩り出さねばならないとは……寂しいものだな。」

「……ですな。」

「俺たちはこれからどうすればいい。軍師殿。」

そう言っすつて近く木陰に隠れるように座り込むと明かりを取り出し、地図に当てる。それに合わせ、周囲の男達もあぐらをかく。

「先ほどわざと……拙者達の鎧を着せた根津達の部隊を大阪城に帰してございます。その男達は普通通りに出陣し、ここに戻ってきます。」

「それは？」

「忍び達を騙させる為です。こうしておけば夜の時間は稼げるでしょう。その間にそちらの部隊に川の側に木船を幾つか隠して置いていただけぬかと。」

「分かった。明日はどうするんだ？」

「町並みを利用し待ちかまえれば、攻めてきてもしばらくは耐えられましょう。只……相手の数は数なので、こちらから攻めれば全滅必死でござる。」

そう言っすつて信繁は地図上に駒を並べる。

「ならどうするよ。」

「こちらの部隊には偽兵をいいます。この山には5千ほどいれば、向こうが5万でも一日は耐えられますよ。」

「それでこれか。」

そう言って近くに飾ってある鎧を見つめる。

「これで敵の数は3倍ほどに見えるでしょうから、後は相手はここがかし相手に無駄撃ちしていただければいいかと。」

「それで・・・勝つ算段は？」

「拙者達が後は奇襲すれば彼らは寄せ集めの兵ですから、混乱し撤退するでしょう。」

「そうか・・・。」

そう言って地図を見つめる。敵の先方は前田利家、老いたるとはいえ織田家最強の5家老の一角。今でもその手腕は戦闘に関してはぬきんでている。

「俺たちは時間を稼げばいいんだな。でも・・・。」

「どうなされました。」

不思議そうに信繁は毛利を見つめる。その顔は不安で曇っているように薄暗闇から感じた。

「いつまで耐えればいい？」

「八つ時（午後三時）までに何も起きなければ・・・城に使者を送り・・・引き上げてくだされ。流石に旗を掲げた使者まで大砲では撃たぬでしょうから、使者を送れば引き上げることは可能ですよ。これ以上は兵士達の緊張も持たず、いたずらに体力の消耗につながりましょう。」

「お主は？」

「帰って来ねばそのまま籠城していただいて結構。討ち死にしたと思ってください。」

「・・・。帰る気さえないと・・・。」

毛利の顔が青ざめる。火の影に移る信繁の顔は死に臨む覚悟を決めた強者の顔に見えたからだ。

「そうとは申さぬ。只、相手はあの徳川。成功しても帰れる保証は

「ごさいませぬ。」

「俺たちが絶対退路だけは作ってやる。だから安心して行ってこい！」

「分かり申した。」

そう言うつと勝永は立ち上がり陣を去っていった。

”確かに計略はこれで完成する……だが……だが……だが……”

信繁は毛利が去った後も地図を見つめ続ける。今回信繁が採った最終作戦とは”啄木鳥戦法”であった。これは武田家の主力戦法であり得意な手であった。まずは一度普通に戦闘を行うことで相手に先入観を与え、対策を逆手に取ること、相手を完膚無きまで撃滅する必勝戦法である。最初に真つ向勝負をすると考えれば当然次の戦は前に構えるところを突くのが基本であるが、今回は兵力の消失はそのまま、敗北に至る為、銃を用いる作戦を採っていた……だが……確かに頭では考えていたのと被害は違い、引き立ててくれた恩師を先の戦で失う……頭では分かっているても悔しくてたまらない。信繁は地図をじつと見つめていた。

「信繁。」

青海は視界を遮るように自分の使っているひょうたんを突き出す。

「飲め。」

「青海……。」

「何考えているか知らねえが、迷いは戦場では死ぬ。」

「ですが……。」

「……後藤殿はお主の作戦を信じておった。そのお主が迷っている……作戦が成功して、徳川に勝てなけりや……あいつは無駄死になる。」

青海はじつと信繁を見つめる。だが暗闇で良く目の前は見えない。明かりは先ほど毛利殿が持って行った……。だがその向こうから嗚咽が聞こえる。

「あの人の為だ。せめて、無駄死にするな……。」

「わかった……。すまない……。」

そう言う信繁は地図をたたみ、足早に去っていった。あれでもあいつは大将なのだ・・・泣くのは後でいつでも出来る・・・じつと青海は信繁の後ろ姿を見つめているしかなかった。

「準備完了しました。」

半蔵は家康の陣にやってくる頃には会議は終わっており、各自出撃準備を行う為に陣に帰って行った。この場には家康と半蔵しかいなかった。

「そうか。」

「どうでしたか、今日の様子は。」

「伊達と藤堂、上杉が全く動けなくなった。あそこまでやるとは思わなんだ。」

優しい声で半蔵に言うと、家康は地図の駒の配置を直していく。

次の戦はほとんど徳川の部隊が前に出ることになる。

「予想通りで？」

「いや、予想より手強い。流石・・・真田よ。」

その声は優しく・・・寂しそうに声が響く。

「死人は・・・食い止めましたが・・・。」

「戦い方を聞いた限りでは向こうは死人を使ってはおらん。」

「あの人らしいですな。」

半蔵は頷くと地図を見つめる。大方次はあの山で立てこもることだろう。

「だろうな。そう言う男だ。義と礼を欠くことはあいつはあり得ないが・・・だからといって手を抜ける相手ではない。」

「ということは・・・。」

そう言うて陣の駒の一部を後ろに動かす。

「来るとしたらここしかない。ここを直屬部隊で守らせる。」

「そう来ますか？」

「わしが同じ立場ならこの手を打つ。まあ・・・そこまで分かるからこそあいつに惚れているのだが。」

そう言つて陣の側面を叩く。そこは川ばかりである。また、本陣の位置はどう来ても大丈夫なように川の中腹に陣を立ててある。だが後陣には息子達の部隊を配置してある。

「これを抜くには数がいるが・・・戦は分からぬかもしれぬ。覚悟はしてあるよ。念のために真田が来たら生け捕りにせよと説明してある。」

そう言つて半蔵は陣を改めて見つめる。正面は前田利家、後方は徳川秀忠どちらも猛者である。だが・・・生け捕りというと数は五倍いると言われており、被害のほどはしれない。

「生け捕り・・・ですか？」

「ああ。あいつはきつとこの日の本をしょつて立つ男だ。ワシなどではない。それをこんな所で散らせたくはない。」

「自惚れれば死にますぞ。」

厳しい顔で家康を半蔵は見つめる。

「分かつている。・・・いやこの老い先短い命であれば安いものかもしれない。だが・・・それでも惚れたのだから仕方がない。」

そう言う家康の顔は少し明るかった。

「今なら分かる。あの・・・手紙の意味を・・・ワシは従うわけにはいかなかったが・・・あの信長公の顔の意味も・・・そこまでして一緒にいたかったのだ。」

そう言うと同じと地図を・・・いや信繁を捕らえた時のこととか妄想に浸っていた。

「拙者達も捕縛には参加いたしません。普通のものならばきつと手には負えなさそうですので。」

「分かった・・・。頼んだぞ。」

そう言う半蔵はその場から姿を消した。半蔵は待機位置に戻りながら・・・どこか悔しい感情を・・・押し殺しきれないでいた。

「戦はこちら側の圧勝ですかねえ。」

城から見る布陣は明らかに・・・作戦違反である。だが、ここで

うかつに止めるのはまずい。じつとキース・フロレンスは見つめていた。天守閣から見える兵士達の顔は希望に満ちあふれていた。

「それはそれでいいではないか。」

淀君の声が響く。声はいささか震えているが、意識だけはまだはつきりしているようだ。

「そうすると奴らに大量の戦勝金を払わねばなりませんぞ。あの者どもに。」

「それは・・・いや。あの金は私らの物じゃ。」

「だとすれば、快勝されるのはちと困りますのお。」

じつと見つめる。城に帰ってきた部隊は幾つかの武器を持ち、戦の準備をしている。

「どうするかのお。隊長。」

淀君がじつと空を見つめる。

「こちらが弾を撃たなくてもよいのは嬉しいが・・・これでは計算が狂う。なら・・・こちらから打って出ればよい。お前ら。」

そう言うつと側に控えた6人の宣教師達が膝を突く。

「作戦を変更する。」

「は。いかように。」

「お前達2人は外回りで戦場に入り、死人封じをしている箇所を見つめ、そこを潰せ。」

「は！」

そう言うつと四人の宣教師達が頷く。

「あと・・・お前らは味方陣地から入り、引つかき回せ。」

「了解・・・です。」

そう言うつと大男達が頷く。

「後は・・・。」

「裏から周り、敵本陣に行き、茶番を終わらせてこい！」

「はあ・・・いいんですか？」

「これで終わらせるつもりはない。もう少しな。」

その言葉に全員が頷く。

「後の者は仕上げの準備に入れ。艦隊には明日、明後日だと伝えておけ。」

「はい。」

そう言うと、宣教師たちは天守閣から降りていく。

「私はどうすればいいのかえ。」

淀君はそつと窓から月を見つめる。月は煌々と輝き、大阪城を美しく照らしている。

「大将はそこにいればいい。」

「そうか。大将か。大将らしくせねばのう。」

じつとキースは淀君を見つめる。

”人形は人形らしく、人形であればいいのだよ”

そのまま振り返ると天守閣の階段を下りていく。さて、報告書にはどうやって書くべきか……。

朝も明け切らぬ夜にこつそりと信繁達の部隊は移動を開始していた。根津をその場に残し、部隊の陣頭指揮を執らせ、後の部隊を岡山（茶臼山東側の小さな山）の裏手を通り、こつそりと川までやって来て毛利達に用意させた船に乗り込む。船の数は偽装出来るほどと少ないが、船を使うことで、音を立てずに最初の川を渡ることに成功していた。そして近くの山頂にとどまり、斥候の帰りを待つことにしていた。この時、この決死行に付いてきた猛者は1万2千。

配置された軍の4分の1相当にも及んでいた。無論この数で奇襲を行うにはこの数は多すぎた。だからこそ……東の沼地域に警備隊を置いていた。すなわち、奇襲を警戒させた部隊による忍者等の偵察をさせない為だけに前日に部隊を配置したのだ。警備隊と思えば戦闘後、そこをもう一度越えるとは考えがたい……。心理的な裏を狙うつもりで来たのだが……。

「ま、あんたの予想通りだったよ。」

帰ってきたしまと算は落胆した顔で陣に戻ってくる。その顔を見て近くの石の所に明かりとともに、地図を広げる。

「こことここに、旗本部隊がいる。敵陣は区別が付かないが・・・大方こちらの布陣をある程度見切っているようだった。流石に本陣の位置までは・・・分らん。」

そう言うと言は指で丸を書いて陣を示す。

「明かりだけで区別は付かないが、前陣に前田家。後陣に旗本・・・更に前ではあぶれたように他家のものがいた。だが遠すぎて・・・」

「でもさ。どうよ。これ。」

しま達が地図で丸を付けた位置を頭に思い描いて信繁は考える。

これは・・・偶然か・・・いや・・・考えがたい。なら・・・こちらの作戦は読まれていたと言うことだ。だがもう・・・この部隊を引き替えさせるわけにはいかない。引き返せば敗北確定である。ならどうする・・・信繁にとってつらい決断がそこに待っていた。

だが、この配置ちよつと・・・待て・・・

「陣はどこまで奥にあった？」

「かなり奥までだったな。」

「ああ。川の真ん中まであぶれていたぞ。」

「さて・・・」

ちよつと待て・・・信繁の頭にあるひらめきが頭をよぎる。川の真ん中まで陣があぶれる？そう考えるのはいくら急ぎ足の行軍でも考えがたい。当然川上は押さえてあつても、当然川原から・・・予想は付いてきた。大方本陣の位置は・・・川の真ん中だ。なら・・・どうする・・・信繁はじつと地図を見つめる。普通に行軍してはあの辺一帯の川はそれなりに深く、銃の餌食となるう・・・いや・・・

「進行手順は固まった。後は・・・俺たちが行くだけだ。」

そう言つて後ろを振り向く、山の裾野に一万四千の各部隊の精鋭部隊が並ぶ。

「お前ら！良く聞け！」

その言葉に全員がこちらを向く・・・気がする。各部隊に発覚を

恐れ明かりはつけさせてはいない。

「俺たちはこれから修羅となり、敵陣を突き抜ける。今までみたいな楽な戦じゃない！俺たちは援護も支援もなく只ひたすらに前を掛ける狼となる！」

そう言いはためく旗を信繁は見つめる。そこには真田家の象徴6問千の赤い旗が夜風にはためく。

「今後赤い鎧ではなき者・・・自らの前に立ちただかる者全てを斬れ。先陣は旗を立て続けよ。他の者はその旗を指し走り続けよ。そうすればそこに味方がいる。そして俺が・・・先陣を切る。だから・・・だから・・・。」

じつと家臣達が真田の顔を見つめる。その顔は・・・覚悟に満ちていた。その時日が昇り始める。ちょうど日の加減もあり、後ろから後光のように朝日が兵士達を包んでいく。

「お前達は存分に戦働きをせよ！家康を討ち！今度こそ戦争なぞ起きはしない豊臣の世を！」

そう言っ腕を突き上げる。

「俺たちの手でつかみ取る！！平和な世を！そしてオラが家族を・・・俺たちの手で平和へと導け！」

その声に言われるわけでもなく、全員がときの声を上げる。

「ここから休む時はないと思え！突撃！」

その言葉に信繁達は馬を掛け、全速力で走り始める。それに合わせ騎馬部隊、槍兵が走り始める。朝になり、無論徳川軍が進軍を始めることだろう。これが戦国最大の激戦”天王寺の戦い”の始まりである。

五月七日早朝。徳川軍もまた軍の侵攻を始めていた。無論、戦を終わらせる為である。

「俺たちや無理だと言ったのにさ。」

そう言っ進む兵隊達を背に伊達政宗は遠見筒を見つめる。茶臼山には真田軍と思われる兵士達が陣取っていた。先日の山岳立てこ

もりもあり、伊達郡の士気はガタ下がりでもある。だからこそ後ろの坂井郡に警戒する、奇襲警護を買って出たのだが・・・ダルい。「あいつら・・・張り切つてやがる。」

徳川四天王軍と前田軍が歩を進める。

「でも・・・いいではないですか。こうしておけば同盟関係が結べ、しかも兵士達に実践を積ませられます。しかも激戦では働かない旗本扱い。」

片倉は茶器を持ち出すと、そつと正宗にだしてみせる。

「でも・・・なーんかおかしいんだよなあ。徳川の旦那も・・・真田もさ。」

そつと茶器を受け取ると中の抹茶をぐいっと一呑みに飲み干す。「確かに・・・そう言えば家康どの・・・真田信繁の捕縛命令を出しておりましたな。」

「そつちじゃなくてさ。」

「この配置だよ。」

そつと自陣を見つめる。露骨に陣を只異名達に任せているように見えるが・・・しきりに家康は何かを気にしている・・・気が伊達政宗にはしていた。無論ある程度あつた中で家康の性格は知っている。むしろ自分から先陣を切り、自分で片付ける性格の男がどつしてこの配陣・・・。今も四天王軍が二つの山の脇にある町に進軍を開始している。隣の山を攻略するべく、猪突猛進な前田利常が軍を岡山に向ける。

「それは・・・分かりかねます。さすがは内府殿と言つたところでしょうか・・・。」

片倉はじつと四天王軍を見つめる。伊達軍は動ける者だけで、構成されてはいるが・・・その勢力は弱く、後方支援の形を取っている。無論東側から奇襲を狙つた上杉軍、藤堂軍もまた、奇襲にあつたらしく後陣詰め・・・待て・・・何で中程が後陣・・・。しかも、何故か利常のとなりだが・・・。むしろ大阪城から見ればあの位置・・・先陣ではないか・・・。

伊達政宗は遠見筒で、敵陣の様子を見つめる。ここからは遠いが真田軍は兵士達が立派に鎧を着て・・・ちよつと待て・・・。あれ・・・動いてねえ。

「俺たちはここで待機だ。だがとりあえず、軍はどこにでも動かせるように構えておけ。」

「はい？」

「俺の予想が正しきゃ・・・あいつ・・・やらかすぞ！」

「よく分かりませんが真田がやらかせば・・・わたしたちが不利ですが？」

伊達政宗は何かに気が付いたように遠見筒をにやにやと見つめていた。考えが正しければあいつも旦那も考えることは一緒だったらしい。なら・・・後はどうするかだ。どっちの力と才が上なのか・・・。俺はここから見物させてもらおうか！

「戦闘始まりましてございます。」

「わかっている。」

「霧の具合が遅いぞ！」

半蔵は後方の山から霧隠れを使い陣全体に被い水をまいてはいる。もし相手が死んでから死人を生成されてはこちらが圧倒的に不利となる。特に各大名の部隊なら、真っ先に逃げ出しかねない。

「戦場が広すぎます。それに水の量が圧倒的に不足しています。」

周囲の部下達や妖怪達も連日の霧隠れで疲労の極致のあり、もう霧を張るのも限界に近づいてきた。

「各部隊報告！」

半蔵は後方の山から戦場を見つめる。遠くの山では今頃戦闘派が始まっていることだろう。

「は。」

そう言つと各部隊とかに向けて走らせた忍部隊達が集結する。

「現在の状況！」

「は！」

「南、伊達側は生還の様様！前田殿は市街戦に突入！またそれに伴い後陣の旗本部隊が進行中。真田軍と交戦中です。」

「そうか……。」

机の上に置かれた地図の駒を報告に合わせて動かす。これを伝えるの餓死の美の役目でもあるが。半蔵達はその上に予測を交えた妨害を行う。だが……。

「真田軍の動きはあるか？」

「いえ。」

それは……この時真田と交戦又は親交のある人々は何となく理解し始めていた。真田軍の様子がおかしいと。先の戦いといい、その圧倒的な作戦で徳川軍を苦しめてきた真田軍がこの程度なのか……。

「そう言えば……お吉の方は？」

「さあ。出番は夜になるとか言って本陣近くのほうへ行きました。」

「半蔵様！」

「なんだ！」

怒鳴り声を上げると後陣にいたはずの連絡役が血相変えてやってきた。

「後方で火の手が上がりました。どうも……真田軍です！」

「なに！」

半蔵は驚いて、手に持った遠見筒を持ってその方向を見ると後方の陣が二つに割れていくのが見える。この時午前十時である。

「お前ら！初っぱな一撃を加え！……撃て！」

その叫び声とともに迫り来る徳川の大军に向け第一者が発射された。

「毛利様！」

「あいつが討ち取るまではこちらに兵を引きつける！引き寄せて、横を付く！」

その掛け声に屋敷に隠れた部隊から大声が揚がる。建物に多くの

兵士を隠し、じつと待機していた。ある意味大都市を使った初めての最初で最後の戦国市街戦である。

「これでこっちに来る。門を閉める！」

その言葉で、数人係で門を閉じる。勝手口には見張りを立たせている。無論武家屋敷というのは襲撃前提にくまれてはいるが、実際に使用されることは少ない。門を閉めると同時に栓抜きを押し込み、門を閉じる。このように狭い路地裏では傷値とかを持ち出すのは難しい。しかも。

「来ました！」

「よし！構えろ！」

そう掛け声をあげると屋根の上に構えた部隊が銃を構える。

「敵が見えたらぶちかませ！」

「おお！」

その声とともに銃声が響く。その瞬間向こうから叫び声が響き渡る！

「あいつら・・・頼むぜ・・・。」

じつと徳川本陣の方を見つめた。まだこの時はまだ変化らしい変化は感じられなかった。

「おおおおおおおおお！！！！！」

騎馬部隊は川の浅い所を狙い信繁達騎兵隊は一気に後陣に殺到していった。流石に後陣にいただけあって兵士達は浮き足立ち、赤備えの男達が太刀を構え駆け抜ける様は正に恐怖その物であった。

「貴様ら！あいつを捕らえよ！褒美は！褒美は！」

叫ぶ人間を馬ではじき飛ばすと信繁達は一気に駆け抜けていく。

後続部隊が、横を押さえるように切り結んでいく。ここでも大方・・・陣の大きさから二万から三万はあるが・・・そんなのはもう・・・彼らに関係はなかった。もうそこにいるのは赤鬼ともいえるほどに血に染まった男達だからだ赤備えの部隊は陣を横切ると同じく、その部隊を壊滅させていた。ここに徳川軍”第一の失敗”がある。こ

の陣に配置されていたのは経験を積ませる為に配置した若年兵ばかりであった。と言う主熟練者達の多くは先の戦いで死んでしまい、代わりの兵士がいなかった。だが変に時間を与えれば徳川軍はすぐにも海外から増援を集め、また国力を回復させてくると予測出来たからだ。ならどうするのか……。単純である。回復する前に叩けばいい。だが徳川軍にも悩みはあった、前の戦いでほぼ半数以上の兵士を失った彼らにとつてすぐに徴兵出来たのは、彼ら戦闘経験のない部隊ばかりであった。訓練は行う物の、訓練不足の感は否めなかった。だから他の大名の力を借りるしかなかったのである。そこまでして……。相手の死人を封じ、潰さねば行けない理由がある。城にはあるのだ。だからこそ後陣詰めしかこの部隊にさせるわけにはいかなかったのだ。いたずらに死者を増やせば、死人にされる恐怖に……。この部隊は打ち勝てる……。百歩譲つても見るわけにはいかなかったのだ。それにもう一つの計算もある。奇襲人数である。どう見ても奇襲の相場は3千前後であった。それ以上は統率出来ないは今まで戦で分かつてはいた。それ以上なら忍者達の報告があると家康も高をくくっていたのだ。そこにミスがあった。この戦いでは最低人数以上の忍者は霧隠れに配置され、ほぼ全ての忍者は偵察もろくに出来なくなっていた。そのためか、報告や偵察が通常に比べおろそかになっていた。唯一偵察が出来る忍軍を持つ、伊達軍が先日の戦いでほぼ半壊したのも痛手だともいえる。そのため、奇襲は防げなかったのだ。それがこうして勢いが付いて止まらない真田軍となつて現れていた。最早、その勢いを三万前後の部隊で止めるは叶わず、そのまま雑兵となつてしまった徳川軍は後ろに後退を始めてしまう。

「おおおお！！！！！」

青海達騎兵達はそのまま指示された方向に進んでいた。目的地は橋だった。

「ここで抜けられては徳川の名折れ！」

徳川秀忠の声が響く。その声は歴戦の武将のようでもあるが、自

身も前に立つことは出来ず、腰が退けている。

「ですけど！敵はすぐそこに！」

叫ぶ声が聞こえる。だが震えた秀忠の身体が動くことはなかった。それはあの恐怖が思い出されるからだ。あの赤い鎧・・・そしてあの掛け声・・・真田！

「お下がりにくいだされ！」

後ろの陣から黒い牛を思わせる兜の男がやってくる。黒田長政。橋を守備している徳川家康最後の切り札ともいえる男である。

「爺！」

秀忠はその声に目が覚めたように逃げ始める。

「ここは我らに任せ、お引きくだされ、。私らが絶対通しませぬ。」

「分かった！頼んだぞ！」

そう言うのと秀忠達各部隊は引き上げ始めた。それは真田達も分かっていた為、退く部隊に目もくれはせず、正面の橋を守る部隊を睨みつける。

「行くぞ！」

信繁はそのまま馬を駆けさせ一気に突っ込んでいこうとする。その時！

”ぬおおおおおおおおおおおおおおおお！”

気合にあふれる声が聞こえた次の瞬間、信繁の乗っていた馬に太い槍がぶち刺さり、馬はバランスを崩しその場に倒れてしまう。

「この黒田長政！お前らを決して通すか！」

仁王立ちした黒田の声に黒い鎧の部隊が真田達に立ちはだかるように構える。

「撃て！」

長政の号令に脇に構えた銃や弓が飛び、騎馬達は足止めされてしまう。一部の兵は落馬してしまう。だが、その瞳はまだ闘志に満ちてはいるが・・・。騎馬止めの棘が付いた鉄盾を構え、こちらに向けてにじり寄ってくる。

「お前ら！行け！」

その声とともに川向こうから銃弾が黒田達に放たれる。声の方を信繁が見ると算が一部の銃撃隊に指示をして撃たせていた・・・だがそこは川原・・・隠れるところなぞ無い！度が考えることはなく信繁は一瞬の間を見逃さず立ち上がると、一気に走っていく。

「させるか！」

黒田は近くの槍を握ると槍を投げる構えにはいる。次の瞬間その兜に銃弾がかかる。それに気を取られた好きに懐に飛び込む、近くの銃撃隊を切り伏せる。それについて騎馬隊が突撃を開始する。黒田は少し考えた後騎馬隊に向け、槍を放つ。それは馬ごとき馬体の男に当たり、一撃であいてを吹き飛ばす。そして腰に差した刀を抜くと信繁に向かって走っていく。

「者ども、奴を止めろ！殺しても構わん！」

「しかし！奴には！」

周囲の兵士達には動揺が広がる。

「私が責を負う！奴に本陣まで行かせるな！」

「は。」

そう言うのと信繁に今度は足軽達が突進を始める。その穂先を交わし一気に間合いを詰めると近づき、柄を叩きおる。だがその後ろに追従するように黒田が間合いを詰めていく。信繁

はさらに奥まで進むが、そこで足を止めてしまう。そこには黒田家の精鋭5千が控えていた。今までの新米とは違いここは熟練兵ばかりで固めた、親衛部隊ともいえる部隊だ。だが・・・止まればそこで道はとぎれてしまう。しかも・・・ここは橋の上数体を切る結び、越えようとするが人垣と槍で止められ、強行突破することは・・・出来ない。後ろからは黒田長政が雄叫びを上げ、猛進してくる。

後ろの部隊はまだ、前の弓と鉄砲部隊に阻まれて、突破は出来そうにない。

「なら！」

信繁は振り向くと刀を構え、黒田に向かって走っていく！

「来るか！」

雄叫びとともに長政は上段に構える。だが今朝が前をして突つ込む信繁に只力任せに振り下ろすのを、刀を滑らせ、回避するとそのまま胴を抜こうとするのを柄を強引に信繁にぶち当てるとそのまま無理矢理引きずりおろす。信繁はそれをわざと引き抜くと一回転してもう一度斬ろうと構えるが、その時にはもう長政は元の構えに戻っていた。

「お主……やるな。名は。」

「……真田……信繁だ。」

一瞬、色々考えるが、この鎧や兜を見ればこれが大将であることは分かる。黒田長政……後藤基次のライバルでもある猛将である。聞いたことはある名前だ……。

「私は、黒田長政だ。」

そう言うと刀を構えたまま少しずつ距離を知事馬手来る。無論後ろは槍を構えた兵士達である。この男を前にして……今後ろを見ればすぐさま切られてしまうだろう。だが、このままでは……この時真田信繁、一瞬死を覚悟してしまう。

「本当に……ここにいるとはな……。のう……。」

一瞬女性の声が聞こえたと思う次の瞬間、一陣の風が吹く。次の瞬間着物を着た女性が横に立っていた。脇には大柄な羽根だらけの人も立っていた。

「久しいな……信繁。元気だったか？」

「お吉の方様……。」

「よ。」

驚いて信繁は横を見ると、そこにはお吉の方とトリさんがいた。

「どうしてここに。」

「ん。仕事のついででな。折角だから顔だけでも見に来ようとな。」

お吉の方は余裕そうに扇子を開き、ぱたぱたと顔を仰いでいる。

「んだ。ひさしいよのお。」

にこにこ笑い、お吉の方の真似をしていたのは昔山中で助けた妖怪”トリさん”だった。

「お前もだ。」

「おらか。オラな。おめえに言われた上田が気になって村から自分で出てきて、上田に来ただ。そしたらこの人がいて、おめえの所に連れて行ってくれるって言われて嬉しくてな。」 その様子に黒田は啞然としてしまう。ここは橋の上であり、後ろでは兵士達と青海が戦闘を行っている。むしろ苦戦している。

「本当に苦勞しているのだのお。本当に・・・真田はおもしろい。」
優雅に語ってはいるが、信繁は焦ってしまう。ここは敵陣中央であり敵に囲まれている最前線だったのだ。

「お吉の方様。お下がりください。今は世間話している暇はなさそうですので。」

信繁はお吉の方を庇うように長政の前に構える。

「暇がなければ！作れば良い！」

その掛け声とともに後ろを向くと扇子を大きく振りかざすと突風が起こり、後ろを固めていた兵士達が吹き飛ばされていく。そして一直線の道が突風で、出来ている。

「今は用事があるのだろう。行ってこい。後で世間話でもしてやる。」

そう言ってお吉の方は黒田長政の方を向き返る。

「オラ・・・恩返しに来ただ。行ってける。ここはオラ達で押さえる。」

そう言つとトリさんは後ろの兵士達に構えてみせる。

「すまない。」

そう言つと信繁は背中刺していた刀を一本お吉の方に投げる。

「これは。」

「ここはお任せいたす。では。」

そう言つと信繁は陣の奥へ走つていった。

「ほんと、このために来るなら言えばいいんだに。」

「素直にいえれば苦勞はせん。」

トリさんは苦笑いをしてお吉の方に話す。お吉の方は少し頬を赤

くしていた。

「お主ら・・・邪魔だてすれば・・・容赦はせぬぞ。」

長政は刀を下段に構え、様子を見ている。

「お主・・・私にその物言い。」

そう言ってお吉の方は信繁から受け取った刀を抜く。それは大太刀であり、その身の丈と合いそうではないが・・・軽々と抜いて見せた。

「私を何者だと思っておるか。」

その声に徐々に殺気が籠もっていく。それとともにお吉の方の背中から尻尾らしいふさふさした物が飛び出してくる。徐々に気配は大きく感じられるようになっていく。

「知らぬ。只・・・徳川の敵であろう!」

「ふざけるな!」

その声とともに周囲の人間達はその気だけで数人が吹き飛ばされる。

「この天狐、自ら相手になろう。来るが良い!この世の地獄!味合わせてやる!」

そう構えた瞬間その恐怖は最高潮に達している。だが長政も意地の人、刀を構えて空きを窺う。他の物と違い、退くことだけはなかった。その頃にはお吉の方の尻尾の数は9本を超えていた。

「黒田長政!参る!」

「毛利様!」

異変に最初に気が付いたのは鉄砲隊達である。

「どうした!」

「敵陣の様子がおかしいです。」

そう言つと毛利は屋根に上がり、望遠鏡を覗く。そこには敵の後方で煙が上がり、人?等が空を舞つところである。無論後方で戦闘が開始されたと言うことは・・・。

「奇襲は行われているようだな。」

そう言うと屋根から掛け降りると、周囲を見る。周りの顔は晴れたように明るい。これは

・・・

「勝機！お前ら！攻めの合図を揚げろ！一気にあいつらの血路を開くぞ！」

「了解！」

近くの兵士は手に持った筒に火を入れる。そして空に赤い信号の煙が空にて舞っていた。

信号筒は豊臣軍各部隊にその戦況の変化は伝えられていた。

「根津様！」

赤い鎧を着て、信繁の代わりをしている根津にもその信号は見えていた。

「分かっている！お前ら！もう少しの辛抱だ！部隊を入れ替える！」その掛け声とともに、攻めの隙間を縫い、戦闘に参加する兵士達を後退させる。彼にはまだ・・・全面に広がる部隊を見つめる。向こうにはまだ多くの兵士達が構え、親交を行っている。まだ気が抜ける環境ではない。この時、日はまだ頂点に至っていないかった。信繁が奇襲に成功してなおまだ、戦況は互角なのだ。その事は毛利もまた分かっているが。それでもこれは数少ない勝機だ。そう皆は感じていた。

「先陣に異常あり！」

徳川の本陣では急遽防衛の準備がされ、忍者隊の呼び戻しなどが行われていた。

「分かっている！」

家康は本陣の脇からその様子を見つめていた。大方相手の数は五千を超えている。そう家康には感じられていた。無論秀忠達の崩れっぷりも見えていた。自分の息子ながら・・・情けないが、前田の後陣・・・本隊部隊がこちらに戻り、黒田の部隊がぎりぎりで見詰まっているのだろう。まだ向こうの部隊は来ないだろうが・・・。予想

していたとはいえ・・・いや違うあいつは予想を超えた数を持ってきた。なら・・・届くかもな・・・ここまで。

「お前達、固めろ！本陣であいつを捕らえる！」

危機は好機でもある。あいつの性格からするとここに来るのは本人だろ・・・。

「半蔵を呼び戻せ！ここで・・・最後の決着をつける！」

兵士達に号令を掛ける家康はじつと向こうの戦況を見つめる。あの赤い鎧・・・まるで武田軍その物ではないか・・・。まだ・・・私の元に武田軍の亡霊は来るのか・・・。私はまだ・・・やることがあるのだ！邪魔はさせない。今度こそ！逃げない！

「おお！すげー。」

伊達政宗は遠見筒で少し高い所から後陣の様子を見つめる。そこには人が空を舞い、鉄砲の煙舞う戦場の様子でもあった。

「どうなさいました？」

片倉は不思議そうに聞き返す。

「いやあな。今・・・マジに、本陣が襲われてやんの。」

「へ？」

片倉は啞然としてしまう。確かにここまでこれば向こうの様子は分かるわけでもないが・・・だからといって本陣が襲われるのは只ならないことだ。

「それは・・・。助けに行った方が・・・。」

「今動けば、敵さんの本陣と挟み撃ちだぜ。そこまで義理は俺たちにねえ。」

そう言っているものの、頭の中ではいろんな事が・・・。

「ならどうするんです？」

「俺たちは後方詰め。来ないなら行かない。」

気が抜けたように正宗は答える。それには片倉には言えないが二つの不安がこの軍あるからだ。ちょうどここは戦場と堺を結ぶ直線上にあり、今、伊達軍が動けば堺にいる豊臣軍が動き出し、三方挟

み撃ちになる公算が高い。また、大阪から浜を通り奇襲する部隊が来る公算が高い。ここを動けば、その部隊の侵攻を許す公算が高い。だからここを動くことは出来ないのだ。

「ですが・・・」

正宗は遠見筒から目を離した瞬間。ただならぬ殺気を感じ、刀を抜く。その瞬間化に鉄砲の弾がぶち当たる。

「な！」

片倉は慌てて周囲を見るが周囲に人の気配はない。

「おめえら！警戒しろ！」

その声に周囲の兵士達が立ち上がる。

「なんですか・・・。」

「殺した・・・。」

そう言い正宗は立ち上がると、刀を構える。この”殺し”というのは片倉が昔から仕えている時に使われる隠語で、暗殺者が来たことを示す物だ。無論東北では多くの襲撃にあってはいるが、本陣と真ん中で来るとは考えて・・・。

「氣いつける。さつき感じた殺気以外はどうにも気配を感じねえ。」

正宗の獣に近いと言われている野性的な勘ですらも捕らえられない敵・・・片倉は背後を守るように背中側に回る。

「まだ来ますかねえ。」

周囲の兵士達も慌てて構えるが・・・。

「来ると思っぜ。」

漂う・・・何かを感じてか、伊達政宗は構えを解かなかった。そのとき、銃声が聞こえる！その報を無垢と、伊達軍の旗の上に一人の・・・黒い何かが立っている！それは銃を持っているが・・・肉眼では捕らえにくいほどの遠くであり、黒ずくめ以外の特徴を正宗達は知ることが出来なかった。

「あれか！」

片倉が叫んだ瞬間伊達政宗は構えて正面を見る。陣の正面、陣幕の入り口を開け、黒ずくめの男が一人、走ってくる。そのまま伊達

正宗を捕らえるとナイフを構え、身を低くしてくる。

「ふざけるな！」

上段に構え、正宗は振り下ろすがナイフの曲線で一気にいなされたと反対側の手を暗殺者と正宗に向ける。それに何故か恐怖を感じて身をよじった先に轟音が響く。どうも、手の先から何かが飛び出したように見える。正宗の胸に当たるが、殺傷力はそれほどでもない為貫通はしていない。次の瞬間遠くから更に銃声が聞こえる。それを片倉は走って庇う。その瞬間片倉の方をかすり弾はそれる。その間に二、三撃ナイフで突きを狙うが、それは正宗に弾かれてしまう。正宗が斬りかかろうとする次の瞬間、一気に飛び退く。

「さすがだな・・・おめ。」

暗殺者らしき、黒の謎の着物で全身が覆われた男は少し距離を取り、まだ構えを解いてはいない。周囲の兵士達は慌ててそちらを向くが、反応仕切れてはいない。

「おめは。大将？」

「知るかよ。」

そう言っただけで構えてはいるが、その目の前の男の異様は言い表せない物がある。その男は小さくはあるが・・・背筋が曲がり、ノミのようにも見える。それ以上に胸に下げた十字だけが白いのも気になる。あれは基督教とか言う・・・。

「おめえ、宣教師か？」

「さあな・・・。」

そう言っただけで、少しずつ正宗は距離を詰める。次の瞬間、ノミみたいな男は一気に間合いを詰めてくる。それに片倉達は反応出来なかつたが、正宗は刀を水平になぎ払う。その早さにナイフを構えた暗殺者の刃は届くことなく、暗殺者は横にすっ飛ばされる。

「大丈夫ですか！」

片倉は駆け寄るが、胸にはめり込んだ弾丸の跡が残る。正宗はこくりと頷くと暗殺者の側に寄る。

「こいつ・・・。」

正宗は当たった手応えに切った感覚がないと思って、近寄ってみるが、もう暗殺者は動くことはない。

「こいつ。毒を飲んでやがった。」

暗殺者の口元から血が流れ出すがその色は通常の血の色よりも相当にどす黒い。

「ですな。」

着物の裏を見ると、鎖帷子くさりかたびらを着込んでおり、刃物は貫通していないのがよく分かる。

「状況が不利と悟ると、毒まで……。おめえら！警戒しろや。第二波……。来んぞ！」

正宗は何か……。こう不吉な物を感じていた。今までの戦とは違う何かを……。

「徳川の旦那……。」

兵士達に警備の指示をする片倉をよそに、先ほどの黒の固まりのあつた旗を見る。そこにはもう……。黒い固まりの姿はなかった。

「ぬおおおおお！」

青海が錫杖で敵兵を殴りつける。ちょうど目の前では旗を掲げた信繁が立ちふさがる旗本達を切り伏せていた。

「大丈夫か。おめえ。」

「青海……。」

信繁は肩で行きをしながら先を見つめる。敵陣中央まではまだ半里（一キロ弱）ほどある。その先には徳川の本陣がある。

「少し息整えろや。後続部隊がくるまで待つぞ。」

「そうさせてもらおう。」

そう言うのと立って様子を見つめる。向こうではお吉の方と黒田長政軍と前田利常軍が戦闘しており、その様子は……。こちらで見ると限り互角にも見える。今、信繁の周りにいるのは

信繁と青海……。そして。

「やっと付いたぜ。」

しまが来たただけであつた。しまの身体には返り血や生傷が所々に付いており、戦闘の激しさが伺える。

「後続は？」

「わかんねえ。だけどあれだと、あのお吉の方だっけ。あの人の影響でお互い足止めだ。あそこで。」

そう言つて後陣を見つめるが確かに、赤い鎧の一団もお吉の方の攻撃を受けている。あれでは敵も味方もありはしない。この三人であの敵陣を・・・だが、兵士がこう立っていたとしても来ないあたり、援軍に向かつた兵士達はもう壊滅しているとも言える。

「算は？」

「あいつは、後方の銃撃隊を指揮していたからさ。向こうをまとめてるさ。」

「わかつた。」

じつと先陣の方を見つめる。まだ戦闘鳩中である。もうさすがに昼あたりは過ぎただろうか。日が西側に少し傾いている。

「行くしかないようだな。」

信繁は息を整えると、旗を地面に突き立てる。

「ここから味方はいないと思え！行くぞ」

そう言い気合いを入れ直す。もう思い残すことはない。信繁は一直線に走つていった。

「利常殿！」

「おおよ。」

横にいた前田利常に黒田長政が走り込んでくる。お吉の方と発言した女・・・いや妖のお陰で陣は混乱の極致である。鉄砲などの武器は聞かず、兵士達はことごとく吹き飛ばされている。最早触れることさえ叶わない。そう言う黒田自身もこれまでに十回ははじき飛ばされ最早軍の統率はとりにくい。それは前軍の前田軍も一緒に挟まれた形ではあるが、後軍の部隊がぎりぎり、前軍への影響を防いでいる。

「ここは！はさみ撃つ！」

「了解！それまでは稼ぐ！行け！」

利常は軍配をお吉の方に向ける。

「撃てー！」

その掛け声に鉄砲隊が一斉に射撃する。それはお吉の方の一步の一振りの前に弾は弾かれ、その場に落ちる。

「このような物なぞ！」

お吉の方の掛け声に鉄砲隊の一部が弾き飛ぶ。その間に利常自身は近くの茂みに隠れ、刀を抜き放つ。

「そこ！」

お吉の方は殺気を感じて手をかざし、衝撃波を放つが、それを利常は刀でかるうじていなすと、ぎりぎりで踏みとどまる。

「やりおるのお。」

その間もお吉の方は尻尾で他の兵士達を薙とばしていた。

「お主から死ぬか・・・のう。お主・・・。」

声はゆっくりとしていたが、その威圧感は巨大な獣に睨まれたネズミその物に見える。その隙を窺い、黒田は全力で後ろから槍を投げつけるが、それも尻尾で弾かれる。その様子に利常は死さえも覚悟した。そこまでの覚悟が彼女からは感じられたのだ。

「お吉の方！」

殺気を感じ振り返ると尻尾と腕に鎖分銅がからみつく。

「半蔵殿！」

利常が声を上げる。お吉の方の周囲には忍者隊が構えていた。

「何故この様なことを！」

「ん？お前か。」

軽い声ではあるがその声には殺気があからさまに含まれている。だが半蔵は更に厳しい顔で睨んでいる

「あの者達が先に手を出してきおったのだ。私のせいではない。」

そう言い周りをも渡すが、陣は半壊で敵味方・・・いや一部の敵兵は歩きながらも中央突破を計っている。あそこはもう兵士達に

任せるしかない。

「協約違反ですぞ！第一どうしてここに！」

「私は遊びに來ただけじゃ。それに先に手を出されて私は・・・私は反撃するなど。」

そうはいつているが、この陣の乱れ方は最早黒田軍とて立て直すまでは難しい。前田軍も相当な被害だ。だが。真田軍もまた・・・一部は逃げ始めている。だが強行突破しようとした部隊は疲労困憊で動けない物が多数だ。

「それは・・・」

忍者部隊を全て傾けてもこのお吉の方一人を押さえるのさえ難しい・・・そこまでの差ではあるが・・・。

「分かった分かった。ここはお主の顔に掛けて退くでしょう。」

そう言うつと後ろを振り向く。そこではまだ格闘して、兵士達を押さえるトリさんの姿があつた。流石に筋力と体格の差の為十対一でも引けをとることはなかつた。そう言っている間にも兵士を胴ごと蹴り飛ばし、気絶させていた。

「おーい。終いじゃ。帰るぞ。」

「んだ？いいだか？もう。」

「そうだ。つまらんことになつたからの。他の者に悪い。帰るぞ。」
そう言うつとお吉の方は軽く鎖分銅に触れるとまるで、軽い埃でも取るように引きちぎる。

そしてゆっくりと黒田長政の所まで歩いていった。その頃にはお吉の方からは尻尾なぞ見あたらなくなり、着物の陰に隠れていた。

「んだな。」

トリさんはぱつと兵士達から手を離すとお吉の方に歩いていった。

「そこのお主。」

そう言つてお吉の方は黒田長政の側にしゃがみ込む。長政自身、精も根も尽きかけ、膝を突いていた為、ちょうど顔をつきあわせる形となる。

「中々やるのお。ここ1000年ではなかなかなよ。楽しかつたぞ。」

そう言うと立ち上がりトリさんを従え、山に向かって歩いていった。その様子に全員は啞然とするしかなかった。

「あの方は……。」

前田利常はその後ろ姿を見つめ、ぼそっとつぶやいた。周りに立っていられるだけの兵士はいなく、半蔵だけが立って呆然としていた。

「あう言うお方だ。」

「だな。」

そう相づちをうつと黒田長政はぱったりと倒れ、この日に目を覚ますことはなかった。

ちょうど撤退を視野に入れると明言していた八つ時の頃、戦場は混沌としていた。お吉の方が暴れたお陰で、後陣が消えた前田軍は市街戦を仕掛ける毛利勝永の軍に苦戦を強いられ、四天王軍だけで戦線をさせていた。また根津率いる偽真田軍も奮戦し、ぎりぎりの所で戦線を維持していた。だが、そこまでして兵を払った奇襲部隊も壊滅状態にあり、本陣に付くまでに少し待っていても35人を残し、ほぼ壊滅してしまう。(捕縛での戦闘不能含む)この状況に置いて徳川軍の忍者部隊は本陣防衛および、お吉の方の押さえの為に全てを割かれ、各部隊に状況を知らせる斥候部隊さえ回せなくなっていた。無論、妖部隊はこの戦闘で使えるわけではないので、最早徳川軍に打つ手はないように見える。ここで硬直を破る展開が現れ始める。その展開は毛利隊に発生する。

「おまえら！」

毛利勝永は前陣の後退につけ込むと一気に戦線を前に押し上げていた。その時だった。

「紀州が裏切ったぞ！」

誰かの声が響く。

「何か様子がおかしいですね。」

「いや……様子がおかしい。待てよ……。」

じつと敵の本陣を見つめる。そこはもう・・・戦の火は見えない。この頃にはお吉の方は戦闘を終え、帰還を始めていた。だからか・・・もう戦闘は発生していなかった。これは・・・失敗したかもしれねえな・・・。

「引き上げの為にぎりぎりまで、粘るぞ。他の部隊を固めて引き上げの準備だ。大野に撤退の使者を出しておけ。」

そう言うのと近くの男は走って後ろに下がる。

「生きてくれよ・・・真田。」

こうして、言われたとおり、毛利は陣を下げ始めた。確かに信繁が言ったとおり、日って上気ではあるものの、兵士達の疲労は極致に近づいていた。

「それは本当か？」

根津は見張りの言葉に真剣に考え始める。先ほど兵士達はどうも後陣で裏切りが発生したとの報告を聞く。これが本当なら情勢の悪化について徳川を見限る者が現れたのか・・・なら。

「お前ら！」

「は。」

周囲に声をかける、もう戦闘時間が長く、兵士達の疲労は限界でもあった・・・だが、まだ信繁様は帰らない。この好機逃すわけはいかない。

「我々は今から、陣を崩し、信繁様を救出に向かう！付いてこれるものだけ来て！後は、毛利殿へ合流せよ。ここを破棄する！」

そう掛け声を発すると幾つかの兵士達は立ち上がるが、多くは座ったままだった。その数3600。最後の突撃には十分であったが、もう余力なぞ残っていない。下を見れば未だ敵兵で埋まった山の下だが、向こうの本陣は空いている。それに裏切りで混乱していれば、敵陣までの突破は可能だ。

「お前ら！今こそ勝利の時！突撃！」

そう言うって根津達、最後の部隊は一気に山を駆け下り、山中に駆

け下りたもうその頃には兵達の多くは疲労でいっぱいであった。また戦線の拡大は戦場にいる各旗本達に伝わり、士気は低下していた。結果突撃は成功し、兵はかなり失うものの更に混乱させる事に成功させる。

「俺でも・・・やれば出来る・・・。」

根津はよろよろになった馬を叩き歩かせていた。敵陣を突破する事には成功している。だが、帰らなくてはいけない。帰らなくてはならないし、まだ信繁様を見つけてはいない。

「本当に疲れましたなあ・・・。」

「そうだな。」

頷いて根津は声の下方を向く。そこには黒い甲冑を着た兵士が・・・。

「お前・・・それは・・・。」

次の瞬間兵士は投げナイフを投げつける。それを直感で無理矢理避ける。

「やりますな、信繁殿。」

そういうとさっと身をかがめ、馬の前まで走ると兵士は投げナイフを投げる。更に身をよじりかわそうとするが、かわすまでも当たらない。馬に当たったのだ。馬の目に当たったナイフに馬は暴れ、根津は落馬してしまう。

「そのお首・・・頂きますぞ。」

暗殺者は身構えると異様な形のナイフを取り出す。倒れた相手ですら警戒を解かず少しずつ間合いを詰める。根津は身体を起こし刀を構える。相手の構えは・・・彼自身見たことがない構えだった。袖口から見えるナイフのような大きな刃物は・・・刀ではないようにも見える。

”勘違いしているようだ・・・徳川の忍びか？だが・・・これは？”

根津は窺うが向こうからの動きが・・・次の瞬間数歩ずらす。その耳元に風を切る音が聞こえる・・・二人か・・・。目の前の暗殺者は一気に走り、間合いを詰める。刀を青眼に構え、無理矢理穂先

を相手の刀に当てずらそうとするが、その刃物がかち合った瞬間、
するりと抜け、自分の喉元へ！

「させるか！」

その刀を平にしたまま波を外へ強引に払う。だがそれを見越した
ようにもう一つの腕を突きガス。袖に隠れていたのもう一本の異
様なナイフであった。それを回避しようにも市毛決めで両手を使っ
た彼に回避するすべはなかった。そのまま鎧の隙間を抜け、肩にぶ
ち刺さる。

「よし！」

だが根津も一角の武将。そこで意識を失うような男ではなかった。
そのまま払って力が抜けた側を無視して柄で心臓付近を殴りつける。
どうも・・・この男・・・胸に防具をつけているように見えない・・・
。だが、そこで彼に激痛が走る。その攻撃に暗殺者は慌てるが、
もうそのときは遅かった。引き抜こうと力一杯ナイフを抜こうとす
るが力を込めた根津の前では刃物が抜けることはなかった。根津は
刀を捨てると、腰の小柄を抜いて・・・相手の腹に全力でブツ刺す。
その勢いで吹き飛ばされそうになるのを今度は暗殺者が踏みとどま
る。そして抱きつくように倒れ掛かる。

「GO！」

その掛け声が聞こえるといきなり後ろから投げ込まれる・・・
これは・・・。

「YOU, KILL。」

その掛け声とともに、暗殺者と根津の周りが火に包まれる。杜松
は蹴り飛ばし離れようとするが、肩からの出血が激しく・・・相手
の必死のしがみつきをはがすことは出来なかった。

”神よ・・・御許に参ります・・・”

そう暗殺者は母国語で言うと・・・そのまま意識を失ってしまう。
・・・いや、絶命した。

「これで・・・あのお方を・・・いやあのお方みたく成れたらどう
か。」

根津は死ぬ寸前、信繁の顔が思い浮かぶ。初めて見たあの時から
憧れ・・・そして必死についてきた。似ているとかいわれたときは
どういう意味でもとても嬉しかった。今こうしてあのお方の代わり
にこうして・・・一人の敵を食い止めたが・・・こうしてあのお方
みたいになれたのだろうか・・・。思い浮かべ崩れ去る根津の顔は
火に焼けただれながらも・・・。
安らぎに満ちていた・・・。

”これでかき乱す事には成功したようだな”

建物の影から吹き矢を持った暗殺者がじつと焼け死んで行く二人
を見つめる。しばらく見つめると死体の前で十字を切る。通路の奥、
大阪城のほうから銃を担いだ黒ずくめの男がやってくる。

”そっちはどうだ。魔弾。”

やってきた男のほうをみるが、その顔はさえていなかった。

”こっちは失敗だ。ネテロの奴・・・しくじったおかげでこっちま
でやばかった。”

”こっちはまあ・・・セルゲイの奴が粘ってくれたおかげでどうに
かなったが・・・引き上げるぞ。俺達ではこれ以上は限界だ・・・。

”

吹き矢の男は奥のほうを見つめる。奥ではまだ戦闘が行われてい
るようだ。

”後は、アンサレムがやってくれるだけか・・・。”

”撤収するぞ。こんな所で死ぬのはあの馬鹿どもだけでいい。”

そう言い、根津の死体を放置して彼らは去っていった。それから
遺体が発見されたのすぐの事だった。

「おお！うおおおおお！」

徳川本陣に突入した信繁たちは一気に突入すると、信繁たちは一
気に陣幕に向かってひた走る。

「おめえ！邪魔すんな！」

そう言うと島は一気に走る速度を上げるとの武士達の横を押さえ

るように来た男のすねを思いつきり蹴る。それに崩れ、鎧を着た男が倒れる。そのまま横をすり抜けると一気に先のほうへ走っていく。各人、相手を蹴散らし陣内を走りぬける！

「信繁！」

青海もまた、側面を押さえるべく、横に広がり、来る敵を殴り飛ばす。

「あの天幕だ！」

そう言っつて信繁が走り掛け声を上げた先には一つの大きな徳川の紋がかかれた陣幕がある。一気に駆け込むと他の者たちもその後が続いて入り込む。だがそこに誰の姿もなかった。

「ここじゃないか！逃げたか！」

「いや、わしはここにおるぞ。」

その声の振り向くと、陣幕の陰から男が一人出て来る。それは……

「お前！あの時の！」

「家康！」

青海と信繁は同時に声を上げる。

「今度こそ……問おう。今までの事は水に流そう。わが陣門に下れ。この極みにいたってまだ主君なぞ……何の意味もないからのお。」

そう言い家康は手を上げると幕の裏からぞろぞろと鎧武者達が出て来る。この状況……後ろをちらりと見れば、後続部隊も囲まれているらしい。

「投降せえよ。この状況が分からぬほど……愚かではあるまい。」

そう言い厳しい目で家康が信繁たちを見つめる。

「それは……主君を違えろと……。」

「命は惜しくないのか？」

そう言いつつも家康は半ばこの言葉を聴いた段階で諦めていた。

この男がここで突進してきたのを食い止めることはぎりぎり出来るかもしれないが……。だったとしても捕らえるのは難しい。

「命を惜しんでここまで来る事はないが……。」

そう言いつつ信繁は周囲の状況を窺っていた。たとえ、切りかかるのに成功したとしても、手傷だけを負わせ、自身が倒れては何にもならない。だがその時だったどこからとも無く聞きなれない音が聞こえて来る。その次の瞬間だった。

「おい……。」

その不思議な減少に気が付いたのは取り囲んでいた兵士だった。そのうちの一人がふらふらと目をうつろにして家康の元に歩いていた。

「お前！」

声を上げるものの、聞こえたふうも無く家康に向かって歩いていった。そいつが信繁たちの目の前を横切る頃、取り囲まれた後ろのほうでも異変が発生した。何の合図も無く、兵士達が襲撃を始めたのだ。

「お前ら！止める！」

家康は異変に気が付き声をかけるが兵士達は聞く耳を持たない。

家康の目の前に来た兵士は刀を突然振り上げる。それをみて、とっさに信繁は踏み込み、その兵士を横から蹴りつけ、吹き飛ばす。

「お主……。」

次の瞬間、風を切る音が聞こえる。

「信繁！」

その声とともに青海は腕を広げ立ちふさがると、腕にナイフが二本ぐらい刺さる。

「青海！」

「おめえ！」

そう言ってしまうは短刀を構えたまま信繁の後ろを固める。そのほうにはナイフを両手に持った男が近くの昨日江からこちらの様子を窺い、……何故か本を持った宣教師の姿が兵士達の後ろにいた。

「君達……豊臣軍でしょ。そんなの庇っちゃダメでしょ。」

不思議に気の抜けそうな声で話す男は、その異様さもあって周囲

を威圧していた。

「ですな。せつかく神の為に働く機会があるのですから、そこで全滅しないと。」

宣教師は近くの男に呟くとその兵士の目から精気が抜けていく。周囲の兵士達はもう目に生氣は無くふらふらしている。

「お前ら！」

信繁は睨みつけるがそれに一切動じることなく、少しずつ距離を詰める。

「お前ら！馬鹿にするな！」

青海は怒号を上げると腕に刺さったナイフを引っこ抜き投げつける。

「こいつら・・・嫌いだ！」

しまも宣教師たちに刀を構える。それに反応して宣教師達も構える。

「お前ら・・・俺達がこいつらを食い止める。そいつを連れて逃げる。」

「青海！」

信繁は驚いて腰を抜かしている家康を掴み、引きずり上げる。

「家康殿！逃げるぞ！」

「う・・・うう・・・ああ・・・。」

そううめき声を上げると家康はある場所を指差す。そこには馬が一頭あった。信繁は無理やり家康を馬に乗せると信繁は馬を出して全速力で走らせる。

「なんで・・・こう・・・ねえ。」

そう言うとナイフの男は気から飛びあり、ある低来る。まるで周囲の兵士なぞ気にならないように歩いて・・・その自然な動きの中で、襲い掛かる兵士達の急所を切り裂いていく。

「ダメよ。異教徒だからって邪魔しちゃう。」

「お前達！異教徒に神の裁きを！」

そう言うと宣教師が掛け声を上げると兵士達が青海に向かって走

つてくる。それを片手で錫杖を握り、弾き飛ばす。

「喝！」

その声に兵士達の一部は目を覚ますが、その瞬間後ろから切りかかられていく。

「異教徒つてツさ・・・お前らの教えだと殺しはアリかよ。」

青海は少しずつ間合いをはなしていく。先ほど庇った怪我で、片腕が動かない。声だけならどうにかなるが・・・。

「神に逆らうものは全て死すべし。他の神信じるもの全て・・・敵なり。」

宣教師は微笑みながらこちらを見つめる。見つめる青海たちと宣教師達の間では正気に戻った兵士達と増援と、正気を失った兵士達が戦闘を行っていた。

「改宗なんて無いのかよ。なんとというか・・・さすがだな。」

「さて・・・早速・・・神の御許に召されなさい！」

ナイフ男がナイフを投げつける。だが今度はそれはしまが全て刀で弾く。

「おめえ・・・しのびか？」

「忍び？知りませんね。そういえば使者を弔う事を偲ぶとか・・・。確かに偲ぶ意味ではね・・・。」

そう言つて今度はしまに投げつけるが、またも刀に弾かれる。だが、距離は遠く・・・反撃できるほどの距離ではない。

「アルサレム・・・引き上げようよ。めんどくさいし、標的じゃないし。」

「確かに。私が時間を稼ぐ。行け！エミリオ。」

”りよう・・・かい。”

不思議な言語で少し話すぞ、また宣教師達がこつちを睨みつける。それに構えるしか・・・二人には残されていなかった。ナイフ男が腰からナイフを抜き・・・抜き打ちでしまを狙う。だがそれもしまに弾かれるが・・・。

「な！」

「じゃあね。」

そう言うと宣教師の二人は二手に分かれ走る。ナイフ男はそのまままぎれるように走り去る。

「貴様！」

青海はナイフ男を追うために振り向くが、そこに人垣が邪魔をする。宣教師の男は大声で何かを喋っている。それに合わせ周りの人間の生気が抜けていく。

「しま！」

「おうよ！」

その声にナイフ男に向かって走ろうとすると青海が足を引っ掛ける。

「俺達も引くぞ。」

「は？」

しまは立ち上がると周囲を見渡す。人垣のせいでわからないが、もう二人の姿はなかった。

「ここは敵陣の奥だ。ただでさえ生きて帰る保証は無い。あっちの山に逃げるぞ。ついてこい。」

そう言うと近くの山を指差す。そこまでは一里はありそうだ。

「どうしてさ。あいつのところに行こうぜ。」

「馬に乗って逃げたなら、追いつけないし、あいつらはどうも引きに転じたみたいだ。なら俺達もここなら逃げるぞ。」

騒言うと、陣幕の奥に向かって走り始めた。各自、戦況は分からないが旗本のこの陣は宣教師のおかげで大荒れであり、脱出するにはこの時を置いて他にはなかったのだ。悔しそうにしまは周囲を見渡す。信繁・・・生きてくれよ。

「大丈夫かよ。」

馬に乗せて走り川原を抜け、信繁は一路、堺に向かった。あそこならどちら向きでもどうにかなる。それに警備部隊もいる。背中ではがみつく家康は震えていた。

「やはり・・・切腹するしか・・・。」

蚊の泣くような家康の声が信繁の耳元に入る。

「あんた・・・怖いのか？」

「そう・・・だな。今でも・・・ずっと・・・戦は怖い。だがな。

戦が怖くなければ策略も立たない。平和を望む事も無い。怖いから無くなればいい。だからここまで来れた。」

「だな。俺もだ。」

信繁は頷くと、更に馬を走らせる。だがもう馬は限界らしい。徐々に歩みは遅くなっていった。近くに打ち捨てられた寺を発見するとそこに入る。寺の看板にはかすれた文字で”南宗寺”と書かれていた。

「ここならばらくは持つぞ。」

そう言っただけで近くに腰を下ろさせる。家康の顔は青く息も絶え絶えだった。この時家康74歳。普通なら歩く事さえ叶わぬ老体である。

「どうして助けた？」

「わかんねえ。」

平然と言うと懐から出陣の際に持ち込んだ握り飯を取り出した。小さくはあるが、小分けにされており、戦のたしなみでもあった。そののうち一つを手に取ると後を家康に渡す。

「食つときな。まだ先は長い。」

「これからどうする気だ。」

家康は刀に手を掛け信繁を見つめる。

「あいつらはあんたごと俺も殺そうとした。だから一緒に逃げた。後のことは考えてない。」

「そうか・・・。」

鞘にかけた手を離すと、握り飯の封を開け一つを口に含む。

「夢中でき。」

そついつと信繁は軽く微笑えんだ。

「そうか・・・。お前のような奴が息子なら・・・この歳まで何の苦労もしないのにな。」

「……。」

寂しそうな顔をして下をうつむき少ない米を噛み締めていた。

「でも……ありがとうな。助けてくれて。」

素直に、ポツリと呟くように家康は呟いた。その顔をちらりと信繁は見ると、それはまるで仏のようにも見えた。その時、どこかで聞いた音が……。家康は急に立ち上がると信繁に抱きつく。

ズドドドドド!

鈍い音が連続でがして、家康の背中に大き目のナイフが数本刺さる。

「家康殿!」

「わしの古い先短い命……古い先短い命!無駄に使うか!」

そう言っただけ向きかえると、寺の入り口にあのナイフ男が立ちふさがる。

「探したわよ。本当に。」

「貴様!」

信繁も刀を抜くがそれを家康が手で制し、刀を構える。

「お主は生きる!」

「あんたが言うんじゃない!」

そう言っただけ構えているが、ナイフの男もお互いの間合いが分かるのか、うかつに近づいてこない。しばらく見つめるが、腰から抜いたナイフを更に投げつけようと構えた。

シュ……ルルルル!

次の瞬間更に風を切る音が聞こえ、エミリオはナイフを急に持ち替えて飛びのく。その足元には手裏剣が転がっていた。その瞬間、周囲を顔を布で覆った黒ずくめたちが取り囲む。

「殿!」

半蔵の声が聞こえると、半蔵は家康の傍に駆け寄る。その顔は……いつもの飄々とした顔ではなく、なきそな……少女の様でもあった。

「半蔵か……。」

「との！」

家康は寺の柱に寄りかかり、腰をすたとんと落とし、地面に腰を落とす。

「これは・・・状況が悪いようね。じゃあね。」

そう言つとエミリオは腰に持った煙だまを投げつけ、一目散に逃げって行つた。

「追え！追え！」

半蔵の号令とともに、忍者達はナイフ男を追いかけていった。敵意が去るのをみると半蔵は家康の脇に寄り添う。信繁もまた寄り添う。

「助かつたな。」

「あんた・・・。」

家康はほつとした顔で信繁を見つめる。その顔はまるで息子を見ているように・・・信繁には思えた。

「半蔵。」

「は。」

「遺言は・・・ここに記してある。あれを実行するように。」

「は。」

半蔵は深く頷き背中を見る。背中のナイフは深く刺さっており、明らかに致命傷である。それはお互い分かっていた。

「後・・・今まで世話をかけたな。」

「は・・・い・・・。」

半蔵の頬から涙が落ちる。

「信繁殿・・・。」

「ああ。」

そう言つて信繁を家康は見つめる。

「日ノ本を頼む。おぬしなら・・・きつと・・・。」

「ああ。」

「これでいい・・・。心残りはあるが・・・最後まで人らし・・・
く・・・満足な・・・人生だった・・・。辞世の句を読む体力は・・・

第十二節 最後まで人らしく（後書き）

この文を以って大阪夏の陣および、冬の陣での戦没者の皆様の冥福を祈り、ここにこの文を捧げます。

第十三節 夜は深く……人の業も深く……（前書き）

あまりの展開に呆然とする信繁はそのなかで唯一の仁義でもある秀頼救出の為、大阪城に乗り込む。そこで待っていたのは南蛮衆であった。

第十三節 夜は深く……人の業も深く……

第十三節 夜は深く……人の業も深く……

「敵は……もう……こねえようだ。」

遠見筒でじつと正宗は敵陣を見ていた。この時5月7日夕暮れのことであった。

「ですな……敵があれから来なくて……助かりました。」

「いや……そうでも……ねえみたいだぜ。」

そういつて正宗はぐるつと向き返り本陣の方を見つめる。一応は山向こうではあるが、周囲の軍の様子から、内容は伺える。もしかや……本陣まで大崩したか……。

「今なら……もしかしたら天下が取れるかもしれねえぜ……俺たちのさ。」

そういつてにたりと笑うが……正宗から見ると本陣はもう……体をなしてはいなかった。

「それは……。」

片倉はつい俯いてしまう。

「出陣の準備をしる。戦況次第では……本陣を討ち取るぞ。」

馬を用意させるべく後ろを向いたその瞬間正宗は固まってしまう。

「正宗どの……。」

それは黒い布で口を覆ってはいるが……服部半蔵その人である。その姿に正宗は背筋が走る。

「どう……した？」

「つい、その気迫に……つい刀に手をかけようとする。」

「今夜、本陣にお一人で……おいでください。会議を開きもつす。」

「そついうとくるりと背を向け、半蔵はとぼとぼと歩いていった。」

「殿……。」

「どうも・・・無理とまではいかねえが、向こうもまだ力が残っている・・・だな。」

そういい半蔵のいた所を見るが、もう姿はなかった。だが・・・あの悲壮な目を・・・あの鬼気迫る目。もし変に動けば自分が先に殺される・・・そう感じられた。

「ですな。今夜・・・会議とか・・・何があつたんですかねえ・・・」

片倉もとまどいながら、正宗の側に駆け寄る。

「ま、わかんねえが、凄いことになりそうだ。」

そういつて、元に位置に戻ると遠見筒でまた戦況を見つめる。善戦は勝利したらしく、市街地の奥へ兵が進んでいく。だがその一方、旗本達は黒田家の位置に結集を行っていた。今、天下が大きく動いている。正宗の直感は訴えていたのだった。

「では・・・死人を止めていた部隊の位置は分からなかった・・・のですね。」

城に戻ったキース・フロレンスはぶ隊を見渡していた。その数は3名ほど減っていた。

「ん・・・ネテロ、エミリオ、セルゲイはどうした？」

「二人は見事役目を果たしましたが、ネテロは・・・」
聖書を持った男アルサレムは膝を突き、頭を下げる。

「彼らの為に祈りましょう・・・」

そういつと、キースは手で十字を切り、祈る。

「それで具合は。」

「は、ネテロは死人封じの部隊がいるであろう軍まで行き交戦しましたが、届かず。セルゲイは、目の上のたんこぶを排除しようとして勤めを果たし、エミリオは・・・途中でで見失いましたが・・・いまだ生きていますかと思いますが・・・」

キースはじつと望遠鏡を片手に、外を見つめる。茶臼山周辺では

敵兵達が攻撃の準備を行う。明日・・・この城にも攻めて来るだろう。いや、もつと前かもしれない。

「警備だけはしっかりしろ。そして、お前達には明日も働いてもらう。全員を城で待機させる。」

「それはもう。ペドロ、オミルケアは準備完了だと。」

「分かった。なら警備に当たれ。」

「了解しました。」

そういうとアルサレムは落ち着いて天守閣を降りていった。

” 猊下に預かりし精鋭を三名も失ってしまうとは・・・やはり・・・一筋縄ではいかない。だが・・・それもこれで終わり。これが終われば・・・。”

考えながら望遠鏡をはずし下を見ると、オートマタの最終調整が行われていた。それは最後の灯火やもしれなかった。

「俺たちを集めたのは・・・何のよう・・・だ。」

新しく前線に移設された本陣の天幕を開けた正宗の第一声であった。それは中にいる布陣を見てのことである。中には上杉景勝、前田利常と黒田長政。後は徳川四天王達控えていた。

只・・・何故か・・・この場に徳川家親族および・・・直系の姿はない。

「今後の方針についてでござる。」

大将の位置にある腰掛けに座り、半蔵は周囲を見渡す。端の椅子を見つげ座る正宗はそれだけでも驚いてしまう。半蔵は懐から書面を取り出すと、皆に見える位置に広げる。そこには長く書かれた文章があり、所々に傷あがった。

「先日の戦で・・・内府殿は戦死致した。」

その言葉に全員が息をのむ。

「それに伴い皆様には遺言をお伝えいたす。」

その言葉に全員が衝撃を受け、お互いに顔を見渡す。衝撃が全員に走る。

「お……おつ。」

「今……死ねば……死を伝えれば豊臣方はきつと勢いづき、平和はなくなるであろう。そこで3年は死を伏せ、影武者を立てること。また、皆々には各領地にて外から来る外敵を守り、人々に平和をもたらして欲しい。そして、今ある幕府を守って欲しい。」

その言葉にじつと全員が押し黙る。一部の者は涙し、顔を伏せる。「これが要約した遺言でござる。細かい内容については今後伝えていきもうす……」

「で、影武者は？」

正宗はあまり思い入れがない為か、涙までは流さなかった。直感には当たっていたというわけだ。

「今は用意出来もうさぬが、幾つか用意してござる。今は偽装させていきますが……。いずれ影武者は建てます。」

「そうか……で……我らはどうすれば……。」

景勝は涙を拭いつつ半蔵に向く。

「無論。この事を口外してはなりません。」

「そつちではない。明日だよ明日。千姫がいるんだろ。どうするんだよ。」

利常は呆れて聞き返す。

「明日は皆様それぞれ、城攻めをしていただきたい。あの秀忠公では……作戦指揮は無理でござろう。ですから皆様方、各自の方法でお願いいたします。相手の戦力はこちらの分析では、もう2万もありません。ならこちらの方が数は有利。力押しでも攻めましょう。」

「分かったが……。」
「今退けば、この事が公になる可能性は高い……。だからいいんじゃないねえか。」

正宗は開き直ったように言ってみせる。

「分かった。此度の戦はあの城を落とし、甲いとしよう。」

上杉景勝は立ち上がると、一礼をして去っていった。それに合わせ、黒田長政、前田利常が陣を去っていった。

「でもさ・・・遺体は回収したのかよ。」

「それはもう。」

半蔵は即答した。だが正宗はその回答の中で一瞬身体が震えたのを見逃さなかった。

「そうか・・・あんたもつらいんだな・・・でも明日の城攻め、被害は尋常じゃねえぜ。」

「分かっておりますが・・・今攻めねばそれこそ、無駄死。せめて太平な世こそが彼らへの弔いでしょう。」

「分かった。俺も攻めてやるよ。只・・・思いこみが強すぎるは危険な事があるぜ。」

「肝に銘じておきます。」

正宗は立ち上がると半蔵を見つめる。その顔はまだ何か隠し球があるように見える。だが、それは今・・・分かるものではなかった。

「終わったようだな・・・。」

「そうだな。」

半蔵は裏手に回り、陣のはずれまで歩く。そこには信繁が木により掛かり、陣を見下ろしていた。

「でこれから俺をどうするつもりだ。」

陣を去っていく重臣達を見つめている。

「これから・・・お主ならどうする？」

そう言つて半蔵は大阪城を見つめる。

「俺なら・・・指揮官がいない今、撤退するが・・・あんたらは焦つていた。」

「まあな・・・。」

大阪城は煌々と明かりがとまり、大方今頃、籠城決戦の準備をしている所だろう。夕方の明かりに沈みつつある大阪城を今見ると・・・落日が似合う・・・ように見える。

「決着時期は・・・。」

「今夜ぐらいには決着をつける。」

「そうか……。」

確かに徳川軍の兵力ならごり押しすれば勝てるが……被害は甚大だ。

「だが……まだ連中の手が分からぬ以上、うかつに攻めれば死傷者がでかねない。」

半蔵は大阪城を見つめる……信繁側から顔を見る事は出来なかった。

「お前……冷静だな……。」

「いや……親方様はいつも出陣時に皆に内緒で遺書をしたためなされる。ただそれを履行しているだけだ。未だに拙者も死の余韻は抜けきつてはおらん。」

更にじつと半蔵を見つめる。旅においても少し気が抜けた顔をしていたが……それとは違う……悲壮さがやはり見え隠れしていた。

「今。連中が事をなす前に殺す……。あんたらにとってもっとも得意な手だ。敵討ちに俺たちだけで行くぞ。」

信繁はせかしてみせる。大方連中が事を起こせば今の状況では死傷者が大量に発生し、また、それで死人が増えかねない。

「行くなら少し待て。準備を整え、夜……。夜に行くぞ。」

何か思いついたような半蔵の顔はいつにもまして、真剣そのものだった。

「半蔵様。」

「なんだ！」

幕僚達にこれからの作戦を説明し、陣に戻った直後のことであった。忍びの一人が駆け寄ってくる。

「敵兵を捕らえました。尋問は？」

「連れてこい。」

「お前な、やつぱりダメじゃねーか。」

「仕方ねーだろ。あんな所に敵が陣張ってるとはおもわねえって。」

忍者達は、一人の少年と一人の坊主を紐で縛り、連れてくる。

「これは……。」

半蔵はすこし口元をゆるませる。あの戦場の後だ。死んでいても不思議ではない。

「お前！」

それは青海としまであつた。青海に傷らしい傷はないが、しまはその軽装もあつて所々に生傷が付いている。

「ひさしいな。どこで捕らえた。」

「は、ちようど陣を移動させようとした所、山中に来たので、捕らえました。」

「お前らも運がないな。」

半蔵は少しほつとしたように顔をほころばせると、その顔をじつと見つめる。しまはじつと下に俯き、青海はかみつきそつなぐらい身体をがたがたとさせている。

「俺たちを放せ！」

「……お主ら……拙者に仕えぬか。そうすれば……放してやる。」

半蔵は顔近づけ、ささやくように言った。

「俺は嫌だ。」

しまは顔を上げて反論する。その顔は……涙でいっぱいだった。

「二君に仕えるなぞ！」

”お前ら……そのまま少し視線を上げる……。”

半蔵のささやくように小さい声に青海はふと顔を上げると、そこには下を向き、俯く信繁の姿が遠目に見えた。

”もう……これ以上旧知の仲を斬りたくはない。解れ。”

「もう一度言う。軍門に下れ。さすれば命は助けてやる。」

半蔵は顔を話すと皆に聞こえるように大きくしゃべる。

「わ……わかった……。」

「青海！てめえ！」

青海は仕方ないように頷く。しまはそれを見て噛みつきそつな顔

で青海を見つめる。

「今は・・・生きるぞ。」

その言葉にしまはうなだれた。そしてそのしまの目にあの刀が目にとまった。”死に名月”・・・。

”負けてもいい。生きてくれ。”

あの時の言葉が頭をよぎる。

「分かったよ・・・。青海・・・。」

しまは頷いたのだった。

「しばらくはあそこにいる捕虜どもと一緒にいてくれ。今夜の作戦でお主達は役に立ってもらう。連れて行け。」

そういつて忍者達に指示を与えると奥にある捕虜達・・・いやそこには一人の男だけが木に寄りかかりうなだれていた。そこで紐を解かれると、忍者は去っていった。

「・・・。」

捕虜の男はゆっくりと顔を上げる。その顔からは生気がなくなっ
てはいるものの、それは真田信繁その人だった。それをみた瞬間、
しまは思いつきり抱きつく。

「信繁！」

だが、信繁に反応はなかった。その顔は喜んでいいのかショック
のようだった。

「どうした・・・お前。」

青海はその様子の異常さに気が付いて顔を見つめる。

「何があった。」

「結局・・・何も守れなかった。」

「じゃあ・・・。」

青海はその答えに何が起きたのか理解出来た。そして・・・その
心情を理解した。

「でもさ。こうして生きて俺たちは会えた。」

青海は信繁の前で腰を据えると真正面から見つめた。

「んだよ。」

しまは嬉しそうに見るが、まだ少し生気を回復・・・したように見える。

「さすがは坊様・・・いいことを言うのぉ。」

その声に後ろを向くと、お吉の方とトリさんが立っていた。

「信繁、会いに来たぞ。」

青海は後ろを向くとゆっくりと歩いて来た。

「お吉の方様・・・。」

まだ生気が抜けた目で信繁は見つめる。

「その坊様の言うとおりだぞ。信繁。生きている。なら・・・まだやれる事がある。やる事がある。お主はまだそのことが頭に残っておるはずだ。」

「・・・。」

少ししか回らぬ頭で、信繁は考える。浮かんだのは豊臣秀吉の顔と、息子の顔だ。

「まだ・・・やれる・・・。」

「そうなんだ・・・。やる・・・んだ。」

トリさんも心配そうに見つめる。その顔は徐々に生気が戻っているように見える。

「負けてもいいから生きるんだ。言ったのはお前だぜ。」

しまは嬉しそうに信繁を見つめる。

「確かにな・・・俺にはまだ・・・やる事がある。」

そういうと信繁は立ち上がる。

「そう・・・世間話をするのじゃ。ワシとな。」

「なんでやねん！」

青海がついお吉の方に突っ込みを入れてしまう。そしてお吉の方はちらりと信繁の顔を見た。もうその顔はいつもの信繁の顔に戻っていた。

「すまない・・・みんな。」

「いいんだよ。」

青海はにやりとほほえむ。

「それで・・・どうしました？」

信繁はお吉の方を見つめる。

「そうじゃのお。酒・・・いるか？」

そういってお吉の方は着物の裾から酒瓶を取り出す。

「いえ・・・これからまだ行く所があるので、一通り終わってから。」

「そうじゃのお。」

そういって惜しそうに酒をしまうのを青海は目を離す事が出来なかった。

「今回は大手をふるって参加出来るからと言うよりは・・・。」

「ですな。しっかりと働いていただかないと。」

お吉の方が後ろを見つめるとそこには仁王立ちしている半蔵の姿があった。

「あなた様があの時暴れたせいで、後で説得してまわるのが・・・それはもう大変でした。」

「それはじゃ・・・あの時は信繁と会えた喜びで・・・後・・・胸が弾んでな。」

お吉の方が、少し汗を垂らして半蔵を見る。

「胸が弾んで味方を全壊させるんですか!？」

半蔵は睨みつける。その顔にトリさんは苦々しい顔でみつめる。

「いいではないか。」

「良くありません!」

半蔵は怒っているが・・・それはすぐに終わり、向き返る。

「お主達にはやって欲しい事がある。そしてそれは・・・。」

「わかっている。」

その言葉に青海はじつと信繁は見つめる。その目は悲壮にも近い瞳で見つめていた。

「今夜、大阪城に乗り込むぞ。」

「は?」

しまと青海は驚いたように信繁を見つめる。

「頼んだぞ。拙者は部隊の選抜がある。3刻後には出発いたす。各自準備して欲しい。」

そう言つと半蔵はきびすを返し、その場を立ち去つてしまう。

「私も・・・あんなに怒られては世知辛い・・・トリどの・・・行くぞ。後でゆつくり酒宴でも開こうぞ。」

「ア・・・んだ・・・。おめ・・・後で・・・オラの村に来てけるおとつさ達きつと喜ぶだ。んじゃ。」

そう言い、慌ててお吉の方と、トリさんは去つていった。お吉の方の手にはあの時渡した刀をまだ・・・持っていた。

「で、俺たちはどうするんだ。」

青海はじつと信繁を見つめる。

「俺は・・・最後・・・半蔵に包囲され捕まった・・・。だが・・・まだ・・・最後の希望をあきらめたわけではないが・・・俺は命を救われた。」

じつと二人を見る。あの戦闘の後だ・・・生きていただけ、少し嬉しかった。これ以上何かを失うのは・・・耐えられそうになかった。

「だからといって叔父貴への恩返しは終わっちゃあいない。」

「へ？」

青海はその言葉に驚いた。流石にこの場に置いてさえ豊臣の事を考えるのか？

「正確に言えば、俺は捕まってから少し考えた。この状態で出来る手は何か・・・それは・・・秀頼様を連れ出す。」

「大丈夫なのかよ。」

「馬鹿殿・・・そう言えばあいつか。」

しまはふとあの時の若い侍を思い出す。確かにあの容姿ならどこに行つても生きて行けそうだ。

「それは・・・細かい事は言えないが向こうも承知済みだ。」

「それならいいが。」

「向こうは一応そのために尽力するとは言った。」

「信用していいのかよ。」

青海は心配そうに陣の向こうで忙しそうに部下達に指示を与えている半蔵の姿を見る。

「ここまで来たら・・・もう誰かを信用する以外無いぞ。」

「それはわかった。」

そう言っただけで青海は周りを見渡す。まさかこうなるとは青海自身思っても見なかった。だからこそこの信繁の態度に少し違和感を持ったのは否めなかった。

5月7日深夜、信繁の周りには回収された鎧を着た・・・忍者と妖怪達の姿があった。その先陣には半蔵の姿があった。

「此度の目的は・・・千姫および秀頼の脱出・・・そして、城内にいる南蛮勢を討ち滅ぼし、明日の攻城の被害を押さえる事である。」

半蔵は各人を見渡す。忍者部隊が300、今は豊臣軍の甲冑を着ている。また横には妖怪衆が構えている。

「死人による部隊が来た時は妖怪衆に任せ、我々は奥にいる南蛮を潰す。そうすれば今まで続いた戦乱は終わる。」

その言葉に少し部隊がざわつく。

「私たちの生活はこれで落ち着く。皆の者最後の一踏ん張りじゃ。」

壇上上がった普通の老人に見える男が声を上げると、その声に妖怪達がときの声を上げる。聞いた所に寄るとどこかの妖怪達の総大将で、それは凄いと半蔵は言っていたが・・・あいく妖怪とは面識はない・・・お吉の方様は別か。

「何か・・・すげえな。」

しまは啞然として横の部隊を見つめる。そこには異形の者達が並んでいた。

「まあな。俺にはその向こうの方が信じられないぞ。」

そう言っただけで青海が見つめた先には戦装束に身を包んだ僧侶の姿があった。

「あいつら、今まで仇同士だったんだぞ。」

「そうなのか。」

「それまでした・・・南蛮とは・・・。」

青海は考えさせられていた。そこまで集結しなくてはならない・・・敵とは・・・。南蛮衆とは・・・分らない事だらけだった。

「今まで聞いた事が正しければ・・・戦乱の全てが・・・あいつらの企み・・・そして・・・今夜それを終わらせる。」

決意の目で信繁は大坂城を見つめる。

「今回の作戦は、お前達は敗残兵となり！豊臣軍に紛れ込み内部にはいる事で南蛮衆の居場所を突き止め、そしてかたずける。それだけだ！」

シンプルではあるが、敵方がぼろぼろである今、一番効果的な方法である。しかもこれは今夜しか成功しない。明日以降は警戒され失敗する公算が高い。と言うのも、戦の直後に帰還兵を断れば、内部兵士の士気が下がり、裏切りさえ起きかねなくなる。だからこそ、このタイミングでしか成功しないのだ。

「出発。」

数多くの籠城戦を超え、徳川軍の出した籠城対策とはこれだったのだ。各部隊は出発を始めた。

「兵士達の死傷者・・・。」

キースは高台から見つめていた。

「各人にあれは配りましたか？」

そう言っつてぼろぼろの鎧をまとった武将を見つめる。

「確かにな。あれは薬とか言っつておいたが・・・あれは何だよ。」

ぼろぼろの鎧を着た毛利勝永は不安そうに粉を見つめる。

「あれは・・・。」

「あれは・・・。」

「元気になる薬です。」

キースは平然と答えた。彼にとって間違えた事は言っつていない。

「元気・・・か？」

「ハイ。ただ劇薬ではあるので、その使用にはご注意を。」

「と言う訳じゃ。各自・・・城を守れよ。」

帳の向こうから淀君の声が聞こえる。姿を見る事は出来ないが・・・。

「分かりました。」

もう・・・豊臣には戦略を見る事は出来ない。この時、毛利勝永は悟らざる終えなかった。

”どうしろというのだ。こんな薬一つで敵軍を押し返せるのなら、我らは苦勞しない。この時敗北は確信してしまった毛利は天守閣からおり、兵士達を見つめる。もうぼろぼろの鎧でいる者や疲労困憊で城に帰ってからは動けなくなる者など、その姿は悲惨その物である。敗残者達の帰還は城で受け付けているが・・・本当に・・・真田が言ったとおりだった。”城に帰るより、逃げて返った方がいい。”

”持ちこたえられて二日。”

”上は切り捨てるつもりだ”

・枚挙にいとまがない。下に降りながら思考をまとめるが、勝ち筋はもうほぼ無かった。明日になれば本格的に攻めてくるのに状況では無理だろう。通路には最早・・・どこを見渡しても警備兵達はいない。血なまぐさいのを嫌った淀君達が、兵士達を天守閣から追い払い兵士達は仕方なく、隅の方で治療を行っているが・・・もう敗戦は濃厚である。だが、その上から貰ったのは粉だけ・・・何をしろというのか・・・確かに自分たちの部隊はまだ少しの傷で帰れたが、真田隊は奇襲部隊、残存ともに全滅と報告があった。ならもう・・・。

「勝永様！」

「どうした！」

呼ばれて振り返ると、兵士の顔が明るい。

「信繁様が。」

「そうか！」

その言葉に急いで階段を駆け下り、入り口まで行くと鎧はぼろぼろではあるが五体満足な信繁の姿があった。

「どうした？返らぬと思ったぞ。」

「それが……まあな……。」

信繁はぼつの悪そうな顔をしている。

「中に入れ。お前らも入れ。」

そう言い後ろにいるぼろぼろの兵士達を中に入れる。数は少ないが、これだけ残れば上等だ。

「どうした。信繁、早速色々聞かせてもらっぞ。」

そう言うと言繁の手を引き勝永は奥の小さな見張り小屋に連れ込む。非常用ではあるが一応ここで作戦を立てる事が出来る。

「どうだった？生きて帰ってきた所を見ると……それなりの事情があるみたいだが……。」

「まあな……。」

信繁は、すまなさそうにこちらを見つめる。

「どうした？」

「……。」

信繁はしばらく迷っているようだった。だがそれが普通だ。生き恥をさらすとはそう言う事なのだ。

「どんな事でもいい。俺に言え。俺は受け止める。」

勝つ永は意を決していった。その言葉に信繁はきりりと前にむいた。

「此度の戦……敗北は必死でござる。拙者の考えは甘くございました。」

頬から涙を流して信繁は見つめる。

「それは……。」

「拙者は陣奥深くに入り……徳川殿は無き者になり申した。ですが……。」

「それなら勝ちじゃあ……。」

「ですが拙者は捕まり……戦は未だ続く見込み……。」

毛利勝永はその言葉に息をのんだ。そしてしばらく信繁を見つめる。そう言えばこいつにも家族があったんだっけ。そうだよな。勝

永は家族を思い浮かべる。家族に最後にあつたのは……一年前だつたな……。

「わかった。」

「へ？」

その勝永の言葉に信繁が啞然としてしまつ。

「お前はもう行ってこい。出来れば、生きて……そしてこの戦の俺たちの事を後世まで伝えてくれ。」

「毛利殿。」

「この状況まで来れば拙者は責任者として残らなくてはならないだろう。同郷の者もここには多い。見捨てては行けない。だが……お前は生きる。」

そう言い毛利は信繁の肩をがっしりと握つた。その手は震えていた。その想いはわかる……。だが……。

「すいません。ただ、戦はもうこれで終いにしたい。」

そう頭を下げる信繁の顔はどことなく情けない若造に見える。きつと俺でもこんな顔になる……勝永はそう思った。

「だから、兵士達をまとめ、このあたりにいて欲しい。今から……戦の元凶だけでも……討ちに……行きます。そして希望だけでも……。」

「……そうか……。」

そう言つて手に持った粉を見つめる。上はこんな物だけで俺たちに恩義を売つた気であるが、どうして……。こいつの方がずっと大将に見える。

「行ってこい。俺たちは戦に備えてここで門を守っている。ただ、返りにここを通つた際には見逃せないからな。」

「分かり申した。」

そう言つと信繁は戸を開け外に走つていった。その姿は……泣いている少年のように勝永には写つた。

「やはり……こう来ましたか……。」

キースは望遠鏡で下を見つめる。そこにはよりは来ているもの、見慣れない早い兵士達が走って天守閣を目指す。その中には見慣れない異形の者達も混ざっている。

「お前たち！」

「おう。」

そう言うつと部下の部隊の一部が答える。

「今日と明日で、作戦は終わりです。特に今迫っている部隊は敵の主要部隊です。これがおわれれば勝利は確定です。」

「おう。」

「行きなさい。」

そう言うつと男達は介したに向かっていった。この天守閣を破れる者は世界を見渡してもありはしない……。キースは自信を持ってみていた。そのとき、銃声が響く。戦闘は開始されたみたいだ。

「どうした！」

道案内しながら走る青海達は足を止める。数人の男達が銃に打ち抜かれ倒れ込む。

「分かりません。」

「俺が行く。」

そう言うつとしまは壁を蹴り、屋根の上に駆け上がる。そこには一人の黒ずくめの男がいた。ちょうど対角線上に位置し、青海達を狙撃出来る位置だ。

「おめえ……。」

”ほう……この様な所にまで人が来るとは……。”

そう言うつと数人の忍者達も壁を蹴り上がり、上に上がってくる。

「俺達でどうにかする。おめえら、いつてくれ。」

「分かった。信繁が来るまでは耐える。」

「了解。」

そう言うつと青海達は壁を盾にしつつ前に走る。

”あなた方は幸運だ。私のような慈悲深い使徒が相手なのだから……”

”
「おめえ、何言ってるんだよ。訳わかんねえよ。」
不思議な言葉を放つ男をじっとしまは見つめる。

「そうでした。言語はこれではなくては……。」
いきなり日本語をしゃべるのを驚いて見つめる。ちょうど彼が立っているのは屋根の先端であり、かなり高い位置にある。男は帽子をかぶり、カソックを着てはいるが、そのマントは重そうに垂れ下がっている。

「皆様……。私……」魔弾の死神”と申します。初めまして。
そう言つと立ち上がり、帽子を取り、一礼する。帽子の中から押し込められていた金髪がばさつと肩までたれる。

「そして……さようなら。」
次の瞬間視界から彼の姿はなかった。

「な！」
忍者が驚いて……周りを見渡すが姿はな……
タン！

軽い音が響くと一人の忍者がそのまま倒れて屋根から落ちていく。
「おめえら！きいつける！」

しまは神経をとがらせ……そうだ……信繁が……。
”まず分からない事があれば現場に行つて調べろ。情報があるほうが常に勝つ。”

しまは言われた言葉を思いだす。そのまま走つて彼がいた所まで行く。その間にも銃声が二発響いた。倒れてはいない者、手傷は負っている。

「やっぱり……。」
ちょうど彼がいた所は先っぽになっており、下には通路があつた。なら……ここを通る。だがこの先は……。通路を見るが斜線が通っている様子はない。あれ？あの跡は……。
しまが見た先には壁に空いたいくつもの銃痕がある。

「なら！」

通路に駆け下り、一気に通路を走っていくと銃声が・・・かすかに聞こえる。その瞬間、弾が跳ね返り、屋根上に走っていく。あそこにいる・・・。

” 忍びたる者・・・気配を殺し、一撃で決める。出なければ自分が死ぬと思え”

信繁の言葉を思い出す。そして刀を抜くとそつと近づく。そこにはマントに隠した銃を取り出している。今だ！しまは一気に走り、間合いを詰める。銃相手なら間合いを詰めれば！

魔弾は襲撃にいち早く気が付くと、銃の柄を握ると持ち手側で刀を受けて止め、腰に手をやる。そこには最新型の銃。片拳銃の姿が・・・。

「んなる！」

そう言うつと刀を滑らせ、銃を弾くと真横になぎ払う。胴体に当たる感触はあるが・・・斬れてはいない。次の瞬間構えた銃が火を噴く。だがそれは胴体を切られた衝撃でしまの脇をすり抜け飛んでいってしまう。だが魔弾はそこを踏みとどまり銃の柄でしまをぶん殴る。

それで横にすつ飛ばされ壁に激突する。

「やりますね。」

「おめえ・・・固え。」

そう言うつて刀を構え直す。

「あなた・・・ここまで近づけた人間は初めてですよ。ですが・・・神は我々にきつとほほえみますよ。」

「しらねえ。」

そう言うつと腰の小道具入れに手を当て、様子を窺う。腰の小道具入れは戦闘前、半蔵が支給した物で、幾つかの飛び道具が入っているが・・・

「飛び道具・・・当たるかな？」

しま自身、弓以外の飛び道具の経験は薄い。相手はあの銃とかはととても上手い。だが・・・じりじりと少しずつ、距離を詰める

が、それは向こうも分かっているらしく距離を取る。殺気の拳銃は使えないらしく、今は銃を構えている。向こうは1回撃てば終わり。ただし、こっちも当たれば終わり。

” 神のご加護を……。”

そうつぶやくと銃を狙撃の態勢に構える。その瞬間からだが勝手に握れるだけ小道具入れの道具を持って投げつける。それはバラバラのほうに飛んでいった。一瞬視界を遮られるがそこは、さすがはベテラン。隙間から狙う……が……。

” な！”

その瞬間にはしまの姿を見失って……次の瞬間には足に激痛が走る。足元を見と足を刀でブツ刺した、しまがいた。そのまま刀を引っかくとそのまま裏に回り……壁を蹴り、跳躍すると、頭に刀を打ち付ける。この時魔弾はもう意識はなかった。そのときれゆく意識の中、腰から何か袋を取り出していた。

「危ねえ。」

落ち着いてしまは立ち上がるとじつと魔弾を見つめる。一瞬の機転でどうにかなったが、覚えていない。だが勝っている。生きている。じつと刀を見つめた。名刀らしく刀に傷は一切無い。

「帰るか……。」

そう言っしてしまは背を向ける。頭を切りつけた以上……あれで死亡だろう。次の瞬間銃の轟音が響き渡る。振り返ってみると頭から血を出しながら、フラフラと立ち上がる魔弾の姿があった。目は白目をむき、口からは大量のよだれを垂らしていた。倒れていた側には勝永達ももらった粉と同じ物が転がっていた。しまは焼けるような痛みとともに太ももを見ると足を打たれていた。

「おめえ！」

しまはそのまま倒れそうな所を身体をひねり、仰向けになる。だがそこにはよだれをだらだらと垂らした男の姿が……。その姿にしまは一瞬恐怖が走る。

「痛えぞ！」

そう言いまだ動く足で股間を蹴り上げるが、男は微動だにしない。そのまま手に持った銃を振り上げる。

「ちよ！」

そして、そのまま銃を全力で振り下ろすのを、刀で受け止める。だがそれであきらめた様子もなくまた振り上げる。このまま行けば、体力負けする！

「ぬおおおおお！」

しまは掛け声をあげると、刀を構える。その瞬間……刀が光を発する。気が付くまもなく倒れたまま全力で胴をもう一度なぎ払う。その瞬間、この世の物とも言えない叫び声を上げ、魔弾は吹き飛ぶ。その隙にしまは壁伝いに立ち上がり、立ち上がる魔弾を見つめる。よろよろと立ち上がるその姿は……まるで死人そのものであった。「まさか……うそだろ……。」

最早今までの知性も感じられぬようによろよると……最早……本能だけなのだろう。その姿を見ると……何かこう……切なさを覚える。そう思い刀を見つめると、刀が輝き始めていた。

「そうか……お前もか……。」

そう言い、一気に間合いを詰める。死人となった魔弾は銃を振り上げるその瞬間を狙い、一気に裏に回り込むと、首に横から刀を突き刺す。その瞬間えもいわれぬ雄叫びをまき散らす。その叫びはしばらく続いた……。それがとぎれる頃にやっとしまは刀を抜いた。もう……この死体が動き出す事はない……。その瞬間疲れと痛みがどつと押し寄せる。

その痛みの中、やってくる忍び達を見て何故かほっとしてしまった。

「こつちだ！」

そう言っつて青海達は走って天守閣を目指す。この天守閣までは敵兵を追い払う為に迷宮みたくなっているが、解き方を知っていればどうにかなる。だが……さっきの叫び声とはなんだったのか……。

「待て！」

その叫び声に青海は足を止める。後方から半蔵がやってくる。

「どうした。」

そう言うつと青海を無視して半蔵はその場にしゃがみ込む。

「やはりな。」

そう言うつと手で後ろに下がる指示を出す。全員が下がるのを見届けると、半蔵は足下にクナイを投げつける。その瞬間近くの大地が盛り上がり、棘が付いた木の板がせり上がってくる。

「これは……。」

「この先罨が仕掛けられている模様。気を付けなされよ。」

そう言い半蔵は周囲を見渡す。この類の罨は放置される事はないはずだが……。

「ならもつここは安全だよな。」

青海はある個とするのを半蔵は手で制する。

「このほかの道はあるか？」

「遠回りになるがある。」

「そっちに行つてくれ。後続部隊の為にここは拙者がかたずける。」

「分かった。行くぞ！お前ら！」

そう言い、青海は後ろに走っていった。半蔵は一人、近くの石を持ち上げると、板の向こうに投げつける。石の重さで落とし穴の天幕が落ちていく。

「やはりな。」

「これは……一人残つて残業かね。」

上の方を見ると背を丸めた一人の男が屋根の上に立っていた。その男はポルトガル語でつぶやいた。

”仕事と言うより……お前を待っていた。”

半蔵は言葉を返した。彼自身ポルトガル語を聞く事は出来たが、しゃべる事は出来なかった。それはしゃべる機会がほとんど無い為だが、海外の書籍とかを調べる必要性があった為、発音などの言語だけは覚える事が出来た。

”わかるか・・・？いや偶然か・・・。”

だが半蔵自身そう詳しくは分からない。大体の内容までしか把握していないかった。

”だが、覚悟してもらおう。このペド口。こんな所では死なぬ！”

そう言うのと不意にペド口は腕を突き出す。その瞬間半蔵は刀を抜き、後ろに飛び退く。

それを見て一瞬ペド口は腕に付いたアームボウを撃つのを躊躇う。だが奥の手は撃たねばそれはそれだ。ペド口はそのまま屋根伝いに去っていった。このあたりの塀は高く、しま達がいた所よりも高い為、ここは上る事は出来ない。曲がり角から先はあの男の罠がたくさん仕掛けられているのだろう・・・。ならあいつのいた通路・・・。屋根が安全地帯か。壁の高さは・・・5間（9m程度）ほどか・・・。壁を見つめるとつかかりも無く、上れそうにはない。だが・・・ちよつと曲がり角の奥には門がある。手持ちを確認する。伊賀でよく使う穴つきクナイが6、信号火薬が4、刀が1、身体に巻いた縄が5尺・・・。後は火打ち石とかか・・・。基本的な物しか持つてこなかったのが悔やまれる。無論信号火薬を使えば、合図と勘違いして味方が撤退しかねない。使用は出来ない。相手は大方・・・。曲がり角にも罠を設置している。半蔵は上着を脱ぐとトラップの木を引っこ抜く。ある程度軽さがあるが、これでいい。服で橋を結ぶと簡易的な分銅ができあがる。それを持って曲がり角の向こうに板を投げつける・・・。何も反応はない。曲がり角からそつとの覗くが・・・。反応はない。夜目がある程度効くのはこういう時に有利だが・・・。そのまま板を構えそつと近づく。ここでないなら門の前・・・。屋根を見る・・・。何かを設置されている・・・。木がする。無論門は閉じている。だが直線も少しある・・・。なら・・・ここに。半蔵は先ほどの板を盾に構え思いつきり地面に打ち付ける。次の瞬間地面に穴が空き、弓が飛んでくる。それを勢いそのままに地面に伏せ、倒れる事で回避する。だが、木の板は下に落下していく。穴は深く、2町（3・6m）以上はあるよう見える。長期戦を覚悟しているよ

うだった。

「流石に巧者か。だがこれで終わりだな。」

そう言うと門に近づくと木に触る。固い木が遣われてはいるが、これでもどうにかなる。

次の罾は門を破った後だ。ならここが最適だ。半蔵はクナイを力一杯木に叩きつけるすると少し刺さる。それを蹴飛ばし深く食い込ませた後、上下に振り確認する。よし、揺るがない。

そう言うと刀の鞘をかけ、足場にして、クナイの上に乗る。そしてその鞘をクナイの穴に引っかけると壁とクナイの間に橋を造る。そしてそれを足場に一気に駆け上がる。そして屋根に付くと帯で鞘を回収した。下には刺さったクナイがあるのみだ。上を見ると・・・隠れる所はあるみたいだ。天守閣を見るとそこには大きな人形の何かが鎮座しているが・・・今はあの罾師をかたづけねば進行できない。屋根を伝って半蔵は走っていく。しばらく進むと何か瓶らしき物が飛んでくる。無理矢理足を止める。ちょうど間に挟むように液体がばらまかれる。目の前を見るとそこにはペドロが立っていた。ここまで来るとは・・・クソ！化け物か！”

「よくわからぬが・・・驚いてはいるようだな。」

半蔵は冷静に構える。無論。罾師の事だ。一筋縄ではいかない。だがこれは・・・足をすりつつ、その液体を旅の先端でこする。やはりぬるぬるする。足止めか、滑る物か・・・当然、飛び越したい所だが、今までと様子は違って・・・目の前にはペドロがいる。無論先ほどと同じく腕を突き出し構えている。今・・・手に持っているのは鞘と刀。飛び道具はないが、先ほどの液体の正体がわからぬ以上は・・・どうしようもないか・・・大方あの手は飛び道具・・・なら。

”死ね！”

その掛け声とともに腕から何かが発射される。そこまでは分かっていた刀の鞘を大きく横に振り、一射目を鞘で弾く。だが二射目、三射目は連続で発射された為、二射目は胸に刺さり、三射目は肩に

当たる。

”よし！”

只、少しくらついただけで、半蔵に変化はなかった。そのまま大きく跳ね、液体を飛び越え、勢いを殺さぬように飛び込む。そのまま懐まで飛び込むと手に持った鞘で、胴を横凧にすると、そのまま勢いを殺さず太ももに刀をブツ差す。ちょうど帷子も下半身まではなかったようだ。自身の鎖帷子は少し、細かく目を切ってあったので、ぎりぎり貫通はしないが、肩に刺さった矢を引き抜く。傷の具合は軽傷だが。

「ただでは殺さぬ。」

厳しい目で目の前の男を見つめる。

「ただで死なぬ。」

そう耳元に声が聞こえる。顔を上げるとペドロが痛みをこらえながら懐から瓶を取り出すと足下に落とす。

「地獄へ道連れだ・・・いや・・・俺だけは天に召され・・・。」

そう言うのと腰のポシエットから袋を取り出す。半蔵も流石に匂いで何をするのか理解する。これは油か！奴はこのまま焼身自殺する気だ。俺を巻き込んで！だが・・・

「そうはさせるか！」

離れようと踏み込もうとするが、足下の液体がぬるぬるする！これは・・・。周りを見ると、屋根伝いという事もあり、周囲は高さはかなりだが・・・それ以上に緩衝材さえない。このまま落ちれば死ぬ。そのまま顔面に肘をぶち当てるが・・・まだ強くしがみついている。

「貴様！」

「我らは神敵を倒す為なら命も惜しまぬ！お前が死ね！」

半蔵は無理矢理身体を引きはがすと足をねじ込み蹴り出す。そしてバランスを崩したペドロはそのまま、屋根から転げ落ちて・・・落ちた。そして、点火剤に火がつき・・・そのまま遺体は燃えてしまった。

「……あの者は……もう……。」
いくら武士でも命は惜しむ。なら、彼らは南蛮の為か？それとも
淀君の為か？その燃えさかる遺体を見て半蔵は考えるしかなかった
のだ。

「こつちだ！お前ら！」

青海は走って大回りをしてきていた。無論こちらのほうが遠いが、
畏だらけよりはいいが……裏門まで走るのはかなり体力を使う。
それは皆そうみたいではあるが……前を見ると兵士達が集団で立
っている。だが……青海は微妙な感じがしていた。今までの通路
で兵士を……一切見かけなかったからだ。

「お前ら……どうしたんだこんな所で……。」
「うー。」

そのうめき声を聞いた瞬間 青海はある事を思い出し、武器をか
める、その青海の構えに後ろの部隊も構える。

「皆さん。ダメですよ。こんな夜中に徘徊しては。夜は危険ですか
ら。」

声のした方を見ると裏門の見張り台の屋根の上に一人の黒ずくめ
の男が立っている。あの男は覚えている。

「宣教師のカスヤロー！」

青海が怒鳴りつける。だがそれに意を介さぬように本を持った男・
・アルサレムはじっとした青海を見つめる。

「カスヤロー。何という汚い言葉を。聖職者ならば……。もつと
きれいな……。いや……。あなた方にそれを要求するのは無理でし
たな。」

そう話している間に後ろのほうから叫び声が聞こえる。青海が
後ろを見ると、後ろの部隊の人たちが、兵士らしい物に襲われてい
る。

「野郎ー！！！」

青海は何か投げようと周りを見るが……。何も持っていない。

「名前！名乗れ！」

「名ですか・・・折角ですから・・・私は・・・。」

そう言っている間にも兵士らしい物が忍者達を襲うが、後続部隊である妖部隊が引きはがしにかかっていた。

「私は！トヨトーミ・ヒデオーリ！」

その声に前のほうにいた忍者達が驚愕する・・・。

「です！」

「んあわけないだろ。あんな金髪のどこが日本人だよ。」

アルサレムの髪は金髪で、確かに日本人に見えない。青海は突っ込みを入れるが、前の門は閉じている。ここは後続部隊が槌を持ってくるかしないと・・・。

「ですが・・・私は戦闘は苦手です。だから・・・。」

そう言くと、城の奥から何かが空を切り・・・。

ズドオオオオオオオオオン！

激しい音を立て、門があつた所に門の代わりに大きな人形・・・門よりも大きい西洋の鎧を着たようならくり人形が立っていた。

「彼に代わりに戦って貰います。では。」

そう言つとアルサレムはきびすを返し、走つて去つていつてしまった。

「てめえ、待て！」

そう言つて追いかけようとするが、人形が不自然に動き出し、こちらを見つめる。明かりをつけてはいないが、動くかとは思つたがこれは！その無機質の顔につい恐怖を覚える。後続の部隊は死人に囲まれている。だが、実際青海の片腕は先日庇つた傷が治されてはいる物の、今はマヒで動かない。この状況はつらい。人形は動き出すとこちらにも目をくれず立ち上がると敵と味方が交戦しているあたりに腕を突き出す。次の瞬間青海の耳に轟音が響く。振り返ると前衛部隊が倒れている・・・奴は腕から銃を撃つのかよ。

「これはこれは大きな人形ですなあ。」

そういう声にとなりを無垢と、戦闘前に妖怪立ちに説明を行つて

いた”お頭”と、お吉の方がいた。

「ですがこれ……。」

青海は見つめる。予想が正しければ……。まだ先にも死人がいっぱいいる。

「こいつをブツ倒せば……。いんだな。」

トリさんが闘争心にあふれた目で、じっとあの大きな人形を見つめる。

「最低でも被害はない。」

青海はじつと歩き始める、その巨体を見つめる。妖怪を見た後だからあまり驚かないが、これはこれで大概だと思った。

「行つてくで。オラがあいつを止めるだ。」

「すまん。頼んだ。」

そう言つと、見てないのを確認すると青海は一人、奥へ走つていく。

「ほんとに……。頼むぞな。私は……。あの宣教師とやらを追つてな。」

そう言つとお吉の方は姿を消した。人形は歩き始め、更に奥に向かう。奥には後続部隊が戦闘中だ。トリさんは走ると手短に近くにある足をぶん殴る。……。揺らぎはするが……。効いている節はない。だが注意を引きつけるには十分だった。

「がんばれー。」

奥から老人の声が聞こえる。陰に隠れているらしく、あの”お頭”には助けて貰えそうにない。身体は今まで見たどの妖怪にも……。そう言えばいたかもしれないが、ここには入れなかった。だからオラしかない。

「事のついででけんど。おめえはひつたおす。」

そう言つとこつちに来て軽く教わつた格闘の構えをする。そして身体を弓のようにしならせると、力一杯同じ所を蹴る……。また効果がないようだ。蹴つた足が痛い……。まだ……。と思つている討ちに人形の腕が大きく振られ、しまにぶち当たる。体いっぱいを

横幅だけで覆うような腕はそのまま壁まで行き、壁にトリさんを叩きつける。そのまま腕を引っこ抜くと、壁いっぱいにはビビが入っている。だが、それでもトリさんにはあまり貴意邸はいないようだが……。そう言えば除霊の水とか言ったのが連中に聞くなって言っただけ……。でも……。オラの体にはそう言う物を入れる所がない。「おめえ！水！あるだけか？」

後ろにいる”お頭”に大声で聞く。

「あれか……。あるぞ！」

そう言い、”お頭”は懐から水筒を持ち出した。そしてトリさんに投げつけようとする。

だがそれを人形は見ると、腕に付いた銃ではじき飛ばす。水筒はころうじて中身がはじけ飛ばないものの、遠くまではじき飛ばされる。他は……。なさそうだ。

「これだと、このクソ固いんの、殴んなきゃなんないだな。」

元々こういうのは苦手なんだけどな。最後の言葉を飲み込みじつと見つめる。敵は大きく、そして固い。どうすればいいんだろうか……。

”ここまでこれば……”

天井伝いに走り、アルサレムは天守閣側を見つめる。天守閣は最上階以外は狭く、戦闘には向かない。だからここが事実上の最終決戦だ……。あいつがいる事を除いて……。

「ふうむ……。やはりかのお。」

その声に振り向くと一人の女性が通路上に立ちはだかる。そのはだけたような着物を着た女性はいかにも不潔で、彼が嫌いなものだ。「お主よのう。あの人形とかを操っているのは……。」

「そう思うのかね。」

そう言いアルサレムは書を取り出し、距離を取る。彼自身、戦闘は経験しているが……。格闘は苦手だ。

「まずはお主……。じゃのう。」

そう言う時もの裾から扇子を取り出し広げる。

「なら、先に行かせて貰おう。」

アルサレムはそのまま、不思議な言葉を紡ぐ。それと同時に、何かお吉の方の頭が痛くなる。お吉の方は頭の痛さに耐えられず、片膝を付く。

”やはり・・・悪霊か！”

アルサレムは代々伝わる、聖書の退魔項を詠唱する行為に専念する。そしてそのまま少しずつ距離を詰める。

「貴様・・・何を！」

お吉の方は憎々しげにアルサレムを睨むが、それに動揺する要素はない。

”さてこのまま一気にトドメを”

そう思いアルサレムは服の内側に忍ばせた、聖別された短剣を取り出す。

”かあああああつ！”

その大声にびくりと体を震わせる。アルサレムが声のしたを見つめると、通路にいた青海の声だった。

「貴様！またか！」

「やつと一対一だな。この腕の借り、帰させて貰うぞ！」

「一対一ではないが・・・これは・・・効くのお。」

頭を抱えながらお吉の方が立ち上がる。

「あの男！クソ野郎が！」

アルサレムが咆え猛る。

「汚ねえな！お互い！」

そう言い通路の奥に青海は消えていった。追うには下に降りなくてはならない。そう思った次の瞬間アルサレムは体を反らす、その元あった所を大きな何かが通り過ぎる。

「奴には助けられたわ。」

攻撃の根元を見ると、お吉の方が真剣な顔でこちらを睨む・・・。これ・・・尻尾か。

「お主は不思議な術を使うようだのう。」

その言葉に先ほどまでの余裕はない……がこちらも！

「ここで……終わってもらおう。」

そう言うつと尻尾の数を増やし、まるで槍のようにアルサレムに向ける。だがアルサレムに動じた様子はないが……いや……小声で何かを言っているように見える。

「ここまで来て何も無しか……つまらぬのう。」

お吉の方は尻尾を振り回し、アルサレムを薙ぐ！……ように見えだが……尻尾はそのまま見えない壁に弾かれ……またもお吉の方に激痛が走る！

「早々容易く私ができるか！」

アルサレムはじつと向こうを見つめる。流石に聖別結界は効果があつたようにも思える。

「お主！退魔師かあ！」

「我らに敗北は無い！特に悪魔ども相手でも負ける事なぞ！決して！けっくつして！許されるものではない！」

アルサレムは叫ぶと次の儀式の準備を始める。向こうは結構知能がある……なら対策は結構早いはず。次は……。

「ならこれ！」

お吉の方は声を荒げると尻尾を回転させ始める。だがそれも、結界で弾かれていく。

”どうする！あれを突破できるのは……！ん！”

お吉の方は思いついたように服の間から刀を取り出す。大太刀。信繁から預かったものだ。そう言えばこれ、真田家伝来ならあれも貫通できる！だが……。ふつうでは……。

「貴様！落ちろ！」

そう言うつとお吉の方はわざと尻尾を回転させたまま、結界に何回も叩きつける。そのたびにお吉の方には衝撃が走る。だが……衝撃は蓄積し、徐々に反動は小さくなっていった。

割れたと思い、貫通した次の瞬間、その尻尾を片手で受け止める。

「なっ！」

「神のご加護を！」

アルサレムは受け止めた尻尾を掴むと無理矢理引きずり寄せる！
「だがなあ！」

お吉の方が叫ぶと余った尻尾をからませ、壁に無理矢理しがみつ
く。それを見たアルサレムは尻尾を手放し、聖書を開く。だが、次
の瞬間捕まれていた尻尾で横道を打ち据える。

その衝撃で、屋根からはじき飛ばされそうになるが、それを無理矢
理踏みとどまる。もう少しで崖みたいに高い・・・この城壁から落
ちる所だった。

「この程度では沈まぬ！」

「お主・・・。」

お吉の方はじつと構えるしかない。尻尾に痛みが蓄積し、そんな
に攻撃を放つまでには行かない。突風も・・・。もう種は少ない。
この致命傷をあいつにぶつけないと・・・。

「んとな・・・固いだ。」

トリさんは息を荒くしてじつと人形を見つめる。時々手から何か
を出して攻撃するが、それはどうにか回避してきた。だが・・・ど
うにか人形の意識はこっちは向いているが、これのお陰で進軍も
出来ない。もう、あの鋼鉄を叩きすぎて、手も足も痛い。だが、向
こうはまだピンピンだ。

「ぬおおおお！」

奥から叫び声が響く、この声は・・・。

「お前ら！ここを始末したら、妖怪達は退却しろ！後の部隊は！俺
と上に行くぞ。」

掛け声の先には信繁の姿があった。だが、まだあの人形が立ちふ
さがる。信繁は構えるが気にはしていない。今まで攻撃を続けた
トリさんの方を向く。

「おめえ！こんな所で何しってた！」

トリさんは叫ぶと信繁が振り向く。

「あんだこそどうして！」

「んだ。こいつ。すっげえ固ってえだ！」

「だろうな。」

手に持った明かりから照らし出されるあの巨体は大きく、西洋の鎧人形を模した形は・・・いかにも固い。だが・・・！

「いけるか？」

「んだ！」

体を無理矢理引きずり起こし、人形を見つめる。

「俺が攻撃を誘う！その隙にあいつの体をつたえ！頭を狙う！」

「んだ。」

トリさんは二つ返事で頷くと、機会を狙う為に後ろに下がる。それに合わせ、手に持っていた明かりを地面に起き、この時の為に用意した背中に背負った武器、村雨作大業物 大太刀”霧風”を抜く。そして構えると明かりを蹴って人形にぶつけるが、効いた様子は無い。だが気をひくには十分で、こちらの方を向く。そして人形は大きく腕を振りかぶる。

「よし！」

そう言つと刀を上段に構えたまま、一気に掛け出す。それに対して振りかぶりながら腕を振り下ろすが、予定外の動きという事もあり、少しバランスを崩しつつも、腕のお陰でぎりぎり立っている。

「今だ！」

信繁の掛け声に反応しトリさんは一気に腕に飛びつき、一気に肩口まで駆け上がると全力で、少し小さめな人形の頭を勢いをつけて蹴り飛ばす……。だが・・・頭も固く、揺るぐ事はなかった。

「んだあ！？」

トリさんは驚いてみるが、一切揺るぎもしない。

「ならば！」

信繁は背後に回り込むと、全力で、脛の関節を狙う。だが……。衝撃はあり、ダメージを与えたとは思いが……。それでも……

倒れるまでには行かない……。人形は後ろに回った敵を倒そうと腕を振り上げようと……。人形が力を込めて振り上げようとするが、腕が上がらない。

「やっとな、準備が出来ましてな。」

ちやうど人形から見て正面から、老人が一人出てくる。その老人は”お頭”だ。

「おめえ？」

「やっとなの準備が出来ましたのでな。ここまでの時間稼ぎ……。感謝いたす。」

「お……。お頭。」

”お頭”が二人に一礼する。信繁も急いできて、”お頭”の気配を感じる事は出来なかった……。そこまでに息を潜め、じつと準備していたのだ。人形は餓死を振り上げ、蹴ろうとしても、足に根が絡みつき、動かす事が出来ない。

「後一本！壁でいいので押さえてくだされ！」

「了解！」

そう答えると信繁は振りかぶり、わざと背中を刀でブツ叩く。それに飯能市振り返る間にトリさんが、人形の肩から飛び降り、勢いをつける。

「これでえ！終わりだあ！」

跳び蹴りで反対側の腕が壁にぶち当たる。そしてそのまま、いつの間にか、壁に這わせた根っこがそのまま絡みつき……。人形の腕を縛り付ける。人形は動こうとするが……。もう……。動けなくなつた。

「すまない。ご老人。」

信繁は一礼する。大方このまま行けば、持久戦で負けていただろう。

「私らはいい。お主らは上に行くのじゃろう。わしらはここで後続を断つからの。行きなされ。」

そう言うと、その頃には死人達から逃げおおせた忍者部隊が何人

が集まる。

「分かり申した。行くぞ！お前ら。」

そう言い信繁は奥に走っていった。トリさんはじっと人形を見つめる。

「おめ……すげえな。」

「ふん……これは足止めしかできんわ。どこかでこいつに術を掛けた馬鹿がある。ワシもここで足止めだから。だからお主。」

「おらか？」

トリさんは意外そうに”お頭”の側に寄った。

「朝まで足止めすればいいのだから……朝まで護衛……頼むぞ。」

「んん。わかつただ。おめえの側にいれればいいんだけろ。」

そう言い、トリさんは老人の真横に座る。

「そうだな……それでいいな。おもしろいのお。お主は。」

「んだか？」

トリさんは不思議そうに、老人の顔を見つめるのだった。

「さて、お互い……息が整ってきたようすな。」

アルサレムじつとお吉の方を見つめる。

「だの。だが……お互い早々こんな所で油を売っているわけにも行かぬのでのオ。」

お吉の方は、尻尾をわざと回転させ、視界を遮りつつも、相手の出方を見計らう。最後の言っただけは見破られるわけにはいかないしびれもそろそろとれてきてはいるが、向こうもつかつには仕掛けてこない。

「でも、お主のほうに時間があるまい？」

「そうでもない……。」

アルサレムはじつとあいてを見据える。一人では手に負えないのは分かっているが、お互い、トドメの一手は握っているように思える……だが、それにはちと手は足りぬ。なら……あいつが来な

ければいいが……。アルサレムは聖書を開くと詠唱を始める。今度はお互いに聞こえる大きさだ。

「させるか！」

お吉の方が尻尾を一本。大きくなぎ払う。だが、それを寸前でかわして、詠唱を続ける。先ほどの詠唱で身体感覚を強化した私に、あれをかわすのは造作もない。アルサレムはそのまま距離を詰めると、お吉の方の頭に激痛が走る。これは……。苦手だ！またもお吉の方が頭を抱える。しばらく詠唱を続け、すぐ側まで近寄ると、詠唱を続けながら懐から聖別された短刀を持ち出す。

「これで！終わりです！」

「喝！」

声に振り返ると……。またもあの男の声だ！……。だが今度はあいつが屋根に上がっている。

「ふん。同じ手を食うほど愚かではないわ。」

お吉の方は苦しそうに見つめる。よく見ると尻尾が一本だけだらりと、下に向かっていている……。これか！下に垂らした尻尾で青海を誘導し、上に上らせたのだ。

「今度こそ。おめえのような奴に天誅が下せるってもんよ。」

青海は残った片手で、杖を構える。

「この異教徒が！その程度で勝ったと思うな！」

今度こそ構えた短剣を振りかぶる瞬間！何かが来る殺気を感じ、首を少し横にずらす。そこには刀が、頬をかすめ……。腕に浅い傷を付ける。

「ちい！使い慣れぬ物なぞ！使うものではない！」

お吉の方がうめく。手に持った刀を頭めがけ突き出しては見るが、先ほどの頭の痛みもあり穂先がずれるが……。それでも傷は与えたようだ。そのまま、一度刀を引き抜くとお吉の方は大きく刀を振りかぶる。

「これで！終わりだ。」

体を傾けるように切り裂こうとする瞬間！腕に激痛が走る。その

痛みで刀を手放してしまふ。

” 局長！”

その声に方向を見ると、屋根伝いに瓶を持った黒ずくめが走ってくる。

「何奴！」

お吉の方は尻尾をとがらせ、瓶を持った男に刺そうと向けるが、それをサーベルを抜刀し、切り払う。斬れるほどではないが、その傷みに顔をしかめる。その隙をつき、アルサレムが距離を離し、局長はアルサレムのすぐ側に来る。

「局長！」

アルサレムは慌てた声を上げるが、気にしないように、庇うように身構える。

” 撤収する。必要なものは全て運んだ。オミルケアの仕掛けも終わった。後は……”

” ……了解しました。キース。”

そう言うアルサレムは、じっと青海達を睨む。

「お主も……退魔師か？」

お吉の方が、警戒した顔で二人を見る。あの痛み……あの男達独特のものだろうが……。

「それは……関係ないな。今は……。お互い……。」

そついい、瓶を片手に、片手にサーベルを持ち、構える局長。

” いけ！”

その掛け声とともに、アルサレムは全力で逃げていく。

「逃がすか。」

手に持った刀をほおり投げると尻尾に掴ませ、アルサレムを狙う。だが、それはキース局長のサーベルに弾かれる。その距離を詰め、青海が杖でぶん殴ろうとするのを、キースは返す刀ではじき飛ばす。

「さて……。お前らの相手は出来ないようだが……。」

そつ言いキースは下を見る。下には幾つかの忍者達と信繁、半蔵の姿も見える。彼らは走って、天守閣に向かう。

「ここでお主達を足止めする．．．いや．．．される側か．．．されるわけにはいかないのではな。」

その頃にはアルサレムの姿はない。キースは少しずつ距離を取ってはいるが、お互い攻めきれぬ環境にはなかった。

「ちと．．．不利じゃのお．．．。」

お吉の方はじつと尻尾で牽制しようとするが．．．相手の腕は高く、うかつに踏み込めば、逆に喉元が突かれかねない。さっきの痛み．．．あれは退魔用の刀だろう．．．。

「だな。」

青海もじつと様子を見るしかない。両腕が動けば行けるが、今は手負いだ。

” やつと．．．つきましたよ．．．局長！”

その声にキースは、青海達の後ろを見る。その視線と声にお吉の方が振り返るとそこには満身創痍のエミリオの姿があった。エミリオはここまで、忍者の追っ手を振り切り、必死の思いで大阪城まで帰ってきたのだったが．．．。

” 突破するの．．．疲れちゃった。”

その姿にお吉の方達が驚いていると、その隙をつき、キースが目散に逃げる。

” え？”

” 命令だ！食い止める！では。”

” ちよ！”

そう言いキースは姿を消した．．．。後に残ったのは満身創痍のエミリオと敵が二人である。

「あはははは．．．。」

「とりあえず．．．おめえ．．．。運がなかったな。」

「ワシは後を追うから．．．任せた。」

そう言つとお吉の方は尻尾に持たせた刀を手に持ち替え、走っていった。後に残ったのは青海と．．．エミリオだけだ。

「あんた．．．あの時のおっさんか．．．。」

エミリオは腰の短刀を抜く。彼に残された武器はもう……この一本しかない。

「最後には丁度いいかもね。」

「お主……。」

青海も構えるが……片腕が使えないのが痛い。この男は強い。だが相手の傷は多く、時々小刻みに震える分、傷は深そうだが……。あの時は庇う相手がいたが。今度はどうにか出来る……。気がする。エミリオは構えているが……。動く気配がない。

「もうやめだ。ワシは行く。」

青海は構えるのをやめ、背中を向ける。

「どうして……?」

エミリオは構えを解かず、呆然と見つめる。

「ワシは……お前のような奴は討てん。」

その言葉に触発されたようにエミリオは全力を振り絞り、距離を詰めて切りかかる。それを振り返りざまに杖でなぎ払い、吹き飛ばす……。一瞬の反応だった。するつもりはなかった。そのままはじき飛ばされたエミリオは屋根から落ち、通路に直撃する。

”そんなお情け……。いらないわよ。私はあの人達に生かされ……。殺された。だけよ。”

エミリオは手をかざし、空を仰ぐ、夜は暗く深い闇だった。

”神様……。今度は……。いい人生だと……。いいな……。こんな私でも生きられる……。”

エミリオの手がぱたりと下りる寸前……。手を合わせ合掌する青海の姿が……。見えた気がした……。それがエミリオが最後に見えた視界であった。

「半蔵！」

半蔵は走って信繁達を見る。そこには少数ながら忍者部隊を率いる姿があった。

「お主！大丈夫か？」

半蔵は走るペースを速めると、信繁に追いつく。もうすぐそこは天守閣だ。大阪城の城内は少し狭く、刀とかを振り回す事は出来ない。

「まあな。作業に入ってくれ。俺は迎えに行ってくる。」

「了解！」

そう言つと城の扉に手を掛けると一気に蹴り破ろうとするが……すんなりと空いてしまう。

「行くぞ。」

半蔵は合図をすると、忍者部隊は、地理じりとなる。この中にある貴重品や資料を持ち出す為だ。半蔵がその作業をしている間に信繁は一人階段を掛け上がり、秀頼の部屋を目指す。

「秀頼様！」

しばらく駆け上がると、秀頼の部屋を見つけ、豪華なふすまを開けると、そこには眠そうな目をこする秀頼と……隣には千姫の姿があつた。

「信繁……。」

秀頼はじつと信繁を見つめる。

「無理を承知でお願いに参りました。」

「脱出……なの？」

秀頼の答えに千姫がびくつとする。覚悟はしていたがと言つ顔だ。

「はい。」

信繁は即座に頷く。

「どうして？」

「……」。明日にも総攻撃が始まり、この城は落ちましょう。城が落ちれば、あなた方は総大将とその一族という事で……処刑されましょう。ただ……内府殿は内心それを嫌つておいでです。それなら、ここで脱出すれば血族を絶やさぬ為にも……脱出すべきでは……。」

信繁は頭を伏して願つてはいるが、一刻を争うものだった。

「……でも。」

そう言つて秀頼は上を見つめる。祈願をする為に天守閣の戸を閉ざし、籠もつていた母親がいた。しばらく考え、秀頼は信繁の方を向く。その顔は・・・今なら男の顔・・・に信繁は感じられた

「分かった。だが、脱出なら・・・。母も一緒じゃ。今から仕度をする。母の所に行つてくれ。」

「・・・了解しました。」

信繁はそう言つと立ち上がり、足早に部屋をさる。ここから正念場だ。あの淀君の事だ・・・。そう思いながら、すぐ上の階段を上る。この大きな入り口の向こうが・・・。

信繁は開けようと戸に手を掛けるが、開きそうにない。無理矢理蹴破るとそこには帳と蝋燭の明かりがあつた。すぐに膝を突き頭を下げる。

「どうした？」

「は。淀君様・・・。」

信繁はかすかに頭を上げる、視線の先に影となる人物がいる、無論声はのど気味ではあるが・・・少し声が野太い。頭を下げながらも片膝をつき、いつでも動けるようにしていた。

「最早、明日には総攻撃が始まり、敵も押し寄せましょう。だから・・・。せめて・・・脱出を！」

「何を言うか！」

淀君の怒声が響く。

「武士たるもの！最後の一匹に至るまで！わらわを守るのが仕事だろつが！踏みとどまれ！戦え！」

「それは・・・。」

信繁は怒りに震え、切り裂こうとさえ思った。だがここで逆らえば、秀頼様の悲しむ顔が・・・。

「わらわが良いと言つまで退却は許さぬ！勝つてこい！」

「だとしても・・・。」

「そのような・・・そのような事を言っているから！侍はふ抜けるのだ！あのお方の言つた事なぞ・・・！もう我慢がならん！このわ

らわが出て！全てを倒す！」

そう言つと向こうで立ち上がった音が聞こえるが……。妙に音が大きい。少し信繁は刀を持ち、身構える。さつきを向こうから殺気をひしひしと感じているからだ。

「まずは！その軟弱者！貴様だ！」

次の瞬間刃風が、帳の向こうから飛んでくる。それを持つていた刀の鞘で受け止めるとはじき飛ばす。蠟燭の明かりで照らされた帳の向こうの腕は太く……。まるで丸太を見るようだった。その手に握られた薙刀は少し小さめに……。見えるだけだ。その手の大きさを分からなかったが、通常の薙刀の物だった。

「これは……。おもしろい。キース局長も粋な事をしてくれる。

あの薬……。こんな効果か……。これなら……。誰でも勝てるぞ！これなら……。徳川を屠り、全てを滅ぼせよう！」

そう言つて帳を退いた姿は……。元より高い身長であつたの淀君の身長を更にかなり高くし……。七尺（196cm前後）を軽く超しているように見える。その大きな体いっばいの肩幅と筋骨隆々な有様はまるで異形そのものであつた。いままで確かに味方に妖怪を見ていたが、それとは違い……。威圧感さえ感じる。その体に丈が短いながらも十二単をまとう姿はまるで、悪鬼羅刹を思わせた。

「これは……。お主……。本当に淀君か？」

唾をのみ、じつと様子を見るが、その身の丈と同じ大きさの薙刀はいかにも軽そうで、木の葉を散らすようでもある。

「このワシが……。太閤が妻、淀君なるぞ。無礼な……。やはり……。その無礼者はたたつ斬るべきだな。」

そういうと、軽く……。淀君にとっては軽く、薙刀を横に払うその瞬間、信繁は刀を縦に構えると、そのまま入口を超し、窓を突き破り、外まで突き飛ばされてしまう。外まで出た所で、屋根の瓦の隙間に刀を差し、ぎりぎりの所で落ちるのを踏みとどまる。

「これなら、この力なら！これなら！」

そう言い、淀君はゆっくりと破れた窓から外に出る。月が煌々と

輝き、大阪城を見下ろす。

「お前のような・・・お前のような奴がいるから！戦は終わらない！」

信繁は刀を構え、淀君を睨みつける。月明かりに照らされるその姿は最早、元は女だと誰も・・・分かりそうになかった。だが、この状態・・・下の増援が来るかすれば・・・どうにかなるが・・・。天守閣の屋根は道伝いの屋根とは違い、傾斜が急で戦闘には向かないがどうかしないと・・・。

「戦・・・そんな事なぞ関係ない。勝てばよいのだ。」

その月明かりの中、上からじつと淀君が下にいる信繁を睨みつける。

「拙者もせつかく拾った命。捨てるわけには行かぬ。」

そう言い信繁は構えるが・・・正直自信がない。

「ふん・・・。貴様のような男が何を言うか！」

その掛け声にまた淀君は雑刀を振るおうとするが絹の足袋をはいっていた為、バランスを崩し、そのまま落下してしまった・・・。信繁は啞然となり下を見つめると、一番下まで落ちた淀君は、さも何もなさそうに立ち上がる。・・・ここは天守閣で、向こうは城の入り口だぞ・・・。信繁もあまりの事に啞然としてしまう。だが向こうに怪我らしい怪我はない。

「貴様！」

周囲全体に響き渡る大声で、屋上に声を掛けると、そのまま飛び上がり・・・、近くの屋根の上に飛び乗る・・・。何という人外・・・。信繁は立ちくらみをしてしまいそうになる。こんな事が出来るなら・・・本当にとつとつと、戦場でも行けば活躍できたもの・・・。淀君は次の屋根の上ろうとするが、体の重さが災いして上れそうにない。あきらめると、下におり、一気に階段を駆け上がる。その間に体制を整えるべく、信繁は天守閣に入り込む。

もう・・・普通の戦術で太刀打ちできる人間ではない・・・。なまじつか妖怪ですらないのが更に問題だ。しかも天守閣はそれほど大

きくない為、太刀を振り回す事は出来ない。太刀をしまつと脇差しを構える。だが……。横に振る程度ならどうにかなるが上段に構えられないここもまた……。不利だ。なら……。獣狩りか……。じつと脇差しを逆手に持つと体のバネを生かす構えをし、階段を睨みつける。その間も轟音を立て、階段を駆け上がる音が天守閣のここまでも聞こえる。

「軟弱者！」

その声があったから響く中、じつと中央で信繁は待ちかまえる。そして、淀君の頭が見えた次の瞬間、一気にかけ出し階段に飛び込む。無論淀君がいるのは分かっていた。だが、その顔面に飛び込むと無理矢理飛び上がり、肩を蹴りつけ、全体重を押し込む。突然の事で淀君の体がぐらつと来て階段から転げ落ちる。信繁は手を広げて橋に引っかけて根性で落ちるのを踏みとどまると、そのまま下を見つめる。まともに戦えば駄目でも、不意を突くならいくらでも出来る。下を見つめると少し頭を打ったらしく呆然とする淀君の姿があるが……。

「ア……。化け物……。！」

横を見ると秀頼の姿があった。秀頼は驚いて千姫を背中に隠すと刀を抜いて構える……。構える刀は……。震えていた。

「あの軟弱者が……。！」

淀君が起きあがると、ふと気になり、横で聞こえる刃がかたかた鳴る音の方を向く。そこには……。刀を構えた秀頼の姿があった。

「お前！母様をどこにやった！」

秀頼は体いっばいに大声を出す。その姿に淀君は呆然としてしまふ。

「秀頼……。ワラ……。！」

「この化け物！母様は……。どこだ！」

一瞬空気が凍り付くの信繁には分かる。確かに通路は夜の為薄暗いが……。月のお陰で、姿が見えぬほどではない。だがそれでも勘違いさせるほど……。姿が変わっていたのだ……。淀君の顔から

頬いっぱい涙がこぼれ落ちる。

「鏡・・・鏡はどこじゃ。」

その声に背中に隠れていた千姫は後ろを指さす。淀君は秀頼達を無視して、奥に行つてしまふ。その隙をつき、信繁が階段を下り、秀頼達の元へ走る。

「信繁。大丈夫か？」

「いや・・・まあ・・・。」

軽く二、三回頷くと、奥の様子を見つめる。奥では、姿見鏡をじつと、淀君は見つめていた。当時姿見鏡は貴重で、奥女中や、城の奥方に人気の為、城に設置されている事が多い。

蠟燭の明かりや、月明かりに照らし出される自分の姿を見た淀君は絶望していた。これでは・・・化け物ではないか・・・。こんなのでは・・・美貌を語る事なんて・・・出来なかった。今までの苦勞とは何だったのか・・・。

”うおおおおお・・・おおおおおおおおおおおおおお！！！！！！”

淀君の絞り出すような絶叫が城内に響く。

「あれは・・・。」

千姫は驚いて見つめるが・・・。信繁は腕で合図し、奥に潜むようにさせる。あの状態になると・・・もう手に負えなくなる。完全な・・・錯乱状態だ。

「・・・おおお・・・。おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！”

叫び声が奥から響く。そして・・・畳を打ち鳴らす激しい足音が聞こえる。その音に信繁は太刀を抜き、構える。いくら振れなくとも・・・受け止めるぐらいは使える。次の瞬間、淀君の薙刀の柄のいちばん遠く持つ遠心力の籠もった振りが・・・柱をへし折りながら信繁を狙うが・・・それを体いっぱい受け止めるが、すっ飛ばされ、壁に叩きつけられる。家鳴り・・・。力が凄い。その一振りが終わると・・・そのまま膝を突く・・・やはり何かあったのか・・・

・だが……こっちは体がきしむ。ぎりぎりを受けきったがその一撃は重く……。信繁自身もまた膝を突く。頭さえフラフラ来る。

「貴様達がふがないせい……秀頼は苦しみ……。私は……。こんなに……。お前が……。」

つぶやきが淀君から漏れる……。だがそんな余裕さえない……。この状態……。連れ出す前に死ぬ！信繁はこの時……。死を覚悟した。そこまであれば無慈悲で……。しかも理不尽だ。回避する手段が思いつかない。あの攻撃、あの重そうな薙刀がまるで小枝に見える……。だがこちらは振り回せるわけではない。太刀を持っている手の反対に持っている短刀を見る。

「お前らが憎い！お前らが！」

また淀君が立ち上がる。天井に着きそうにも見えるが、この天井は少し高く、7尺ぐらいだが……。それでもこの高さ程度では柱に当たり、刀は勢い負けして折れてしまう。そう言う設計なのだ。

太刀をその場に刺すと、短刀を構える。それでも業物……。目の前でゆらりとこちらを見る淀君の顔は、凶器に満ちていた。後ろで波線姫があまりの恐怖に泣きじゃくり、その顔を秀頼が覆っていた。

「まずは貴様だ！」

そう言うと、またも大きく構え、なぎ払う構えを取るが今度は信繁は一気に走り込み、一気に間合いを詰める。先ほどと同じ斬撃なら、受け止めなくとも斬れはしない真ん中で食らう方が生存確率が上がる！淀君はこちらの動きを見て、大きく横になぎ払うが、元の背の高さが災いして、少しかがむだけで、頭上をかすめ、勢いを失った薙刀は柱に刺さる。その隙間を狙い、肩を狙い、短刀を突き刺す……。刺さったよな……。少し刺さった所で、刃は止まり……。更に深く刺そうとする信繁だったが……。まるで木に刺して更に見えるろうとした時みたく……。全然前に行かない。淀君はその刺している腕を信繁ごと持ち上げると、まるでゴミでもほおり投げるように、軽く……。弾き飛ばした。弾き飛ばされた信繁はそのまましたに下りる階段側まで弾き飛ばされる。淀君は、じつと肩をみるが、

浅い傷で、皮膚が切れた程度にしか……信繁の目には見えなかった。甲冑を着て中敷きを仕込んでいなければ……死んでいた所だ。「これは……意外な……意外に痛く無いのオ。」

淀君はじつと信繁を見つめる。

「軟弱者だから……ふん……。」

深く刺さったなぎなたを軽く抜き、淀君はじつと見つめる。もう今までの酷使で刃はぼろぼろで……柄にも亀裂が入っていた。元は非力な女性でも使える刃物である薙刀は、それほど丈夫ではないし、ましては強力で振るう為のものではない。だが……それでも……その力はすさまじい。そのぼろぼろの薙刀を信繁の鼻先に突きつける。

「声も出ぬか……だが……。」

信繁はかろうじて体制を立て直して……じつと見つめる。窓や……上の階の空いた隙間の明かりから見える淀君の目は狂気で爛々と輝き……もう説得なぞ出来そうにない。

「最後に辞世の句……なぞいらんか……。」

淀君は薙刀を振り上げる。そこ何故か……鞘が薙刀にぶち当たる。それで揺らぐ事はなかったが……そちらの方を見ると、毛利勝永の姿があった。

「おめえ……何もんだ。」

「貴様！」

淀君はおもいつきり振り返るが、そこには脇差しを構える……

「勝永殿！逃げてくだされ！」

「ふざけるな！」

そう言うと一緒に階段を駆け上がり、持っていた脇差しを思いっきり振りかぶり、斬りかかるが、それを短く構え直した薙刀で受け止めると、そのまま強引に弾き飛ばす。その怪力に叶うわけではなく……勝永もまた、部屋の端まで弾き飛ばされる。

「何だ！この！化け物！」

「化け物！じゃとおおおおお！」

勝永の負け惜しみに完全に理性を失い、勝永を睨みつける。

「てめえ・・・何者か白根柄が、侵入者は俺がゆるさねえ！」

確かに声は発狂寸前の淀君の声・・・気が付かないと言つても不思議ではないし・・・あの外見・・・化け物と・・・誰もが思うが・・・だが、油断は出来ない。

「信繁！すまんが、手伝え！二人で行く！」

「合い、分かった！」

そう言うと言信繁は無理矢理、体を持ち上げる。体中に激痛が走るが・・・この程度で・・・この程度で今まで死んでいった奴らに！顔向けできるか！信繁は立ち上がると、腰の脇差しを抜く。勝永もかろうじて握ったままの、脇差しを構える。

「貴様ら・・・わらわに逆らうか・・・。貴様らも！逆らうのか！」
「怖いよ。」

「大丈夫だよ。きつと、きつと信繁が・・・。大丈夫だから・・・大丈夫だから・・・。」

後ろで、声が聞こえる。きつと・・・怖いのだろう。俺も怖い。だが・・・。

「こいや。わらわが・・・貴様らの性根を入れ替えてやろうぞ。」
「知るかよ！」

勝永は咆えるとそのまま一気に間合いを詰め、全力で脇差しでたたっ斬ろうとするがそれを・・・腕で受け止めた・・・。だが、信繁は周りを見渡す。先ほど防御用で使った太刀がある・・・この幅！太刀まで走り寄って勢いをつけて引っこ抜くと、重さを利用して・・・太刀を逆刃にしてそのまま太刀の重さと、勢いを乗せ、後ろを向いた淀君の胴体にぶち当てる。固い！だが！流石の淀君も、その衝撃に顔を歪めるが、それほどでもない・・・その痛みに顔をゆがませ、片膝を突く。やはり・・・。戦闘経験や訓練が少なければ・・・痛みへの態勢は薄い。特に淀君は戦いが嫌いな為、その場面にさえ顔を出さなかった。ならこういう事はある。斬撃よりも打撃のほうが効果が高い。その隙を逃さまいと、勝永は脇差しを構え一

気に斬りかかるがそれはまた・・・皮膚に遮られ・・・淀君に両腕を片手で握られ・・・弾き飛ばされる。流石に同じ所を二度投げられた為、壁に穴が開き・・・。月明かりが城内に差し込む。そして片膝を突いた淀君の顔を照らす。今まで背が高すぎて、また暗い為見えなかった顔が・・・今なら見える・・・その顔は確かに淀君ではあるが・・・その頬には涙の跡がびつしりと付いていた。だがその顔に衝撃を受けたのは信繁以外の全員だった。

「よど・・・ぎみ？」

「おかあさま？」

その声に淀君は振り返り、奥の鏡を見つめる。その姿・・・体は変わり果ててはいても、その顔まではそう変わらなかった・・・。その顔が今・・・月光にさらされ・・・鏡に美しく映されていた。

「え・・・あ・・・。」

更に衝撃的なその姿に・・・じつと淀君は鏡を見つめた。

「どうして・・・そんな・・・。」

秀頼の啞然とした声が聞こえる。千姫も除くが、その姿に驚きが隠せない。もう月は西に傾き、ちょうど城に差し込む角度だ。

「わらわが・・・こんな・・・悪鬼になったかとおもえばこれは・・・あああああ！」

突然淀君が叫び、うずくまる。その様子に全員が近づくが・・・その顔は蒼白で・・・体の震えがまた恐怖を悟った。

「どうした!？」

「・・・フフ・・・わらわが・・・これを呪ったせいなの・・・体が・・・言う事聞かなんだ。もう・・・。」

そう言って淀君はばたりと仰向けになる。その顔はどことなく諦め・・・そして、どことなく悟っていた。

「あの薬・・・きつところなる事を分かってあいつはわらわに・・・くれたのか・・・。」

全員が淀君の側に寄る。特に秀頼は・・・泣きそうな顔をしていった。

「それは……。」

信繁はじつと見つめる。

「あのひとは……私らを見捨てる気だった……のじゃ。まだ……すこし……あり……そう……。」

「どうしたんだよ！あんだ。」

這って柱まで行き、寄りかかる淀君に、慌てて勝永が詰める寄る。

「見てみい……これ。」

そういつて淀君が腕を見せると、もうそれまでの筋骨隆々な姿とは違い普通の女性の……いやそれよりも不自然に細い腕になっていた。

「ワシの体はもう……ほとんど言う事を聞かん……。」

「……そうか。」

あの南蛮衆はきつとこの状態の淀君を置く事で時間を稼ぎ、自分たちは逃げる気なのだろう。どこまでも卑劣な。

「秀頼……少し離れておれ。」

「はい。」

そう言うつと、心配そうになりながらも階段まで距離を置く。

「お主らなら……ワシは……茶々ではない……。」

「それはもう……淀君だからな！」

勝永は当たり前のように答えるが……信繁にはその重みが分かる。

「ワシは……昔……奴隷だった。それが突然……着物を着せられ……そしてここにいた。」

その言葉二人はじつと聞いていた。いや……勝永は幾つかの言葉の意味を分かっていないように見えた。確かに信繁も分からなかった。

「そして……ワシは……茶々になった。最初はとまどった……だが……。」

その言葉にさっと信繁は後ろを振り返り……秀頼も耳を澄ませているようだ……。

「あの人は優しかった。私は関係なかった。最初はいいつらの言う事を聞いていたが……。ワシは隙を見たある日、あの人に打ち明けた……。知っておったよ。優しくほほえんでくれた。それ以来……。本当に愛していた。」

「……。もしや……。」

信繁は息をのんだ。確かに説得の為と思っていた淀君の話が本当なら……。

「あの子はワシが連中に慰み者にされた時の子じゃ。太閤の子じゃない……。だが……。あの人は……。それでも、我が子と可愛がってくれた……。」

「あんたもしかして……。」

勝永はじつと見つめる。流石に気が付いてきたのだろう……。何を言っているのか……。

「それで……。」

「ワシは……。あいつらの力を使って……。この戦に勝つつもりだった……。だが……。結局は利用されただけだった。キース局長……。結局はあの人の手に平だった。お主らに頼みたい。もうわらわはもう駄目じゃ。だから……。あの子だけは……。あの子だけは……。安全な所に。」

「わかった。」

信繁は頷いた。

「そして……。この事をあの子に……。頃合いを見計らって……。伝えてくれまいか……。わらわはもう……。駄目じゃ。」

淀君のその顔は……。どことなく儂くとも……。憂う母親の顔だった。

「わかった。」

「感謝……。」

信繁が後ろを向いて手招きをする。それに吸い寄せられるように……。淀君の側による。その顔を見て、秀頼は……。何かを悟ったようにじつと顔を見る。

「お前……。きつと……。きつと……。きつと……。だから……。いいこに……。そだって……。ね……。」

そう言って淀君は、秀頼の顔を見て、何を思ったのか腕を上げるが……。その腕はそのまましばらく立ちっぱなしで……。そのまま落ちた時には……。目を開けたまま……。絶命していた。外は白みがり、もう……。脱出しなくてはならない。このままいけば、待つてもらった総攻撃が始まってしまふ。信繁は近くに転がっている自分の刀を拾うと秀頼と千姫を抱え、そのまま階段を駆け下りる。その後を何故か勝永が追走する。

「信繁！」

秀頼が叫ぶが……。それを無視して駆け下りる。このままいれば死ぬ。それに……。側にいれば……。悲しみが広がるだけだ。つらいだけだ。

「行きますぞ！！」

叫びながら入り口まで駆け下りるとそこには半蔵が待っていた。

「行くぞ……。そろそろ時間だ。」

「分かった。」

そう言つと千姫を下ろし、半蔵に渡す。千姫はこの時12歳。人が抱えられる大きさでもある。その様子をじつと……。勝永は見ていた。

「行くのか……。」

「まあな。秀頼様は回収した。」

「そつか……。明日……。いや今日か……。俺はここで最後の責任を取る。」

「わかった。」

「……。お主も来るか。徳川は……。優秀な人間を求めているぞ。」
半蔵が、気を掛けるように勝永に言つがそれを……。勝永が首を横に振つた。

「いや……。情けはいらない。誰かが……。ここで責任を取らなくちゃならない。」

「わかった。」

「そういえば……。」

そう言つて勝永は改めて、秀頼を見つめる。その幼い瞳はじつと勝永を見つめる。

「俺は……初めて……秀頼様をみるな……おめえ……かーちゃんと一緒に……きれいだぞ……。大野の野郎が熱を上げているのも分かる。」

しばらくみると、信繁の肩を押す。

「後は頼んだぞ。」

「……わかった。さらば。」

そう言つと信繁は秀頼を肩車で背負つと、急斜面を駆け下りていった。勝永はじつとその様子を見つめる……。

「そうだな。最後に誰かが……この始末をしなくちゃならない。特に上のな……。」

勝永はゆつくりと周りを見渡しながら……城の階段を上がる。城の中を見ると、見事に書物だけが持つて行かれていた。軍備や武器は残されている。生きて帰ろうと思えば帰れたが……。俺もあいつや淀君とかと一緒に……命……恩義があるんだよな……。最上階、天守閣の下まで来ると、淀君の体を抱えて下りる。ふと見渡すと倉庫を見つめる。そこに淀君の遺体をおいた。ちょうど、下にお付きとかいたつけ。扉に鍵を掛けると、天守閣に揚がった。そこは戦闘の跡が残るが……かろうじて……帳をおろすと、戦闘で大きく開いた窓の隙間から……外が見える。もう戦闘が終わり……朝になれば……徳川軍が来る。死ぬと分かっているも……いや。降伏したい奴がいればするようには伝えた……。俺はしないが……。下からちょうど兵士宿舎が見える。朝起きて逃げ出した連中は……逃げればいい。そう言えば……南蛮衆がいない……。あいつら……。あいつらだけは残したかったが……。

「やっぱ……切腹だけは出来ねえな……。俺は……。だが……」

俺は最後まで……ここを守る。」

毛利勝永……この後この城で迫り来る徳川軍相手に大立ち回りを
を行い……その最後は想像を絶するほどに……漢だった。

第十四節 五月八日 堺攻防戦（前書き）

大阪城から脱出した信繁一行に大阪方最後の計が発動する。無事！
信繁は生きて帰れるのか！そして、行く先で何が待っているのか！

第十四節 五月八日 堺攻防戦

第十四節 五月八日 堺攻防戦

「半蔵・・・もういいぞ。」

千姫は照れながら合図を送ると・・・手で追い払い仕草をした。その仕草を見て少し離れる。ここは徳川秀忠・・・父親の陣中だ。もうここまで来れば大丈夫だろう。千姫は、何か決意した顔で陣幕を開ける。そこには泣きそうな顔で立っている父親の顔があった。

「千！」

「お父様！」

秀忠が抱きつくとき千姫も泣きながら抱きつく。しばらく・・・抱きしめると、お互い・・・感じたように距離を取る。

「お父様・・・帰りました。」

千姫は礼儀正しく一礼をする。それに合わせ、鷹揚に頷く秀忠・・・ではあるが・・・その顔のデレた様子に威厳はなかったが・・・家臣達が居合わせていた為、仕方なかった。半蔵も、その幕臣に混ざりその様子を見つめていた。

「おう。良く帰った。大儀であった。」

そのこと場とともに腰掛けに秀忠は座る。

「帰って休むといい。大変だっただろうからな。」

そのまま少しの間静寂が訪れる・・・誰も動かなかったからだ。

「お父様・・・お願いします。」

千はあえて、頭を下げ伏した。その異様な様に最初は驚いた秀忠も・・・流石に何を言うのか理解できた。

「もうこれ以上の攻めは大儀を失います。ですから・・・もう・・・おやめください。」

徐々に涙が声がかすれながら・・・また十二歳の少女のみでありながら・・・実の父にここまでして・・・幕臣は息をのんだ・・・。

「もう・・・部隊は動き出しておる。もう止められぬ・・・察せよ。これ以上言えば・・・。」

秀忠はちらりと半蔵を見つめる。秀忠自身は知らされていたが、秀忠の幕臣は家康の死を知らされていない為、ここで名言は出来なかつた。そして、事実上の指揮権が半蔵にあるとも・・・言えなかつた。

「ですが!ですが!」

秀忠は困った顔で半蔵を見る。半蔵はあごで外を指す。

「疲れて錯乱しておるのだらう。連れて行け。」

その言葉に陣の端で警備していた侍は千姫を抱え、外に連れて行った。

「お父様!お父様!」

その陣の向こうまでも彼女の声が聞こえていたが・・・苦しい顔で無視していた。

「皆のもの。今朝こそ!あの城を陥落指せよ!」

秀忠の掛け声に、幕臣達が答える。その行為に・・・秀忠の決意を感じたのだった。

半蔵達と一時的に分かれた信繁は馬を走らせ、海岸沿いに南に向かつていた。確かに忍者には攻撃されなくとも、正規軍には攻撃される。この状態を避ける為、半蔵が出した指示とは・・・堺にて待機する事だった。堺は人が多い上に市民も多いので、どうか・・・見逃す事が出来る。そこで今後の指針を決定するらしい。

「で・・・。どうするの?」

馬の背に乗った秀忠は心配そうに信繁を見つめる。信繁は全力で馬を疾走させていた。今は朝日も昇り掛け、行進の音が聞こえる。今から・・・大阪城を陥落させるのだらう。

ふと、海を見つめる。やはり・・・黒い大きな影を・・・三つ確認が出来る。やはり作戦は決行されるのだらう・・・。だが今の俺はそれをす耐える事は出来ない。今は・・・秀頼様が優先だ。前に向

くと、全速力で馬を走らせる。ちょうど、視界の端に町が見える。しばらく走らせると警備隊がいる中を突っ切るうとするが・・・流石に止められた。

「おい！貴様！」

兵士が馬の前に立ちふさがり、止める。無論・・・彼らに旗はなかった。

「何のようだ。」

流石に兵士達も殺気立っているのが分かる。まだ・・・火は揚がってはいない者の、この戦況を知らないと・・・。彼らの鎧がぼろぼろだ・・・もしかして・・・。

「馬上にて失礼いたす。諸侯らの所属は・・・名を名乗っていただきたい。」

そう信繁は言う。どちら向きでも言い訳は立つが、使いどころだけは間違えられない。

「拙者達は・・・元は・・・真田軍であるが・・・。今は・・・分からね。」

しめたと信繁は思ったが・・・だがまだ終わらぬ。彼らはこちらの顔を知らぬようだ。

「そうか・・・つらかったのだな。大阪城からの使いだ。ここの大將は？」

少し同乗するが・・・そうも言っではいられない。

「今は・・・真田軍の侍頭であった、算殿である。」

「それはいい。そこへ案内されたし。」

「お主は？」

兵士達は疑い深く・・・じっと見つめる。周囲には一団が囲んでおり・・・状況は悪い。

「拙者は・・・拙者は・・・。」

信繁は考える・・・ここで本名を言えばきつと疑われる。それに・・・幾つか不利な事がある。

「真田幸村でございます。」

「さなだあ？」

兵士がいぶかしげに見つめる。流石に偽名は・・・通用しそうにない・・・。

「あの・・・。」

その声に兵士達が後ろを見ると、秀頼が馬を下りる。

「すみません！急ぎの用なんです。通してください！」

秀頼は大きく一礼すると・・・うるんだ瞳でじつと兵士を見る・・・。その顔は女性のようにもあり・・・そして・・・その母性と被虐心を煽るその顔は兵士達の胸をときめかせるのは十分でもあった。「でないと・・・でないと・・・。」

そう秀頼が言いながら俯く。その様子に兵士達が慌てる。

「わ、分かったよ。通っていいぜ。算殿は・・・。今は確か町はずれの商人の屋敷を間借りしているとか。そこに行ってくれ。」

「はい。行きますぞ。」

そう信繁は、ほつと胸をなで下ろすと、秀頼を乗せようと見るが・・・。秀頼は嬉しそうに兵士の手を取って感謝していた。その様子に何故か、手を握られた兵士は顔を赤くしていた・・・。あれは男だぞ。信繁は呆れて見つめるが、しばらくすると馬の背に秀頼が戻ってくる。

「行きましょう。」

「あ・・・はい。」

そう言うのと、信繁は馬を叩き、先に進める。・・・この時戦略や腕力とは違う何かがそこなるのを・・・信繁は初めて知った瞬間でもある。

「局長！」

船のはしごを上がりながらキースとアンサレムは大阪城を見つめるが・・・まだ何も起きてはいないが・・・日は昇り始めていた。登り終わると・・・船の船員が全員敬礼を行う。キースはそれを確認した後、合図を送る。そして、船員達は手を下ろした。

「状況説明！」

「は！」

一歩前に優男が現れる。

「言われた通りに、旧外堀に・・・粉、設置したよ。後は砲撃すれば舞い上がるから。それでいいはずだよ。」

「そう言い、船から元外堀を指さす。」

「で・・・向こうはどうなりました？」

「ああ。あれは破棄だ。最後の切り札も設置してきた・・・まあ・・・確認したかったんだが・・・仕方がない。外見データだけで十分だ。」

キースは苦々しく、大阪城を見つめる。

「後はどうします？」

優男が不思議そうに大阪城を見つめる。

「データの回収は？」

「終わりました。」

「なら・・・塵に帰せ！」

「了解！じゃ、引きつけて打ち込んでおくれ。」

「そう言つと優男は、奥に向かっていった。船員頭達に指示を出している。キースは懐から双眼鏡を取り出し、外堀を見る。ちょうどそこには兵士達が進行を始めた所だ。」

「彼らが後は・・・。砲撃準備開始！完了次第・・・撃て！」

キースが叫び声を上げる。それは合わせ各所に指示が行き渡る。

「本当の作戦は・・・ここから始まるのだ。」

「船長！」

「なーに？」

優男がやんわりと声を上げる。

「船団が迫ってきます。大方・・・日本の船かと・・・。」

「じゃあ、ロンブルムは、船団の迎撃。後は陸への砲撃ね。後・・・トルネードの布陣。連絡お願い。」

「は！」

船員はその指示を聞いて優男から去っていく。

「キース局長。」

「分かっている。連中も無能ではない。・・・私は行く必要があるかね。」

キースとアンサレムは疲れた顔で優男を見つめる。

「このぐらいなら必要ありませんよ。お疲れですから・・・お休みください。後・・・各宣教師達のレポート、部屋に置いてありますので・・・見ておいてくださいね。」

「了解したよ。同士。」

そう言うと、キースは船の中に戻っていた。その後についていくようアンサレムも戻っていく。

「行けますかね?」

不安そうに顔をしかめる。その間にも、船室の通路を忙しそうに船員が往復する。

「あの異形がきても・・・数で押し切れよう。だが・・・。」

キースは頭で色々考える。あの女の形をした異形・・・何回か襲撃されたのでまた来るかと思っただら。船までは来なかったな。

「後はこの船の砲撃で、すりつぶすだけだ。でなければ・・・一度退く。」

「分かりました。成功するといいですね。」

「だな。」

そう言い、キース達は自信の船室に帰っていった。

「どうしてここまで時間がかかり申した!」

その部屋の主は怒ったようにその向こうにいる主を見つめる。ここは下八達の商人がいた屋敷。今、彼らは奥に避難してもらっている。無論、真田の奥が戸と息子も一緒だ。

「いや・・・そっちから説明して欲しい。算。」

信繁は優しい声で語る内容は不思議である。確かに隣の若君は秀頼様でも・・・この意見は聞きがたい。

「分かり申した。こちらから説明いたす。こちらは、あの戦闘の後、本陣の荒れ様を見て、成功したと思い、撤退命令をいたしました。……ここは敵陣深く……敗残兵を連れ、敵兵を横断し、少数になりながらも命からがらこちらの警備隊と合流する形で堺に陣を張りましたが……。でも……。何がやらさっぱりです。徳川軍に動きはないし……。かといって攻めれば負ける戦は行きたくないし……。」

算は最初、勢いでしゃべっていたが、徐々にその勢いは衰えていった。

「つらかったな。」

「は。」

「根津は？」

信繁は不安そうに周りも見渡す。後……来ていないのは根津だけだ。

「根津は……聞いた所に寄りますと……山の真田軍は全滅……ですから……きっと……。」

「そうか……。」

その言葉に思わず算は顔を伏せる。その様子を秀頼もじつと聞いていた。

「で、そちらの首尾は……。」

「ま……こうしてきているのだが……色々あってな……ありすぎて答えられんが……。」

頭で色々考える。半蔵と別れる前に言われた、しまが負傷し、徳川軍の忍者部隊に保護されている事。青海、妖怪達は契約に従い朝には撤退完了している事を考えると、こちらも正規軍はやってくるだが、自分もここにいれば捕まる公算は高い。いや、処刑されかねない。半蔵が取り持っても算やこの兵士達は無理だ。だから……うかつに投降を薦めるわけにも行かない。

「分かっているのは……ここも今日にも徳川軍が来るという事だ。」

「

「それは・・・重々承知してお下ります。そこは流石に抵抗させています。住民達もそれに賛同しているようですが・・・まだ来ない所を見ると本腰ではないのでは・・・。」

確かに、自分が来た時も敵兵の姿はないし・・・それに・・・半蔵が待機場所に堺を指定するのに戦場だったなぞ・・・普通はあり得ない。だが、こういう所は警戒してしかるべきである。何が起るか分からないのが・・・戦である。そのとき轟音が堺からも響き渡る。その音に慌てて外に皆が出ると、海上の船からついに砲撃が始まっていた・・・そう言えば・・・敵の作戦についての説明・・・していなかった。それに・・・今は家康がいない。なら・・・戦略などあるとは思わない方がいい。今回は特に他所の大名の寄せ集め、この局面で一大名が戦略を組めるとは考えがたい。ならどうするか・・・愚直に攻めるしかない。ならあの作戦には・・・どんな簡単で、ばからしい作戦でも豪快に引つかかると考えた方が良かった。良くも悪くも・・・彼らの思惑通りだ・・・。

「あれは・・・？」

「あれは・・・美井が言っていた・・・。」 世界最強艦隊”

「世界最強艦隊ですか。」

隣の秀頼も何か・・・怖い眼で船を見つめる。

「ああ。今までいくつもの海賊や、敵艦隊を滅ぼしてきた”最強艦隊”だそうだ。あの大砲は山一つは超し、あの船一つで大砲を城一つ分は抱えている。だから・・・淀君の作戦は成り立っていた。それがあそこに3隻はいる。」

「そうなんですか・・・。だから淀君はあんなに自信たっぷりに。只あれどう見ても・・・。」

算はじつとその撃ち方を見ていた。絶え間ない大砲の砲撃、飛距離もすさまじく、堺から着弾点は見えない。だが、その現場の激しさはよく分かる。あれを食らって生きているものは・・・敵味方問わずいないだろう。

「そして・・・俺の予想が正しければ・・・作戦には二段目がある。」

「はい？」

「算は意外だったらしく。信繁の焦る顔を見つめていた。それは秀頼も一緒だった。」

「それは何なんですか？」

「おそろおそろ秀頼も聞いてくる。」

「あの時言えなかった。あまりに酷かったから……。淀君の作戦は二段目がある。それは……。」

「その言葉に周囲にいた人間は唾を飲んだ。」

「大砲で死んだ人間を死人として復活させ、徳川軍に襲わせる。」

「その言葉に算は唾然としてしまう。」

「死人……ですか？」

「算も青海と一緒にだった経験上名前を聞いた事はあったが、それが現実のものだと信じられなかった。秀頼にしては初めて聞く名だ。」

「俺が調べた所、生者、死者問わず死人にする粉というものを南蛮衆は持っていた。そして、死人を操る術も持っていた。俺が怖かったのは大砲じゃあない。大砲から逃げて、敵味方関係なく死人に襲われて味方が全滅しかねないと言う事だ。そして何より……。」

「算の顔は蒼白となっていた。もし、城で守るとか言っていたり……。城に逃げ帰っていれば……。」

「死人を使った戦争。そんなものがまともな戦争のはずがない。そして俺たちは死んでも死人として、兵士としてずっと使われる……。」

「信繁は毛利勝つ永を思いつつ大阪城を見るが遠く……。状況をうかがい知る事は出来ない。その場にいた人間全員が凍り付いていた。だから俺は……。あの作戦に賛同できなかった。」

「じゃあ……。淀君は俺たちを使い捨てるつもりで……。」
「算は怒りに震える眼で、南蛮船を見つめる。秀頼は力の抜けた顔でじっと信繁を見ていた。」

「だろうな。そんなのは作戦でも何でもない。だから……この作

戦にした。特に、あの山を越えて布陣するなど言ったのは……」
そう言つて、信繁ははまだ砲撃を続ける船を見つめた。遠いが黒いあの船は……悪夢の産物に見える。

「あいつのせいだ。誤射とか言つて俺たちを撃ちそうな気配がしたからだ。」

「なんか……もう……。」

算がうなだれる中、信繁は大阪城の事を思い浮かべる。今はもう大阪城側に南蛮衆はいないはずだ。だが……。あの船にはまだいる。実際信繁はこの時、直に撤退したのを見ているわけではない。だから半信半疑であつたのだ。だがこの様子では……。

「でもあれ……あれはどうして？」

秀頼はある船を指さしていた。それは……船が旋回を始めていた。これは……信繁は望遠鏡を取り出すと、屋敷を飛び出して近くの高台に上がり、海の向こうを見ると幾つかの船団が見える……あれは……。

「どうしました。信繁どの？」

「ん？あれ……。」

信繁が指さすと……まだ黒い固まりにしか見えないが何か会場に出来て他のが分かる。あれは……鉄甲船……まだあつたのか……。織田信長時代に作らせた至上に名だたる鉄甲船……。だがその船団はあの船に比べれば小さく……。半蔵殿は流石に対策は立ててあつたか。

「何が見えますか？」

「鉄甲船がああ船に突っ込んでいる。」

「拙者はどちらを応援したらいいのやら……。」

算が複雑そうに信繁のしている方を見つめる。信繁はまた、南蛮船に望遠鏡を向ける。そこには……一隻が対処にむか……。ではないあれは……。船が三隻回転を始めている……。あれに何の意味が……。秀頼を始め、外に出た全員が船を見つめる。そして、地上に砲撃している船も含め、三隻が、何故かその場を回り始めた。

の弾を込め、仕込みの準備をする。向こうの船を見ると、その攻撃ペースの早さに驚いているようだ。よし！

さっきの船の砲撃が終わる頃には弾込めの準備が可能だ。今度は地上に撃つか……。向こうの敵船は動揺しているらしく、動きが見えない。向こうの援護を書かせば、それだけで作戦失敗してしまう。「次は！地上！」

優男が大声を上げると伝令が下に走っていく。この勝利もまた彼からすれば……。いつもの事だ。終わったら……。あのお方に何と勝利を報告しようか……。

「何か……。車懸かりだ……。あれ。」

信繁は船を見つめ、つぶやいた。川中島で語られた、上杉謙信の必勝の陣……。 ”車懸かりの陣” を見ているようだった。それを南蛮が使うか。驚いて望遠鏡で見つめる。その頃には秀頼、算も高台に上っていた。秀頼は何かおもしろいものを見るように、その様子を見ていた。算は何か……。驚いていた。

「車懸かりですか……。」

算は啞然として見つめていた。あまりにも戦闘に差がありすぎた。射程の長い大砲で、三隻による連続射撃を加え、相手がどんなに固くとも、ぼろぼろになるまで蹂躪する。正に悪夢みたいな戦術である。

「ああ。何か、大砲であんなもの見られるものではない……。凄い……。」

信繁は望遠鏡でその様子を見つめていた。

「信繁！。見せて！」

秀頼が信繁の裾を引っ張る。それに気が付くと信繁は望遠鏡を渡すと、楽しそうに望遠鏡で、海を見始めた。

「おおー。凄いねー。あれ。」

信繁はしつとを考えていた。あれでは……。あの船団は退却を始め、幾つかは寄港する……。これからどうするか……。それ以

上にあれ・・・勝てるのか？だが今の俺は・・・徳川でもあり・・・豊臣でもある・・・下手には動けない・・・だが待て・・・あの砲撃・・・じっと思考を整える信繁の横では手を叩いてはしゃぐ秀頼がいた。

「おおーあれ。何か、同じ所しか撃たないけど？」

「ああ。」

算も船を見つめていた為、その様子を見つめていた。

「あれですか。それはそうですね。伝令することは船同士難しいですから”どこかの真似をしろ”までしか言えません。昔、傭兵していた時に、船乗りに聞きました。」

「そうなんだ。だから同じ所を・・・ありがとー。」

「どうも致しまして。」

秀頼達ものんきなものだ。信繁は対岸を見ると遠すぎてこちらからは、黒い固まりにしか見えないものが徐々に小さくなっていく。やはり幾つかの船がこちらをを目指す。

「でも、どうしますかな？あれは。」

「敗残兵はこちらも一緒だ。受け入れてやれ。」

「ハイ。ではそう伝えてきます。」

そう言つと、算は立ち上がり、下に歩いていった。その間も信繁は考え続ける・・・何か・・・掛け違えた何か・・・もやもやする。例えば・・・南蛮衆が城にいるなら・・・組織だつて反撃する。だが、城中を見てもそれを見かける事は出来なかった。だとしたら、味方がいるのにあのような砲撃は・・・と言う事は・・・南蛮衆は城にはいない。

だとすると・・・今度は・・・さっき自分で言っていたよな。南蛮衆は死体を操るが・・・あの時あつた本を持った奴だろうな・・・あの様子からすると、本人が声を掛けねば、操る事は出来ない・・・あれ・・・もう南蛮衆がいないなら、あいつはいない公算が高い。なら、ちょっと待て・・・半蔵達は死人対策をしていたと言うが・・・大阪城攻めのせいで・・・対策は今夜に限りはしていない

い！ちょっと待てと言う事はほぼ完璧に……ではないか……作戦は成功する。そして操られる事のない死人が……って……待て！信繁は何か思いついたように膝を叩く。

「算！」

「何ですか？」

信繁は急いで高台から駆け下りる。

「急いで！兵士達を門とか前線に待機させる！」

信繁は周囲を見渡すがもう周囲には伝令にでた為、人がいない。

「どうしたんです？」

「死人だ！死人！死人は……こつちに来るかもしれん！」

「は？大体……操られているんでしょ。それがこつちに来るなんて。」

「……いまは……。操っている奴は死んでいるか……。あの船の中だと思う。」

そう言い、信繁ははまだ回転を続ける船を見つめる。

「へ？」

「だから……だとすると……暴走した死人は……徳川軍を伝い……こつちに来る可能性がある。」

「じゃあ……。」

算の顔が青ざめる。

「せめて、柵を突破されないように。徳川、豊臣どちらからも攻められる可能性がある！」

「大丈夫ですか？死人は青海が言う限り、斬っても死なぬのですぞ。」

「分かっている。」

この状態に半蔵が気が付けば……こちらにも増援は来るやもしれん……。だが……それまで堪え忍ばねばならない。背中に太刀が一本、刀が三本。脇差し一本。これが手持ちの業物の数だ。だがこれで、今度はほぼ数万か、数千の死人を相手するのか。

「だからといってモアレでももとは人。人を越えた動きは出来まい。」

なら、策や落とし穴で防ぐ。」

「了解。」

算は急いで走り出した。

「これはどういう事何だあよ！」

伊達政宗は馬上で敵を見つめる。確かに早朝の合図を元に、軍隊はすすみ、戦闘を開始した所で、どこから戸もなく大砲が降り注ぎ、陣は混乱していた。だが、進軍して早く決着させるべく更に徳川軍の後続部隊が今度は先陣を切ってはいるが……。今、伊達政宗軍を襲っているのはその……。先陣を切った徳川軍である。しかも、相手は斬っても吹き飛ばしても起きあがってくる。

「あれが……。死人……。でしょうな。」

片倉は近くにある槍を拾い上げると、全力で死人に投げつける。流石に吹き飛ばされるが、それでも立ち上がるが……。槍が貫通している上に、地面深くに刺さっている為に動けない……。この状態はどこも一緒らしく前線部隊は苦戦している。

「対策の霧はどうした！」

伊達政宗が咆える！

「分かりません……。」

片倉の弱気な声が聞こえる。そう言えば昨日からあれでどたばたしていたから……。ここまで気がまわらなか……。こんな所まで影響するのかよ！大将の死は！

「あれ……。水に弱えよな……。」

「確か……。聞いた所に寄りますと……。お祈りした水でないのだめだと……。」

「んだあ！どうすんだよこれ！」

そう言いながら踏み込んで死人に一撃を加える。その勢いに死人はその場で倒れる。だが、向こうからはいくつもの兵士達が迫る。

「なら！半蔵殿の所に行つて！取ってくればいいじゃないですか！」
片倉の泣きそうな絶叫が聞こえる。

「それだ！でかした！」

伊達政宗の目が輝く。

「はい？」

「おめえ、確か・・・後ろの山で構えている半蔵の所に行って水取ってこい。俺たちは・・・退きながら戦ってるから。」

「分かりました。」

片倉は近くにあった馬に乗ると、急いで陣の後ろに引き上げていった。

「おめえら！こいつらはきついから、少しずつ退くぞ！特に！噛まれたら放置しろ！ここが踏ん張りどころだ！かぶくぞ！」

「おお！」

伊達政宗の号令に全員が声を上げる。だが・・・先は厳しいものだった。特にこいつらを後ろに逃がす事は・・・難しかった。

無論死人の間は、半蔵に耳にも入っていた。

「何故！何故！」

半蔵は地図を片手に考えていた・・・そう言えば・・・信繁なら何か・・・知っていたはずだが・・・あの様子で聞けなかった。敵の作戦・・・無理でも・・・聞き出せば良かった。各所から報告が揚がる。海上の船から大砲が撃たれ、陣が半壊状態な事。そして、対策で向かわせた九鬼の船団が半壊状態な事。そして、味方の一部が暴徒状態となり、何故か味方に襲撃されている事。その報告の整理だけで、襲撃班が帰ってきてても、半蔵は指揮を検討していたが・・・この時・・・頭が混乱し、どうしていいか分からない。今更・・・今更ながら、家康のすごさを・・・痛感せざる終えなかった。だが！

「報告急げ！」

「は！」

忍者部隊の彼らもまた、ある意味限界が近かった。昼夜を問わず、戦闘や情報戦を行いました、妖怪部隊の対応もあり、もう限界が近かったのだ。

” どうすればいいのですか……。内府様……。”

「半蔵殿ー！」

遠くの声に声の下砲を振り返ると一人男が陣中に馬で乗り込んでくる。家紋は……。伊達家のものだ。

「どうしました？」

半蔵は馬の元に走って行く。

「現在こちらの軍は死人と戦闘中。」

「何！」

半蔵は頭を抱えそうになる。更に死人の追い打ち！だが今でも・本隊は攻めを続けているはず。ならどうする……。敵の作戦さえ分かれれば……。待て！

「そのの！」

半蔵は近くの男を呼び止める。

「何でしょうか？」

「すまない、その水を一樽を運んでくれ。」

半蔵は指示を出しながら考える……。もはや……。死人か……

暴徒は！抜かった！

「指示を変える。ここにある払い水の樽を各部隊へ配布！また、僧侶衆は？」

「はい、陣で一部が待機しています。」

「その者達に、死人が出た事を連絡せよ。大方前線に広く当たっているだろうからな。」

「了解！」

そう言つとその男は走つて陣の奥に向かう。

「片倉殿！水は陣中に運ばせるので、一緒に付いてきてください。」

「分かった。」

そう言つと半蔵は近くにある馬の飛び乗る。もし分からぬなら今からでも遅くない。聞きに行く必要がある。半蔵は堺を見つめる先に……。堺の町があった。

5月8日正午頃、堺の町にも、死人の群れは到達していた。無論これは入り口を守る警備隊達と戦闘が始まった……だが……。「逃げるな！逃げれば！後ろにいるものも死ぬぞ！」

算の叫び声が響く。だが……どう考えても斬っても撃つても立ち上がる相手の大軍なぞ……。出来るはずはない。最初は奮戦していても、柵に到達された幾つかの場所で破綻し、兵士達が逃げ始めていた。算も叫んではいるが……その実……自分も逃げたかった。実際初めて戦ってみて……。どうしようもなかった。

「おい！」

算は後ろを振り返ると……信繁の姿がある。

「どうしました？」

「撤退だ！」

信繁は周りを見渡す。戦線は内部に入られた死人を注進に崩され始めていた。

「でもどこに逃げるんです？」

そう叫ぶ前に算のいる……見通しの聞く櫓に信繁が上り叫び始める。

「逃げる！、逃げるんだ！海に向かえ！港に向かえ！逃げる兵士は海にと叫んで逃げろ！」

信繁の声に算は櫓を下り始める。それを見た信繁ははしごを下りる。

「海ですか。」

「そうだ。あそこにはさつき寄港した鉄甲船がある。あれに人を乗せる。」

「え……？」

算はまだ高い台から下りるハシゴの上で海の方を見ると、何隻かの鉄甲船が停泊していた。只その船を……南蛮船は撃つてこようとはしなかった。

「分かりました。」

そう言うと一緒に下り、港に向かって走り始める。

「どうして逃げるんです？」

算ははしごを下りるとじつと敵兵がいそうな所を見つめる。

「一カ所が破られれば・・・後は彼らにえさを与えるだけだ。更に混乱する前に通路を絞り、防衛する。とともに・・・。」

「？」

算は焦りながら、港に走る信繁についていく。

「ここにいずれ攻めてくる徳川軍とぶつける。彼らはある程度は死
人対策をしているみたいだから・・・それに期待する。」

自分の立場を忘れ・・・向こうを見つめる。

「徳川軍に期待ですか・・・。」

算は複雑そうな顔をする。その間も見かけた者全てに港に行くよ
うに掛け声をあげる。

「半蔵は前に死人にあった時、水を・・・払いの水だよな・・・。」

そう言い神社を探すがここは、堺の町。そう大きい神社を見かけ
なかった。

「連中の武装に期待するしか・・・今のところ方法はない。」

そう言い信繁が走っていた。この時正午頃、戦況は様々な変化が
起きていた。まず、大砲と死人の群れを越えた兵士達による大阪城
攻めが徳川慶直（後の水戸黄門）により開始されていた。また各所
に配置された僧侶達による結界により、徳川軍に大阪城へ攻める道
が完成されつつあった。無論海側に寄らねば、大砲の影響は受けに
くい為、川側中心である。そして大砲と粉で閉せされた無秩序な群
れは進行をやめ止まり始めるが、直ちに排除は出来なかった。水で
一部は退治できているが、絶対量が少なく、軍が侵攻するまでに至
っていないかったか日だ。こうなると、お互いに千日手の状況でもあ
るが・・・無論・・・僧侶にも限界がある。死人は待っているだけ
だから・・・限界は来そうになかった。ちょうど半蔵と片倉が堺の
町の中に入った頃には死人達であふれ、人々は食いつかれていた。
幾つかの勘のいい人間は港へ逃げていたが・・・逃げ遅れた子供と
かは死人に食いつかれていた。この死人の編成の多くは・・・徳川

軍であつた。

「何ですか！これ！」

片倉はもうしゃがれてしまった声で、馬を走らせ周りを見渡す。そこかしこから人々の悲鳴が響く。

「黙つて来てください。」

半蔵もまた、もう半分頭を抱えながら馬を走らせていた。人の流れを読み中心へ向かう。この動き……。しばらく走ると向こうに鎧を着た人々の群れがあるこれは……。豊臣軍の部隊だ。強行突破しようとする……。それを赤い鎧を着た男達に止められる。

「やつと会えたな。」

「半蔵……。どの？」

乾いた声が聞こえる。算だろう。半蔵は馬を下りる。片倉は事態がつかめず、只見ているしかなかった。

「そこに、信繁殿がいるか？」

「お主！徳川だろうが！」

算は兵士の手前そう言わざる終えなかった。走りながら言っていた……。徳川軍の力を使わねば……。死人に勝てないのは分かっていたが……。だが……。ここで素直に頷くわけにはいかなかった。

「算どの。」

半蔵は周囲を見渡す。確かに逃げ延びた難民もいるが……。兵士の数も多い。この事態……。何かを察すると半蔵は片膝を付く。

「算殿。今は火急の時。このまま人々が襲われるのを黙ってみていと。我々も救援の用意がある。」

「では……。分かり申したお通りください。今……。信繁殿は奥に止まったお主達の軍の船と交渉中である。」

「了解。」

そう言つと、半蔵は立ち上がり、奥に走っていく。その様子に只一人……。片倉は取り残される。

「お主は？」

算も不思議そうに見つめる。無論その家紋に見覚えがある。伊達

家のものだ。

「まあ……。半蔵殿に來いって言われてな……。」

「そうか……。お互い主に振り回されて……。つらいな。」

片倉はじつと筧を見つめる。確かに親近感がわく……。疲れた顔だ。

「そうさな……。だがそれが心地良いからこそ……。人は付いて行くんじゃないのか？」

「お主……。もし敵でなく、この場でなければ酒なぞのみたいお人ですな。」

筧は顔をゆるませる。この言う時のにこつとした顔は疲れを一瞬忘れさせてくれる。

「だが……。どうなる事やら……。」

「ですな……。」

「負傷者は搬送しろ！船は港の奥に入れろ！」

「信繁殿！」

半蔵が走ってくる頃には、信繁は港で指示を行っていた。

「半蔵殿。」

半蔵は信繁のすぐ側まで近づくと……。平手で一発頬を叩いた。

「……。すまない……。何となく腹が立ちもつした。」

信繁はじつと半蔵の顔を見る、複雑な顔をしていた。

「……。いいさ。分かる。」

「でだ、敵の作戦について、お主が知っている事を聞きたい。でなければお互い……。全滅するぞ。」

「分かった。あそこで。」

そう言うのと近くの倉庫を指さす。そこに二人が入ると信繁は隅に入って床に座り、地図を広げる。

「敵は……。大砲や城での戦闘をした兵士達で死人を作り……。徳川に共倒れさせる気だろう。」

そう言い、信繁は海と城を指さす。

「第一、どうやって死人は出来ている？南蛮衆がいなければ出来な
いはずだ。」

半蔵は不満そうに聞いてくる。だがこの時、掛け違いが分かった
気がした。

「敵は・・・粉を使い・・・人を死人にする。」

「へ？薬？」

半蔵は目を丸くする。最早、それだと作戦の前提が違う。南蛮衆
を倒しても・・・死人は必ず発生する。

「こつからはおれの予想だが・・・大阪城から南蛮衆を追い払った
事によつて・・・死人を操る奴がいなくなり・・・暴走状態にあ
ると見ている。無論あの時あつた死人の事だ・・・。」

死人は大抵人がいる方に向かい、人をかみ殺そうとする。嗅覚が
発達している為、目が見えなくとも、匂いだけでいる所をかぎ分け
る。集団の動きにも慣れている為、近くの死人の匂いがなければ、
ある方に向かう。それが、半蔵が知っていた死人の習性である。

「と言う事は・・・今は南蛮衆がいないと・・・。」

「そうではない。南蛮衆はまだここにいないのではないかと・・・。」

「そう言い信繁は海を指す。」

「さて？船は・・・そうか！貿易船！あれに逃げ込んだか！」

「そう言う戸半蔵はつい地図を拳で殴りつける。」

「あれは拙者が見た限り・・・軍艦・・・そして大量の大砲を積ん
だな。」

「大砲？ではさつき海を指したのは？」

「海に三隻の軍艦が地上に砲撃を行っている。それにお主達が送っ
た鉄甲船の船団もやられおつた。」

「少しお待ちください！ここは敵陣ですよ！」

「でもここ居るだろうが！半蔵が！」

「え・・・海上封鎖に向かわせていた部隊は全滅か・・・なら逃
げた南蛮衆はそこにいると。」

半蔵は啞然としていた。作戦は完全に読み違っていた。これなら

再度作戦の立て直しを必要とするほどのずれだ。だがどうする・・・
もう攻城は始まり・・・。

「どうする・・・。」

半蔵は地図を見てじつと考える。死人だけでもどうにか出来ないか。信繁もじつと地図を見つめる

”それはお待ちください！”

外が騒然としているが・・・信繁達には関係なかった。

「・・・作戦はある。乗るか？」

”だあー！おめええら！俺ん邪魔すんじやねえ！”

”分かりますが、ここはお待ちくだされ！”

「ああ。もうお主ぐらいしか作戦は立てられん。」

「わかった。」

そついい顔を上げ、信繁は・・・後ろに見える鬼気迫る顔の伊達政宗を見つめた・・・。

「やあ・・・。」

半蔵は顔を上げると意外そつな顔をしていた。

「おめえ！どうしてこんな所に居るんだよ！」

伊達政宗は怒鳴りつける。後ろには片倉と笥の姿もある。

「敵の作戦について聞きに来た。」

「はあ?!」

あつさりと答える半蔵とは対照的に睨みつける形相で伊達政宗は見つめる。

「そちらこそどうしてここへ？」

「おれたちアさあ・・・片倉の背中が見えたもんで何かあるなと思つて部隊ごとこつちに来たんだよ！そしたらこの様！何なんだよ！それにてめえは何者だ！」

「これは好都合。伊達殿もそこに座つてくだされ・・・。」

「は？ふざけるなあ！」

伊達政宗は刀を信繁に突きつけるが・・・信繁は動揺した様子はない。

「ふざけているなぞ！拙者には毛頭無い！今は一刻を争う！だから早く！」

信繁の声にたじろぎながら、じっとその顔を見つめる。しばらく見つめた後、刀を納めると地図を囲むように伊達政宗は座る。それに合わせ、片倉と算も座る。

「今現在……。」

信繁は改めて地図を見ている全員を見渡す。

「堺の町は死人に襲われて……大方、城攻めに参加した兵士達も襲われている。」

「だあなあ。」

「半蔵殿……死人対策は何をもっていました？」

「僧侶部隊は今、各部隊に配分し、守ってもらっている。今は結界のみであるう。後は払い水を各部隊に配っているが……昨日から精製していない為、残数は少ない。」

「それじゃどうするんだよお！」

「なら、やはりこれか……。」

「と言い、堺郊外の町の入り口を刺す。」

「まず、伊達軍に配属される僧侶隊と、妖怪部隊を用いて、堺の町中の死人を倒します。」

「はあ。」

片倉は生返事をするが、その妖怪部隊については誰も……分かってはいなかった。

「で、拙者達警備隊と伊達軍で、水を投入し、ここを守りもつす。」

水をつけた武器なら、死人は倒れるので、ここは水を撒いた部隊を固めるべきかと。半蔵殿？今回投入された兵士達の総数は？」

「4万7千。」

「伊達殿？ここに来た部隊の総数は？」

「2万2千。負傷者含むぞ。」

「十分。」

地図をにらみ信繁は余裕のある声を上げる。その様子に伊達と片

倉の二人は圧倒されていた。

「で、大方城から来る死人部隊は、ここを通るか。」

と言つて堺の町の北側を指さす。浜があり、防衛戦が出来ない所だ。

「だからここで流入を防ぎもつす。」

そう言い、信繁は浜と町の境目を指さす。確かに建物があつ

て戦いやすが……。

「でさ、俺たちの軍は全滅か？」

正宗は不満そうに言う。

「いや……各部隊に僧侶がいるならその方々に結界を張つてもらえば、その結界の幅を徐々に狭める事で、死人を海岸沿いに固める事が出来もつす。そうすれば死人の群れの向きをいじる事が可能でござる。」

その言葉に全員が息をのむ。

「最終的にはここに死人を固め、水を使って耐えきれれば結界と念仏が効く彼らは……ここで退治できもつす。」

「でもそれまでは……。」

「豊臣、徳川の大砲での死亡推定人数……大方……3万7千の死人がここに集結しもつす。」

その言葉にじつと地図を見つめる。そして、信繁は伊達に頭を下げる。

「ここは……お願い致します。時間さえ稼げれば！きつと死人を滅せましょう。」

「でもさ……俺たち……。」

「弱き人々を守るが侍の本分でしょうが！ここに至つて家なぞ！何がありますように！」

信繁の声に口ごもつた正宗は……じつと見るしかなかった。

「分かつた。片倉。指示通りには位置指定やれ。細かい事はおめえに任せる。俺は……前が出る。」

「了解しました。」

片倉は二つ返事をし、立ち上がると信繁に一礼し、正宗と倉庫を後にした。

「あれ・・・すげえな。」

馬に戻る正宗は感心したように・・・いや半分放心した顔で片倉を見つめる。

「ですな。あれこそ正に君主の鏡。仁徳のなせる技でしょうな。」

「ほんと・・・俺もああ・・・なれるか？君主の鏡に・・・。」

「なれますぞ。あなた様は伊達家当主ですぞ。」

その言葉の変化に片倉は・・・言いしれぬ自信を感じるのだった。

「ではこれで作戦は終了か？」

半蔵は地図を見つめ、言った。算も信繁の先ほどの言葉に感動している所だった。

「いや。まだ・・・これが片づかねば、上陸されるか固まった所を大砲で終わりだろう。」

そう言い港から外を見つめると、大阪城近くの海に、大きな船が三隻、もう回転もやめたようにめった打ちに、地上を砲撃していた、
「ではどうする。」

「とりあえず、港を撃つ気はないが、こちらに気が付けば別だろう。」

信繁は近くの止まった船を見つめる。鉄甲船が三隻がこちらの最終戦力でもあるが・・・。装甲は大砲ではがされ、その偉容はいずれの船もなかった。船員も海に振り落とされたものも多く、戦死者の数にいとまがない。

「どうする・・・。」

半蔵はじつと見ているしかなかった。

「お主・・・船の指揮は出来るか？」

「いや・・・拙者は山の育ちなので・・・。」

半蔵はため息をついた。

「だとすると・・・半蔵殿。お主に頼みたい事がある。それが終わ

り次第、各所への連絡を頼む。」

「分かった・・・頼みとは・・・。」

「その鉄甲船の船長達を説得して欲しい。」

「戦ってもらうとか？」

「いや、幾つかでいいから俺たち警備兵を乗せ、指揮をさせて欲しいと。」

「・・・。」

信繁の顔を半蔵を見つめる。算も驚いたように見つめる。

「分かった・・・。これが終わったら各所に手配いたす。では・・・健闘を祈る・・・。」

そう言つと半蔵は港の奥に歩いていった。算は立ち上がると地図をまとめ始める。

「でも・・・どうして・・・。」

「あの船には・・・散々苦しめられた。豊臣の勝利とはならないが・・・あいつらのやっている事が許せない・・・すまない算。色々説明するにはいい間はまだ・・・時間がかかる。もう少し・・・つきあってくれ。」

そう言つと、信繁は算に大きく一礼した。

「拙者にそう言つてくだされば・・・拙者はどこにでも付いて行きますぞ。だから・・・」

顔を上げて。後拙者に様出来る物があれば・・・。」

「そうだな。油と火種、壺が出来るだけ欲しい。炮烙玉を作る。それで、連中は潰せる。」

「では・・・。」

「そうだ。大砲戦は使えないから・・・近接でしとめる。」

そう言つて見つめる先には黒い三隻の船が・・・しばらく様子を見ていた。

それからしばらくたった頃、半蔵は自陣に戻っていた。確かに信繁の作戦は的をえているが・・・だからと言って。伝令を伝え、伊

達軍に水を固める算段をつけ・・・作戦を伝えたが・・・一つ難題がある。それは契約だった。妖怪達と行った契約は”朝まで手伝って貰えば・・・その身分を保障する”という物だった。だが、もう朝は過ぎ、しかも妖怪達の多くはその姿を人見られるのを嫌う。驚かれるのが好きではないそうだ。

「半蔵殿・・・」

「お吉の方。」

「あいつらに逃げられてしもうた。」

突然の声に後ろを向くと、お吉の方の姿があった。

「どこに・・・」

「すまんな。ワシに勇気がないばかりに・・・連中は海における。海に小舟で逃げおった。」

「そうですか。」

信繁の見立て通りだ。なら・・・成功する可能性は高い。

「一緒に来て下されぬか。」

「わかった。」

その言葉の中に秘める意志の強さに、そっとお吉の方は後に付いてくる。妖怪達の長達がいる陣幕だ。昼は動きたくないらしく、ここで日差しと戦っている。

「オラ達の番は終わった。」

中に入ったその場でいきなり妖怪の一人が声を上げる。分かっていた。

「すまないが・・・戦闘は忙しそうだが・・・私らには関係ない。

帰して貰えぬか。本来なら、断り無く姿を消す所だが・・・それは流石に約束の確約がとれんので居て貰っている。」

妖怪の長が声を上げる。その言葉に全員が頷く。

「私らには安住の地が欲しい。誰にも襲われぬ・・・確約がな。」

彼ら妖怪もまた・・・戦国やその前に置いて差別された・・・民である。確かに悪い事をした者も多いが、一方で武功の為に、何もしていない妖怪が狩られてきた歴史も存在する。だからこそ、自分

たちの味方となる山の民を信じ、そして彼らと山の民が力を合わせ、山間部の大名を支えてきた。そして今・・・それが徳川の忍者部隊の統一に伴い、こうして連合軍となっていた。だがその一方で平和になった時は武功を消失させ、その武功の為に、妖怪狩りや偽罪人狩りが多発したのだ。彼らにとつてこの戦とは・・・”保身”の為にしかなく・・・”義”を説くのは難しいように思えた。半蔵はいきなり頭を地面にこすりつける。

「すまない・・・。この中で・・・有志で構わない・・・。拙者達を・・・手伝つて貰えないか。」

「なにがあつた？」

後ろで効いていたお吉の方が不思議そうに半蔵の後頭部を見つめる。

「今・・・堺の町は死人に襲われ・・・全滅しかかっている。」

”え・・・。”

妖怪達のざわめきが聞こえる。確かに彼らは大阪城で死人と戦い、そのほとんどを倒して帰ってきた。

「どういう事じゃ。」

長が聞いてくる。自分たちに何か不備があつたのかと心配するような顔をする。

「・・・拙者の計算違いだ・・・。死人は・・・今・・・戦闘で増えている。」

”そんな事・・・オラ達はなんだつたんだ？”

ざわつきが一層大きくなる。

「だとしても、契約は契約、もう・・・関係ないはずだ。それに今出て行けば・・・また・・・。」

長の声が小さくなる。優しい人間なら大丈夫かもしれないがここは都会の堺。人々に討伐されかねない。

「だからこそ・・・有志で構わない。来たくなければ結構。それでも約束は守る。」

半蔵は頭を地面にこすりつけたまま話を続ける。

「なら・・・帰る。それが約束だ。」

長はそう言う戸半蔵に背中を向ける。

「それが・・・いいかもねえ。みんな・・・人間じゃないからね。」
お吉の方はやんわりと言葉を続ける。

「でも・・・。今のあんたら・・・迫害してきた人間と・・・何にも代わりやしないよ。」

お吉の方は半蔵の前に立ち、妖怪達を見つめる。体は強そうでも・・・瞳は怯えていた。

「今までだって・・・ここにいるのだって・・・みんな・・・人間が怖くても・・・無理矢理・・・我慢してきたんだ！これ以上は無理だ！」

「でもんだ。おめえら・・・優しくしてくった父ちゃや、母ちゃはいないべか？オラン居るぞ。最初は・・・みんな・・・人間も・・・こつちを怖がっただ。それは向こうも一緒だ。だってん。慣れれば、優しくしてくれんだと・・・オラは思うだ。」

トリさんは立ち上がり、周りをも見渡す。その言葉に更にうなだれる。

「半蔵も有志でいいと言ったからな。わしは・・・行くぞ、お主、くるか。報酬はないぞきつと。」

「だとしても、オラは・・・追われた事もあるんだ・・・助けられた事もあるんだ・・・それにみんなも・・・この人に助けられるんだって思ったら・・・助けてもバチ・・・あたんねえだ。」

「そうか・・・坊主どもは？」

「もう出発し申した。彼らは二つ返事で・・・了解した・・・。」

半蔵は顔を上げ、お吉の方を見つめる。

「わしらが後れを取れば・・・メンツは立たん。付いてこい。二人でもいれば、盾の一つにはなるう。」

「んだ。」

トリさんは妖怪達から抜け、お吉の方は陣容から抜けて歩いていった。しばらく半蔵は待ってみたが、それ以降妖怪達が動く気配は

なかった。

「もう・・・確かに・・・拙者もまた・・・時間がない・・・すまなかつた。この戦が終わりに次第、お主達の願い通りの手配を行う。感謝いたす。」

そう言うのと、半蔵は一礼すると、走って馬の元に戻り、馬を走らせて立つていった。半蔵にとって彼らの思いは分からないわけではなかった。怖い物は怖い。だから・・・だが・・・半蔵は走りながら堺を目指す。水の手配を確認し、前に立つ為だ。拙者に一人でも・・・居ないよりはいい！

「どうする・・・。」

残された陣にいる妖怪達は不安そうに、お互いを見る。その中で長はたたずんでいた。

「でも・・・あれ・・・どうするんですか・・・。」

「ああ・・・。」

あれから信繁はじつと、敵船を見つめる。何回か散発的に九鬼船団が鉄甲船で攻めるものの、いつも回転戦法で退かざる終えない所まで行かされる。あの回転大砲に大砲で挑めば・・・負ける。それは分かっていた。

” おおーあれ。何か、同じ所しか撃たないけど？ ”

” あれですか。それはそうですね。伝令することは船同士難しいですから”どこかの真似をしる”までしか言えません。昔、傭兵していた時に、船乗りに聞きました。”

じつと船を見つめると・・・船は大きいが・・・あれだと大方・・・大砲主眼の戦闘か・・・大砲の窓の照準・・・撃ち漏らしが多い・・・それを次の船が狙う。ある意味欠点を克服した編成だ。待て・・・大砲の窓・・・あそこには人がいる。

「炮烙玉準備できました！」

「分かった。」

狙い所はつかめたが・・・一対一で勝てる大きさと大砲じゃない

なら……。一気に……。

「信繁。」

振り向くとそこには刀を持った袴姿の秀頼の姿があった。

「どうしました?」

「あれと戦うのか?」

「はい。」

信繁は頷く。

「あんな大きいのにかなうわけないよ。」

秀頼は寂しそうに信繁を見つめる。

「大きくても……。勝てます。昔、童話で一寸法師というものがあ
りましてな。よく拙者も読まれたものです。秀頼様は?」

「ううん。お母様や乳母達はそう言う話とか嫌いだったから……。

」

「それは惜しいですな……。小さな体で、大きな鬼と戦い、勝つ
様は拙者も相当感銘を受けたものです。」

「でも……。どうしても行くなら……。僕も……。連れて行って

」

「……。戦闘経験は?」

信繁はあの時の姿から大体予想は付いていた。だがあえて聴いて
みた。当然諦めさせる為だ。

「僕もいつかは……。前線に立たなくちゃって思っていた。せめて
今だけはこれで……。」

「この戦は……。船の落ちれば死ぬ危険なもの……。それでもよ
ろしいですか?」

「……。大丈夫。信繁が居るもん。」

その言葉につい、信繁はキュンとする。だがあえて声には出さな
かった。彼は男だ。

「それにこの着物があるから……。きつとお母様が……。守ってく
れるよ。」

「その着物は?」

秀頼は裏地を見える。そこには金色の刺繍がしてあり・・・不器用ながらもトリの上げ勝てるように見える。

「お母様が蝶を縫ってくれたんだ。ここ。だからきつと。」
その顔は泣きそうでも・・・今はなくほどの暇はない。縫うって・・・流石に不器用だったらしいな。あの人は。ぬう・・・。ぬ・・・う・・・。ちよつ！ちよつと待て！縫う！縫うんだ！それだ！確かに三隻で、大砲の弾を詰めるまでの間隔。無理矢理ねじ込めば、攪乱か、怯えさせて舵を狂わせれば・・・。行ける。後は・・・攻撃した後だ・・・。

「分かりました。若の初陣。拙者が先陣を切りましょう。只・・・。戦場はあの時より、きつと恐ろしくございます。」

そう言って信繁は淀君の事を思い出す。城の天守閣から落ちて無傷な奴が迫ってくるより怖くない事・・・。早々無いな。

「分かった・・・。出来るだけ・・・。がんばる！」

やる気満々の秀頼の顔について信繁の笑みがほころぶ。こうして生きていく若い命・・・父の気持ちか・・・少し分かった気がする。

そう思い、じつとあの戦艦を見る。あの船を止めねば・・・。きつと未来は・・・。明るい未来はない。決意を固め、ただじつと見つめる信繁であった。

「で・・・これかぁ・・・俺たちは・・・。」

家の屋根の上に乗っかり遠見筒で、先を伊達政宗は見つめていた。水は届いたので、どうにか通路上の死人はどうかには出来たが・・・。遠見筒の見える先には・・・。死体の群れがまるでこちらに吸い寄せられるように歩いている。

「今は、刃物が効くとはいえ・・・。水が乾けば効かなくなります。」
片倉は後ろに座り、鮮烈を見つめる。警備部隊の作った柵を鉄立で補強し、水をつけた矢で、相手を追い払うべく構えさせている。その行進はまるで・・・片倉から見える範囲だけでも・・・。黒い壁だった。

「でも今は・・・連中は普通に倒れる。しかも殿だ。」

正宗は何故か胸のわくわくが止まらない感じだった。だが、片倉にはまだ不安があった。届いた水が少ないのと、補給線がない位置なので、水が尽きればどうしたらいいのか分からなかった。そして・・・後方を見つめる。まだ堺の町は阿鼻叫喚と言った所だった。その敵がいつ後方から襲ってくるのか・・・計りかねるのが・・・一番の難敵だった。

「第一射・・・引きつける！」

正宗の声に合わせて兵士達が柵の合間から弓を構える。その間にも、水の樽を鉄立ての間に隠し、じつと構える。その陣の中には一部の豊臣兵士達も混ざっていた。だが、それは正宗にとっては関係なかった。今は全力で生きる事しか考えなかった。そうこう言っている内に、敵の顔がかすかに確認できる位置まで接近してきている。

「第二射！準備しろお！第一者！撃てえ！」

その掛け声とともに矢はまるで雨のように放たれていく。矢を食らった死人達はばたばたとその場に倒れていく。矢を撃ち終わった兵士達は後ろに下がり、近くの家に刺してある矢を受け取る。替わり様に張ってきた弓を持った入ってきて構える。

「撃て！」

その号令とともに、第二者の矢が、死人部隊の後続部隊に当たり、後続の群れは倒れた・・・だが・・・その屍を越えて死人はまだ行進を続ける。正宗が遠見筒を除くと、その視界の果てまで死人の群れで埋まっていた！

「おめえら！もう少し早く撃つぞ！準備だ！」

「応！」

その声に兵士達が準備を始める・・・今俺が弱音を言ったら・・・きつと逃げる！いや俺も逃げたいが・・・

”弱き人々を守るが侍の本分でしょうが！”

あの言葉が頭をよぎる。後ろを見れば・・・まだ火の手の上がない地域があるなら！

俺は怖くても・・・踏みとどまる！

「近づいた奴らは・・・たたつ斬れ！」

伊達政宗の掛け声が響く。この後ろは大都市・・・まだ生きている人がいる限り・・・。

「信繁！」

半蔵は港に舞い戻ると出航準備を始める信繁の元にやってきた。

「どうだった？」

「僧侶部隊は動いたが・・・妖怪は・・・。」

「それでもいい。誰も動かぬよりはいい。後はこれで。」

「やはりな。」

「や。」

その声に横を居るといつの間にか、お吉の方と、トリさんが居た。

「やはりお主の作戦か・・・。だろうと思った。かなり無茶だったからな。」

「んだけんど・・・おら・・・これ・・・これが海だか？」

トリさんは珍しそうに海を見つめる。遠くを見れば秀頼もまた何か色々準備をしている。

「お主は町中に戻り、死人から人々を守って参れ。そのために来たのであるう。」

「んだけんどこれ・・・。」

「いいから行ってこい。後でゆつくり遊ばせてやるから。」

「ほんじゃ・・・。信繁・・・後でゆつくしな。」

「分かった。後で・・・あのおじさん達へのお土産買ってやるから。」

「んじゃ。」

そう言つと、トリさんは走って町中に向かっていった。道路上なら、大軍には会わない為、大丈夫だと思うが・・・。

「お吉の方様・・・。」

「船に乗ってどこに行く気だ？」

お吉の方は不思議そうに見つめる。その頃には炮烙玉の載せ替えの準備も出来ていた。

「あれです。あれを倒しに。」

信繁が指さすのはもちろん……。海上の三つの黒い船だ。

「あれか……。あいつら……。行けるのか？」

「勝算は他の者に比べ少ないですが……。でもあれを止めねば……。死人倒しに来た者達がやられてしまいます。」

「本当に……。お主は損な役回りだのう。約束なぞしなければよかった。」

「ん？」

「お主には関係ない。風がこれでは……。まずかろう。ワシも行くぞ。」

「分かりました。こちらへ。」

そう言い信繁はお吉の方を船内に案内しようとする。棧橋に乗る直前、お吉の方は

「そうじゃ、この船に小舟はあるか？」

「いえ。」

「そうか……。」「
そう言つとお吉の方は近くの小舟を見つけると、尻尾で釣り上げる。

「行くぞ。これで本当に終わらせて……。後は帰るだけじゃ。」

「はあ。」

そう言い意気揚々と乗り込むお吉の方を見て、信繁は何となく不安を覚えてしまった。

「かなり……。戦績がいいようすな。」

優男は甲板に出て、双眼鏡を眺める。向こうには穴だらけとなった、大阪城前の様子を見ていた。そこにはうるつく死人達がいた。それは生存者を求め、歩いていった。

「ですな。」

キースもまた外に出て、同じように双眼鏡を見つめた。

「後はどうしますか？」

「敵兵が見えたら打ち続ければよい。落ち着いたようならこちらが下りていけば・・・それでよい。」

落ち着いたように空を見る。もう昼過ぎらしく・・・日が西に見える。

「上陸はいつ頃に？」

「死人に船員が襲われては叶わぬ・・・向こうが引き上げる夜までまとう。」

「分かりました。」

そう言いじつと大阪城を見て・・・頬を風がよそぐ・・・あれ？この風向き！

優男は立ち上がる。風向きが急に変わり始め、北向きになっている。

「船長！南側から突進してくる船2隻！」

優男が走って後方に行くこと確かにぼろぼろの・・・鉄甲船が二隻こちらに突進している。

「トルネード！」

「イエツサー！」

優男の掛け声とともに、操舵士達が舵を切り、帆の向きを変える。それと共に船は動き始めた。またくるとは愚かな・・・。だがその速さは風に乗った船と動き始めた船。差はあった。

「戦闘だ！今動き始めた船をねらえ！」

鉄甲船を走らせる信繁は掛け声をあげる。作戦を考えている間じつと船を見ていると、後続に二つの船はずっと同じ行動をしていたと言う事は根元はどこか。それは必ず最初に動き出す船でなくてはならない。その船を止めれば混乱する。それが今回の最大の作戦にして・・・唯一の作戦である。運良くお吉の方様が来てくれたが・・・そうでなければ艦をこいででも、寄せるつもりだった。それとも、しばらく手に赤い旗を持ち、様子を見る。やはり、横にある大砲をこちらに向ける気だ！赤い旗を頭上に掲げる。それとともに

乗組員達が帆の向きを調整する。こちらは・・・後方に周り・・・後続の船は前に回り込んで船を止める！速度を更に上げ、勢いよく突っ込む。大砲は重く、照準を上下に合わせづらい所を狙う！後ろの船と、分かれ、追い風もあつて素早く回り込むが・・・この船は大きい。鉄甲船船の上に二階建ての建物だが・・・これは・・・それよりも甲板が高い。だから、ここで斬り合いは出来ない。だが、それも予想済み。

「大砲を撃つに近すぎねえか！」

船員の恐怖にも近い声が聞こえる。だが向こうはここまで計算済みのはず。だがここからだ！秀頼はもう縁を掴むだけで精一杯であった。

「お前ら！大砲の穴に炮烙玉投げつける！中にある火薬を全て焼き払え！」

「おお！」

信繁の合図とともに炮烙玉に火をつけ、紐を廻して炮烙玉を大砲の穴めがけて投げつける。元々この戦法は海賊戦法ではあるが、その製法自身は大砲の研究課程で多くの武家によって研究されていた。無論奇襲を得意とする信繁は九度山で、その書を読み、自信自らでいくつもの方法を考えられていた。この作戦は表から食い止める連中にもあたえてある。だが、数には限界がある。大砲の中から叫び声が聞ける。無論この船は鉄ではなく、外洋渡航用の・・・木の船だ。水に強くとも、火には弱い。大砲の中から叫び声が聞こえる。

「何だ！何が起きた！」

優男の声が聞こえる。船内は蜂の巣を突いたような大騒ぎになっていた。

「大砲室から火が！」

「何！」

優男が甲板に乗り出すと、大砲の死角から何か物を投げている・・・

「水で消せ！甲板員！奴らを銃で蹴散らせ！」

その掛け声とともに船員達が船室から銃を取り出す。だがいざ船員隊が下を向いた頃にはもう船は後方から抜けていた。そのまま鉄甲船は少し傾きながらも、後ろの船の側面内側に回り込む。確かにここまで大きい船なら船の内側から来る大砲の数は遠くより少ない。衝突するリスクを考えてもこの作戦は無茶だった。

「前！突っ込め！重さで振り切る！」

優男は指示を出す。これではこの船の大砲は離さなければ使えない。なら突っ切る！

「何い！」

信繁は叫び声を上げる。思った以上に船が速く、戦闘の船がだしゆつ使用とする。これを真似されたら・・・距離を取られる。

「やっとワシの出番だのう。少し時間を稼ぐ。その間に・・・。」
「分かった。」

その声を聴くか聴かぬ内にお吉の方は尻尾で小舟を戻る位置に投げつける。着水すると同時に、その船に一跳躍で飛びの乗る。

「さて・・・神風の実演と行きましようか！」

そう言い、着物の隙間方扇子を取り出すと、突風を先頭の船の横つ面に当て、船を揺らす・・・。流石に船が重く。揺らすまでが限界だった。だが、その隙をつき、信繁達は反対側に回り込む。真ん中の船は先頭の船の様子に慌て・・・先頭との船の間が離れ始め、最後の船は二番目の船を追い越しかかっていた。完全に隊列が崩壊した瞬間であった。この頃の大砲は弾を込め、撃つまでに少しの間がかかる為、方向の構想くで入れ替えると、大砲を撃つまでに時間がかかる。その間に側によると、ありったけの炮烙玉を打ち込む。完全に真ん中の船は混乱していたが、前を塞いだ鉄甲船は最初の船の突破のあおりで遠く離れてしまい、距離を戻すのに手間取っていた。只ぼつんとお吉の方は小舟の上で浮かんでいた。

「・・・そう言えば・・・船のこぎ方とか知らなかったの・・・ワシ。さて・・・まあ・・・水に触れるのもいやだしのお。だが！」

向こうを見ると幾つかの・・・崩落玉が届かない、撃てば鉄甲船

の上を通過しそうな最上階の大砲が……こちらを狙う。お吉の方はまずは突風でたい方の訪問を狙うが……弾は減速しても……まだ殺傷力はあるようだ。なら！お吉の方は尻尾を広げる。尻尾を三本まとめ、尻尾で弾き飛ばす。他の弾は脇にそれ、船を大きく揺らす。

「流石に大砲の弾は無茶であつたか……。」

お吉の方は顔をしかめる。流石に勢いのある重い弾を弾くには尻尾の強度が足りない。

「ちい！」

甲板に出たアンサレムとキースは舌打ちをする。あの悪魔……まだ追いかけてくるか！大砲さえ弾くとは……何という悪魔！

「まだやれる。側面にい！」

層支持しようとした瞬間、ざわつく声が聞こえる。そちらのほうを優男が、双眼鏡で見ると、3隻目の船が突進してくるのが分かる。あのコースは！

「全船！全速前進！」

「は！」

その声に副長が走る。もう伝令とかもこの状況で戻ってくる様子はない……。その間にも全速力で走る船は……出過ぎた三号艦、ロンドンブルムの側面に激突する！その衝撃で船が大きく揺れ……。優男の双眼鏡には船に乗る鎧武者達が船に乗り込む様子が映し出されていった！

「どうする！あのままだと三番艦が！」

優男が聞いてくる。下の大砲室は火薬や船内が火事で、火を納めるのに手一杯だ。だからといって向こうが切り込みを掛けてくるわけではないこの状況……。手を出すわけにはいかなかった。ここに踏みとどまるのは危険！だからといって助けに行かなければ……。船乗りの多くはこの当時軽装を好む為、度無手も鎧を着た人間との先頭では防御力の差で圧倒的不利となる。と言う事は、あの船はもう……。どうしてこうなった！特にあの小舟の上の黄色いもじゃもじ

やの何か！

「我々は猊下の元に報告書を持ち帰る任務がある。後は分かるな！キースは厳しい目で、反対側に回り込んだ船を見つめる。あのままだと！」

「後ろに信号を送れ！このまま内海を一気に抜け！退却する！」
その声に副長が手旗を持って後方に向かう。

「全員、全速で内海を突っ切る！消化要員以外を甲板に逃がせ！後、大砲板を閉める！付いて来れない船は！おいていけ！」
「了解！」

掛け声で走っていくを見送ると、手すりを力一杯強打する。これが彼ら、イスパニア第3艦隊初の敗北でもある。

「これで・・・最後か・・・」
「もう・・・」

所々に散乱した水樽は最早すべて空。敵はいまだ果てが見えず・・・伊達政宗はじつと向こうを見るが、その先を居る事は出来ない。ここまでの物量の差・・・確かに作戦通りなら・・・もうそろそろ・・・。髭に死に方向き、もうそろそろ夕方にもなる時・・・。そろそろ増援が来ないとこっちが落ちるぞ。そう言えば向こうの砲撃がやんできたな・・・。そろそろ・・・行けるか？もう・・・

「正宗様！しっかりしてください！」

正宗が頭を起こすと、そこには柵が突破され、つばぜり合いする兵士達が！伊達政宗は立ち上がり、やねから下りようとするがここは民家の屋根上、はしごで下りるしかない！飛び降りた場合は甲冑の重みで骨折する。はしごを探し、見渡した瞬間、何か・・・異形な・・・いや・・・何でこんな所に火の玉が？兵士を見ると、笠が、兵士に組み付いた死人を弾き飛ばす。

「ここで・・・合っていたようだな。」

その声に振り向くと、数多くの妖怪達と一緒に坊さんが居る。

「俺が増援だ。前は頂く。おめえらは後ろはから援護頼む。」

「勝手な事言いやがる。おめえら！・・・水・・・持ってきたか？」
正宗ははしごを下りながら、片腕に包帯を巻いた坊さんを見つめる。

「ふん。みんなを助けるのにつかかつちまったよ。」

「おめえ。何か水みたいの、ごくごく飲んでたくせに！」

小さな妖怪が叫ぶ。この状況に流石に伊達政宗も啞然とする。

「あれは酒だ。」

包帯のお坊さんは言うと言のひょうたんの中身を口に注ぐ。そして、伊達政宗に渡す。確かに酒の強い匂いがする。

「おめえ、こんな時に酒かよ。」

「この状況に勝機なんざ保ってられるかよ！あと！邪魔・・・するなよ！おめえら！」

「町中でお前を助けてやったのは俺たちなのに！」

「知るか！行くぞ！」

そう言うと、坊さんは念仏を唱え始める。それを聞いた死人達が動かなくなっていく。

「これは！」

「いけそうすな。」

片倉もほつと肩をおろす。あまりの出来事に、正宗はじつと全線を光恵m流。坊さんが念仏を唱え、妖怪が死人を押さえる。何とも言えないこの風景に・・・自分の中の何かが壊れていく気がした。

そして、その向こうに見える大阪城から火の手が上がり始めたのがちょうど夕暮れ時のこの時であった。その狼煙にも近い大阪城の炎上は何か時代が終わっていく感覚が・・・戦場の誰しもが感じた事であった。

「やっと終わった。」

すべての後処理が終わって軍を各地に退かせるまでに5月八日から更に一週間を要していた。戦闘終了後、お互い一緒に戦った守備

隊と伊達政宗軍は一緒に勝利を喜び、形上は防衛隊が降伏し、無罪放免にする事で事なきを得た。それから、残存の死人狩り、褒賞の選定、死人の首（生きていると勘違いした兵士達の寄る首かり）の除去。そして・・・戦犯の処理である。あれから早馬で到着させた影武者に衣装を着せたりするなど死がしく、裏まで半蔵は手を回せなかった。その間にも彼ら忍軍と妖怪部隊に來客があつた。

「よー！」

「兄貴か・・・。」

信繁は嫌そうな顔で信之を見つめる。お吉の方もその感じだつた。「生きててよかつたな。お前。で。皆のもの！これだ！」

そう言つて指さした先には、食料と酒がある荷車と。もう一つの荷車がある。

「これは？」

もう一つの荷車には、白いふさふさが付いた装束がある。

「これが・・・一応な。俺。妖怪との交渉役つて言う事だな。しばらく妖怪の窓口つとめる異なつたんでな。それ出来たわけだ。これでも急いで来たんだぞ。」

「・・・それはどうも。」

妖怪達を盛ると、食べ物にむしゃぶりつくもの、酒に飛びつく青海とそれを止める筈。服を勝手に着始めるものなど多数だ。その中でゆっくりと長が歩いてくる。

「安住の件は・・・。」

「分かつている。一つは、その服を着ている奴は修行僧だと言う事で、山間部だけなら自由に通行できる。後は、武士からは妖怪狩りは行わない。今後、妖怪からの相談専用の自社を設置するからそこで、今後細かい所を詰めていく。出来る限りの支援を俺は約束する。一応かねとかが欲しい時はまあ忍びの仕事ならこつちで調達できるから、気軽に来てくれ。あの服はお前らにやるから。後は好きにしてくれ。」

「そこまでしなくてもよいのに・・・。」

長は呆れたように見つめる。

「半蔵に頼まれていたんだ。このぐらいいはしてやってくれってな。ま、持ってけ。」

そう言つと長は一礼すると、食事をむさぼる妖怪達の所に歩いていった。

「ま、兄貴もいい所あるな。そつだ。兄貴ありがとな。赤い染料。」

「ふん。真田が黒い鎧を着ているなぞ恥だ！」

そう言つと説明の時に持っていた白い僧侶服を差し出す。

「これは？」

「秀頼殿の事は聞いている。そいつを持って薩摩に行け。薩摩の島津殿には話をつけてある。船もでる予定があるし、家族の分とかとお主の分もある。まずは、そこに行つてこい。それが終わつたら・・江戸に向かつてくれ。そこで半蔵は待っているそつだ。」

「わかつた。さつそくむかう。では。」

そう言い信繁は意匠を持って青海達の肩を叩き、衣装を指さす。

「やっぱりあいつは忙しそつだな。」

「ふん。お主も意地が悪い。無事を確認する為に乗り込んだくせに。」

その様子をお吉の方が見つめる。

「そつですか？お師匠様。」

「そつじゃろつが。わしに”信繁を影から守つてくだされ”とか言つたくせに。」

「それは感謝します。」

信之はお吉の方に一礼する。

「まあよい。分かつておるじゃろつな。」

「はい。酒宴は用意してあります。只、この処理が終わらなければならぬので。」

「分かつておるよ。さて、一応忍軍の連中に挨拶したら、ワシは帰るぞ。じゃあな。」

その言葉とともに強い一陣の風に目を伏せると・・・お吉の方の

姿はなかった。

「感謝しますよ。本当に。」

信之は手を叩くと、妖怪達を集め始めた。これからの事について説明する必要がある。無論ここからが根気のいる作業。時間がかかるからな。

「ここが……。」

信繁の家族と、秀頼は山奥に島津家の侍とともに、来ていた。そこには小さいながらも屋敷が構えられており、中には幾つかの家財がある。

「はい。半蔵殿から頼まれたとおり、江戸から寄せたある程度の書籍を入れてあります。また島津にこれば、仕官なら受け付けると、殿から……。では。」

そう言うで一礼し、侍は、麓の村長の内へ向かっていった。信繁が中を覗くと、そこは振るいながらもしっかりと作りで、ある程度の貴人なら、気兼ねなく暮らせそうだ。

「信繁。ここがそう？」

「はい。」

もう大阪から船を乗り、山奥まで歩いて、十日余りの山中にある屋敷。半蔵は亡き家康との遺言である”秀頼の命は守って欲しい”の命を果たす為、この地をあてがってくれていた。もし捕らえるが出来ても、元からここに住まわせるつもりだったらしい。秀頼ははしやいで中を散策している。

「私たちはこれからどうなるのでしょうか……。」

信繁は船旅の中、じっと考えていた。どうすればいいのか……。大方天海殿と同じく……。別名という事になるだろうが……。今までの印象を考えれば荒事になる可能性は高い。また妻に迷惑を返る事になりそうだ。実際、堺の港には妻が居て……。その命を守るだけでも手一杯だったともとれる。

「すまない。おまえに頼みがある。」

「何でしょうか。」

妻はじつと、信繁の顔を見つめる。彼女も彼女なりに覚悟があったようだ。

「俺にもし・・・何かあったときのため。お前と太郎にはここで秀頼様を守って欲しい。ここなら生きていくのに苦労はないから・・・」

その言葉を妻は身を震わせ、じつと聞いていた。彼の性格とかが分かっているだけ会って予想できていたのだろう。太郎も、その身を震わせる母親をじつと見ていた。

「太郎。」

「はい。」

急に呼ばれて背筋を伸ばす太郎。

「俺は、行かなきゃならない所がある。そこに行けば今度はもう帰ってこられないだろう。だから・・・。」

信繁の言葉に・・・太郎は鼻をすすり、貯めていた涙は勝手に頬を落ちていった。

「お前に・・・漢としての頼みがある。」

「お父様！」

「初めてで・・・最後かもしれない、重要な任務だ！」

「はい！」

顔を上げ、きりつと父親の顔を見据える。涙が信繁の頬にも当たるが、それは信繁自身の涙で流されていった。

「お前達、秀頼達を頼む。」

「わかりました。」

妻がそう答える。太郎は答えようとするが・・・涙で、答えが出ないようだ。嗚咽が響く。

「秀頼様に伝えてくる。頼んだ。」

「わかりました。」

そう言つと屋敷の縁側で座っている秀頼の横にすんと座った。

「信繁・・・。行くの？」

「はい。身の回りの世話は、彼女たちに託しました。」

「どこに行くの？」

「とりあえずは江戸に……。それから……。わかりませぬ。」

「そうか……。」

「帰ってくる？」

「わかりませぬ。」

「もう……。お別れなの？」

「わかりませぬ。」

「どうしていくの……。」

「わかり……。ませぬ……。只……。もし従わねばここは徳川の手中。保護するものが居なければ……。」

「何で……。そこまで……。何の血も持たないぼくをたすけるの？」

「わかりませぬ……。ただ……。ただ……。叔父貴の息子同士だからかもしれませぬ。」

「おじき……。とうさんのこと？ どうしてお前も息子なの？」

「昔……。あなたが生まれる前まで、叔父貴には子供が居ませんでした。それで各地の優秀な子を容姿として取ったのです。俺もそう言う一人でした。ですが、徐々に身の危険を感じたおじきはその子供達を一時的に帰す事にしました。そして俺は……。帰されました。だが、俺も、後藤も、毛利も……。みんなあの人の優しさに助けられました。その恩をあの人が大切にしていたあなたに返しに来たのですよ。」

「でも僕じゃないなら……。ぼくは……。どうしたらいいの？」

「わかりませぬ……。わかりませぬ。それは自分で答えをえなくてはならない。人には聞けないものです。私もまた、その答えを探しているのですから。」

「僕……。わかった……。ありがとう……。信繁・お別れですね。」

「はい。」

その瞬間ぎゅうつと秀頼を強く抱きしめると、すぐに離し、立ち上がると信繁は一礼した。

「また会おうよ。いつか。」

「はい。」

その言葉に弾けるように背を向けると、信繁は妻達のもとに戻る。

「行ってくる。」

「はい。」

信繁は秀頼にしたように、想いを込めてぎゅっと抱きしめる。

「太郎・・・頼んだぞ。」

「はい！」

涙ながらの太郎の顔を見ながら優しくぎゅっと信繁は太郎を抱きしめた。そして離すと手を振り上げるとそのまま後ろを振り向かず・・・別れががつかなくて、別れががつかなくてすぎて・・・最後まで振り向く事は出来なかった。

第十四節 五月八日 堺攻防戦（後書き）

これで、”大阪夏の陣”の章は終わりです。これを以ってすべての戦死者と死人となった魂のご冥福をこの場を借りて祈ります。次回は外伝”服部半蔵”の予定です。楽しみにお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6031t/>

異聞 真田信繁伝

2011年9月19日03時21分発行